女學世界

第八巻
第五號



明治三十三年十月廿五日第三種郵便物認可
明治四十一年四月一日發行（每月一回一日發行）



四月一日より

一、第十五回新柄陳列會

一懸賞課題模様圖案陳列
一懸賞寫眞優等印畫陳列
一新流行歐米雜貨見本陳列
一新古御婚儀用調度品陳列

一、寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右新柄會は我國染織業の改良發達を圖るを目的とし今回全國機業家の賛成を得て是迄に類なく一層盛大に開催致し候ものに有之尚は寄せ裂れ類は假營業場新築紀念の爲め特別澤山に準備致置候間實業奬勵の爲めと思召され新陳列場の御遊覽を兼ね賑々敷御來觀御高評を給はり候樣偏に奉願上候

東京日本橋駿河町

三越呉服店

女學世界第八卷



第五號目次

貴婦人はドンナ白粉で化粧をなさるのでしょう？

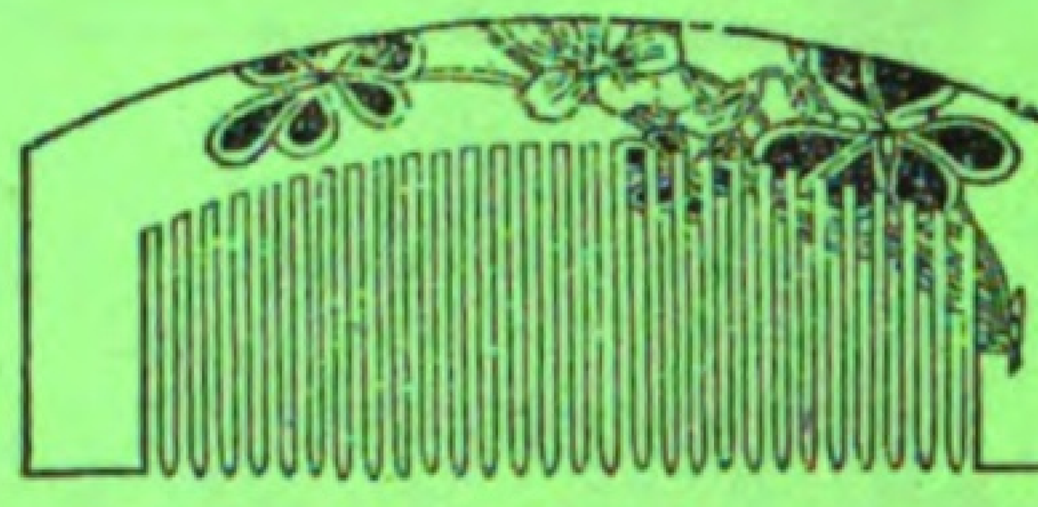
大學の專門大家が最新の學理を應用し發明せられたる**大學白粉**は毫も鉛毒の虞なき美容と衞生とを完備せる絶好の化粧料として畏多くも　高貴の御料となり無上の光榮を得たる高尚名譽の白粉にして品質の純良なる芳香の高雅なる容器の優美なる眞に善美を盡せり今や滿都の貴婦人淑女は擧て本品を愛用せられ高評嘖嘖たり

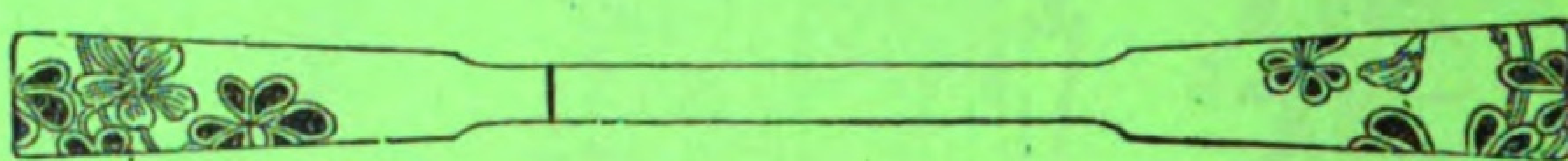
定價　大瓶　三十五錢　小瓶　廿錢

令孃方のお化粧にはドンナ白粉が一番善いのでしょう？



東京市内は勿論全國各地の信用ある各化粧品店に販賣す







深山の花模様御櫛笄（大西白牡丹戊申流行案内其の四）

雲沸く谷を渡り月隠す峯を越へて採集めたる高山植物の姿を模様に應用して御婦人方の装飾品に清麗の花を咲かすことゝなりぬ此深山の花が何故模様に宜しきかと申すに花の美なるのみならず草容に云ふべからざる趣味ありて恰も天花仙香とも稱すべきものなればなり圖に示したる櫛笄の花はミヤマカタバミの寫しにて尚ほ此外各種を選み何れも彫刻と蒔繪の妙を盡せし御目新しきものなれば何卒意匠部の苦心を愛でられ御好評奉願上候

一、組の価格 ……
參拾圓　貳拾五圓　貳拾圓　拾八圓
拾五圓　拾貳圓　拾圓　八圓

東京市京橋南傳馬町
振替口座九貳九三番

大西白牡丹

長電話本局三十番、三千番

女（いの一）

（いの二）

多くの男子は
舶來石鹸より優る
クラブ洗粉
盛んに實用せらる



舶來石鹸より優る
クラブ洗粉は

有名なる三越・白木屋・松屋呉服店及び
信用ある化粧品店より
盛んに販賣す

素顔の美しき

東京婦人は擧て
クラブ洗粉を
愛用せられつゝあり



いの(三)



最上醤油

ヒシニホン

最上醤油

フジニホン

天下一品

マツニホン

特約販賣店

合資會社日本醤油東京販賣所
東京日本橋區北新堀町
(電話浪花一四六番)

東京酒類問屋組合

其他

酒醤油仲買店及各小賣店に於て販賣致候

最上醤油以下數種あり

資本金壹千萬圓

釀造元

日本醤油釀造株式會社

東京深川小名木川通　電話浪花(長三七七三番 / 一五九五番)

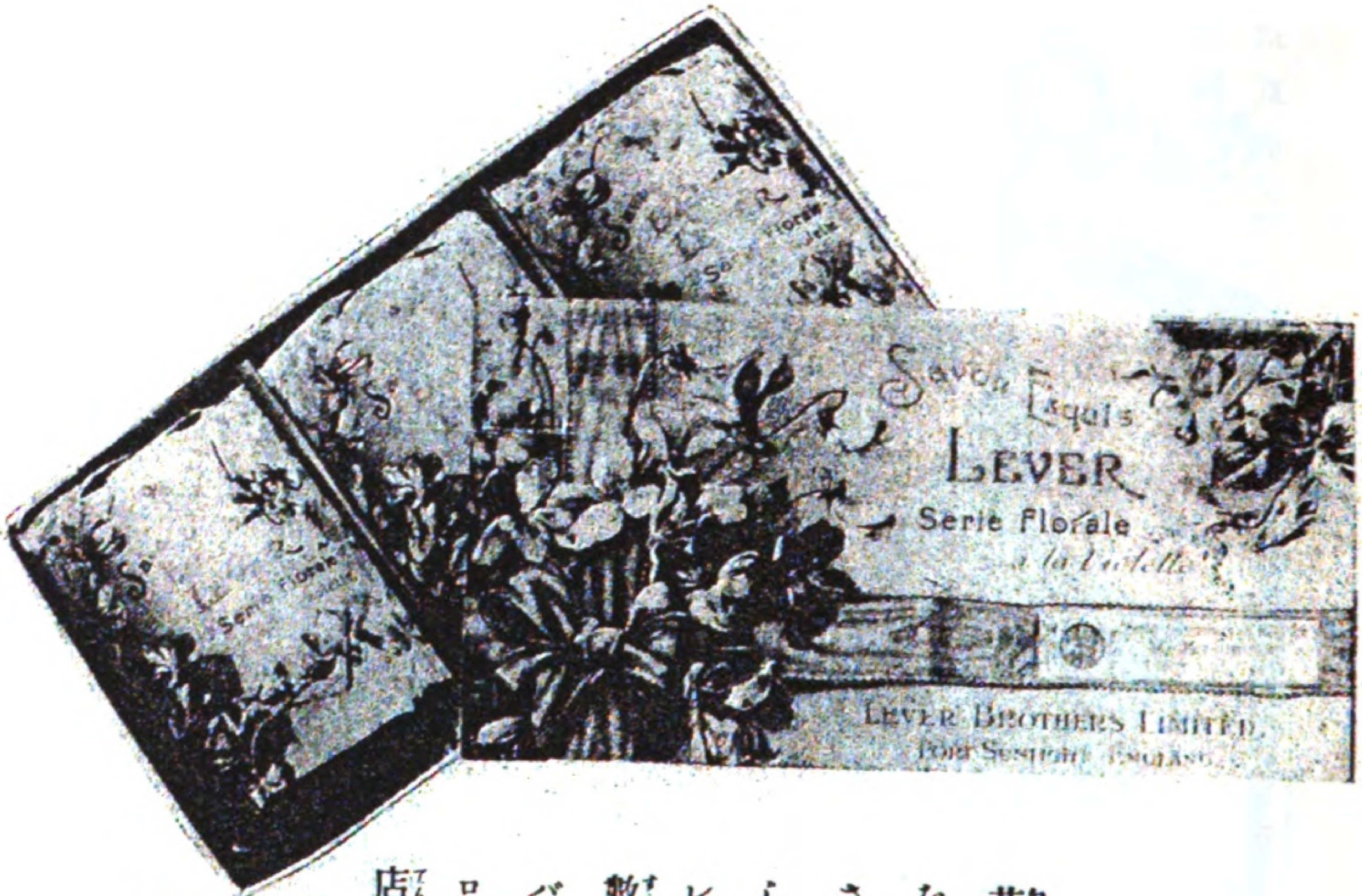
女(いの四)

英國レバー會社製
理想的石鹸の發賣



三個入一箱　壹圓五拾錢
一個　五拾錢

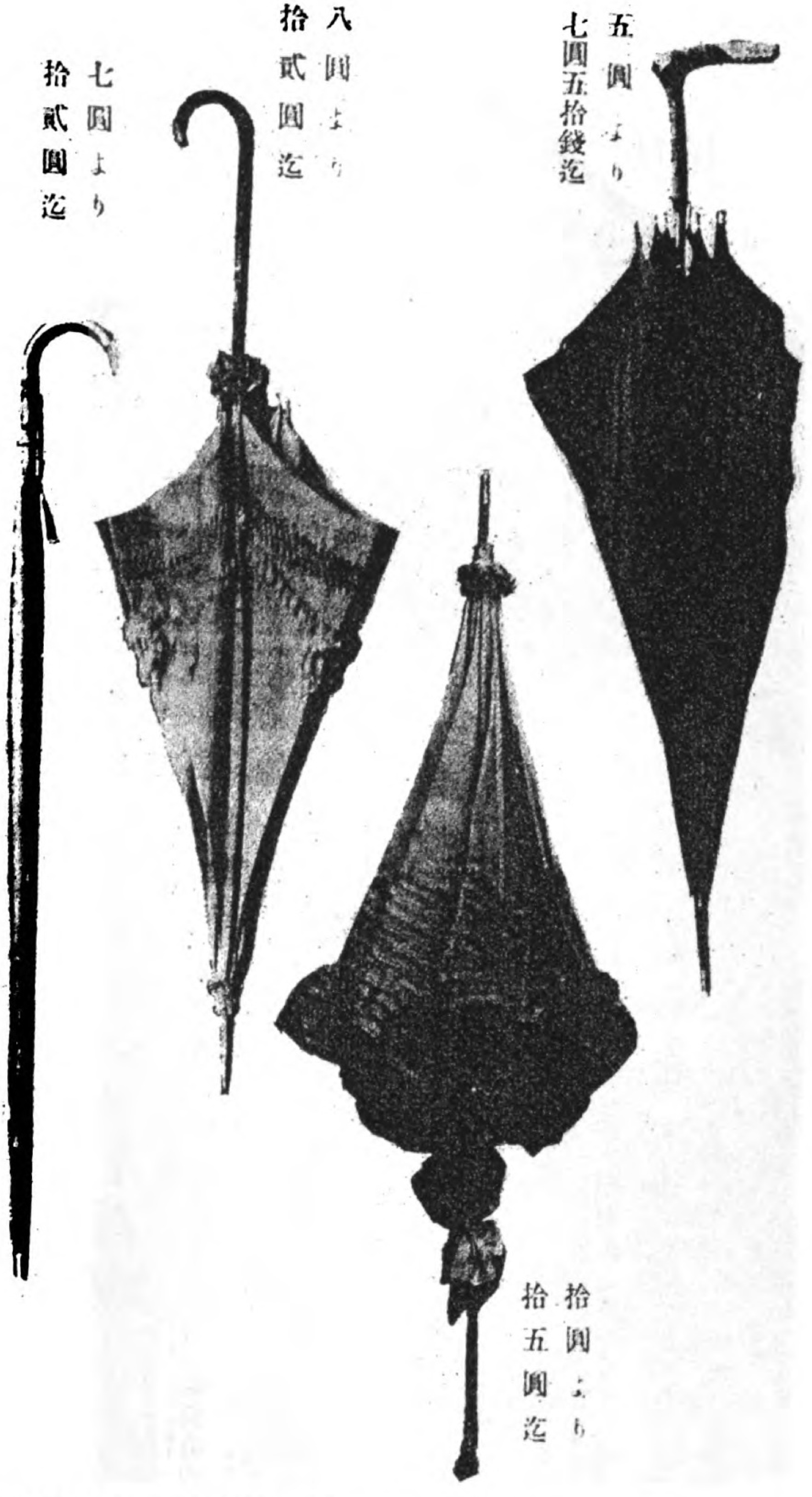
東京日本橋區駿河町
三越呉服店
振替貯金口座……番



三越の特約販賣にかゝるレバー石鹸

英國の石鹸王レバー兄弟商會は、英國皇室御用石鹸製造の命を受け、高等化粧石鹸の製造所として、其名已に世界に高し。さればレバーとさへいはゞ品質の純潔と優秀をいふに等しく、理想的化粧石鹸といふも不可あるなし。

レバー商會は一週間よく三千二百トンを製し、其製品亦十數種ありといへども其最も高等なる化粧用としては、このレバー石鹸と爲す。其香氣はバイオレット、ヘリオトロープ、カー子ーション、ムスク等數種あり。今や三越呉服店は之が特約販賣を引受け、未だ甞て我國に於て見ざる非常なる廉價にてこの世界無比の理想的石鹸を發賣せり。讀者諸君乞ふ、一度之を試用ありて、三越が之を世に弘むるの熱心を嘉したまへかし。


七圓より拾貳圓迄
八圓より拾貳圓迄
五圓より七圓五拾錢迄
拾圓より拾五圓迄

女(ろの一)

四十一年度は益々東髪の大流行を來たす可し
上品なる東髪を望まば必ず前髪じんとして此
ヘヤロールを用ひらるゝ事を諸嬢方に勸告す

米國製

東髪前髪じん



ヘヤロール

●ヘヤロールは今や歐米に最も流行しつゝあり。從來の毛髪製品は彼の忌む可き病患者の遺髪等の混りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論常に頭部にかゆみを起し果ては禿げる心配等の事あれど此ヘヤロールは細微なる金線にて製し優美なる絲網にて覆ひあれば毛を損じスベリ出す事なく且つ輕量なれば空氣の流通宜し故に「フケ」を生せず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ殊に腦病又頭痛持ちの方には最も有益の新輸入品なり



●特に大形（十二インチ十五インチ）御望みの方はハガキにて御照會を乞ふ

○ヘヤタイは東髪用の元結なり㊟本品は從來の元結の如く髪の根元を一々結ぶ要なく隨て髪を解く時にも一々切り取る手數もなし且一度使用する毎に不要にならず一本のヘヤタイは毎日用ふるも數十日間の使用に耐ゆる輕便にして德用のものなり東髪には必ず御試用を希ふ▲定價中打十八錢一打卅五錢

定價一個（普通十インチ）卅八錢送料八錢

輸入元　東京京橋區鎗屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四御園おしろい本舗　丸見屋商店
大阪東區南久寶寺町婦人小間物問屋　小栗小三郎

販賣店　各地和洋小間物化粧品店

女（ろの二）

●兒持及び姙婦方は見よ●

▲使用法 寢床に入れる如く本器上に乳兒を休ませば二合の湯で十四時間同温に腰足を温め大小便自ら器内へ流入して（おしめ）を要せず

▲効能 大小便にて足腰を汚さず冬は暖く夏は冷しき仕組故母の懐ろに在るより能く安眠し随て母も安眠し得て乳質良好となり母子の健康を保ち腰腹の冷却大小便不潔に原因する腦膜炎腸加答兒及傳染病を豫防し皮膚病に罹る事なし

空前ノ發明

專賣特許

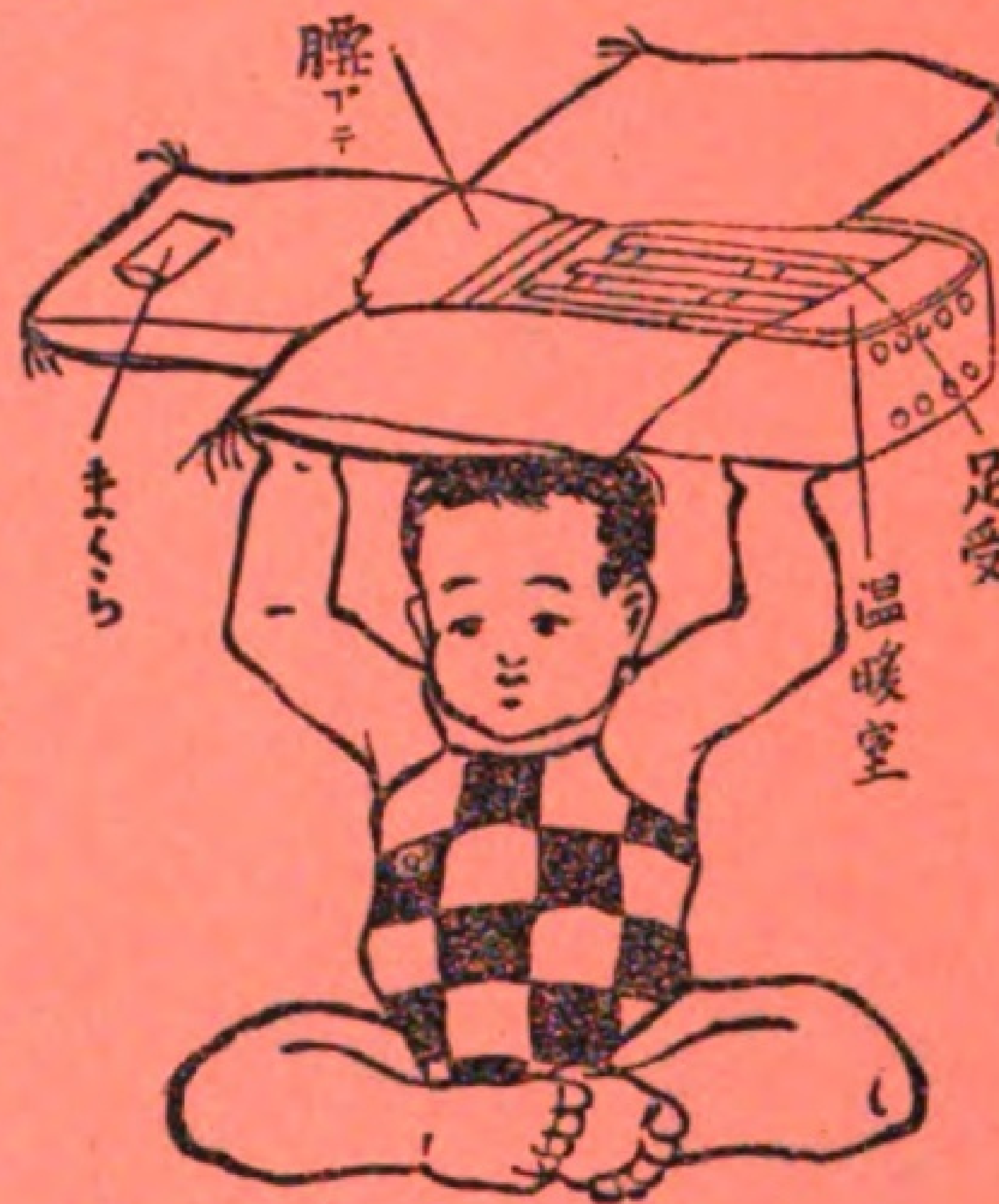
乳兒用便器

（しめしいらず）

子供の福音

甲 參圓九拾五錢
乙 參圓四拾五錢

詳細書御申越次第送呈



▲我國の統計上赤子百人中死亡五十七人なるに

▲本器で育てば僅九人なるの非常好成績を得たり

● 東京神田區竪大工町拾參番地
（振替口座壹四參壹九番）
專賣特許乳兒用便器製造販賣
井ニ全國郵便注文用達營業

丸二商會

三大博士 發明

神經衰弱貧血頭痛ヒステリー依卜昆的里陰痿等通俗的症候解説療法攝生法根治藥詳説の雜誌をハガキで申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロン博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の醫家實驗不思議の効果を確認せる全治報告根治療法詳説の雜誌を救濟の爲無代并呈ハガキで申込……

東京京橋越前堀

樂天堂藥房

●圖書目録

御入用の方は往復葉書にて御申越次第直に送呈す

東京日本橋區本町

博文館

男ちゞれ 女くせ 毛 赤毛は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵劵封入申込の方に無料教授誓て美髮にして差上げます

東京 麻布區材木町 岩阪

女（ろの三）


カメリヤ洗粉
艶麗花の如く純潔雪の如き
美貌は本品の愛用によりて顯る
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を増し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ殊に寒冷に遇ふて肌を荒害する憂なきは全く本品の純良なるが故なり
定價
大瓶 壹個廿五錢
小瓶 同 十五錢
大袋 同 五錢
小袋 同 三錢
鑵入 同 十三錢
ライオン齒磨 發賣元
本舖 東京神田 小林富次郎

（ろの四）

花見



上村松園女史筆



にきび●そばかす●こせがさ皮膚病一切如何なる難病も根本的全治せしむる一大奇藥を予が歐米巡遊中發見の結果餘りの不思議さに同病患者救濟の爲其由來冊子を進呈す郵券貳錢送れ

●東京品川海岸元芝　岡別邸

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子



醫科大學藥學專攻　藥學得業士金平巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の實驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代贈本

本●東京市下谷區上根岸町　衞生書院

當今一番よくきく月ざらへは何か

●諸嬢姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極ず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く特効藥を蒐集し直接大醫に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥

改良月ざらへ　女月丸



●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

藥價	一週分 六十錢	特製 四週分 二圓廿錢	送料 各四錢宛
	二週分 一圓十錢	六週分 三圓卅錢	

調劑本舖　東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地　小宮愛生堂

女(はの二)



◎東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◎山葉製オルガン（金拾八圓以上）
ピアノ（金參百卌圓以上）
◎鈴木製ヴアイオリン（金貳圓以上）
◎獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）
オルガン（金參百五拾圓以上）ヴアイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器
絃樂器各種
◎舶來樂譜
◎獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本鄕區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九番

（はの三）

女（はの四）

春



竹久夢二筆

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病の新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衡 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
陸軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

◉醫藥用胃活錠は有名なる五大軍醫の合議製劑胃活を加減し更に二三の新特效藥を加へた新式の錠劑であつて、完全なる健胃劑として現今の世界に知られたる藥品中其類が無い重に醫藥用として作られしが、今回廣く世上に發賣することとなりぬ

◉胃活錠は携帶に便に飮むに湯水を要せず、飮めば直に溶解し他出の際隨時服用の便有り

◉歐米の民間療法とは、胃活錠にて胃弱症を治するの類なり

理想的健胃劑



(注意) ◉胃活は女の如し、胃活錠は男の如く、胃活よりは其力强し
併し胃活の廢する事の出來ぬのは女の廢する事の出來ぬと同じ道理である

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎膓滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	壹圓　六拾五錢　四拾五錢　二拾五錢
胃活錠	壹圓　五拾錢　貳拾錢

●全國無郵送料●

(二の二)

發賣本舗 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

●地方は送料雜費として金十錢申受く●

御進物用圖書切手調進仕候

東京本町　博文館

肺勞（はいらう）　肺炎（はいえん）　氣管支炎（きくわんしえん）　衰弱（すゐじやく）

●十年の肺病僅に六劑で全治せし禮狀及五年七年の難病全治禮狀積て堆し

治肺美（ぢはい）

○いかなる重病と雖も飲は必ず奇効有早試よ

●委は乞御照會

書冊は全國藥店にあり

定價				
十日分壹圓	壹圓九拾錢	貳圓七拾錢	四圓	五拾錢

●病原を撲滅し營養を與へて全治せしむる最新藥也●

發賣元　藥種貿易商

名古屋京町二　荒川長太郎

最寄の藥店になくば直接注文を乞

着金直に郵送す　◎　全國送費無料

◎生徒募集

本校入學資格●美術部は高等女學校卒業者

技藝部及選科美術部豫科は高等二年卒業者

右の者は無試驗に入學を許す

入學申込は三月末日限り

東京市下谷區谷中初音町四丁目（元美術院跡）

私立　日本女子美術學校

婦人藥王　流經散（りうけいさん）

●月やく止まるを憂ふる方は毎月一の日此藥を用ゆれば止るとなし四ケ月以上の閉止も特別製の方を連服すれば程よく下ると妙なり產後の古血又は血塊及ひ十七八歳になりて月やくなき人にても忽ち下る事請合ちの道にて折々目まひ立くらみのぼせ頭痛又物事を苦にして氣分あしき等に用ひて實によくきく藥にして世間ありふれの月ざらひ等と天地の違ひ是をのめば醫者を要せず

定價　特製四廻り分金壹圓　同半月分六十錢●七日分卅錢●三日分十五錢　送料各二錢宛

わきが藥

本症は頗る惡臭を放ち他人に接近するをきらわれ有爲の美男子も交際を欠き又妙齡美婦女も良緣を失ふが如き不幸に陷れる人澤山あり之れを救はんが爲數年苦心して得たる新發見藥を世に紹介す多少に係はらず本症のある人は早く用へて幸福の人となられよ

（天下一方腋臭劑）　小包卅錢△中包五十錢△大包壹圓　特製大包貳圓　送料各貳錢宛

經驗保證　毛生劑

定價　試み金卅錢●小瓶金五十錢●大瓶壹圓　特製貳圓　送料四錢

本劑は多年經驗したる化學的作用のけはいぐすりにして特許を受けたる保證劑なり。

◎婦人必需の養生寶典は郵券三錢封送あれ◎

專賣　東京神田區五軒町大通り　電話下谷壹參貳壹番　振替口座三六七壹番　寶順堂

女（にの二）

發表期を忘るゝ勿れ

女子文壇 第一臨時增刊

（即四年第六號）

内容

▲小説 ▲論文 ▲新體詩 ▲俳句

▲お伽噺 ▲日記文 ▲短文 ▲繪畫

▲美文 ▲書簡文 ▲和歌

㊟附録には當代名家の新作數編を添ふ

新案 懸賞 傑作

文壇の花

▲四月十五日發行

紙數二百五十頁口繪挿畫澤山挿入

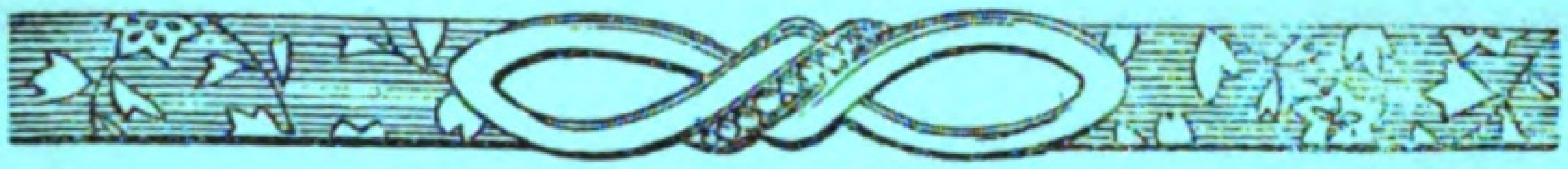
定價金貳拾錢　郵税貳錢

發行所　東京市京橋區大鋸町（振替口座壹七貳九番）女子文壇社

特約賣捌所　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂　其他取次販賣所は全國到る處雜誌書店

戊申文壇の呼物

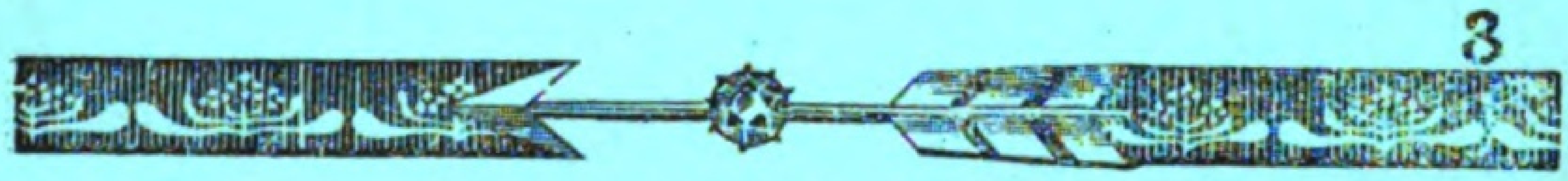
（その三）



2



3



流行の帯留

第一圖　十八金眞珠入ヌボー式結形帶留　價廿五圓

第二圖　廿金眞珠入同　一筋結同　價廿三圓

第三圖　十八金プラチナダイヤモンド入矢形同　價百四十五圓

第四圖　廿二金プラチナ三羽蝶透シ彫同　價十七圓五十錢

第五圖　十八金ダイモンド入、光琳水、透シ彫同　價七十五圓

以上之外最新流行品は色々出來仕り候

其他翡翠硅にて調製せし品六圓ヨリ三十圓銀臺金メツキにて調製せし品三圓ヨリ八圓

東京市日本橋區若松町

嘉

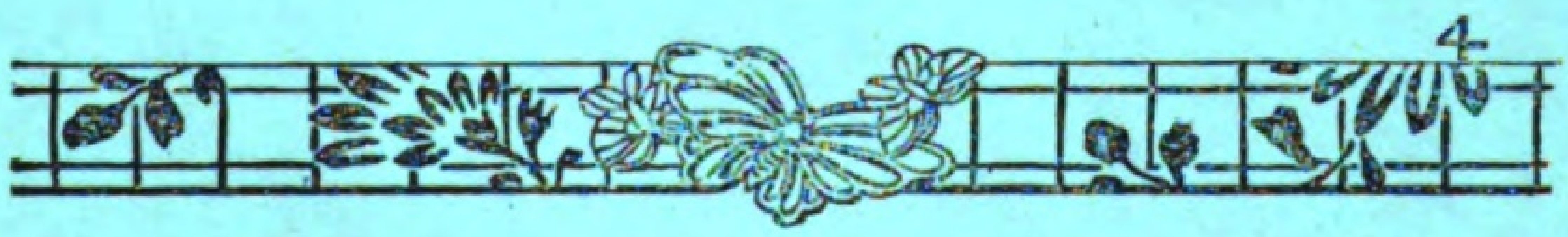
丸嘉

電話特浪花七六八番

振替口座九〇一四番

商品目錄ハ郵券貳錢封入御申越願上候

4



5



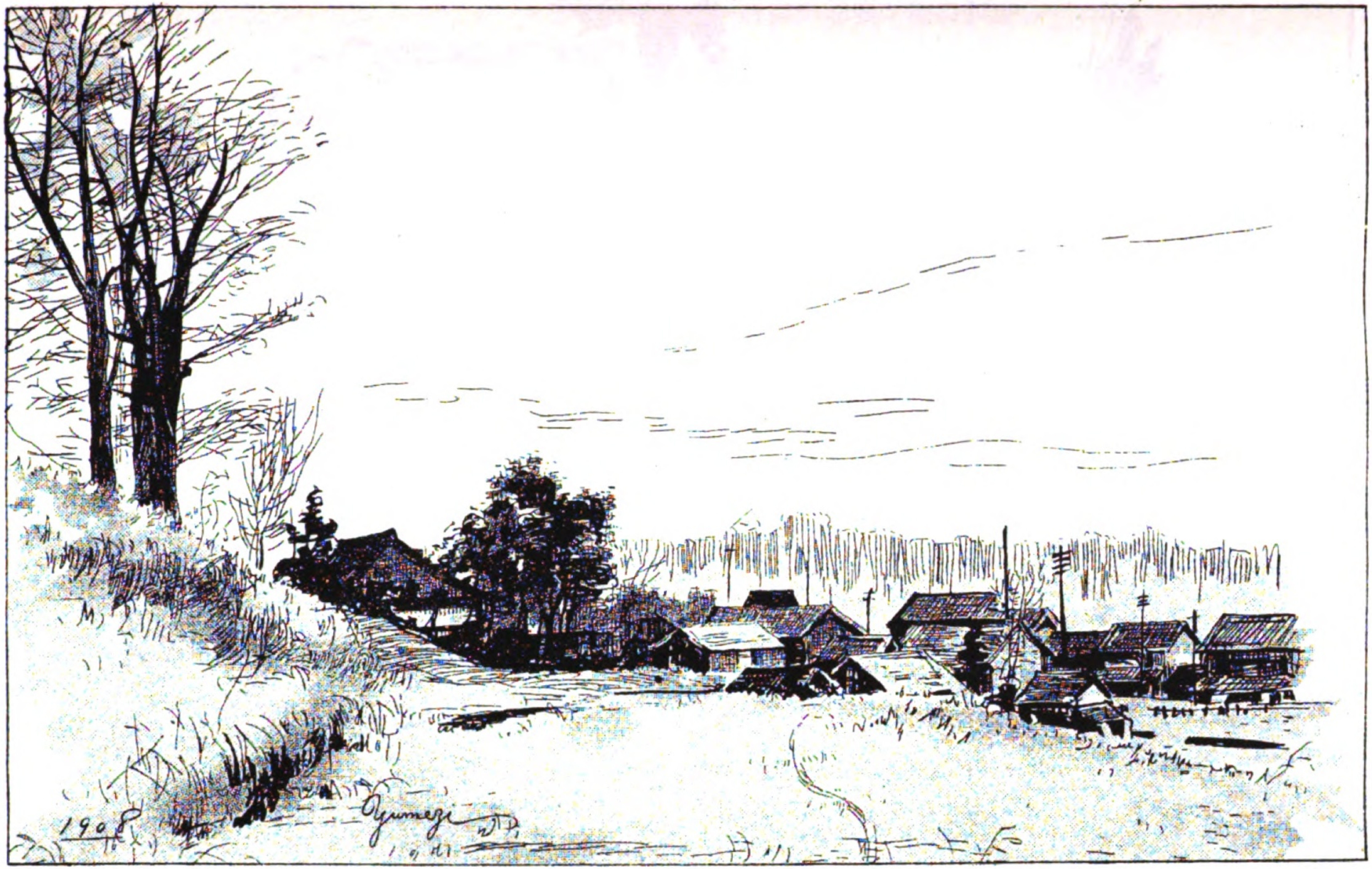
（女、にの四）

小禽



跡見玉枝女史筆

故郷



竹久夢二筆


御料
御園白粉
畏き邊りの御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
製造元 東京芝 本舗 胡蝶園
發賣元 東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
淨白化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御顏あらひ粉 御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等香水油 御園香油
高等香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

女(ほの一)

女(その二)

造花原料

ハ東京市九段坂

吉住商店に限る

營業種目

造花器具

造花材料

造花及半製品

造花用[illegible]

造花装飾用達

摘細工材料

弊店の特色

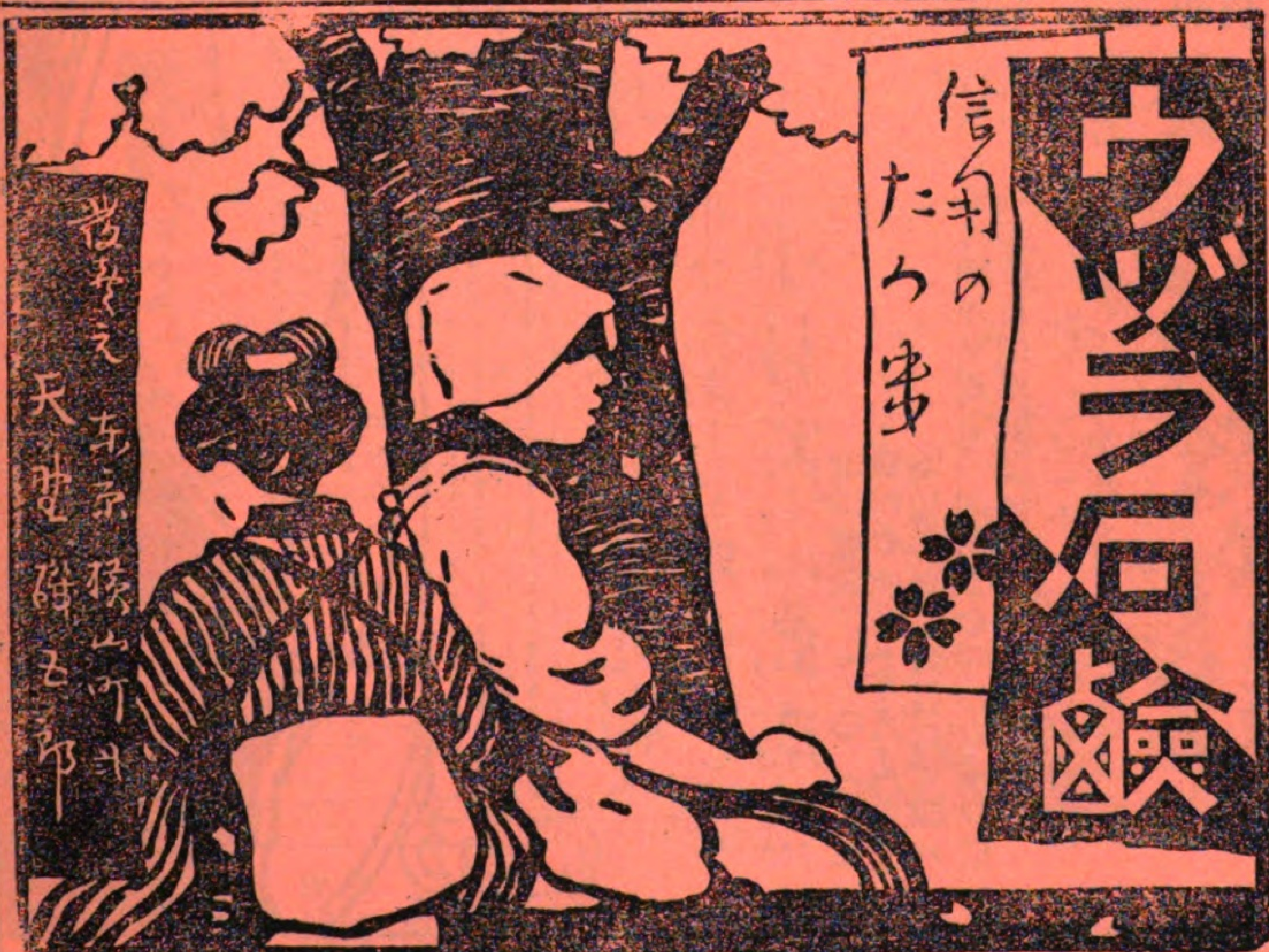
御家庭に親切

品質善良

價格低廉

出荷迅速

営業用[illegible]中入用の方ハ東京市九段坂 吉住商店宛申越さるべし



女(ほの四)

めじろ



加藤南山筆

公園の花



日高島助筆



發賣御案內
造花用電燈

盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種
營業概目。造花半製品、造花用染料、造花用器具
摘ミ細工材料、金銀モール、模寶石、電氣用具線

東京市日本橋區橫山町壹丁目十六番地

美術造花材料商 **天野卯兵衛商店**

特長電話浪花一六四三)(振替貯金口座四九七〇)

營業案內御入用ナレハ此切取御添ヘ御申越シ被下度候

切取線

縣　郡　町村

女學世界

(一〇八)女

女(その二)

良家の家庭には必ず本誌を備ふ何故に斯く廣く讀まるゝや

記事清新

婦人世界

材料豐富

四月號 一日發行 毎月一回 三巻 第四號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎男女結婚論（世人の常に知らんとする所に答ふ）……村井弦齋
◎財産結婚とは如何なるものぞ
◎人物結婚とは如何なるものぞ
◎肩書結婚とは如何なるものぞ
◎氣樂な家とは如何なるものぞ
◎都會生活は果して幸福なるか
◎血族結婚は如何なる害あるか

▲私の好きな婦人……小栗風葉
▲女醫の實歷談……鷲山彌生
▲名歌評釋 春の月の夜……渡邊白水
▲玉子のお料理……弦齋夫人
▲軍人の家庭……木村中將夫人
▲面白くしてためになる少女欄……

▲二十年間實行し來りし私の勤儉貯蓄實驗……佐治實然
▲矯正すべき女學生の惡癖……三輪田女學校教頭 三輪田元道
▲媒妁口に誤られたる不幸なる婦人の實例……山田春子

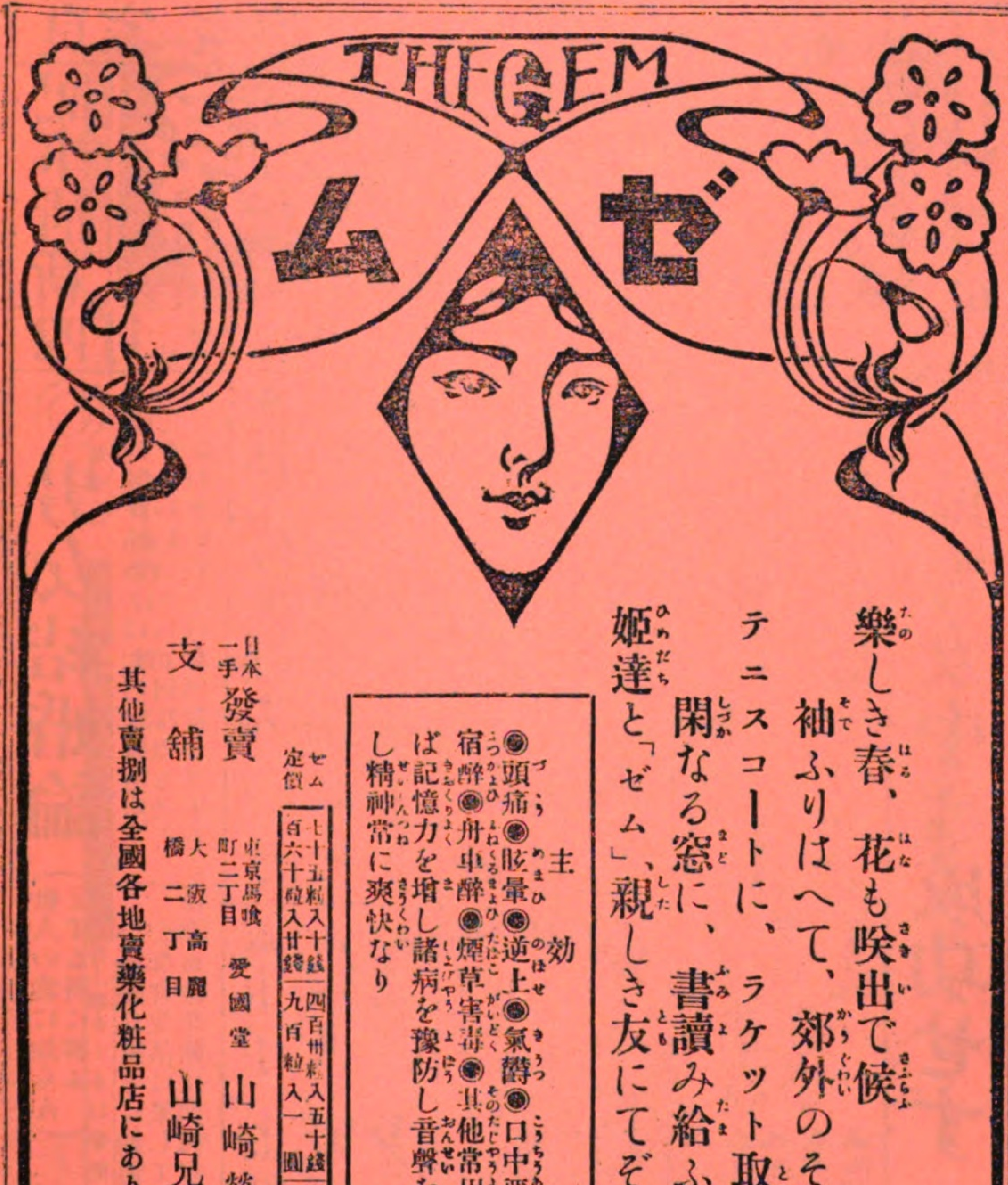
▲母親の注意すべき小兒の發熱……醫學博士 加藤照麿
▲安産は如何にして得べきか……醫學博士 榊順次郎
▲雙子は何故に生るゝか……醫學士 伊庭秀榮

懸賞募集
▲短文 ▲和歌 ▲俳句 ▲習字 ▲寫眞
▲家庭笑話 ▲文字合せ ▲子守唄 ▲繪探し ▲頓智談

◎斯くの如き女中は決して成功せず……清風生

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參六貳番）全國賣捌書店

女（ノの三）


THE GEM
ゼム
樂しき春、花も咲出で候
袖ふりはへて、郊外のそゞろ歩
テニスコートに、ラケット取り
閑なる窓に、書讀み給ふ
姫達と「ゼム」、親しき友にてぞ候らへ
主効
◉頭痛◉眩暈◉逆上◉氣欝◉口中惡臭◉宿酔◉舟車酔◉煙草害毒◉其他常用すれば記憶力を増し諸病を豫防し音聲を美にし精神常に爽快なり
ゼム定價 七十五粒入十錢｜四百卅粒入五十錢｜容器ゼム
百六十粒入廿錢｜九百粒入一圓｜二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
衛生家必携
懐中良藥

女(への四)

秋色櫻



宮崎與平筆

真正 無毒 高等 化粧

クイーン白粉
クイーン水

⦿本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ

東京日本橋區新和泉町

本舗

三井花陽堂



最新の化粧法に基づき配剤せる高貴化粧料

千代田



白粉

當代の名優讃美し曰く

●使ひ心地のよき事○つきの善しき事○永く保つ事○浮きの生ぜぬ事○洗ひ落すに容易なる事○洗ひし後も尚馨しき香を保存する事●斯くして激賞せられたり

▲大瓶卅五錢 ▲小瓶貳拾錢 ▲水製貳拾五錢



香油

千代田香油は紳士令孃貴婦人間に愛用せられ高評益々盛なり

大瓶參拾五錢 小瓶貳拾五錢

發賣元 東京馬喰町 山岸三之助

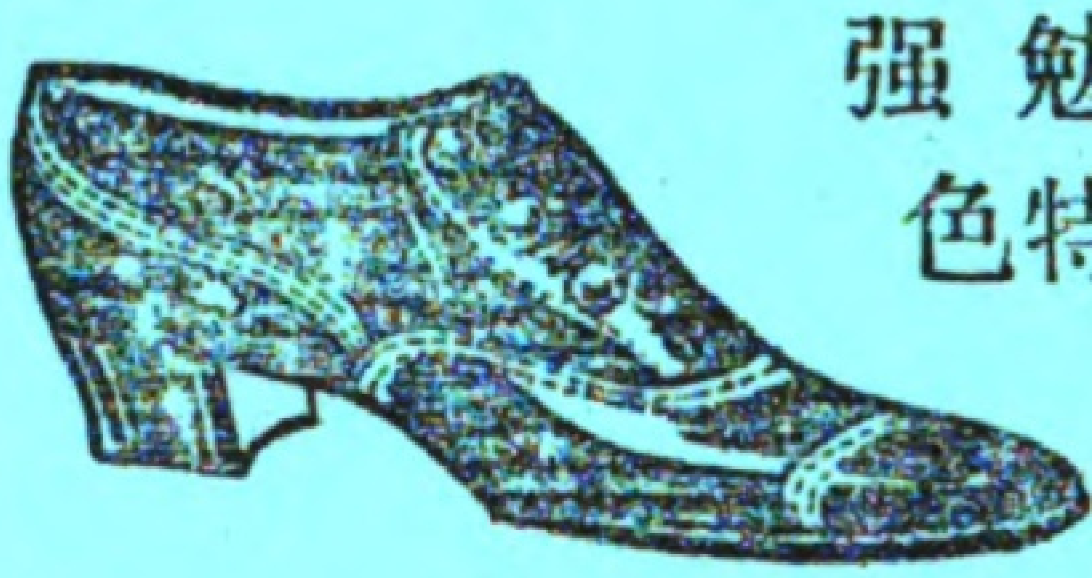
電話浪花三七三三番

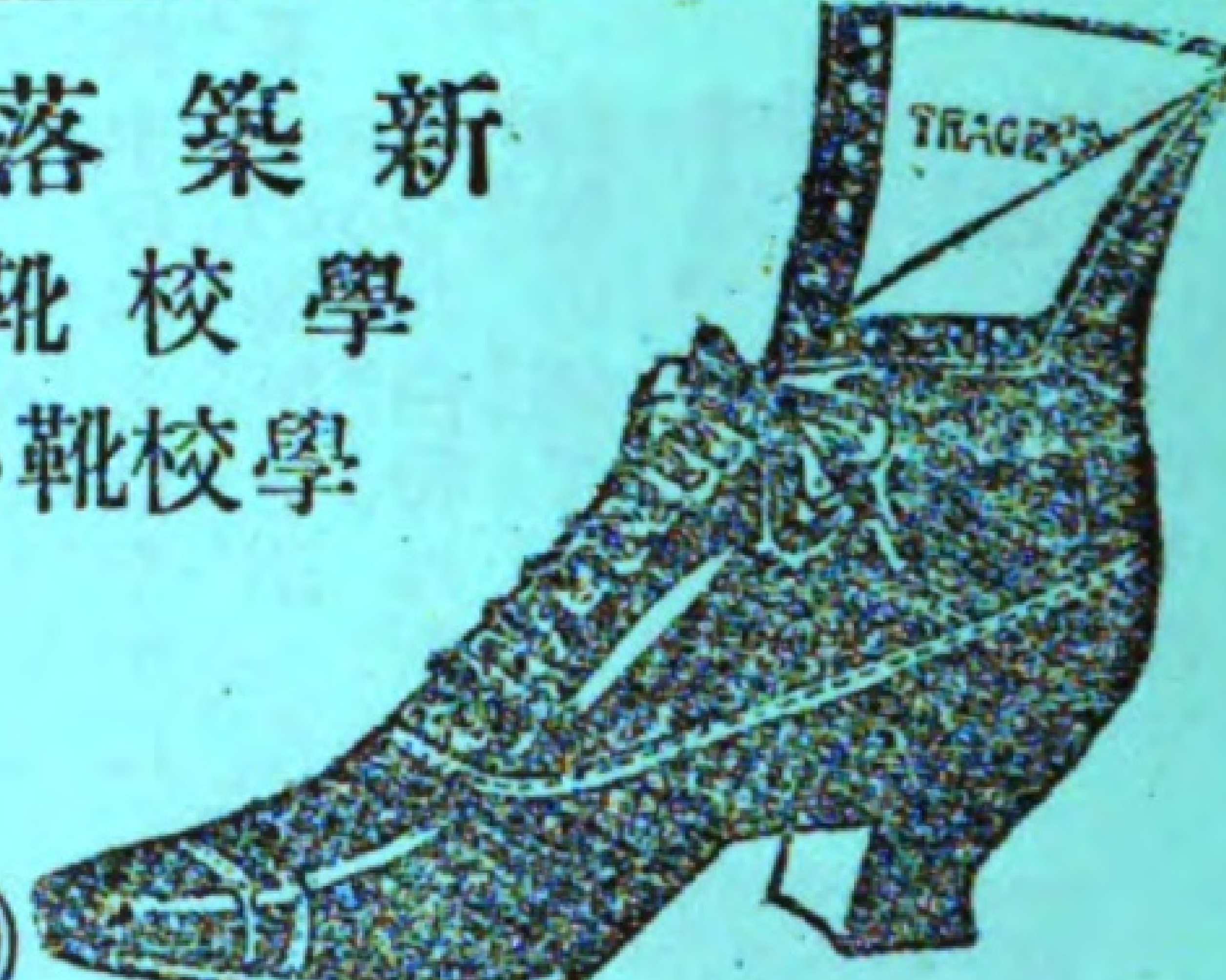
女(その一)

新築落成御披露

學校靴特別勉强

學校靴ハ弊店ノ特色





◉業務の大擴張

◉品質の大改良

◉商品の優美堅牢

◉無双の大勉强

東京市神田區小川町一番地

木戸靴店

電話本局 一二五三

THE ALLENBURYS' FOODS.

古來未曾有の乳いらず!!!

アレンバリー小兒滋養食

人乳ナクシテ小兒ヲ養育センニハ母乳ノ成分ト同一ニ配合セル食物ヲ撰フヲ肝要トス小兒ノ消化力ト營養ノ需要ハ出生ノ時ヨリ生長ニ伴ヒ漸次增進スル故此理ニ適合セサル食物ハ其發育ヲ妨ゲ又ハ一生虛弱ノ者トナス恐レアリ愛兒養育ノ責任者ハ大ニ顧慮スヘキ事ナリ



英國有名ノ「アレンバリ」小兒食ハ特ニ此點ニ注意シ**第一號**ハ生後三ケ月迄**第二號**ハ四ケ月ヨリ六ケ月間ノ小兒ニ適スル樣成分ノ割合ヲ人乳ト同一ニナシ**第三號**ハ六ケ月後ノ兒用トシテ麥芽ヲ調和セル物ニテ從來發明ノ類似品中未ダ如斯精良ナル者ナシ無比ノ効能ハ御試用ノ上實驗アレ

東洋總代理店 **ストローム商會**

神戸磯上通一ノ四　横濱山下町十二番

特約一手販賣店 **田邊元三郎**

東京日本橋本町四丁目(電話本二八七三)

女(との三)

仙嬢か天女か

仰ぎ見る目も神々敷燦然として衆星の中に異彩を放つ物こそ大日本化粧界の白眉

たつた白粉

求め給へ召したまへ召して鸞鏡に向へば桃李の御姿濃やかに芙蓉の御粧を添へん

たつた白粉は新式白粉の總てに優越する、のび、つや芳香の清新高雅なる點に於て上流貴婦人に好評を博す



日本大阪仁壽堂分店製造

（との四）

山階宮妃殿下



博文館寫眞製版所製版印刷

子供の花祭



世界同胞會學校の催し

女學世界愛讀者に限り一割引

毛髪を黒く長くふさ〳〵する椿油にて精製したる

ランラン香油



色を白く肌を艶麗ならしむるレモン牛乳にて製せる

ランラン化粧水

兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び毛髪を大切にせらるゝご婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりません

ランランオイルは最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加ひローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を専一としたる香油也

大阪西區新町通三丁目

發賣元　福田源次郎商店

電話西千六百壹番　振替口座六〇八六番

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆様のご承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられ醫學大家の盛に賛評せらるゝ所となりました

ランラン化粧水は此配合に困難なる牛乳とレモン液とを最も完全に調配したる最新最良の美顔劑にして色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

ハガキ文學 は青年の友なるが故に生氣躍動し一讀興味津々再讀研究の資料となる
ハガキ文學 は毎號大家苦心の作と新進秀才の寄稿誌上に溢る將に百花爛熳の觀あり
ハガキ文學 は其內容も形式も逐號益進步發展し現今雜誌界の精華たりと云ふ十錢を投じ見本を御覽あれ

●四月一日第五卷第四號發行 新號エハガキ
附錄石版極彩色 一葉（頗有雅致） 二葉（頗鮮明也）
口繪 木版 寫眞版色刷 木版紙彩色刷 石版加工

日本唯一青年雜誌

ハガキ文學

定價 一册金拾錢送料一錢〇半年分七册郵稅共七十五錢 一年分十四册郵稅共一圓四十五錢郵券代用一割增

懸賞募集

〇短篇小說〇普通文〇小品文〇新體詩〇新派和歌〇俳句〇川柳〇〇珍談奇話〇如是錄〇繪葉書圖案〇スケッチ〇漫畫（〆切毎月十日）

撰評 山田花袋 沼波文學士 橋本春郊 兒玉花外 窪田空穗 內藤鳴雪 窪田而笑子 太田三郎

發行元 東京小石川久堅町 振替口座二八三八 日本葉書會
發賣所 東京神田東京堂 京橋東海堂 全國各書林

文藝俱樂部懸賞當撰

美人繪葉書

江湖大喝采の美人は??

全國より集る三千有餘の寫眞中百名を選びて更に廿の撰拔投票を爲す……百妓皆嬋妍窈窕いづれ捨てがたきを滿天下の審美眼に依り採點の結果は如何其第一等以下月桂冠を得たる美人の面影は如何に其目其口其鼻まこと日本の花ならずや否世界における日本のゲイシヤは有名知らざるな恥辱となす

美人ならでは夜も日も明けぬ東國當世向の美人を知らんと欲せば賣切ぬ內此葉書を買ひ賜へと版元申す

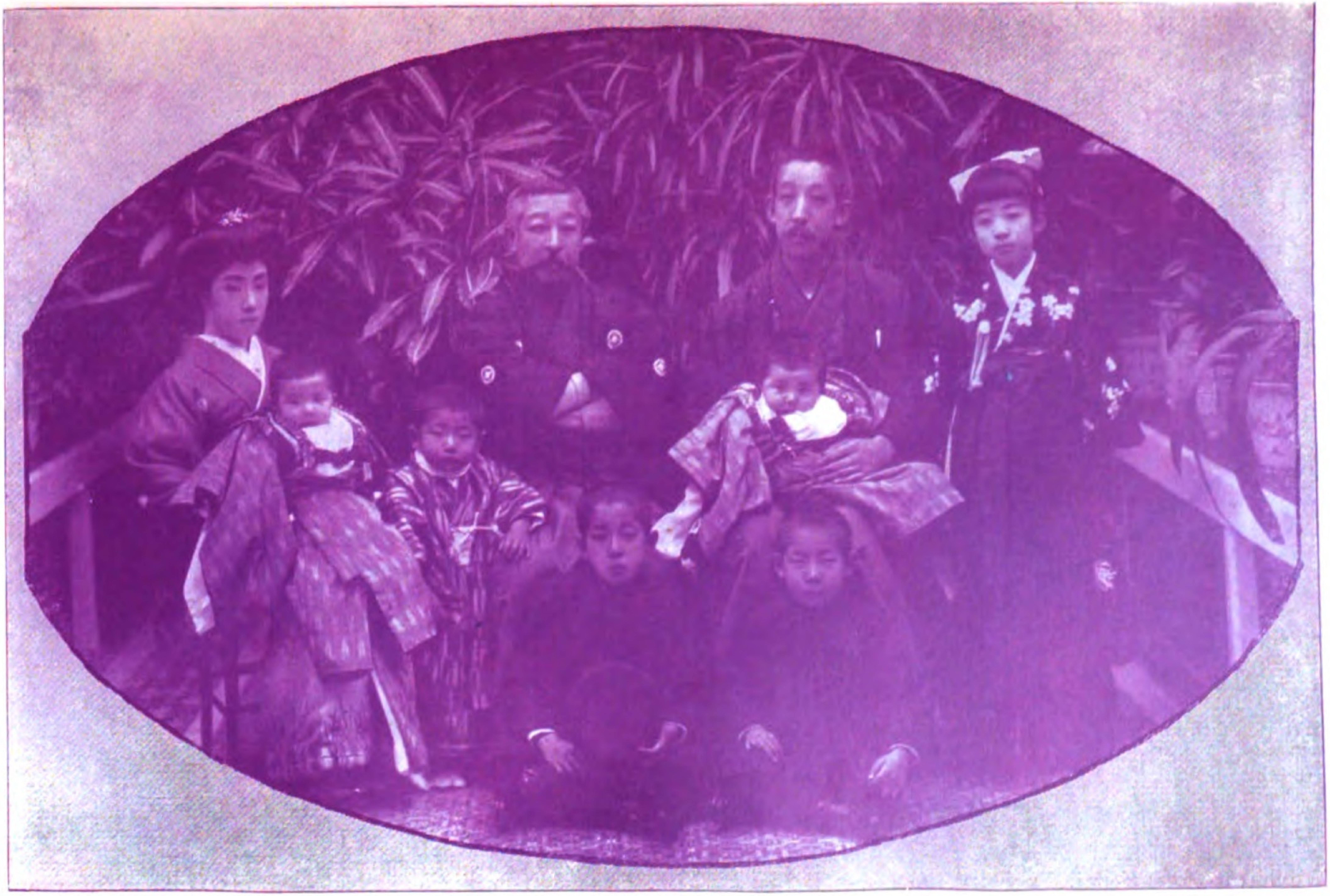
定價
一二等甲 各三枚 十五錢
三等乙 廿等まで一枚三錢五厘づゝ
特別上等マット 一枚 十三錢
郵稅四組まで二錢

發行所 日本葉書會 東京小石川久堅町 振替口座二八三八
發賣元 博文館 東京本町三丁目 振替口座 二四〇

女(ちの三)


ケーバ香油
Made Beautiful by Beautiful Hair.
Try Keiba Oil.
本品は日本特有の椿の油を搾りたるまゝ佛國へ輸出し之れを以て日本人に適する樣精製せしめ加ふるに芳香馥郁たるローズの香料を以て種々研究したる結果再び輸入せし品なれば和洋香油數十種中最も進歩したる日本人向唯一の香油なり
本品の特色
縮毛を延ばし赤毛も漆の如き艶を出し皮膚を滑らかならしめ毛髪を延びよくす
●ケーバ香油を使用すれば「フケトリ」香水の必用なし
東京日本橋區橘町二
化粧品直輸入商 竹間商店
電、浪、一六二四
女(5の四)

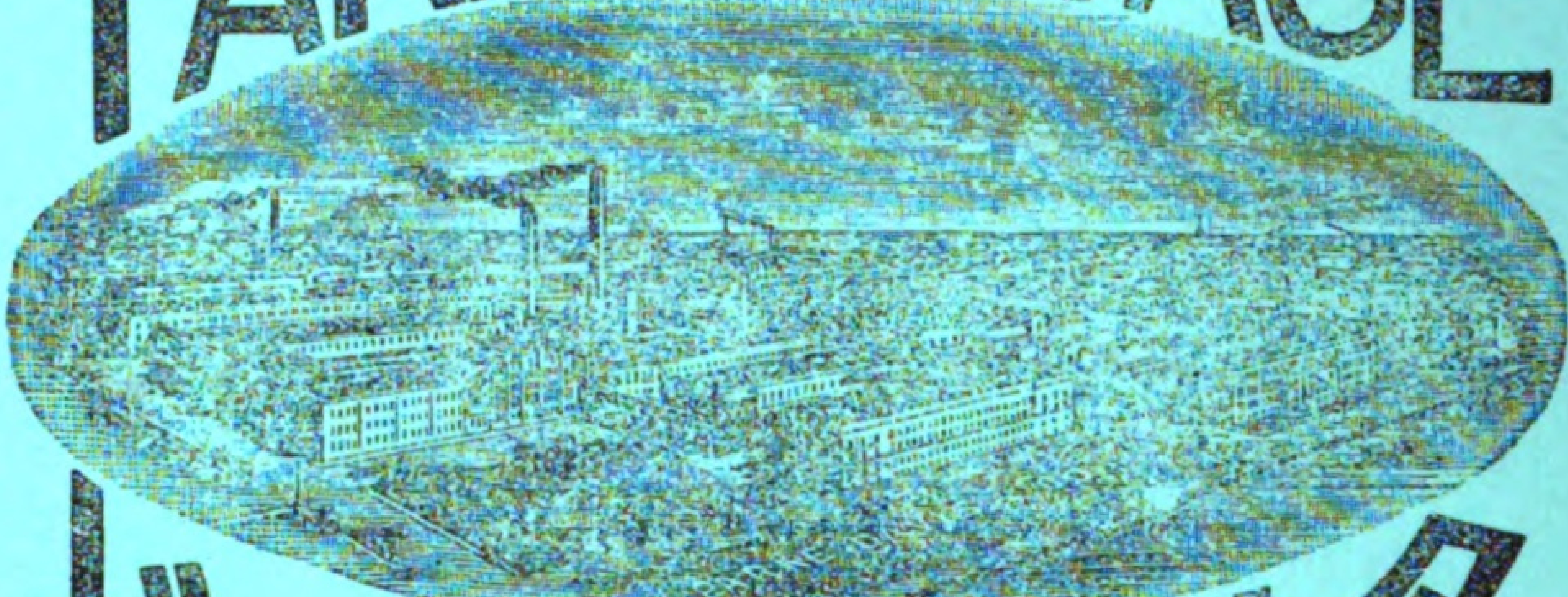
伏見宮殿下の御家庭



龜井伯爵の家庭



TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製薬工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

高峯氏發見消化新劑

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる装置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、毎瓶強度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舖諸彥！模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の賣品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

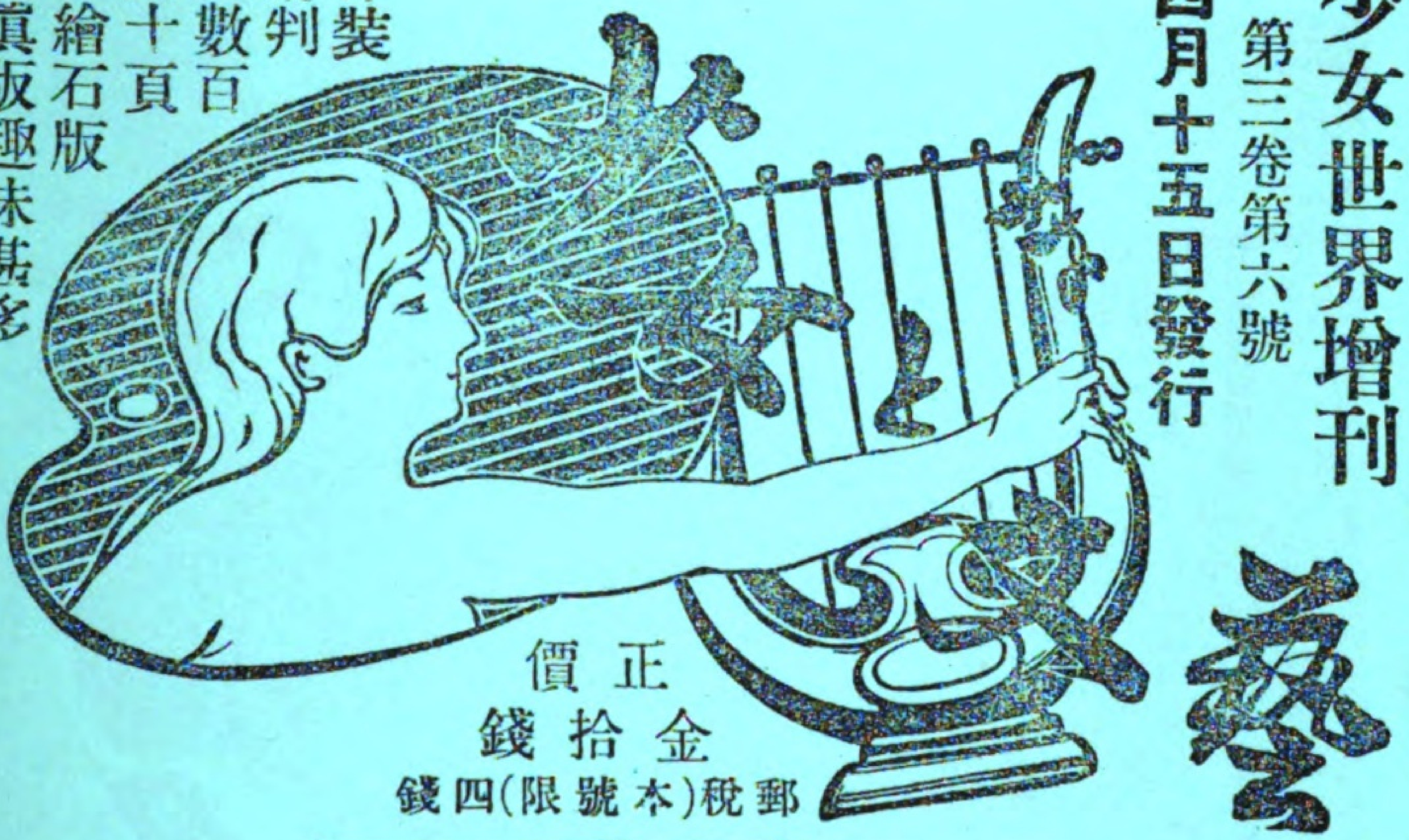
代理店　東京南茅場町　三共藥品合資會社

（りの二）

少女世界增刊

第三巻第六號

四月十五日發行



洋装 菊判 紙數百六十頁 口繪石版 寫眞版趣味甚多

正價 金拾錢 郵税(本號限)四錢

少女諸子の最も愛好せらるゝ美文韻文をあつめ、これを『少女と文藝』と名づけて、四月十五日に發行します。これは、天下の少女諸子が、全力をつくして筆にせられた文章、和歌、新體詩、俳句、繪畫等の中で、その粋を抜き美を選び、更に美麗なる石版刷りの口繪や寫眞版を飾り、また、左の通りの趣味ある記事を掲げたものですから、少女作文作歌の寶典として、必ず座右に備へなければなりません。

少女芝居 **花御前** 巖谷小波作 武内桂舟畫

(主なる記事)

△少女の文體 △文章の種類
△美文の作り方 △書簡の作り方
△和歌の作り方 △新體詩作法
△俳句の作り方 △寫生文作法
△英詩の註釋 △文藝の趣味

販賣用電話 本局二六二〇

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

(りの二)

女(りの三)

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品 最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞發好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する舶來品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亮薔丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ、陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥

價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●大取次左ノ通り●

東京市
- 本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
- 麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
- 日本橋檜物町十八 龜田藥局
- 京橋區八官町八 野田藥局
- 神田淡路町二の四 森田藥局
- 芝田町四の一 加藤藥局
- 芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
- 赤坂田町四の一 竹內藥局
- 同青山北町五 西井藥局
- 本所吉岡町廿五 小島藥局
- 四ッ谷大傳馬町二 永野藥局

- 高松市片原町 新明藥局
- 京都市上京區寺町通り石藥師角 福知藥局
- 京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店
- 大阪市平野町二 丹平商會
- 丸龜市本町三丁目 櫻井藥局
- 名古屋京町三丁目 飯田藤七
- 同鐵砲町三丁目 谷田藥局
- 神戸元町一丁目 西村關東堂
- 廣島市橋本町 萬代藥局
- 神奈川青木七軒町 水崎藥店
- 仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
- 岡山市橋本町 加藤藥店
- 弘前市下土手町角 菊地藥店
- 大津市菱屋町 磯崎藥局



稲澤先生令嬢



中尾章三氏令嬢秀子



山本逢雄氏令嬢文子



らい病

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

ザノサール　一ヶ月分　貳圓
複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れるとなし安心服用あれ

本舖　醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製
三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

根治確證
わきが
新治療藥 ラピヨシン

必ず全治して決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ
丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症にも甲價特別製を用ひよ

毛のぱへる

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髪増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

有力なる最新液にして

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品
色の白くなる
ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

根治確證
新治療藥
梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとりて如何なる劇烈のものばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそ骨うづき其他如何なる悪性の梅毒も必根治す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず

輕症は半劑惡症重症は二劑用よ暫て發效す

藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

電話下谷二五三五
專賣　東京神田小川町三十九　オリエンタル藥舘

女(ぬの一)

花くらへ……實は鼻くらべ也。當今我が講談落語界の眞打連が花に因み深き得意の讀物を集めたるもの、飾るに有名の畫家が腕を揮はれたる挿畫を以てするのみか、表紙に木版口繪に寫眞版に、姿の花の皆とり〲に咲き誇れるさま譬へん方なく、見て美しく、讀みて面白く、恁くばかり花も實もある書册は、鐵の草鞋で探し歩いても外にはあるまじと申す

文藝倶樂部臨時增刊 第十四卷第六號

落語講談 花くらべ

洋裝菊判紙數三百二十頁木版數十度刷口繪其他名妓寫眞版依例豐富

正價金二十五錢郵稅(本號ニ限リ)八錢

四月十五日發行

發行元 東京本町 博文館

目次

見よ讀め

最近絶好の新療法 醫界空前の大成功

腦神經衰弱ヒステリー療法

從一位侯爵久我閣下題字、腦神經專門醫學士常持先生述

事業家、學生、試験前の無理勉強其他過度に精神を勞し故なく煩悶を事とする腦神經衰弱ヒステリー患者の救命主は即ち本書也

送費貳錢送れ 進上

▲施本所 東京芝區愛宕町二丁目十四番地 弘濟院



あかげちゞれげくせ毛を

赤毛縮毛癖直

獨逸醫學博士發見化學應用赤毛縮毛くせ忽ち直り黑艶美髪となる説明書藥名詳説の雜誌ハガキで申込次第無代進呈

東京市京橋越前堀 樂天堂

私立

東京女醫學校

前期生百名 後期生五十名募集

○五月一日新學年開始○入學試験四月廿五日○高等女學校卒業生無試験

○規則郵劵參錢。入學志望者は四月廿日迄に入學願書を東京麴町區飯田町四丁目九番地事務所へ提出す可し

◉觀世流うたひ教授 規則郵稅貳錢

東京市神田區錦町一の十二(中央大學の前)

瓢聲館 土居香海

◉おしろいも香水も洗粉も何も入らぬ調法なる新發見劑◉

藥學得業士從七位鏑木靜夫先生製劑(最も近き頃る理想的可驚特効藥)

新式白色劑

(化粧、消毒、經濟三大德用)

一名にきび退治

笑顏白色新劑

ホワイテン

右高等白色劑「ホワイテン」は在來化粧品と異り鏑木藥學得業士歐米の白色劑を我邦人の常用に適する如く消毒殺菌に注意し香水石鹸洗粉代用となり經濟上の利又少からず乞ふ特効藥の御試用を

(特効) 皮膚を緻密にし白色艶美ならしめ(にきび)(そばかす)(あれ)を防ぎ光澤を増す

(注文) ▲爲替(東京芝久保町局)▲代金引換一個二十四錢▲郵便切手代用一割增▲送料函代共一個十錢▲樺太、臺灣、清韓一個三十五錢▲普通賣藥に非れば直接當藥局へ御申込みありたし

(藥價) 特製一圓二十錢 大瓶七十五錢 小瓶四十錢

調劑發賣本舖 東京芝區櫻田伏見町三番地 東洋堂藥局(電話新橋二九四二番)

大日本高等女學會紀念會



女（るの一）

数學世界臨時增刊 第貳卷第四號

長サと積

四月五日發行

洋装菊判紙數百廿八頁
口繪ユーグリツト肖像及び其著書の原版(寫眞版)
正價金拾五錢　郵稅本號限り四錢

關東の人曰く、幽靈は箱根こつちには無いと、關西の人も亦た曰ふ、幽靈は箱根から此方にはおまへんと、兎角幽靈を繼子扱ひにして、成るべく他所へ押付ける算段、畢竟は厄介物たればなるべし、我が數學界に於ける長サと積の計算、頗る之に似たらずや算術の方ではあれは幾何の領分だと云ひ、幾何の方ではイヤそれは違ふ、成程其研究は此方で取扱ふが、其長短廣狹などの小うるさい計算は知らぬと繼子扱ひ、幽靈なら宇宙にフラ〳〵と浮ばれもせず迷ひ居るも差支なからんも、幽靈ならぬ實用のものにてはそれにては濟まさるべし、乃ち爰に之を收むる處の一書を編し汎く世の爲、人の爲に此等の諸法を採錄せんとす、亦た多少の功德なからずとせんや、書名も其儘「長サと積」世の長サと積に苦む學生諸氏は本書に依り其苦患を免れたまへ

東京　博文館　本町

女(るの二)

女(5の三)



試驗に及第した賞與や幼稚園に入學の出來た御褒美には何が一番適當でしよーか申す迄も無く二十世紀の賢母は愛兒の悦ぶ而も衛生に叶ひ至極經濟的な洋裝を第一に御撰びになるでしよー

故に當店は其需用に應ずる爲め最斬新にして優美なる實用的洋裝を下着より上衣に至る迄一切取揃へて有りますから御一覧を願ます又御好に依り迅速に調製致します

遠方の御方は御一報次第カタログ御送附申上ます

男女小兒洋裝

理想的出產祝物發賣

專賣 ベビー印 ベビースボックス　定價金九圓五十錢

同　夏　着　同　金六圓五十錢

ボックスは嬰兒洋裝に必要なる一切の附屬品より上衣に至る迄美麗なる箱に納め時色リボンを以て飾りたるものなり

白英ネル上衣一枚下着一枚胴衣一枚腹巻一本タヲル製襁褓三枚同覆一枚安全留針半打舶來白粉同刷毛縫取ある涎掛等にして男女三歳迄何れにも使用出來る便利なる御遺物なり



横濱辨四（電話三四四）

製造兼發賣元　中野屋洋服店

東京麴町區内幸町一の五（旭館内）

東京出張所（電話新三一七五）

理想の子供服



女(なり一)

女（その二）

女（その三）

女（その四）

三宅花圃女史と其門生



女（わの一）

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醤油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad.

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

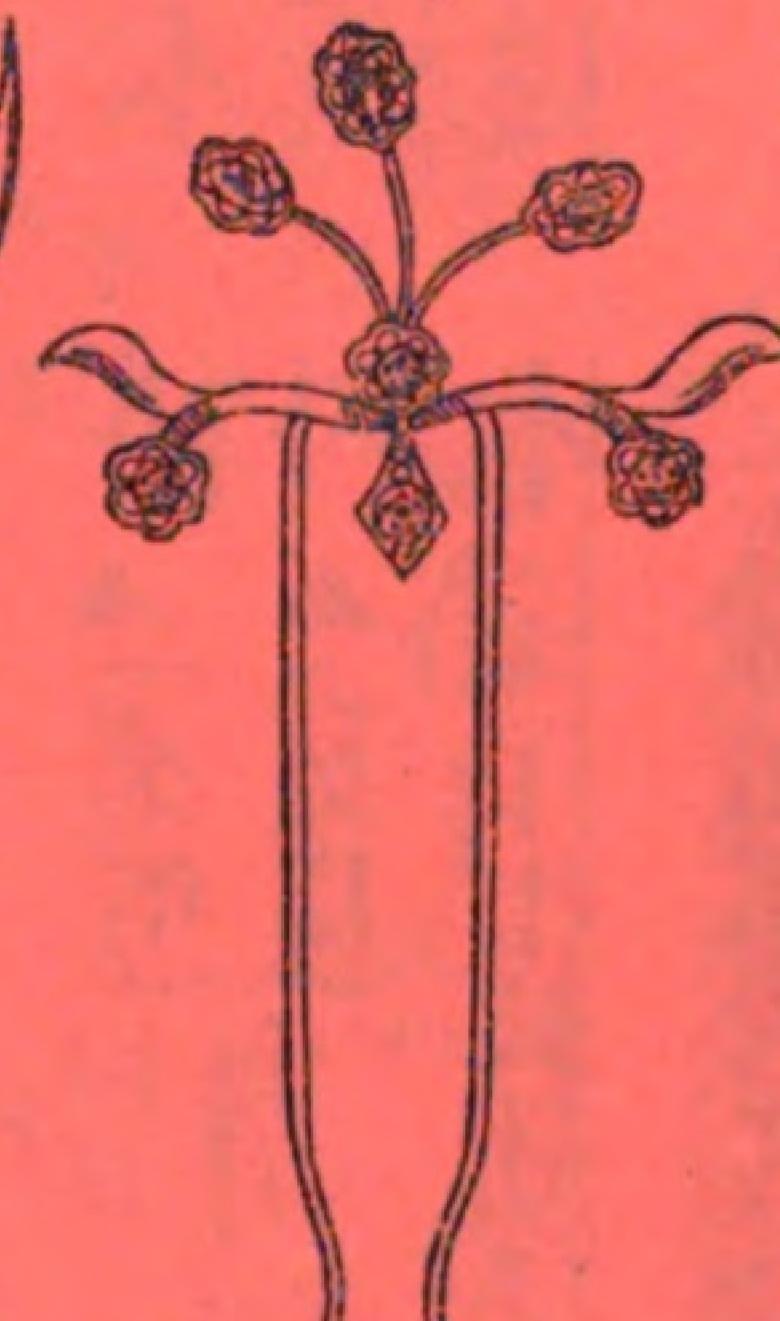
宮内省御用達

千葉縣銚子港 田中玄蕃釀造

束髪用ピン

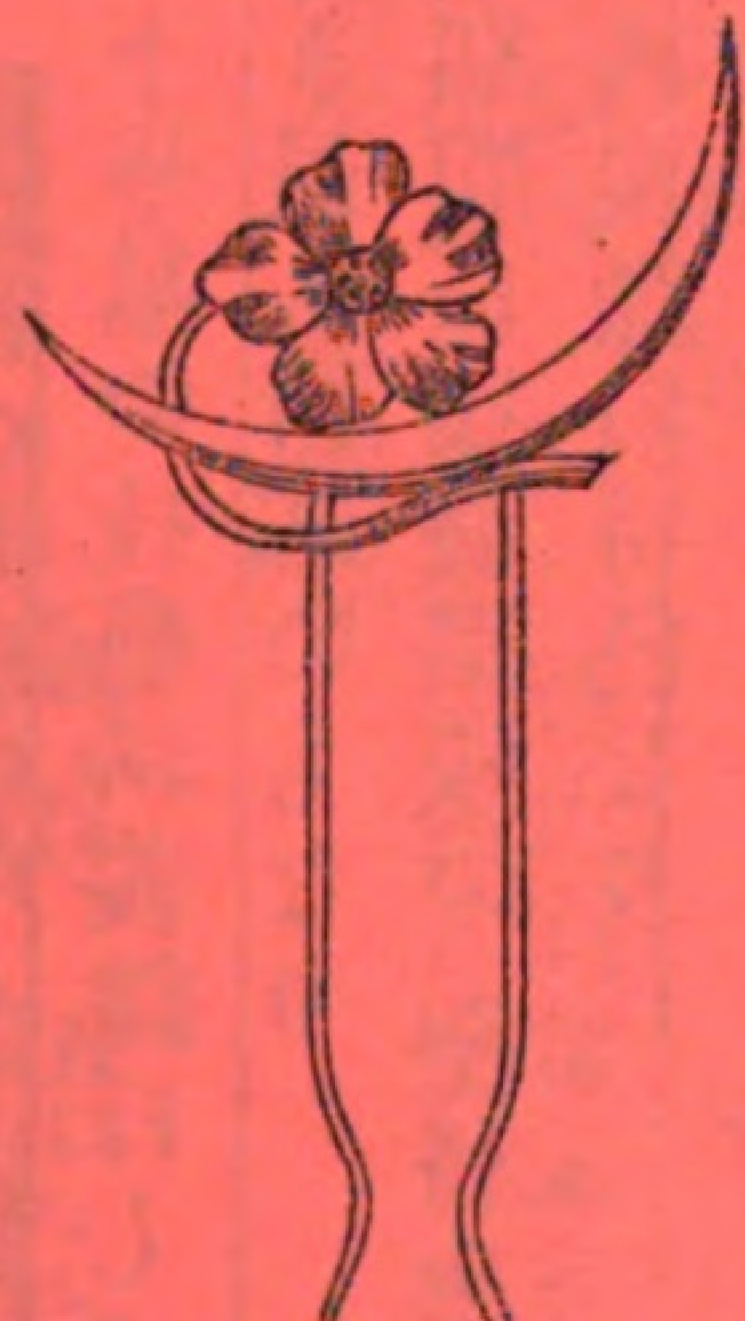
此束髪用ピンハ泰西諸邦流行ノ趣味ト本邦貴婦人界ノ雅趣トヲ參酌シ之ガ製作ハ名匠ヲシテ特ニ意ヲ用ヒセシメシ物ナレバ優美ニシテ且ツ實用ニ適スル佳品ナリ

(1)



十八金 ブローチ兼用 眞珠、ルビー、エメラルド入 廿二圓

(2)



十八金 月ハ銀張分 片面、ダイヤ入 金廿二圓

(3)



眞珠、ルビー、式ハエメラルド入 金拾九圓

拾八金 七寶入 金拾八圓内外

東京市神田區鍛冶町

白牡丹中西

電話本局三〇四〇番

裁縫の實習



（女子共立會和服研究室）

女（かの一）

英語世界

第一號以下數版を重ぬ　▲每月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密書數頁挿入

第二號要目

●雷新聞探訪員と語る……深澤兵庫縣姫路中學校教諭●筆蹟……山縣萬朝報英文記者●Syllabicationに就て……岸本早稲田大學講師●對話(電車)……淸水東京高等師範學校講師●沙翁の舊迹を訪ふ……英太第四高等學校教授●短篇小說(コナンドイル)……今井國民英學會講師●最近科學奇聞……長井氏晸●解釋練習……増田早稲田大學講師●言葉の使ひ分け……S、K、生●飛入勝手英語輪講會……長井氏晸●英語慣用句……伊藤神奈川縣中學校教諭●英詩吟誦の研究……酒井勝軍●入學試驗答解(長崎高等商業學校入學試驗)……深澤由次郎●英吉利の俱樂部……平田學習院教授●齋藤秀三郎氏を訪ふ……東西生●英作文の心得……武信早稲田大學講師●英語雜筆……喜安璡太郎●日用常語●時文研究●英學大家吹込蓄音機●懸賞文披露●懸賞新課題●雜錄

第三號要目

●雷新聞探訪員と語る……深澤教諭●筆蹟……高島高商教授●英譯血判取……武信早大講師●短篇小說……今井國民英學講師●シラビケーション……岸本早大講師●最近科學奇聞……長井氏晸●英詩吟誦の研究……酒井勝軍●珍らしい英習字法●解釋練習……増田早大講師●受驗參考英語の公式……佐川正則講師●對話人をお先に使ふ……長井氏晸●廣島高師入學試驗答解……深澤教諭●教場用會話●比較を表す句……武信早大講師●英和語法叢話……喜安璡太郎●言葉の遣ひ分け……SK●山縣五十雄氏を訪ふ●外語受驗所感●僕の會話熟達の經驗談……一中學教師●英語新遊戲法●時文研究●英學大家吹込蓄音機●讀者研究壇●懸賞文披露●同新題●萬國通信俱樂部を紹介す●編輯餘錄●近刊紹介●英語俱樂部

第四號要目(四月五日發行)

神田男爵筆蹟●コナンドイル短篇小說講義……今井信之●英解釋練習……増田藤之助●英吉利風俗買物の話……平田喜一●英譯血判取……武信由太郎●英文日記の書き方……上條辰藏●譯註マークツヱーン……深澤由太郎●僕の英作文練習の經驗……一中學教師●名古屋商工入學試驗詳解●英語の形式……伊藤彌門●最近科學奇聞……長井氏晸●英詩吟誦法……酒井勝軍●英作文の注意……武信由太郎●シラブルの切り方(完)……岸本能武太●語法叢話……喜安璡太郎●和文英譯の練習……今井信之●初學欄英語輪講會●官立校英語受驗談●指を使はぬ新英習字法●學校用會話●英語新遊戲法●英學大家氣婚集●時文研究●懸賞披露及新題●讀者研究壇●其他數項

第一號以下取揃應高需　▲正價金拾錢　郵稅壹錢　前金{十二冊金壹圓拾錢　六冊金五拾六錢　外要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(かの二)

数年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壮健全になす靈藥

胃病根治劑

従來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムネスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全に壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば従來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

(藥價)一劑四十二錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて確實顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭わきが

根治確證 新發見藥

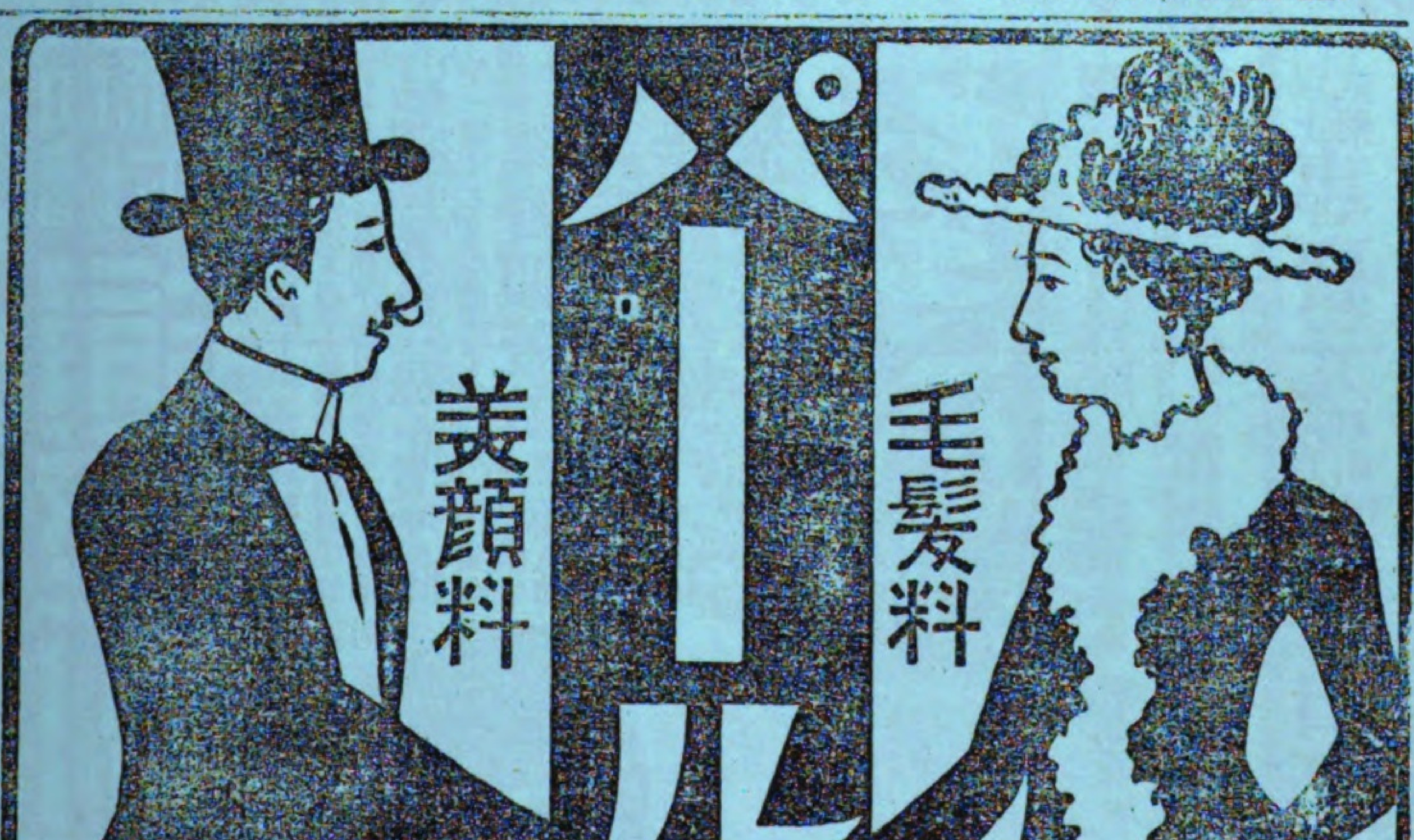
醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房 (電話下谷五四六番)

(かの三)



千九百七年式巴里流行
乳狀薄化粧
フエスクリーム
最も日本婦人に適應して而も皮膚の營養滑澤に實効ある佛蘭西新式
煉白粉代用品
注意（普通のおしろいの如く多量に用ゆべからず）
顔面美的の價値は
FACE CREAM
使用後一回毎に
實現す
（定價一瓶金三十五錢）
東京市日本橋區本町二丁目
高等香油チエリーオイル本舖
發賣元 高橋初次郎
全國至る處の化粧品店小間物店に在ります



パール
美顔料
毛髪料
コールドクリーム本舗 東京濱町 平尾分店

女（かの四）

庭園の團欒



(明治母の會寄贈)

月經時は如何に過すべきか

村井弦齋

月經時の衛生法は私が申上げずとも、醫師の訓戒をお守りになればそれに越した事はありません。たゞ一つ私どもの家族が用ゐて居ります「月の帶」と云ふ物がありますこれは産婆で有名な山田逸子が歐羅巴へ行て西洋婦人の用ゐる月經帶を調査し日本婦人に適する様に改良を施し新に拵へたるものであります此の「月の帶」は至極輕く腰の工合も自由で大層都合が宜いさうです

右は村井弦齋先生が「婦人日常生活法」に紹介されたる一節にして現に本品の効用は

月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動、起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品で有ます赤白帶下の强き人、局部の惡臭を發する人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

各地に取次店あり發賣元へ直接の御注文は特別製（冬季專門用）一圓二十九錢甲種は八十九錢乙種は五十七錢（何れも送料共）郵便爲替又は三錢切手代用一割増で注文早速送ります發賣元は東京神田猿樂町二丁目の資生堂藥局です

産科婦人科專門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかゝりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齡の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して。自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

婦人病の總論◎子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき塲合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千六百一）笹岡省三

女（よの一）

大景品付（福註文券引）當籤番號報告

女（よの二）

本館直接又は取次店を經由し景品付注文券を添へ前金拂込の向にて七日最終便締切迄に到着の分に對し一々抽籤番號御通知申上置きたる處豫告の通り去る八日市役所の抽籤器を拜借し本館に於て取次店立會の上嚴正なる抽籤を執行したり其結果を左に報告仕候

追て最終の番號は「九九九八」番にて總口壹萬未滿に付豫て御約束申上置き候通の比例により壹萬口に對する景品即ち總當籤三百箇、此金額五百圓（圖書の切符）贈呈仕候事となしたる次第に付此段併せて報告仕候、尚右景品は郵便に托し夫々御送附申上候に付是亦御承知願上候

明治四十一年三月

東京市日本橋區本町　博文館

第壹等（五十圓二本）

- 第三八八一番　遠江磐田郡龍山村　藤田光吉殿
- 第四二二四番　丹波氷上郡六路村　畑善三郎殿

第貳等（二十圓四本）

- 三〇三　長門厚狹郡厚狹市　安永良一殿
- 三四三九　攝津川邊郡園田村　西澤儀兵衛殿
- 五三三六　淺草區西鳥越町　岸中和殿
- 九三六四　常陸久慈郡小里村　益子力藏殿

第參等（十圓六本）

- 一一七〇　甲斐北都留郡大原村　藤本ツルジ殿
- 二五八一　天鹽羽幌村　阿部忠一殿（文月堂扱）
- 四二一九　臺灣中壢老街　末廣清一殿
- 四六五九　信濃下伊那郡平岡村　上條織之助殿
- 七二九八　出雲簸川郡鵜鷺村　杉谷守三殿
- 八三五三　韓國全州財務局　圓田彥一殿

第四等（五圓八本）

- 四七四四　神戸市　長谷川常三郎殿
- 四八八八　周防屋代村　田中磊殿（西村商店扱）
- 四九三八　越前敦賀町　明東惠殿（千田新聞店扱）
- 五一七〇　靜岡市井宮町　酒井利作殿（成功堂扱）
- 七〇九三　深川區洲崎町　山根馬之助殿（至誠堂扱）
- 七六〇一　丹後新山村　藤村治左衛門殿
- 八八三三　紀伊見好村　中野保一殿
- 九五六五　伊豫東伯方村　田窪長太殿

第五等（二十圓 十本）

一一五五 一二七九 一八四二
二六三二 三四六四 三五八九
三五九二 三九一六 四〇七五
四二〇三 四五一九 五七三八
五一三三 七〇六七 七〇七一
七二六三 九〇五六 九四三四
九四八六 九七六三

第六等（一圓 百本）

三〇五 三三九 四九一 八四二 八四九 一〇二三 一一一四 一二四一 一二七四 一二八七 一二九九 二六二九
二七七六 二七七八 二七九一 二八六五 二九四八 二九六四 三〇四八 三〇六五 三〇七一 三一四九 三三二七 三四二〇
三四四一 三五〇一 三五一九 三六七二 三六八三 三七三七 三八〇九 三八六三 三八九三 三九七七 四〇〇六 四〇三五
四〇三六 四一六一 四一七四 四二七九 四二九六 四三八一 四四〇六 四四五四 四四五七 四四七三 四五二四 四五八六
四六四六 四六七二 四七〇八 四七六四 四七六七 四七八〇 四七八四 四八〇〇 四八一八 四九八一 四九九九 五〇三二
五一四三 五一六九 五二〇一 五二三四 五二八五 五四二九 五四三二 五四五九 五四七八 七二〇七 七二三四 七六一九
七七三三 八一五二 八一九六 八二六一 八七六七 八七七〇 八七七一 八七八〇 八八〇七 八八三五 八八三六 八八九六
八九〇四 八九一五 八九一九 八九九三 九一六一 九一九二 九一九九 九二四二 九三六二 九四五七 九五三五 九五四一
九五六三 九九〇四 九九一三 九九九八

第七等（五十錢 六百六十本）

三 三五 一六五 一六六 一九二 三二一 三三二 四七六 八一七 九四二 一〇〇五 一〇四八 一〇六七 一〇七〇 一〇八一 一二〇六 一二二六 一二六二
一三一五 一三二六 一三三七 一三四一 一八〇九 一八四一 一八六九 一九三七 二六一九 二六二三 二六五五 二六七六 二七〇五 二七五七 二七七七 二七九三 二八〇三 二八四七
二八七一 二八八三 二九〇四 二九二五 三〇二五 三〇四一 三一一〇 三一七六 三一九六 三一九九 三二二八 三二二九 三二五三 三二九八 三三四七 三四二九 三四五一 三四九一
三五三二 三五五〇 三六一五 三六二七 三八六九 三八八二 四一〇六 四一二六 四一五八 四一八一 四一八五 四二二二 四三二三 四三七三 四四二七 四四五〇 四五〇六 四五〇九
四五一三 四五二五 四六〇二 四六五三 四六六八 四七五八 四八〇七 四八三五 四八六八 四八九二 四九八八 五〇〇〇 五〇三九 五〇四二 五〇五一 五一二〇 五一二三 五一三七
五一五八 五一六四 五二三三 五二三七 五二八三 五二八六 五三四七 五四一八 五四二四 五四五四 五四七一 七〇五一 七一二三 七一五〇 七二六四 七二八八 七二九七 七六一七
七六二八 七六三五 七七五二 七七七五 七八〇〇 八一五八 八一七〇 八二三六 八二四六 八二六九 八二七三 八二九一 八三四一 八七一一 八七二九 八七四〇 八八八九 八九三八
九〇〇〇 九〇〇六 九〇二七 九〇六三 九〇六八 九〇九四 九一二九 九一三五 九一七〇 九一八三 九一八四 九二四八 九二九七 九三四四 九三五〇 九三八一 九三九八 九四七二
九四八二 九五四三 九五六九 九六〇六 九六一九 九六二四 九六五九 九六九〇 九六九三 九六九七 九六九八 九七二五 九七三七 九七八一 九八一九 九八七四

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會



行事――三日神武天皇祭。八日灌佛會、各宗寺院に桒の花を捧げ、甘茶を煮る。二十五日頃より端午の準備とて冑人形、太刀幟の市立あり。男子ある家々にては鯉の吹流しを立て、武者人形を飾りて、節句の至るを待つ。

季節――「清明。」「穀雨。」百花爛漫、春風駘蕩として心地よく、重ね着に袷羽織の花見姿いと艶なり。

家事――鴻雁去つて燕來る。おひ〳〵春暖となりて、袷の時季に入る。窮冬以來の着古しつもりて洗濯物に手のかゝる時なり。足袋、ズボン下、襯衣、外套等の垢づきたるを洗ひ乾して葛籠に納む。園藝、栽培の好季節。八十八夜前後は朝顔の種を蒔き、蔓艸の手など作る。

食品――野菜類にては筍、早わらび、胡瓜、うど、莢ゑんどう、初茄子、じゅんさい、魚介類にては初がつを、ひらめ、櫻だひ、めばる、うなぎ、又あひだものとしては櫻餅よし。

遊樂――櫻花滿開、千草萠え出でゝ野色絢爛の好季節となる、老若ともに袖ふりはへて杖曳きて、郊外散策を試みるに可なり。又此月中旬頃よりは汐干狩に出懸く。

日曜――五日、十二日、十九日、廿六日。





顯微鏡と帶一と筋

明治學院　井深花子

▲婦人と智識慾

女學生方は理科の稽古を唯學校に居る内だけの勤と思はないで、卒業後一家を持ても始終此智識を養ふやうに心掛て貰ひたいのです。理科全般に趣味を持つ事が難いなら、せめて自分の好な一科目だけでも、怠らず研究されたら宜いでせう。一家を持ち子を設けては迚も其樣事に心を傾ける餘裕がないと思ふでせうが、心掛一つで、出來るのです。例之ば動物科が好きならば手近の犬や猫に就ても研究が出來ますし、昆蟲科が好きなら庭に飛で來る蝶や蜻蛉、虻や蠅なぞの生活狀態に就ても注意して觀察すれば皆學問になりませう。又植物科が好なら野に咲く草花、庭石に生へた苔なぞまで研究の材料とする事が出來ます。近頃は四五百倍の顯微鏡が大抵四五十圓で買へますから繻珍の帶一筋新調する費用を節したなら求められませう。顯微鏡を一つ家庭に具へますと蝶の羽からでも蚯蚓からでも面白い發明が出來、來客の際にも是に依て興味ある話を持出す事が出來ま

せう、他人の批評や生活上の愚痴話を並べ立て益もない雜談に自他の心を腐らすより、天然物を話の材料にして微細な造化の工を賞し思想を高め智識を啓き合ふのは如何に淸い樂みでありませうぞ、又子供を持た方は斯樣研究に依て子供を樂しませ乍ら善い敎育が出來るのです、御話が別道に入りますが、近頃婦人の裝飾が益々奢に進むのは社會進步の現象かも知れませんが、資產家の夫人は格別、中流特に定つた月給取の夫人までが無理算段してまでも他に後れぬやうに煩悶するのは家庭を不健全に致す基で、遂には男子が是の犧牲となつて不正の仕事をしても細君の不平を治めやうと云ふ厭な傾が生じはせぬかと思ひます。身分不相應の指環や時計を身に着けて華奢を衒ふ無意味な金を節したならば天然物の採集や研究の材料を調へて自他の智識を啓き學校で受けた敎育を空しく埋めて了はぬ事が出來ませう。

▲文學と理科、自然と美術

文學を知らない私が申すのは僭越で御座いますが、古來の文章は時代に依て高尚な思想を現はして居るものと、文章だけが巧妙で旨意の不高尚なものとがありますが、文章の類例を數ゆるのに之を選擇する次第には參りませんから時として講義する人も聽く人も一寸困る事がありませう。理科は乾燥した學科のやうですが何時も變らぬ天然を手本として研究するのですから深く極むる程崇高な思想を養ふ事が出來、又疎漏な婦人でも緻密な頭腦となる良い習慣を得られませう。

四季の花を一とつの籠へ集めた造花を外國人が見ますと、不自然で面白くないと評し、折角精神を籠めた作品も暗に笑はれる事があります、又繪畫でも蝶の慕はない花に蝶をとまらせたり、時候外れの昆蟲を草花の配物に書いたりしたのは無學な畫工の作だと笑ふ相で御座います。近頃は美術家も大分此邊に注意せられるやう

ですが、專門の婦人方は一層天然物を研究して外國人に笑はれぬやう御注意ありたいと存じます。

▲智識を要求する妻君

米國の婦人は理科の趣味が深う御座いますから、昆蟲や植物の蒐集に熱心なものです。蝶の羽一枚でもシダの莖一とつでも決して粗略に致さず大切に保存して置きます。而して一寸した家庭でも百倍の顯微鏡位は備へて在て怠らず研究致し子供達にも話し聽せて居ります。私の懇意にした或細君は私が時々昆蟲や草花を持て往て上げますと直に顯微鏡にかけ之に就て質問したりして非常に悦んで居りました。此細君なぞはやつと高等小學を終へた位な敎育程度で、子供も多し下婢もない忙しい生活でありますのに、智識の要求が斯樣に熱心であるのは實に感心な事と存じました、智識を得たい事物を知りたいと云ふ念は片田舍の婦人に至るまで盛んなもので御座います、私はクリスマスの休や暑中休に友達の家に招かれて田舍へ參りますと、敎會や農家から話を爲て吳れと頼んで來ました、斯樣際には敎會へは勿論、小さい農家へも近隣の婦人が子供を連れてゾロ〱集つて參り樣々な事を質問いたします中には支那と同國人のやうに考へて居る婦人もあつて『貴女の國人も矢張豚尾を下げて居ませうね』なぞと可笑な問を出す事もありますが兎に角新奇な事物を聞うと云ふ念は盛んで私を招く時には『必らず日本服を着て來て下さい、唯日本の婦人と云ふものを見るだけでも研究になりますから』と言つて居りました。是は物見高いと申せば申すものゝ日本の田舍婦人が花嫁の通るのを飛び出して見るのとは少し性質が違つて何處までも深く研究しやうとあせるので御座います。日本の婦人方も近頃は餘程研究的の頭腦になりましたが、私が歸朝した當時は近親の婦人の中にも米國の事物に就て質問する者は稀で、却つて此方から色々話し出て米國風を鼻にかけると厭がられた位でした。

▲子供の質問にはどう答へるか

私が或る小農家へ招かれた時、都合で夜分遲く參りました處、「子供のために來て頂いたのに最早子供が寢て了ひましたから恐れ入りますが明日亦日本服を着て御出を願ひます」と母親が熱心に賴みました、私は面倒臭い位に考へて翌日參りますと、小さい子供達が私を取圍み色々な問を初め、日本の鼠は何樣ですか日本の猫は何を食べますかなぞと並べ立てました。母親は子供がどんな詰らぬ問を出しても少しも叱らず御客樣に左樣下らない事を申すのぢやアない五月蠅から彼方へ御出と私なら制したい塲合でも、母親は左も嬉しさうに見て居りました。子供に日本婦人と云ふ者を見せるだけでも新智識を與へると、考へて居る位ですから、一つでも多く私から聽かせる事を怡んで居るのです、私は此美風を感心して居りますけれども實際今日自分の子供に對して是丈の熱心がありません。畢竟家政の執り方が未だ不規律で時間の餘裕が無いために始終心が忙々しく、學校へ出ぬ日せつせと家事を執つて居る折子供が諄く何か聞きますとつい五月蠅なり、今少し用があるから庭へ出て遊んで御出と追出て了ひますが、後で考へますと子供の爲には大切な質問を答へてもやらず、折角開發すべき機會を取はづしたのが氣の毒で、殘念で後悔する事が屢々御座います。

▲衣食以外に働く婦人

米國へ參つて初めての暑中休暇に上級生の双胎兒の友達に連れられて其鄕里へ參りました。双胎兒の娘を同じ樣に大學へ入れて在る位ですから田舍でも可なりの身分であらうと推して居たのです。夫で一緒に村の入口まで參りますと、向の畦道から牛を曳て來た汚しい百姓が帽子を取つて私に一禮いたしましたが其顏は眞黑に日に燒て帽子下の額だけが判然と白い壯丁で友達はこれが兄だと紹介いたしました、未だ彼地の風習に慣れぬ私の眼には異樣に感ぜられたのです、其家へ着ますと母親は丁度今他から歸つた處でしたが、暫く或家へ看護婦に雇はれて百弗程報酬を得のだ相で昨年より餘程餘計に收入が在たから日本に居る宣敎師の

許へ送金が出來ると喜んで居りました。此家は母親が働いて金を得なければ立行かぬと云ふ生活向でもないのに、敎會の爲に働いて、寄附しやうと云ふのは高尙な心掛であると感じました。夕方になりますと兄も農業を終へて歸つて參り一同樂しく晩の食卓に付きました際、兄は私に向ひエール大學を卒業した日本人の誰誰を御存じですかと尋ね、彼人達と時々間投詞の拔けた談話を爲て大笑した事や、其他在學中の興味ある話を種々持出す處はどうも大學卒業生であるやうですが眼の明かぬ私は此人が如何しても大學卒業生とは思はれず、併し卒業か否かを問ふのも無禮だと存じて、貴君は何年に御卒業なさいましたかと尋ねましたら一昨年卒業して爾後父の遺業を續ぎ農業に從事して居るとの話、母親も高等女學校を卒業した相應に敎育のある婦人でありました。下婢は元より使つて居ませんから休暇中は友達が母親に代つて、家事を執り、自分の衣服を縫つたりして能く働いて居りました。敎育を受た者でも田舍に引込めば都會の人より智識は舊くなりませうが、兎に角斯様人達が方々の村落に散在して居ますから村民の氣風が自然高尙になつて居るやうで御座います。

▲新聞を本當に讀む婦人

新聞を初から終りまで本當に讀む婦人が幾人ありませうかと言はれた御方が御座いますが、私なぞも矢張忽せに見る一人で、政治や經濟の欄もよく看なければならぬと時々思ひ出たやうに覗いて見ますけれども、始終讀み續けて居らぬ爲に分らぬ事計り多く、如何しても趣味を持つ事が出來ないのです。彼地に居る內も政治に熱心な米國婦人から度々質問され何より是に閉口致しました。私は未だ言葉が下手な故でもありませうが、外國婦人の仲へ入ると話の種が無つて困るのは平生迂濶に過して居らからだと思ひます。東京に永い間ぶら〳〵して居る私が、丸の內などの大建物に知らぬのが在つて、今更人に聞くのも間が惡いし、つい知らぬ儘に過して居りますが、此頃に來る筈の田舍の客

を案内する時に嘸困るであらうと心配して居ります。

▲馬鹿には出來ぬ老人の戒

片袖だけ縫つて止めると化て出るとか、針を失すと針の山へ上げられるとか、米をこぼすと眼が潰れるとか云ふやうな馬鹿らしい昔からの戒も熟考すると却々深い意味のある教訓で、皆實驗から出た言葉であります。無教育の老婆が下らぬ事を云ふ位で馬鹿にするのは未だ思を潜めて研究する念が足りないのですから、母親や姑の戒は呉々も忽せに聽いてはなりませんと毎度生徒方に御話して居ります。

▲婦人同窓會に就て

米國へ參つた者が彼地の話を致しますと、一口置に米國〳〵と賞め立て、日本人を卑むと思はれる方もありませうが、畢竟少しでも彼の長所を紹介致したいためについ誤解されるのです。併し假令誤解されても參考になる事だけは申上げたいと存じます。彼國だとて悉く善い婦人計りもありますまいし、下層になると日本より尙甚しい缺點もありませう『貴女は米國婦人の缺點を觀察なさいましたか』と或米國婦人に尋ねられましたが、『私は米國婦人のあらを探しに來たのではありません。長所を取りに來たのです』と答へた事が御座います婦人の同窓會なぞは却々取るべき處があると存じます。先づ同窓會を致す前には有名な學者を聘して講義を賴む事に一同熱中いたし、又各自も技倆のあるだけを遠慮なく現はして互に益を得やうと計るので、論文を持出す婦人もあれば、自作の音樂を演ずる者もあり、實驗上の感慨を述べる者もあつて少しも氣兼なく行るのですが、何もやらぬ婦人達も之を高慢らしいと評する事はなく新奇な智識を得たと喜んで居る處は度量の廣いものだと存じます。

▲卑下天狗ではいけない

同窓會で四角張つた演説を長々しく聞くより、茶菓を賞翫し乍ら各自の身の上話でもしたり、下らなく笑

ひ興じたりする方が圓滿で、偶々自分の技倆でも發表する婦人があると出過者自慢者と暗に爪彈きされると云ふ風では同窓會が價値なきものとなつて了いませう。自分を卑下して唯尻込しつゝ暗に人を議すると云ふのは俗は申す卑下天狗で、本當に謙遜な心がある者なら他人の智識を衷心から悦んで受ける筈だと存じます。他人の衣服や身の上を羨み、他人の才智や技倆を羨む小さい競爭心をズッと大きく考へ直し、他人の才智や技倆を見聞して我身に益する事を競爭致せば價値ある同窓會が出來、本當に愉快を得られませう。不幸な友に對する同情は誰も持て居ますが幸福な友と喜びを共にする事は却々出來難いもので、喜ぶ者と共に喜べと云ふ聖書の詞を實行し難いのは私自身に省みても分るので御座います。

社交界裝飾の苦心

交際社會の花と仰がれ、婦人間を切つて廻すには、身邊の裝飾に幾多の苦心があつて、政界に變動のある時などは堂々たる大臣連の奥様方が、窃かに商人を呼入れてダイヤモンドの質借を頼んだり、自から馬車を驅つて擬ダイヤモンドの注文をされたり、中には隨分滑稽なやりくりが演ぜられる。その點になると大名華族や舊い豪家には指環や髪飾など古くから傳はつてあるものを時々の流行に連れて形を變へ彫刻を新らしくせられるから、割合に裝飾品の需用が少ない。今身の廻りの裝飾に就て贅を凝らす婦人を擧げると、外交官では稻垣滿次郎氏夫人、井上勝之助氏夫人、華族では山内侯爵夫人、鍋島侯爵夫人、樺山愛輔氏夫人、桂侯爵夫人、小笠原伯爵夫人、秋元子爵夫人、又た實業家としては大倉喜八郎氏、高田愼藏氏の家族、原龍子氏などが其主なる人々で、三井岩崎となると其割合に金をかけられぬ相である。稻垣、井上夫人の如きは、單に裝飾品に贅澤を盡されるのみならず、金属及び寶石類に關する眼識も高く、從て其注文には通がかつたものが多いと云ふ。また金に飽かして裝飾品を作られるのは山内侯爵夫人であらう、同夫人が歐洲に渡航せられる前に某商店に誂製せられた、時計、指環、ブローチなどは實に一目燦爛たるもので、其を一つに纏めるやうに出來た面は、外側を皮張、中を絹天で作られ、品物が一々其に篏るやうになつてゐるとか。



文藝婦人と實業婦人

吉川曾水

鏡の如き月の湖心より出でたる石山寺の秋の夕、浄き机に向いて、柳櫻こき交ぜたる錦繍の文句を並べ、遂に源氏物語五十四帖を著はしたる紫式部の身の上こそいみじけれ。うちしぐれ故郷思ふ袖ぬれて、ゆくさき遠き鎌倉に向ひし阿佛尼の、此處の名所、彼處の舊蹟、道すがら硯取り出して歌を書きつけ、積る憂を文に托して、自ら慰さめたる心こそ奥床しけれ。土佐日記の初めにも、男もすといふ日記を女もしてみんとするなりと、わざと女の書きし如くなしたるに見れば、文學と婦人との縁は古しといふべし。

◎

文藝婦人に最も著しき性向はイマジネーション即ち想像力の非常に發達し居ることなり。普通の女性に取り、何等の興感を起さゝる事物も、文藝婦人の心の線に觸れば、忽ち美妙の音聲を發して、或は優しき詩歌となり、或は人情を穿ちし小說となるなり。野婦村孃が無意識に雜草と共に苅り取る撫子花も、和泉式部の眼に入れば、霜さゆるあしたの原の冬枯にひと花咲ける大和なでしこの歌となりて、限りなき餘韻を洩らし。都會の輕薄なる婦女子が、衣裳の華美、白粉化粧の出來不出來を競ひつゝ、肝腎の花見をお留守にする上野公園の櫻も、紅蘭女史をして見せしむれば、紛紛疑雪仍疑蝶、數片飛來掠翠鈿の佳句となりて風流の眞趣味を解せしむべし。『アダムベヂー』といふ小說を作りて、歐洲の文界を愕ろかしたるジョージエリオット女史の成功は、深き思考力と大なる想像力とを結び合せたる上に築かれたること明白なるが、世界の閨秀作家を通覧

するに、他の職業を執る婦人に比して、何れも想像力の非常に發達したることに氣附くべし。

◎

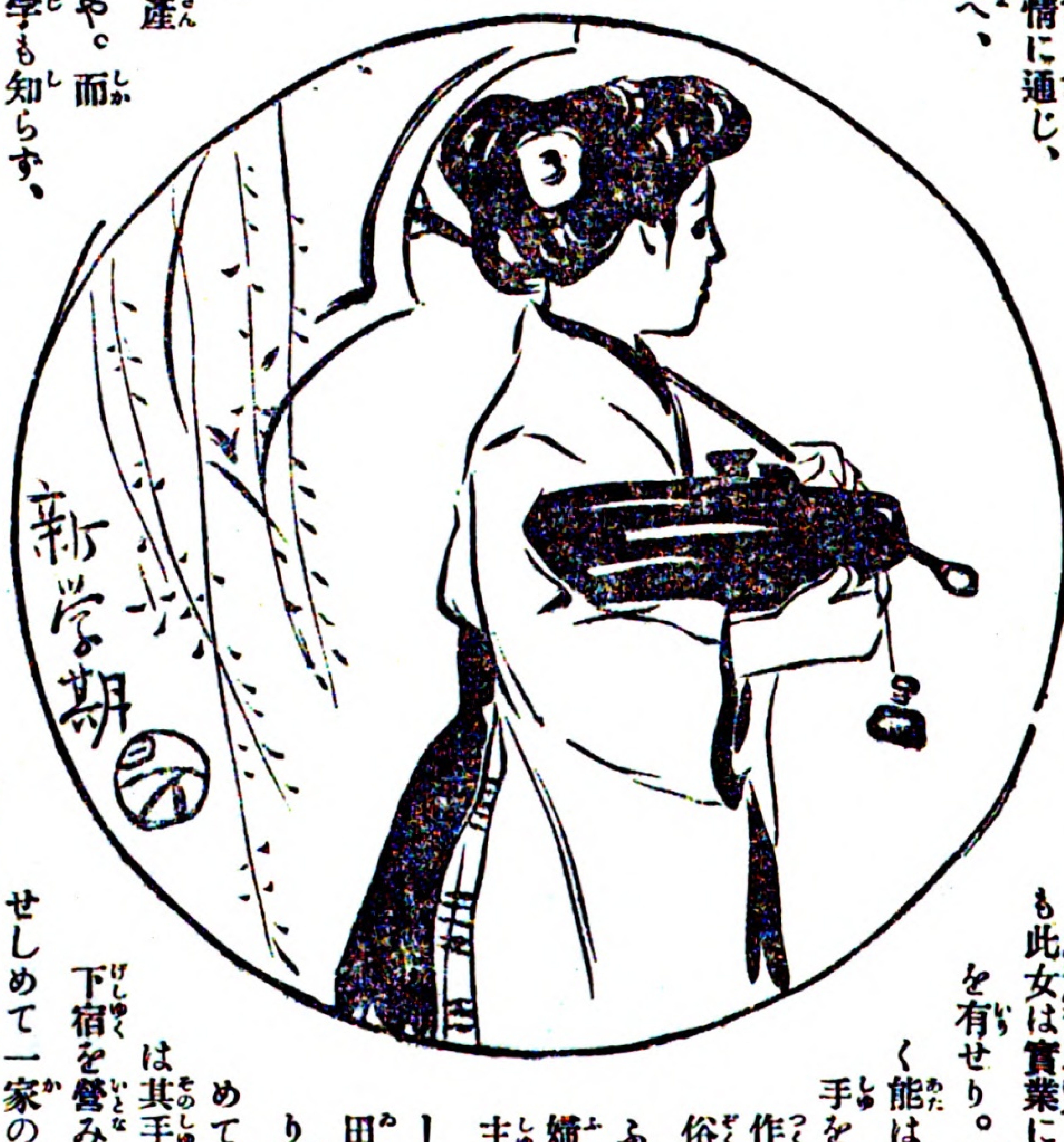
次に文學趣味を有する女性に見る特長は眞實を愛する念なり。如何に燦爛たる思想も、眞實を欠けば恰かも蛙の鳴き蟬の噪ぐが如く、折角の妙文も人を動かす能はざるべし。現時米國の女子文壇に於て、盛名あるものを擧ぐれば、先づ指をアイダ、ターベル孃に屈せざるべからざるが、孃は其彩筆を揮つて、トラストを攻擊し、『マックルーアス、マガジー』誌上にスタンダード石油會社の歷史と題する文章を揭げ、大に民心を動かしたるもの、要するに孃の眞實を愛し、虛僞を疾む精神の溢れたるに外ならず。而して現代文藝婦人の模範は、恐らくルーマニヤ國の皇后エリサベス陛下ならん。陛下は千八百四十三年生れ、十六歲の時初めて戲曲を作り、ソレより數多の小說脚本をものしたるが、其中『マスター、モノール』と題する悲劇及び『チムポビザの物語』といふ神仙譚は大に內外の好評を博し、其後『女皇の思想』と題する傑作を出すや、佛國學士院は皇后に名譽の賞牌を贈れり。又皇后は慈善を好み、其一枝の筆より得たる莫大の原稿料は、盡く之を養老院孤兒院に寄附し、宮中に於ける生活は質素を守り每朝四時に床を離れて働らき給へり、皇后嘗て侍女に告げて曰く、『若し人民の爲になるならば、余は何時にても皇后の冠を棄てゝ、農夫の仲間に入り羊を飼いて生活すべし』と。此の如き純潔無私の心情ありて、初めて一世の女文豪となることを得べし。猥りに男女間の戀愛にあこがれ、ソレ以外に何等の光明も理想も認めざる女學生の間より大なる閨秀作家を求むるは、寒中筍を求むるよりもむつかしからん。故に文藝を業とせんと思ふ女性は先づ己れの想像力に富むや否やを考へ、次に眞實を現はす確信技能あるやを驗せざるべからず。然らずして戀愛歌の駄作者となり、淫猥小說の愛讀家となすも、斯る研究は女性の文學趣味を養はず、却つて其品性を損傷すべし。

◎

交際社會に出入せず、日々の新聞紙すら碌々讀まざるも、能く世情に通じ、學問なきも能く事理を辨へ、常に喜ばしき顔色を呈しつゝ、氣まめに立ち働らく婦人あり。是れ即ち實業婦人にして、男子に嫁すれば大切なる世話女房となり、獨立の生活を營むも、飯を食ひ外づすことなし。

◎

論より證據、某商店の女主人は一兩二分の資本を以て、十萬以上の資産を作りしといふにあらずや。而して此女は伊呂波のいの字も知らず、世界の圓きか四角なるかを知らぬといふに



到つて更に驚くべきにあらずや。然れども此女は實業に對する趣味と腕とを有せり。是れ其姓名すら書く能はざるに拘らず、亦手を振つて巨萬の富を作りたる所以なり。俗に花より團子といふ諺あるが、實業婦人の趣味は此團子主義なり。米國ニユーイングランドの片田舎に於て、農業より得る夫の利益は極めて少なきを以て、妻は其手腕により夏期素人下宿を營み、數多の人を宿泊せしめて一家の經濟を立つること少なからず。又獨逸婦人の勤勉にして、

家政を整理するに巧みなるは世人の知る所なり。然れども儉約貯蓄のみが實業婦人の能事にあらずして、機智に富み、人情を讀み、所謂人間學に通ずるを、實業婦人の特色と爲さゞるべからず。

◎

引證少しく下卑なれども料理屋宿屋の女將といふ連中には秀出したる實業婦人多し。唯其趣味理想の餘りに低き爲に、其實例を示さゞるも、彼等が遊客宿泊人の容貌風采を一見するや、直に其精神までも領解する眼識の鋭敏なる、實に愕くべきものあり。されど我等は女將を以て、實業婦人の典型となすものにあらず、たゞ女將仲居藝娼妓といふ賤業婦人中に、往々實業婦人の資格を有するものあることをいふのみ。

◎

總觀すれば實業婦人の特質は勤勉なるにあり、眼より入りて鼻に出る如き才智にあり、快活なるにあり、平民的なるにあり、何事も氣輕く人の爲に斡旋するにあり。或る店は主人の沈鬱無愛嬌なるにも拘らず、女房の顧客に應接する方法宜しきために、繁昌したりとすれば、此女房は確かに實業婦人の尊稱を戴くべし。彼の丁稚小僧の立身して、大富豪となり大實業家となる、概ね内助の功與つて力ありとすれば、名こそ政治婦人文藝婦人の如く現はれざれ、世間にある實業婦人の數は頗る多しといはざるべからず。而して男子の最も信賴するは此無名の女傑なり。夫の破産を救ひ、家政料理の任に當り、夫をして後顧の憂なからしむるものは此女傑なり。されば賢明なる未婚の男子は、政治婦人文藝婦人宗敎婦人よりも、此實業婦人と結婚することを欲するならん。


日曜学校



三都生活の大様

東京人、大阪人、京都人、おの〳〵氣質風尙の相違

等々力大觀

▲輪鍵の比喩

京の着倒れ、大阪の喰ひ倒れ、東京はそれを併せ兼ねるとの俗諺どほり、場處變れば品變るで、三都にはそれ〴〵各の特色がある。昔し或る粋客が三都の舞妓に對つて『輪鍵』とかけて何と解くと謎々を出したら、東京の半玉は「お酒と解く、心は引掛けて寢る」、京都の舞妓は「別嬪はんと解く、心は殿さん(戸のサン)にかゝる」、大阪の舞妓は「船と解く、心は港(皆な戸)に着く」と答へたとやら。この謎々は昔の三都の状態を巧みに云ひあらはして居るけれど、現今の東京はなかなかお酒ばかり飲んでは居られず、日に〳〵物價騰貴の早鐘が耳朶で亂打して生活難の火の手が今にもお尻に燃えつきさうである。京都だつてその通り、如何に細腰花顏の別嬪はんが凭れかゝつて來ても、此頃の不景氣では風流才子少しは青くならずばなるまい。併し大阪だけは先年立派な築港が出來て、船の比喩は愈々眞面目を發揮して來た。餘談さて措き先づ、

▲三都の輪廓

を一瞥するために靜岡か名古屋あたりに富士山より何層倍も高い山があると假定して、その山へ登つて東京京都大阪を望遠鏡で覗いて見ると一番驚くのは東京の市である、平常から花の都、大日本帝國の首都と自惚れきつてゐたのが、豈に計らんや大根畑、芋畑の眞中へ急拵へでしたホッタテ小屋みたやうなものに過ぎなかつた。花の吉原のお隣にある漬菜の名所の三河島だ

けは「菜の花や月は東に日は西に」とでも負惜しみを云つて置いたところで、練馬の大根、河越の甘藷、田臭紛々は如何に、加之に葛西といへば排泄物輸出で、名高く、雙者同志の會話の様に途方もない大きな聲の者を特に葛西聲とさへいつてゐる、其他東京の近在には王子、浦和、蕨、青梅、八王子などゝ肥桶の臭氣がしなければ、山繭の臭氣がする。之れに比べて京都、大阪は流石百年千年の舊都、市街そのものは、到底東京に及ばないとしても、その代り附近には伏見、宇治、奈良、堺などの名所舊蹟が點々手を連ねあわせて、何れも蒼古の香りがしてゐる。次の山を下りて、腰辨當で大急ぎに三都の、

▲市街の往來

を通り過ぎて見ると、京都、大阪は概して市街が規則正しいけれど、東京の往來は廣狹、彎弓、いかにも不規則、不規律である。東へ向つて歩いてると思へば何時か西に向いて歩いてゐたり、市中の眞中で狐に誑まれたやうに同じ往來を幾度も〳〵迷々することが屢々ある。だから道を數へるにも、京都では何の辻を西へ入つて上るとか下とかいひ、大阪では何橋詰北を北へ入るとか南へ入るとかいふことが出來るけれど、東京では北とか南とか云つたつて一向市街の標準にならない巳を得ず右へ折れて左へ這入るといふやうに左右といふ語を用ゐる。それから東京の往來は隨分狹い所もあるけれど概して廣い。殊に目貫の場所になると、人道車道の間に柳が植わつてゐて、電車は蜘蛛の巣のやうに八方へ馳り、往來を通つても心地の好いこと此上もないが、京都になり、大阪になると、段々往來の路幅が狹くなつて、家屋の色澤が益々陰欝になつて來る。京都では聊か電車があるけれど、大阪は殆んど無いと云つても好い位。そんなら電車の代りに何があるかと云へば、市中を縦横に貫いてる川堀の上を絶えず活潑に巡航船が駛つてるのと、極めて敏捷な人力車、蓋し三都の車夫を評するのも凄じいが京都の車夫は頗る、鈍馬、東京の車夫は先づ達者、雖然大阪の車夫に至つ

ては實に天下一品である。何しろ勸工場の中のやうな狹い賑やかな心齋橋筋を、群衆がウヨ〱歩いて居る自轉車が走つてゆく。荷車が通る。騎兵が一列になつて馳けてゆく間を、韋駄天走りに走つてゆく腕前、否脚前には更に驚いたものだ。併し、この雜閙した、マゴ〱すると踏み潰されて了ひさうな中を平氣で綏然歩ひてる大阪人も是れまた天下一品。假令須田町（東京）の電車交叉點へ抛り出して立たせたつて、別段驚くことはあるまい。次度は内部へ這入つて三都の、

▲家屋の有樣

を覗いて見る。上大厦高樓より下豚小屋に等しきに至るまで盡く備はつてるのは東京。京都は總じて貧乏小屋が少いけれど、大阪になると一體に粒の揃つた小さな家が澤山ある。先づ統計表で見ると大阪市の總坪數が五百萬餘坪、人口が一百十五萬餘、即ち四坪餘りに一人宛住む割合なのだから、立派な家になど住まはうなぞは、以ての他の不了簡、新たに大阪へ移住するものは到底市内に住むことは出來ないものと覺悟しなけりやなるまい。その段になると東京は平野に建てられた都ではあり、交通機關は日々に發達する、加之に貸家でも建てゝ堅い利子を取れば夫で結構と至極消極主義の資本家があるので、斯う三拍子揃つたお蔭で商人には商人の借りる家、官吏には官吏の住む家、官吏の中でも亦た高等官の這入る家と、屬官の這入る家とが整然と最初から區別して建てられてあるけれど、大阪には最早一杯人家が建ち盡して今更貸屋などを建やうにも餘地が無い。だから新たに移住する者などは當分親類の家にでも同居してるか、若しくば宿屋に泊つてゐて人頼み、悠然貸屋の明くのを待つてゐる他はないが、それも夕マに一軒明いても直ぐに塞がるといふ始末、加之家賃が高い上に敷金の一層高いことは三都第一である。東京で十圓位の貸屋は京都では七圓位、大阪では十五圓乃至二十圓位は取られる、敷金は東京、京都ともに家賃の二ケ月分位に定まつてゐるのが、大阪では大概五ケ月六ケ月分位を納めた上に、家を出る

時には更に敷金の中から二割差引かれる。だから新たに大阪に行く者は非常の苦しみの上に、去る時も亦た泣の涙である。而もその借りた家が何んな立派な家かといふのに、東京では多く新築の住心持の好いのに引換へて、大阪では間口の狹い、奥行の細長い、天井の低い、殊に二階の天井は必らず一方が傾斜してゐて、それがため極めて光線や空氣の流通が惡いことはいふまでもない。そんなら何も好き好んで此んな光線や空氣の流通の惡い家に棲まねばならぬ大阪に來なくつても好さゝうなものなのに、事實は之と正反對で大阪は年々人口が夥しく増加してゆく。これは東京や京都と、



▲活動の方面が異ふ

からである。東京は政治の中心學問の中心その他總てのものゝ中心であるが、商業だけは大阪に一歩讓らねばならぬ。從つて官員さんや學者などが持囃されるのは東京を勿論第一とし、未だしも京都は幾分か益だけれど、大阪の役人

と來ては眞に憐むべき境涯である。知事樣を筆頭に百圓以上のお役人さまが果して何人御座るだらう。浮かり料理屋なんどへ飛び込んで髯を捻つてお役人樣風を吹かせたら最後、忽ち○○○○○しちりけつぱいに鹽花を撒かれること疑ひなし。先日も大阪で有名な藝妓が知事はんは全體何の位お金をお取んなはるんだすかと聞いた時年俸三四千圓位だと聞いて喫驚して、オヤそんなら妾達のお小遣位のもんだすかと云つたとやら。人間生れて大阪のお役人となる勿れ、商人を第一に、藝妓を第二に、その他のものは官員はんでも、教員はんでも物の數にも這入らないのだから、令孃諸姉よ、七度生れ來ても決して大阪の月給取の許には嫁ぎたまふなよ、と老婆心ながら御注意申して置く。それから序でに云つて置くのは、大阪商人が總てのものを自分の商略に利用するのが實に巧みなことである。ツイ先日出來た萬世橋(東京)の袂にある消えたり明くなつたりする電光飾の廣告などは、大阪では疾くの昔から心齋橋筋や戎橋の袂で行つてゐる。また、大阪力士の中に次亞辨とか、澤の鶴とかの名があるのも是れ亦た一種の廣告法、生た人間に商賣品の名を附けたのだから、東京力士の電氣燈とか、片福面とかいふ滑稽趣味から出たものとは全然趣を異にしてゐる。併し斯うまでして商業に骨を折り、金錢を多く得なければ、一人で平均四坪にしか當らない土地に齷齪してゐても甲斐があるまい。それから思ふと、東京や京都はいくら生存競爭が激しいといつた處で多寡が知れてゐる。云はゞ東京などは坐つてゐても喰つてゆかれ、京都などは寢てゐても喰つてゆかれるけれど、大阪だけは手足を動かして走り廻らなければ四坪の土地に棲むことが出來ないのである。飜つて三都の人の理想を見るに、

▲東京の名譽心、大阪の實利心

は確かなものである。この間に立つて別段名譽心もなければ實利心もなく、何をクヨ〳〵川端柳のやうに、自分の窶れ姿を加茂川の水に映して、その日〳〵を暮してゐるのが今の京都人の狀態、といふのもお氣の毒

ながら兎に角活氣といふものは爪の垢ほどもない。元來宗教心に疎い日本人は、何時の時代でも名譽心と實利心とが車の兩輪のやうになつて活動してゐる。東京人の名譽を重んずることは、縦へいかなる大富豪でも高利貸から成上つたり、詐僞師から成りあがつたりしたものは世間の人が更に相手にしないのでも分明る。その段になると大阪人は寛濶裕容ともいふのであらう、縦へ細民の膏血を絞らうが、何をしやうが、成功してさへ了へば黄金佛の如來さまと仰がれて、あの人はホンマに豪い人やナと唄ひ囃され、斯ういふ人の爲には實に極樂淨土である。だから大阪で人物の豪さを計るには何時も算盤を指彈いて、一萬圓有る者よりは二萬圓有つてる者が倍だけ豪く、四萬圓有つてる者は其のまた倍だけ豪いといふ勘定になる。故に大阪人は他に豪



く見られるためには身の周圍を飾り立てなければならない。往來を歩いてる處を見ても東京のやうに汚い風をしてゐるものは至つて少く、燦爛と光りかゞゆく絹布をゾロリと着流し、指には必ず一つや二つの金光燦然たる指環を嵌めてる、甚だしいのになると二絃琴の爪のやうな分の厚い廣い、

▲指環を十本の指に十個

も嵌めてゐて、宛然私の指は餘り黄金を掴みましたから恁麽に指まで黄色くなりましたと云はぬばかりである。指環の他に金縁眼鏡、金時計は云はずもがな、金煙管、金の腕環、その他凡てが金々づくめ故、假令大阪人は金色夜叉を讀んだつて、お白湯を呑んだほどにも感じなかつたに違ひない。これは大阪の女學生にばかりではなく、東京の女學生にだつて聞いて御覽なさい、「婦人の魂は何ですか」との問に、今時素直に「鏡で御座います」と答へるものがあつたら、其れこそ玉のやうな指に嵌めてゐる指環がフフンと笑ひますから……。殊に大阪の婦人になると、指環を可愛がること自分の魂とも生命とも思つてゐると見えて、縱へ自分が戀しい男に離れやうが、良人に別れやうが、指環ばかりは金輪際拔くやうなことは仕ない。嘘と思ふのなら大阪へ行つて、風呂屋を覗いて御覽なさい、下宿屋を覗いて御覽なさい、番臺の上のお内儀はんでも、お膳を運ぶ孃やんでも黄色く光つてる指環の一つや二つは必ず嵌めて居る。この指環を買ふためには他にも云はれぬ女德を傷けた苦心經營を母子の間で何れだけ運したやらう、精しいことは云はぬが花。扨て次に人生最も必要な遊樂の方面を見るのに、是れはまた獨逸の文豪シルレルが云つた通り「人は遊樂する時に最も人生の價値がある」代り活動方面に比べて却々忙しい。取りあへず、

▲月、雪、花の眺め

いかにといふに、昔は扨て置き、愛宕の月、品海の月といつた處で、此節は馬鹿に冷遇されて來たのは東京

の月見であらう。望月とか、後の月とか歌にこそ殘つて居れ、今は昔のやうに縁側に薄を飾つたり、お團子を搗いたりする家は十五夜の星の數ほどもあるまい。中には、昨夕は確か十三夜でしたねと噂ばかりで過ぎて了ふことさへ屢屢ある。京都も亦たお月さまを大切にせぬ所。それに引換て大阪は愕くほど十五夜、後の月を重んじ、年中行事中決して欠く可からざるもの〻やうに心得てゐる。豈夫戸毎にお團子を搗くといふほどでもないが、何處か見晴しの好い處に出て必ずお月見をすることに極つてゐる。これは曠原に建てられた



東京や、四面青巒の中に抱かれた京都に比べて、海濱に築きあげられた大阪の方が遙かに月の趣味を解してゐるのにも依るだらうが、一つには月見以外の雪見花見に乏しい故でもあるだらう。雪景色の趣味は大阪では殆んど皆無、京都や東京で粋人騒客が高殿で靜かに盃を傾けるのを、いくら羨ましがつても眞似ることが出來ない。併し愈よ花暦の競爭に

なると、大阪は京都と聯合して南海關西等の風月列車を味方に頼み、大に東京と覇を爭ふ事が出來る。由來東京は四望茫々たる曠野に建られた都會だから驚くほどの花の名所がありさうな筈がないと共に、其處此處の空地へ自分勝手に好き自由な、花の咲く樹を植つける便利がある上野の櫻花で候の、龜井戸の藤で候の、堀切の菖蒲で候の、不忍の蓮で候の、と何でも勝手次第の物を植つけて眺めることが出來るけれど、一人平均四坪有餘の狹つくるしい大阪や四面山で圍まれた京都では此眞似は出來ない。櫻の宮の櫻は枯木がホンの少しあるばかり、而も大阪一流の塵埃と煤烟に穢れて鼠色に咲いてる。祇園の夜櫻といつた所で、聊か古木の枝垂櫻が群衆の吐息で厭な色に染つてゐるばかり。その他藤も、菖蒲も、蓮も何一つ東京に及ぶものがない。已を得ず、例の風月列車を味方に頼んで天下一品の名勝を列べ出すと、サアあるぞ〳〵、月ヶ瀨の梅、吉野の櫻、長谷寺の牡丹、高雄の紅葉。これには流石負け惜しみの强い江戸つ兒も後へに瞠若たらずばなるまい。

然らば一轉して、

▲祭禮の景況

いかにと見るに、凡そ二十年前の東京を今日と比らべて、宛で國が變つたかと疑はれるのは電車が盛んになつた事と、祭禮が全然廢れて了つた事。昔、山王の祭禮とか、神田明神の祭禮とかいへば實に盛んなもので、晨暗い中から笛太鼓の音が聞える。何十本と云ふ山車が通る。踊屋臺に奇麗な娘が踊つてゐる。血氣盛んな若衆が飽くまで醉つて飽くまでお神輿を揉みに揉んで、聊か野蠻ながらお神輿に崩されて人死さへ出來た位なのが、今では電線に妨げられて、ソコ一寸も動くこと無用の、なんのことはない作りつけの山車が出來て了つたことは、いつぞや滿洲軍凱旋の時御承知の通りで、電線の爲めに凧を揚げられなくなつて泣くのは子供ばかりではない。何しろ江戸ッ子の眞面目を充分に發揮した花見の道化と、祭禮の狂熱とは今は全く廢れて了つた。其れに引換へて京都では加茂の葵祭、

平安神社の時代祭、祇園神社の祭などは昔、そのまゝのなか／＼盛んなものである。元來京都は人も市も共に古代めいてゐる故でもあらうが、古代めいた祭禮は愈よ奬勵され、恐くは三都隨一であらう。大阪では例の市街幅が狹いのに、人が實利主義に固つてるから祭禮なんかは如何でも好ささうなのに、今では却つて東京以上に盛んである、天滿祭といへば殆んど全市中の賑ひで堂島川、土佐堀川を始め、有らゆる川堀に數限りな



き絲竹管絃の船を浮べること、東京の川開きや、花見時の隅田川などよりは尚と凄じい勢ひである序でながら云つて置くのは、大阪で祭禮の時の名物寶惠駕である。藝妓を盛裝させて駕の中に安置し若い男が桃色の鉢卷に友禪染の襦袢の袖を飜つかせながら其れを擔いで『寶惠駕々々』と間の拔けた聲して人魂のやうにフワ／＼と走つてゆくさま、誠に感にもつかぬものである。然らば、

▲興行物の樂しみ

はといふのに、縱へ團菊左は死亡なつても演劇は東京が第一である。大阪では朝日座に立籠つてる秋月、小織の壯士俳優一座の他舊俳優では片岡仁左衞門、中村雁次郎などがゐて、兎にも角にも始終道頓堀を賑はしては居るもの丶、身の入つた演藝は一向に見當らない。これといふのも見物人が半分商人、半分藝妓で、何んなクダらない脚本でも濃厚く甘いものでさへあれば、必ず見物に來る故、俳優は年が年中同じ座へ立籠つてゐても決してお米櫃に心配することは無い。その代り何時まで經つても藝の上らないこともこの上なしである。京都に至つては演劇の價値殆んど零、云ふに足らない。角力は常陸山洋行以來幾分か人氣が落ちたやうでも、上方のと比べれば矢張り雲泥の相違、回向院で近年八百長の弊害に堪へられないと云つても、大阪力士が例の次亞燐とか、澤の鶴とか、廣告柱の代にされるのよりは未だ〱結構なこと、斯ういふ風に芝居でも、角力でも、到底東京には及ばないけれど、玆に唯つた一つ大阪でなくつては見ること、否聽くことが出來ないものが唯つた一つ、それは云ふまでもない文樂堀江兩座の淨瑠璃で、年が年中攝津大椽と越路太夫が入神の妙音を聞かせて居る。大阪に來て何より先づ聽くべきものはこの淨瑠璃である。序でに京都に行つて見るべきものは花の四月、祇園の都踊である。全體藝妓といふと聞くさへ耳が穢れるやうだが、都踊の美しさばかりは些かの不快をも感じさせない。東京の歌舞伎、大阪の淨瑠璃、京都の都踊は確かに三幅對であるこれは興行物ではないが、東京の川開、京都の四條磧の大納涼、大阪の舟遊びも同じく三幅對として數へて置かう。見るものが濟で愈よ、

▲三都の食物

の品評會に移る。京都は昔より風流やかな處、定めて牛肉なんぞは召喰る方が少いだらうとは見當違ひ、西に神戸、東に江州八幡から絶えず上等の牛肉が運ば

れて來て、お値段も東京よりはお格好な上、肉も上等だとは些か案外に御思召すだらう。京都、大阪で不味いものはお蕎麥に天麩羅、新京極の更科は京都第一なさうだが左程感心が出來ず、大阪梅月の天麩羅は如何せ天金(東京)などに及ばないが先づ〳〵結構と賞めて置かう。但し上方ではお蕎麥より饂飩である。お鮨は東京では握鮨であるが、京大阪では切鮨といつて、小さく四角に切つてある。美味不味いは人の好々で孰らが如何とも云ひ兼ねるが、東京では鮪のが名物、京大阪では鯛のが御自慢であるさうな。東京のお汁粉は上方のせんざい、但しせんざいは小豆の入つてるのを云ふのである。東京で鰻丼のことを京大阪ではまむしと云てゐる。だから最初京大阪へ行つた人が蝮の丼を喰はさせられるのかと思つて驚いたとやら、落語にでも有さうな話である。全體大阪の喰ひ倒れなどゝ偉さうなことを云つても、喰ひ倒れも矢張り東京の方が優で、市中には一丁隔に必ず蕎麥屋の掛行燈があり、淺草の觀音様の附近に行つて見ると驚くほど飲食店が並んでゐる。併し大阪の蠣の多いのには愕かされる。殊に寒空になる時分には態々廣島から蠣船が來て、殆んど橋々の棒杭の側に泊つて翌年温暖くなる頃まで蠣料理を賣る。京都にも蠣は隨分あるが鱧の方が一層名物で、鱧の骨切は一寸關東人に物珍しく思はれる。この他京大阪には松茸の多いこと、蕪菁の美味いことなど數へ出したら限りもあるまいが、大分事柄が下司ばつて來て、お腹が脹つて來たからこれで筆を擱く。





私の行ひつゝある

臺所の整理法

棚橋絢子

△一切棄てぬ覺悟

一家の主婦たるものが、其厨房を整理する上に就いての心得は、先づ米穀は固より、野菜にしても、魚肉にしても一切棄てぬといふ覺悟が大切で御座います。誰しも新鮮しい米穀、魚肉、野菜などを棄てる事はありますまいが、動もすると其の新鮮なものを腐敗させて、遂に棄てる樣な事がありますから、餘分な物は成るべく買はない樣にしなければなりません。

買ひ求めた品物は、料理に色々變化を與へて使用する事が肝要です。而して殘りなく使ひたいと思ひます。東京は一般に大根の皮を剝いて其實のみを食する風でありますが、元來大根は皮と實との間に滋養があるので、皮を棄てると云ふ事は、如何にも拙い料理法で御座います、けれ共私の家には書生も居りますし、餘り意地汚く思はれるのも、心苦しいので、大根を輪切に切つて、其れを又四角に切ると、眞中は純粹の實となりますから、其れを調理して書生に賄ひ、其端々は糠づけにしてゐます、之は一擧兩得の方法で、皮を剝く手數の省けるのと共に、滋養の多い處を賞味する事が出來ます。

△器具の置場所

臺所を整理するには、飲食の器具、其他物品の置場所を能く整頓する事が、肝要であります。置場所が整頓してゐないと、其れが爲めに、非常な亂雜を來たし無益な時間と手數とを費し、或は不調法を爲でかすなど、種々樣々の弊害があります。私の家に使つてゐる下女は、來てまだ日が淺う御座いますが、初め十日間

程様子を見てゐると、土瓶の置場所が毎日違つて、或る日は佛壇の前に、或日は居間の隅に、又或る日は異中に置くと云ふ風に、更に定つてゐませぬから、私は一日、お前のやうに毎日然う物の手勝手が違つては、何んな粗忽が出來るか知れない、置場所を忘れて、圖らず袖に觸れて覆へすやうな事もあらうし、又、猥狽へ騒いで探すやうな事も出來るから、置場所はキチンと一定しなければならぬと諭した事がありました。

茶の湯は此點は誠に整然としたもので、手都合が順に出來てゐるから、決して無駄といふ事がなくて、業を徐かに速くする事ができます。

自ら言ふのはおかしいけれ共、私が曾て失明の良人を看護しつゝ、三人の子供を育てゝ、一日たりとも學校を遲刻させた事無しに遣つて來ましたのはつまり恁う云ふやうに事に規矩順序を立てゝ處置した爲めだと思つてゐます。

△一錢を惜んで一圓を惜まず

人樣はよく貯蓄と云ふ事を申されますが、私は其樣云ふ事は大嫌で厶います。毎時貯蓄貯蓄と言つてゐると、何うも人間が汚くなつていけません。金錢物品を溜めるといふ考よりは、寧ろ無益な費を省くといふ考を頭に置く方が餘程良いかと思ひます。貯蓄と云ふ事は、無益な費を省きさへすれば、自然に出來るもので、其れを目的とするのは少しく見當違ひかと思ひます。

然れ共無益に使はぬと申しても何もお金を惜むのではありません。例へば、甲乙二つの根掛があるとすれば、甲は價格は高いが持ちが長い、乙は價格は安いが直くに毀はれるといふ場合には、甲の方を需めるが得策で、一時は高い金を出しても、持ちの善い上に、其潰しが何時になつても益に立ちます、乙の方ですと、一時は得のやうに見えても、長く有たない計りでなく、其潰しも利きません。其樣にして安い品物を幾度も需めれば、高い品物を買ふよりも却て費用が嵩まるのは勿論で厶ます。一文惜みの百知らずとはつまり之を謂つたので御座いませう。

私共は宅の子供を育てる間に、僅か一錢たりとも無益に使はせず、高くても有益な事には惜みませぬ。私共が一錢の金を惜むで、壹圓の金を惜みませんから、子供は時として、怪訝な顔をして居りますが、幼心には成程おかしく見えませう。

總てお金は之を使用して世に出す點に注意すれば良いので、貯蓄其物は決して目的ではありません。衣服にしても同じ事で御座います、何も簞笥に詰め込むで使はないのが目的ではありません。併し一たび出して使用する上は、十分大切にして、幾ら經つてもしみも附けず、破りもしないといふ事に注意するのが必要であります。



△嘆いても貧乏は逃げず

人が貧苦に處した場合には、『斃れて止む』の決心で働くべきは勿論ですが、此覺悟は、一朝一夕に出來るものでないから、平生心掛けて、能く心を練り鍛へて置く事が大切であります、私の家は代々朱子學を奉じてゐましたので、私も其の影響を受けて、艱難の時に際しては、彼の主一無適の意味を服膺して、脇目を觸らず、進む覺悟で居りますが、其の朱子の語に、或人が死ぬのが厭やで堪らないと零ぼして居ると、朱子は死ぬるが厭やならば死ななければ善いと言はれるので、死なずに濟まぬから悲しいのですと言ふと、死なずに濟まないものを幾ら零したつて仕方がないから寧ろ死生の外に超然として現在守る可き事を守れと說き聞かされたと書いてあります。貧苦に處するのも同樣であります、貧乏は厭やだ〳〵と嘆息したとて、逃げて行くものでもないからそれよりは能く現在を守つて、彼の廣瀨淡窓先生が、『既往を悔ゐず、將來の功を求めず、只眼前成すところに從つて、仔細に點檢し去れば、自から餘裕ありと』云はれた如うに、兎やせむ、角やせむと計畫のみに日を暮らす事無く、先づ眼前の事に注意して、働くのが最も必要で、斯くする間に新たに希望が湧いて來やうかと思ひます。



應接室に於ける下田女史

婦人記者



今度下田歌子女史が英國の家庭教育に鑑みて神童園なるものを設置されたといふ事が大分世間に評判が高いので記者は一日、女史の意見を聞く可く實踐女學校に女史を訪問致しました。

校門を這入ると右側が竹垣でその竹垣の中が運動場で有ろう、鞦韆の網などが下がつて居て今生徒が二三十人長刀の體操をして居るところであした。

正面の玄關口には硝子戸が塡つて居て、其の硝子にはこの校の徽章らしい櫻の紋が付いて居る、玄關に上ると十疊ばかりの板間で、受付の机と控所の机と相並んで寄贈らしい大時計が馬鹿に目に立つのが柱に掛けられて、壁には體操道具の亞鈴や球竿が整列してかゝつて居る、左側は宿直室で弓張提燈が鴨居に並んで居る、壁には掛物がかけてあるそれは小野鵞堂の假名書の美しいので、「人の一生は重荷を負て遠き道をゆく如し」などの金言が書いてある、この室は裁縫室にも用ふるのかしら生徒が頻に仕立物をして居る。

椅子に倚つて侍て居ると軈て中年の女教員らしい方が出て來られて、「何卒こちらへ」といふ挨拶に導いて下さる從て這入た室はガランとした廣い室である凡七八十疊もあらうと思はるゝ部屋にたゞ二脚の椅子が有るばかりで何の設備もないから、これは講堂かしらと思たが其にしては餘に粗末ゆゑ雨天體操場かとも思たが室の一隅に殆ど前世紀時代のらしい古ピアノが据えられて居たので音樂室といふ方が適當だらうと思て居る。

寫眞でこそ度々拜見して居たが記者は女史には初對面であるから、若しや今の方がさうではないかしらと

思つて、「初めまして」と挨拶すると、其の聲の終らぬ内に、

「只今來客中ですから暫時お待を願ひます」

と慇懃なお言葉に、これはしたり、違つたかと思はず赤面致しました。

　とかうして居る中に矢絣の更紗の校衣を着た女學生が小笠原式の折屈正しくお茶を運で來る、日本婦人と云ふ雑誌をお愛想に置いてゆく、その雑誌を二三頁繰り展げて見て居る聽て戸の外に足音が聞える、女史かなと居すまいを正して居ると果してさうであつた、女史はいと快活な調子で、



「どうもお待たせ申ました」

と會釋して椅子に腰を掛られた。見ればお丈は餘り高くなく、あの筒袖の黒の校衣を着て居られる。襟の邊の紫の打紐が目につく。思たよりはお若くて、色白の豐頰は寛裕と引締つて何處となく才氣を包んだ面影、言葉もハキ〳〵とした能辯で、豫想した女史は矢張り實際の女史と違はなかつたのは嬉しかつた。

「御多忙中御邪魔をして恐入ますが、實は神童園の事に就いて御説などを伺ひ度いと思て……」と記者は口を切ると、その言葉が終らぬうち、女史は打消の言口早に、

「否、それは間違なのでした」

と云はれて、

實は新聞などでも私が神童園なるものを設立したと云て居りますが、其は私の主意を取違へた誤解なので神童園などゝをこがましいものではないので、たゞこの學校内に育兒部と云ふのを設けて見やうかと思て居る計なのです、

ハーその育兒部ですか、それは、生徒に保育の觀念を充分に養ふと云ふのが第一の目的なのです、

まあ東京のもので通學して居る生徒等は家庭に居りますから弟や妹を手がけて居るでせうが、地方の人が遊學の爲に何年の間この寄宿舍に這入て終ふと、全く育兒といふ觀念に遠かるのですが、其上卒業すると直ぐ結婚して終ふ、さうすると全く育兒といふ事に就いて少しも智識も經驗もないうちに、直ぐ妻となり母となつて、自分の兒を育てなければならぬ責任を負ふのですから隨分まごつく事もあらうと思ふのです、萬望さういふ落度がないやうにしたいのと、次には法律上の學齡ですが僅に一ヶ月違で學年が一年宛違つて終ふ例があるので、例へば同じ歳でも、三月生れた人は今年入學する事が出來ても、四月生れの人は年が滿ちない爲に一年遲れるといふ事になるのです、そのくせ實際に於ては四月生れの方が或は三月生のよりは體格も腦力も發達して居るかも知れないのですが、規則の爲に一年遲れなければならぬ不都合になるのです、

或は同年でも人々によつて各長短がありますが、現今の學校や幼稚園のやうに四五十名も一緒に同等な敎育をするやうでは奈何しても各々適當なやうにしてゆく事は出來ないのです、實際それは出來ない譯であります、それを強いてしようとするには費用や手間も容易でないので、現今の如では兎ても可くして行ひ難いものでせう、



それで私は其の兒等の體格や腦力の發達の程度に從つて適切な敎育を施こして行たならば、何處迄發達するものか一つ骨を折て見たいと思て居るのですが、まあ一つ試して見る爲に極く內輪でして見やうかと思て居るのですから、今の中は世間に發表せずしてこの學校の敎員達の子供計、七八名を集めて、其七八名に出來得る丈の事をして見たいと思たので、それに育兒部なる名を附けたので、その子供を生徒にも保育させやうといふ考なのでした、

實際、神童の天才を發揮させるなとゝ云ふ事は不可能で、又必ずしも贊成する譯にはゆかない事だと思ひます、

其事に就いては世の誤解をとく爲に、只今申上げました樣な趣旨を書きましたものが御座いますから後で御覽に入れます。

と立板に水を流すやう淀みなく物語られて、冷たいお茶をお飮みになる。キラ〳〵と細かい金齒が洩れて見える。

「まだ緩りお話したいのですが明日から旅行を致しますので、甚だ忙がしう御座いますから……」

と云はれ、他にも來客が有る樣子だつたので記者も御暇申しました。

陽春三題



杉浦翠子

春の川

眠れる小猫に來て、何を胡蝶の囁くか、あたりを翩翩と舞へば、猫は無心に幾度か耳を振るはず、蝶に誘はれし小猫の夢は花さく野邊に彷徨らん、渡守の小屋の緣臺に丸ふなりて眠れる小猫の幾度か、夢、醒めてはまた眠るも、遲き日の盡きざるを、渡守の老爺は積み重ねたる錢ひとつ〳〵數へつゝ、永き日を老の身の丹精に藁を細く綯ひては繩を作るに餘念もなき。

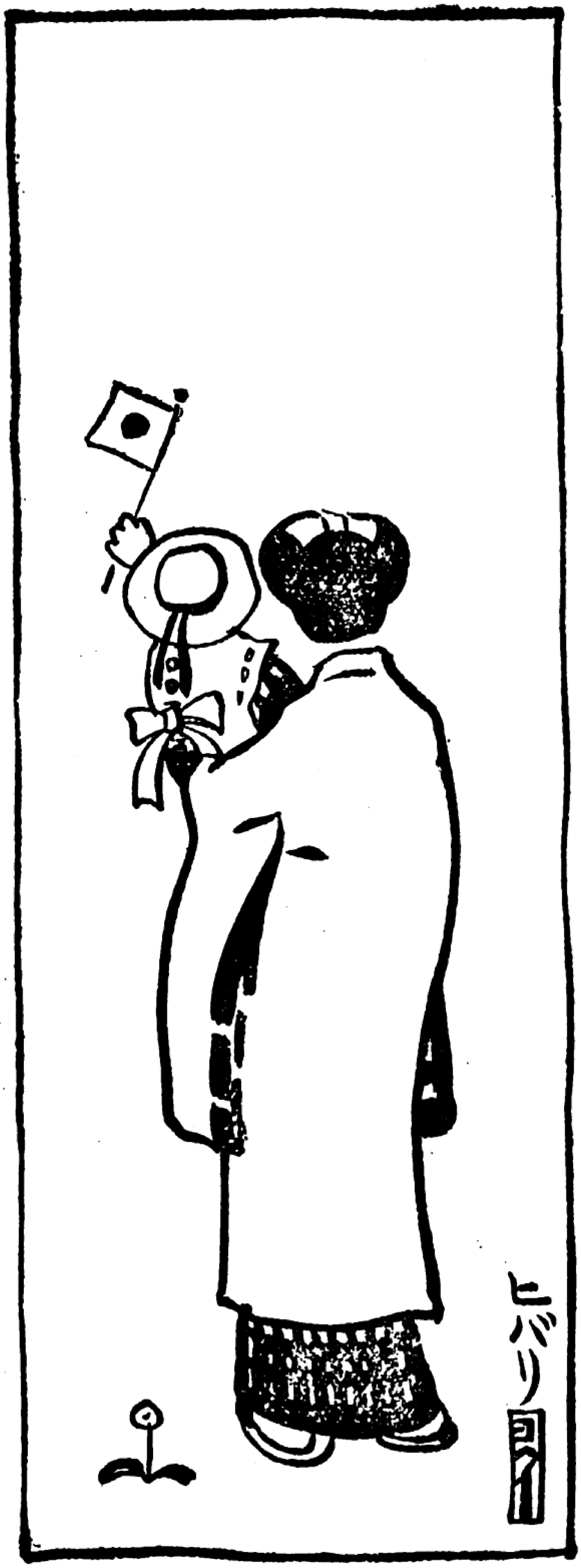
日は暖に風長閑にて、醉ふて眠たき心地なるを、春山は括り枕の形して、誰に寢ませの天鵞絨張りか、ふつくりと圓く、この山枕にして夢を結ばゞ、羽衣はなくとも登仙のおもひして、虚空に花降る景色をや見んなどゝ思ふ。

見渡せば富士をあなたに、遠山鳥の尾山まで咲き續きたる菜の花ざかり、映ゆきばかりなる黄色の彩どりの間を藍に染めたる綾瀨の川は、波紋ちらしの帶かとばかり水緩ふ流るゝ、筏通ひ柴船通ひて棹取る人の舟唄聞こゆ、折しも花の蔭より舞ひ出でたる黄なる蝶を白き蝶追ひ來たりしが、耳に縺つれ〳〵て、夫とせん妻とせんのさゝめ言、今日の吉日を運びて蝶も契るか人も契るか、今ゆく船は對岸の村よりこなたの村に輿入すとて、簞笥載せ島田に結ひたる嫁御乘せ、鐵漿つけたる女房二三人打乘りて棹さし來る、船なる人の美しき衣の色、下ゆく水に影さして恰ら落花の紅浮べるやう、流るゝ水は紅白粉の薫をうけて、花嫁の花の姿を映しゆく、長堤の柳みどりに、君を載せゆく春の川末遙に打霞む。

野遊

野辺の鶯の花の宿訪問れんと、弟妹打連れて野遊に出れば、百千鳥囀ずりて、咲くや千草の花の千紫萬紅春の色は世に隅なし。妹は逸早く紫雲英を摘みて手鞠のやうに丸く糸もて括れば、弟は雲雀の巣探さんと麦畑や菜種畑を廻ぐり、身に花粉を浴びながら求むれども得ず、雲雀は雲上の舞殿に召されつるや、仰げば聲のみして姿見ざるを、下界の宿に盗人騒々しきを知るや知らずや。

里を繞るゝいさゝ川には目高數多泳ぎ居るを掬はんとすれば水なま温く、弟は裾まくりて脛あらはに水に入れば、澄みたる流泥濁りて、今迄岸の青柳が姿映せし水鏡破ぶらる、破鏡の歎に柳の糸の亂れ心地なるもしほらし、妹が流せし少いさき笹舟に胡蝶を乗せて棹したしと思ふ、せゝらぎの音糸のやうなる里の小川。



木舟泥舟流したる兎や狸の忍るゝ、かちかち山のぼうぼうと彼方の山も今日焼くか、永き日に晝寝して鼻を焼くまいぞよ、小狸の柴焚ゆる、煙空に立ちのぼる、やがて午時にもなりぬればいざ割籠ひらかんとて、草の

上に坐ればいと柔かくしつとりと汗ばむ思ひ、足袋脫ぎし蹠のあたり草のちく〱としてむづ痒ゆき心地す碧空の天井に若草の褥に晝食する氣樂さ、露を吸はずとも菫の床に住む胡蝶に同じ想よと思ふ、心地よきままに暫時坐りてとかう眺むれば、彼方にも野遊びの群ありと思しく、菜の花の眞黃な間を紫の日傘翳してゆくが見ゆる、日は廻れども彼處に畑打つ人のいつまでも同じ處に鍬を使へる長閑なる樣よ、あたりの花の色美しければ畑打の色のみ薄黑く、何やら案山子に似たる姿よと云はれても腹立ちさうにもなき態なり。

弟は麥の穗拔きてピー〱と鳴しながら、草笛よというふ牧童のやうなり、少なき撥の形の薺の實をとりてペン〱彈かうよと妹は云ふ、妾は摘み取りしこの土筆の筆に花の汁含ませて春の歌書かんと思ひぬ、三人の間を蝶の縺つるゝ睦ましさ、生れ變れば胡蝶とこそ。

春雨

花の香籠めてしつとりと降る今朝の雨は、化粧の窓の下に注ぎて、朝毎に梳づる我が落ち髮に眞珠のやうなる露の白玉打かけぬ、前髮結びし色元結ひの落屑濡れて紅の色雨に流れ出でぬ、軒に近かき海棠の雨を帶びたるその雫掌にうけて白粉溶きてつけなば、楊貴妃のやうなる美しき顏ばせにならんなどゝ思ふ。

湯泉の宿に來て今日の雨の徒然を、背の君何し給へると室に來れば、今まで田舍源氏の草紙繙き給ひしにいつしか草紙枕に轉た寢し給へる、風なんど引きてはと思ひて、紅裏なる我が羽織、御裾の方へかけ參らせば何處ともなく蘭麝の薫る。

廊下を通ふ衣摺れの音、湯女にしてはあまりに優しきよと、障子の穴より盜み見すれば、柳の腰に元祿模樣の帶しめたる藝妓髷、小褄とる粹なる女、彼方の部屋に招かれゆく、殿に召さるゝ白拍子とは品下れども管絃も候ひて、三味の爪彈きしつぼりぬるゝ鶯の……いとしめやかなる春雨の宿に、誰が樂しむ巫山の春か、短夜のたゞ夢ばかりなる手枕に契るもわりなき一夜妻の、淺き緣は糸遊の雨に消ゆる想よと思ひやれば、我が覗く障子の棧に何を唱ふかぶん〱と虻の曲をかし

欄によりて眺むれば、彼方此方の湯の煙り空に朦朧と上がりて、ふる雨まで湯氣のやうに暖かさうなり、野を見れば、柳の眉雨に濃く、桃花の唇露に沾ふ、京に上る旅人に絹の脚袢穿かせ、金絲の簑着せたしと思ふ、菜の花に注ぐ雨金泥流がすかと思はれぬ。



女子師範學校の寄宿舎

翡翠女

春まだ淺く北風の寒い日、記者は小石川の女子師範學校の寄宿舎、官費生の方を訪問致しました、俥を下りて並べてあつた草履を穿ひて玄關に上がつたが受付らしい處が見當らないので、書記室の扉の外で御免なさい、と大きな聲をすると、へー、と云て出て來たのは紺飛白のあまり綺麗でない筒袖を着た十二ばかりの小僧さんである、女學校の取次に小僧さんとは妙である。

『舍監の方は被入いますか』と私が聞くと、

『西島先生ですか』といふから、誰方でもようございますから、是を上げて下さい』と云て私が名刺を出すと小僧さんは夫れを受取て、遠慮もなく名刺の字を讀みながら奥へ持てゆく。

暫時すると、どうぞ此方へ、と今の小僧さんが引返して來た、私はその小僧さんに從いて、本校を通りぬけると右手に遊戯室がある、今浮ひたやうなピヤノの音に合せて、足拍子面白くダンスの稽古である。

使の者か、何か知らないが田舍者らしい女の人が二三人で遊戯室を覗いて居たが、

『改良劍舞の眞似見たいだね――』と云ながら茫然として見て居る、改良劍舞かさもなくば盆踊と同種類のもの位に思て居るのであらう。

記者がちよいとダンスを覗いてる內、案內の小僧さんはもう二三間先きへ行て、『どうぞこちらへ、』と私の方を振り返つて云ふ、骨を削るやうな北風が吹くので小僧さんはさも寒さうに洟を啜つたと思たら、横撫を袖でする、體は矮少いくせに、どうぞこちらへの挨拶が却々巧者なので可笑しくなる。

案内されて應接室に這入つて居ると間もなく、扉があいて這入つて來られたのは、關といふ女教師、見かけたところ二十四五でもあらうか、薄紫の紬の三つ紋付きの羽織を着て居られる、この方は體操の先生ださうだが、少しも粗暴な風が見えず、物言ひの靜な禮儀の正しい如何にもしほらしい方、こんな方に號令など掛けられるものかと思つた、記者が今日訪問の主意を語ると、

『この學校などは、文部省から指定された一定の規則によつて作られて居るのですから、變つた事も御座いませんが……、

と仰つて、『其れでは、御案内致しませう』

と云はれるので、一緒にこの室を出て生徒の自修室を拜見する、生徒は恰度授業時間中であつたため皆本校の方にゆかれて、お留守だつたが室は清潔に片付いて居て塵ひとつ落ちて居ない、いつ人に見られても差し支へないやうにしてある。

官費生だから机も學校から拜領するのか、各自同じやうな机である、この寄宿舍の各自修室は、何れも一定した裝飾で、大きな机、額一面、花活、眞中に大きな火鉢が据えられてあつて、火がなくつてもあつても鐵瓶が懸けてある、二階へ上がらうとするところに、珍らしい鐵の扉がある、是は一方の棟に火事が起たとき一方へ火が廻らぬやうにこの鐵の扉で防ぐのださうである、この寄宿舍は二三年前ストーブから火事が出て悉く烏有に歸した事があるので、それから餘程懲りたと見え火の要心が却々行屆いてる。

二階へ上がると圖書室がある、生意氣などゝは思ひはしないが如何な本があるのかと、這入つて見ると、大きな硝子戸棚二個とテーブルがある、一方の戸棚には大概地理歷史國語などの教科書で高等女學校位の程度の讀物である、上段には日本百科事彙や、言海や大字典などの金文字入りのクロース表紙の本が並んで居る、『立派な本がありますね』と云ふと、

『是等は皆卒業生の寄附になつたものです、まだ圖書も一向出來ませんので、此頃は毎月一錢づゝ生徒から

圖書の費用として集めて居りますから、追々買ひ集める積です」と先生が仰る。

此方の戸棚には雜誌類がある、地圖が壁にかけてあつてテーブルの上には高等女學校讀本補習科用といふ本が置いてある、よし形ばかりであつても、この位の程度の學校に圖書室などがあるのは珍らしいのに、皆教育家に必要な書籍ばかりである。流石は師範といふ名に背かぬ。



圖書室の隣りが遊戲室とは、ちと受取れないが實際隣室にはピンポンの道具が置いてある、これでは圖書閲覽する人が喧騒がしい事だらうと餘計な心配もして見たが、さういふ時には何方かゞ讓り合ふのだらうと思つた。

とある自修室の白壁に紙雛を畫いた紙が貼つてあつた師甲二、關きんと姓名が書いてあるから、多分繪畫のお淸書でもあらう、その下に桃の花が活けてある。記者が其を見守つて居ると先生が、

「お節句に自宅に歸れないものですから、あんな事を

して……」とお笑ひになる。

さうして故郷遠く離れて、學舍の窓に居ては其折毎に何くれと故郷の偲ばれて、三月のお節句には私は家に居なくとも私の雛様は誰かゞ飾つて與れたらうか、其れとも土藏の奥に納ひ込まれたまゝだらうか、よし緋の毛氈の上に飾られても私のお雛様は持主の私が居ないので乾度泣いてるに違ひないなど〻、その思ひ出を慰む可きせめての心遣りに、斯うして繪草紙貼つての雛祭、白酒の香はなくとも、陶然と故郷の夢に慰められたであらうと流石は優しき女性の現はれて嬉しくも思はれた。

次に見たのは談話室である、十五疊ばかりの廣さで琴が二面にお茶の風呂、裁縫板を置いてある、こゝは毎週土曜日毎に交代に生徒がこゝへ集まつて舍監の先生とともに色々な打解けた談話をする、平常は間食を許さないのを此時ばかりは相當な茶菓の饗應があつて生徒は編物をするとか、裁縫するとか平素學事に追はれて出來ない身のまはりの事などをしながら、他愛もない世間話を先生とする、而して其間に先生と生徒の親密が結ばれるやうにするのである、といふ事を先生が仰つた、お琴やお茶を稽古する人があるのですか、と聞いたら、「否この學校は教員を養成するのですから遊藝のやうな者は致させませんが、今迄習た事のある生徒が折々練習の爲に調べる事が御座います」と云ふ。

二階を下りて洗面場を見る、百八十人の寄宿生の手拭がずらりと釘に掛かつて居て宛度西洋洗濯やの干場を見るやうである、次には割烹室でその隣が食堂である、食堂には澤山な腰掛と机が並べてある、丁度お晝に近いので机の上には箸箱茶碗皿などが奇麗に並んで居る、先生は指さして、

『彼方の椅子は、教師が食事するので、毎日お晝は教員も生徒とともに食事致しますさうして少しでもお互の親密を計るやうにして居ります」といふ、見れば生徒のやうな粗末のではない、先生のらしい椅子テーブルが十脚ばかり並んで居る、室の隅には一臺のオルガンと黒板が掛けてある。

「あの黒板には其日々々の献立でもかくのですか」と聞くと、「否、あれは不意の出來事を報告するとか、生徒や教員の偶感などをこゝへ書いて、大勢な人に示す事もあります」といふ、壁には生徒心得と書いたものが貼つてある、讀んで見ると『生徒は將來小學校教員たる可きものなれば夙夜教育に關する勅語の趣旨を佩服すべきは言ふを待たず常に左の綱領を遵守して之が實踐を務むべし』といふ次に第五箇條までの訓諭が示してある、朝な夕なにこの食堂へ來ては、この生徒心得なる物を見てその戒言に心は琢磨されて、嘸立派な教育家が出來る事だらうと思はれる。



「この學校の生徒は教員たる可き思想を養ふ可く、特に感化を受けるやうなことがあるのですか」と聞くと、『ハー　毎月一度づゝ校長が、この生徒心得に因んだ修身のやうなお話を致しますが、教員になるには何より德操の高いのが一番の勝利を得るのですが、却々さうはゆかないのであります」と云はれる

意志の弱い青年の女子が教育といふ大任を負ふて、幾多の兒童を理想的に薫陶するといふ事は、妻となり母となつて家政を治める以上に或は難事かもしれない、今日では銀行とか會社とかで、いくらも女子の自活の道が立つ爲か、責任ある教育家にならうといふ者が漸漸尠なくなつて、毎年この學校にも入學生が減てゆくさうである、是をしも時代思潮といふのであらうか、漸々世の中が物質に開けてゆくと、女も品性といふ事や德操といふ事を顧みないで、意志の自由を欲するやうになつてゆくのかもしれないと思ふと何だか世の中が情けなくなる、などゝこんな事を先生と話し合て此室を出ると、廊下に黑板が掛けてあつて、其の面に今日入浴お休みとかいてある。

その傍に百八十八の生徒の名札がかけてある、見れば器具係、炊事係、圖書係、運動係種々な役に割り當てられて居る、外出の時は自分の名札をこゝから外づして門監に預けて置くのださうである。

『生徒は幾時頃起きるのですか』と聞くと、

『この頃は五時半で、人員檢査をして深呼吸や運動などをして後食事を致します』といふ。

この寒いのに、却々早起なのには感心した、さぞ體格の健全な女教員が生れるだらうと思はれる。

大概の室を見終つたので私は舍監室に通された室は八疊ばかりの西洋間でストーブがあり、壁には今年の時事新報の附錄の美人の石版畫が貼つてある、額二面あつて、何れも塡めた繪はチーションスピクチユアーの三色版である生徒の自修室にかゝつた額の繪も皆此西洋の雜誌のものであつた、窓から見ると玩具箱でも覆返したやうな小學校の生徒がわい／＼と騷いで居たが、教師の號令がかゝると殊勝にも整然と行列する。

『こゝには小學校もあるのですか』と聞くと、

『ハー幼稚園からあります、師範の生徒の教育練習の爲に置いたやうなもので、三年間の修業ですが終りの一年間は大概教育といふ事にのみ研究致させます、卒業するまでには、教授によく慣れるやうに稽古に小學校の兒童などを教へさせます』と云ふ。

關先生の授業時間が來るのでお邪魔をしては、と思て記者もお暇をして室を外に廊下へ出た。

寧ろ婦人を畏敬せよ

精華女學校にて　浮田和民氏

左に掲ぐるは去月廿二日新宿角筈精華女學校教育講話會にて博士が述べられたる所なるが、當日は校長勝田孫彌外一二氏の講話ありし外、餘興として生徒の箏曲六段、同八段合奏、來賓上山嬢の薩摩琵琶小督の局、臺灣入等ありて頗る盛會なりき、尚ほ本校にては既に校舍の改築を了へ、今や文部省認可申請中の由なれば學期の改まると共に更に大に發展すべしと云ふ。

◎男は意志の強いもの女は弱いものとは、從來の考へであつたが、最近の學説から云ふと、實は女の方が意志は強いのである。無論武勇は野蠻時代から男子の專門であつたから、之には叶はないが、出產や育兒や其他男子の耐え得ない家庭の面倒な仕事に從事せる結果、忍耐力と粘着力の強いことは女の特徴で、到底男の及ぶ所でない。

◎又女子は智力の點に於て劣るといふが、之も境遇の然らしむる所で、本質に於て男子に劣る所はない。即ち男子は世に出で益々智識を磨くことが出來るけれども、女子は結婚すると此機會が少なくなるから勢ひ男子に劣ることになる。其替りに德義の點に於ては大に男子に勝て居る。

◎要するに武勇と智力は男子の長所で、忍耐力と德義は女子の長所である。之を以て見れば男女は本來同等で、唯だ分業的に働いて居る丈けである。然るに日本では女と云へば頭から輕蔑し、家族間ですらも「女の癖に……」と罵る。斯く男子が女子を輕蔑する間は、男子の墮落は止まないのである。されば女子の教育を高めることは獨り當人の利益なるのみならず、男子を矯正する爲めに特に必要である。

◎由來婦人は家庭に隱くれて其光は世に顯はれないものであるが、母親の品性は直接子供に遺傳するから、子供の品性は即ち母親の品性の發揮である。昔英國のゼームス一世がまだ母の胎内にある時、父なる皇帝が其の面前に於て人を殺した、其時の母の恐怖はゼームスに遺傳してゼームスは生涯劍を見る度に震へたといふ話がある。之を以ても如何に母親の品性が子供に影響するかゞ判かる。同時に母としての教育の必要を思はざるを得ない。

◎維新以來我國の文明は進歩した、併し是畢竟歐米に負けまいといふ競爭心から出たもので、謂はゞ模倣の文明である。若しも歐米が無くなつたならば日本の進歩も止まればなるまい。故に根本的に日本の文明を建設しやうとするには、先づ婦人の品性を高めて男子をして之を尊ばしめねばならぬ。寧ろ婦人を畏敬せしむるまでに至らなければならぬ。斯くして前面に歐米に刺戟せられ、後方からは婦人に押されて然る後始めて眞の文明が出來るのである。

◎併し米國で婦人が尊ばれるのは、元殖民地で男子が多くて女子が少なかつたからのことで、決して賞すべきことではない。去りとて日本の樣に徹頭徹尾輕蔑するのも間違ひである。

印象の乏しい美人

秦利舞子女史

◎日本で美人は隨分少なくはないが、印象の無いのは先天的の缺點になつて居る、夜會などで極めて鮮かな顔立の上に華やかな美服を着けて居る日本婦人と、一寸した顔で一寸した服裝をして居る西洋婦人と較べると、日本婦人が餘り眼を惹かぬのは、顔に印象の乏しい爲めと、着る衣裳が只粋づくめの流行を趁つて居る爲めである。

◎西洋婦人が彼の透徹るやうな皮膚に、衣服の美といふとを調和させる術に長じて居るのに反して、日本婦人は唯だ化粧に依つて工まれた顔に、地味で引立たない黒ツぽい衣裳を着けて居るのは、嗜好の乏しいも甚だしい。

◎目下流行する栗梅、鶯茶、鐵色などの色合は澁くて粋だといふだけで、人の注意を惹かない、若い婦人が裾模様などを着るけれども、舞妓のやうに立つて踊る者でなければ美が發揮しない、殊に夜會などでは卓子に腰から下が隱れて了ふから、縁の下の力持にしかならぬ 最も近來腰の上に模様を置くのが流行初めたさうで、幾分か美人の顔が救はれて居るが、概して日本婦人の服裝は一ツとして感心するのがない、彼の吾妻コートは胸部に縫房があるばかりで、ズボリとして見苦しい事此上もなく、第一歩行に困難のが耐たられない、袴も面う、穿いて工合を好く仕立てる稍脇が餘計に空いて來て、細紐までも見える袖、衣といふ薄い冠り物が埃除けとして流行り出したやうだが、それが頭部に蟬袋を冠つたやうで見憎いといふよりも寧ろ滑稽で、是なれば却て帽子を冠る方が美である。

◎で和服スカートを考へ出して婦人の袴も吾妻コートも發明した、袴は布が節約されて掛けてさへ置けば、疊む必要もなく、吾妻コートの改良はインバネスにしたから下に袴を穿いても裾さばきが自由に出來て、歩行にも容易である、又た帽子も發明して妹に冠らして居る。

◎元來日本婦人が世帶を持つて小供の一人も擧げると、若く見られるのを遠慮して澁く地味な服裝をするのが通有性であるらしい三十歳の婦人を二十五歳に見せ、二十五歳を二十歳位に若く見られるやうに若造りをするのが美であつて、決してお洒落ではない、自ら老いたりと爲して、地味造りにお母さんを氣取るのは、生活搆裏にも退歩する次第で國家に對する忠良の母ではないと思ふ。

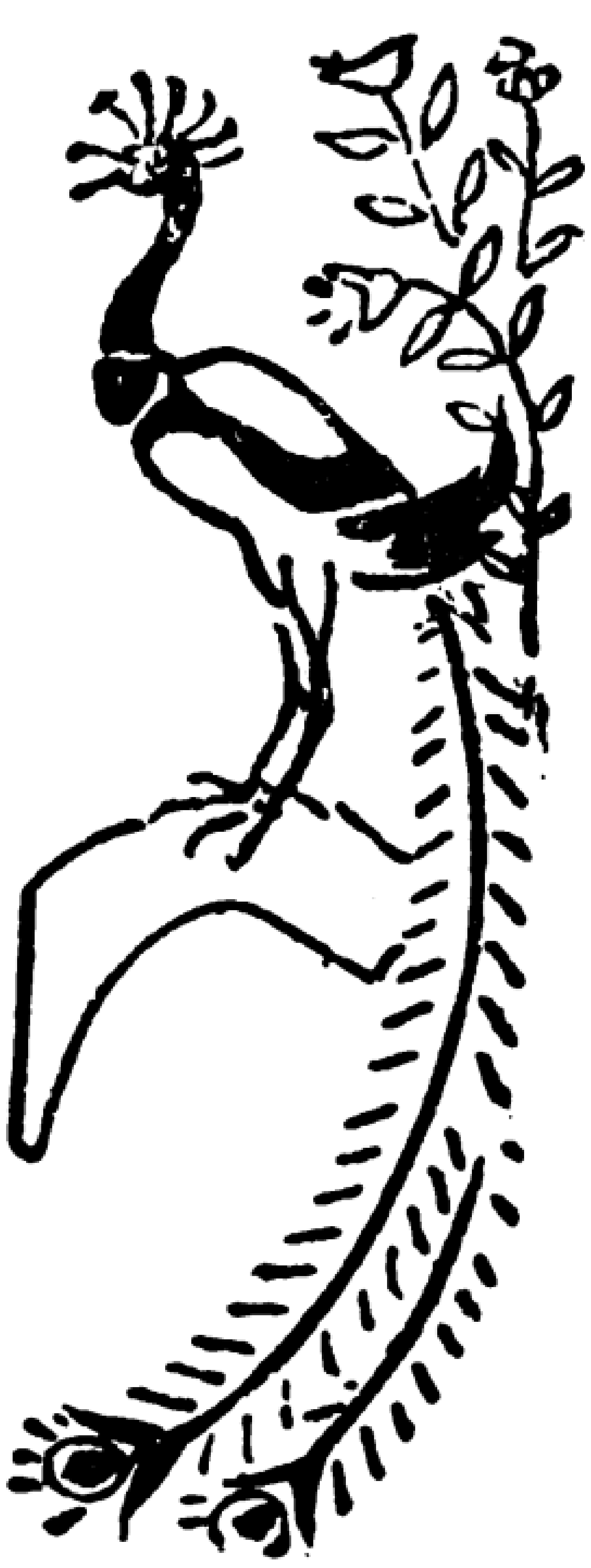
◎さらでだに日本婦人の顔の印象の乏しい處に、服裝からして美しく清潔にして、人に印象を與へるやうに助けて行かれば、美人などは思ひも依らぬと盛んな氣焔であつた。（都新聞）

の如何を見ればならぬ、第三に家庭に於ける言葉使これが大切である、餓鬼の畜生の山の神のといふのは好く無い、之は或典獄の話であるが或監獄で財政上の都合から、今までの湯呑を竹の筒に代へた、するとその四人の一人が惡い事をして仕方がない、或日其四人を密かによんで質すと「致します、いつ迄も惡るい事を致します、私共は今まで湯呑で湯をいたゞいて居ました、それに今度は竹の筒になりました、竹の筒で飲むのは鷄より外にありません、だから鷄のやうな行爲をやつて見せるのです」と實に大なる教訓であると思ふ、個人の人格を尊重するといふ事は殊に家庭に於ても甚だ必要なる事である、先づ形に現はれたる言葉に於て大にこの心がけがなくてはならぬ。（萬朝報）

子供の育て方

留岡幸助氏

自分は男七人女二人といふ子持であるが、又二ヶ月計すると今一人殖える、斯る有樣であるから私の收入では多くの子供を學校にやる事は出來ぬが、金のみで教育の出來るものでは無い、子供の教育者は其親自身でなければいけない、親自身の生涯で模範を示すのが最大最良の教育法であるといふのが劈頭第一で扨曰く次に必要なるは子供の體育である、ルーソーもエミールの中に斯ういふ事を云つて居る「弱き身體は其心靈をも弱くす子供は弱きが故に惡くなり強からしむれば又善となる」之は實驗動かすべからざる事實である自分の見た四千人計の泥棒について云ふも、泥棒なら定めし強からうと思ふと却て反對で、どこかに身體上の缺點がある、英國のドクトルモリソン氏は三百四十の感化院三萬六千人の不良少年を研究して感化院に居る者は握力が弱いとか腕が短いとか種々な身體上の缺點が有ると云た、又世には隨分一寸した事にも泣く子供がある、併し子供の本領は笑ふに在る、彼等は生活難の何たるを知らぬ、唯嘻々として金絲雀の樣に朝から晩まで樂げに囀つて居る筈である其金絲雀にして首を縮め籠の隅に小くなつて居るのは異狀のある證據である子供の無暗と泣のも身體に異狀があるからである、コンナ時には叱る前に其身體に注意せねばならぬ、私の學校に奇妙な子供がある、食事にも歩くにも眠つてるのだ人は其罪惡を云々する前、先其身體



皮膚に皺の出來るわけ

人間の皮膚は老衰するに随つて段々と皺が出來る、この皺といふものは即ち老衰の徴候で何人もこれを否むことは出來ない、併し皺といふものは何人も好まぬもの別して婦人方の身に取つては此上もなき厭なものである併し乍らこの皺も生理上の原理を確めて工夫を施したなら必らずしも防ぎ得られぬ事はあるまい、近頃西洋の生理學雜誌に斯ういふ事が說てある、即ち皺といふのは畢竟年齡の結果であるから皺を防ぐには一面には年を取らぬ工夫即ちいつまでも若々しさを保つといふ事が必要である、勿論これにはいろ／＼と工風があるがまづ差當り年を取るとなぜ皺が出來るかといふ事を說明して見ませう。

さて人の身體といふものは時々刻々と筋肉やすべての組織に廢物(所謂消耗)が出來てこの廢物を償ふがために食物を取るのですが、この廢物はどうなるかといふにみんな肝臟へ運ばれ肝臟の中で或變化を經た後に體の外に排泄せられる事になつて居ます、丁度町にある塵芥燒捨處といふのが、この肝臟の役廻りになつて居るのである、處が町の燒捨場は塵芥が多くなれば多くなるほど取擴る事が出來るが、肝臟はさういふ譯に參らぬ、これが生活の機關に大變な障害になるもので赤兒の肝臟は大人に比べると割合がよほど大きく出來て居る、それ故全體が廢物のごく少ない處へ燒捨場の肝臟が馬鹿に大きいのであるから肝臟の中に少しの滑りも出來ぬ、それ故もし人間が何日も赤兒で居れるなれば年を取つて死ぬといふ事は決してないわけである。

處が悲しい事には小兒の丈は伸びても諸機關の大きくなる割に肝臟は大きくならぬ、大人になるに從つて身體の組織の廢物はだん／＼と殖えて參るが肝臟がそれを燒捨る力はその割合に强くならぬ、處で今にだん／＼平均が取れなくなるといふ日が生じて來る それが丁度人間の十八歲から二十五歲までの間に起るのでそれから後は肝臟の燒捨る力よりは廢物の方が餘計になる勘定になる。

そこでこの餘分の廢物はどうなるかといふ事が疑問の起るわけであるが、これは外にさばけ口がないので體內に溜こほる外はない、それがどうして溜こほつて居るかと云へば、則ち生活上一番大事な血液と淋巴液に吸收混和されて仕舞ふのです、かゝる不用の廢物が血液や淋巴液に雜つてそれで人體の組織に影響を來さずに居られやう筈はないのである、そこでどんな影響があるかといふにこれがそもそも恐ろしいのである。即ち筋肉の變化が起つて來て身體の組織が次第に劣等のものに變形する、肉の組立が異つて來る、筋へは例の廢物がだん／＼堆積して硬くなつて來る、丁度年を取た鷄肉が硬くて雛鷄の肉が柔らかいのと同じ理由です、故に最も早く影響の表はれる處は則ち皮膚で影響の最も遲い處は腦髓です。御覽なさい、皮膚は年齡の幼長によつて變化が著るしいが、腦髓は年を取つても其の割合に老衰はしないのであります。



約婚日記

野菊子

九月三日晴

妾は妾の部屋なる奥の六疊で、今朝來た新聞を見て居ると、「三重子」と後から呼ばれたので、びつくりしてふり返ると、いつの間に入らつしやつたかお母樣が立つて居られた。

「今お金さんを呼びにやつたから一寸髪を直しておもらひよ、そして今日は島田にお結ひが好いよ」

「お母樣まだ暑いわ、島田なんかに結ては」

お母樣は妾の頭をみつめながら、

「ほんとうにそんな庇なんかより何程に好いか知れないよ」

妾は尚も庇髪の功能を説かうと思ふと、お母樣は子供でもすかす樣な言ひぶりをして、

「三重子、今日ばかりは島田に結てお呉れ、嫌なら晩に解いてもかまわないから」

斯樣迄願ふ樣に言はれて見ると、さすが剛情の妾も「いゝえ」とは言はれなかつた。

お母樣と入れ違つて染が來た、染と云へば若い樣だが、實は妾の乳母で今年四十一である。

染は何か知らず微笑〳〵して至極御機嫌が好い。

「お孃樣、今お母樣からお話御聞きなさいましたか」

「御話ッて何、お母樣は只お金さんから髪を結つてもらへつて被仰つたばかりよ」

「ぢや後でお聞かせなさるおつもりで御座いませうオホヽヽ」

「何のお話なの、え、染」

「何でも好う御座いますよオホヽヽ」

「厭な染ね、自分ばかり嬉しがつて笑つたりして、妾へもお聞せよ、え、染」

妾は染の古びたびり／＼しさうな縮の單の袖を引張つた。

「ぢや御話申ませうね、今日で御座いますよ、今日實は、お孃樣を見にいらつしやる方が御座いますの」

さては見合かと妾の胸は轟いたが、さあらぬ顏して、

「妾を見に來るッて何故なの」

「あらお孃樣、今日は御見合で御座いますのよ、ですからいつもの樣なお化粧を遊ばしてはいけませんよ」

染は妾の顏をみて、

「染は御孃樣が丸髷をお結び遊ばした處を早く見たう御座いますよ、オホヽヽヽ」

「厭な染」

妾は染の膝をしたゝかに打ち、

「今日のお客樣は何處の方なの」

「私も委しくは存じませんが、そら、御孃樣も御存じで御座いませう、金崎村の御醫者樣、其御醫者樣、櫻井樣の御舍弟で、此春學校を御出來になつたつて云ふ方で御座います」

染は尚も言葉をつゞけ、

「それで此度、東京の大學、何とか忘れましたが、其處の何とやらに、ゑらばれて御出でなさるので、俄に嫁御をおもらひなすつて、直ぐ東京へ御連れなさるのだつて、奥樣の御話で御座いました」

お母樣がいつもに似ず、無理に島田を强ひられたのも解つた、何だか嬉しさうにそわ／＼して居られたのも解つた。

緣談は是で二度目、最初のは妾が十七の時、近村の物持ちで是非にと望まれたのであつたが、血統の餘り正しくない、と云ふ處から止めになつて仕舞つた、其時は未だ子供であつたから、嬉しくも悲しくも何ともなく、全く他人の事の樣に思つて居た、そして其時は先方で許り妾を女學校に見に來て妾はちつとも知らずに居た。

お金さんが來て妾は鏡の前に坐つた、妾の廂は破された、島田が戴つた、ゆら／＼と耀る物が其上にかゝつた。

「マア好くお似合で御座います事、恰で御人形の樣で御座いますよ」

お金さんのお株のお世辭が始まつた。

お母樣も被入つて、縱から横から念入りに御覽遊ばして、きわめて御滿足の御樣子で、

「お金さん誠に好く出來ましたよ、妾は癇の癖がついて居て、とても此樣には行くまいと思つてネ」

ほめられてお金さんも嬉し相にほゝ笑んだ。

湯に入つて化粧を初める、お母樣と乳母は側で種々と指揮をする妾は何だか馬鹿らしい樣ですが仕方がない お母樣のなさるまゝに任せた。

お母樣の今日の狼狽方といつたら、そして忙がし相つたらなかつた、そして何だか嬉しさうにニコ〳〵。

お父樣は未だ今朝から會はないからどんなお顏をして居らつしやるか知れない。

臺所の方でも忙し相にがた〳〵と瀨戸物の音を立て時々染の轉がす樣な笑ひ聲がする、それにお母樣の聲も交つて。

それも一切り、鎭まつて、お中飯を了して、一時が打つて、妾はぼんやりいろ〳〵の空想に走つて居ると、門の處にガラ〳〵〳〵と勢好く曳こまれる車の音がした、妾の胸は再び轟いた。

お客樣の歸つたのは午後四時過ぎであつた、後片付けや何かも出來て、御飯を過して部屋に歸つて、先刻の見合の有樣を日記に書かうと机に向つた時、八時を打つた、北見樣の安子樣(學友)が御見合の時なぞは御婿樣を穴の穿く程見て遣つた、とのお話しだつたが、妾はとてもそんな事は出來なかつた、お客樣は三人であつた、一人は小間物商に時々宅に來る利助さんで、一人は櫻井樣の伯母樣ださうな、品が好くつて、物の言ひぶり奥ゆかしく、立派な人であつた。

それから其御當人は先きでは妾を何と見たかは知らぬが、先づ妾の理想にかなつて居た、パッチリとした目、引〆つた口元、何々伯の若樣と云つても耻しくない天晴の好男子、只思つたよりお酒を餘り召し上るのと、初めての家に來た人にしては少ッとお辯りではな

いかと思はれたが、欠點と云へば云ふ様な物、そんなに何處から何處迄そろつた人はないものだから、此處らで極めるとしよう、自分勝手に考へた、先きでは何う云ふか分らないのに。

四　日　雨

中庭の秋海棠花咲く、世はいよ〳〵秋を告げた、昨日迄晴天であつたのに、今朝見れば雨が降つて居る、是も秋の空、最う一ッ驚いたのは兄様が昨夜お歸りになつたと見えて、雨具が乾してある、妾は少とも知らなかつた、朝御飯過ぎて、新聞を見て、兄様の部屋に行つて見た。

兄様の部屋は元妾のであつたのを、二階で、庭を見下して、田が見えて、隣村迄見えて、氣が晴々する程好い處だ物だから、兄様は無理やりに妾を說いて取返へしてしまつたのだ。

兄様は未だ寢て居られた。

「兄様、兄様」

兄様は目も開けずに、夜具の中から手を出して拜むまねをしながら、

「三重ちやん、最う少し、最う少しず、後生だから」

「ぢや又起しに來ますよ」

云ひ捨てゝ二階を下りると、花が、

「お嬢様、奥様が呼んで被入います」、と云ふから、直ぐお母様の御部屋に行つた。

お父様は次の間で誰かと話聲が聞える。

お母様は今牛乳を召上つて居らした處であつた。

「三重お坐りよ、そんな處に立つて居て」

お母様は妾の方に向き直り、妾は何様な事を云ひ出されるかと思つて居ると、

「三重子、染から話は聞いた筈だが、昨日のお方はお前は別に嫌な事はあるまいネ」

妾は何と返事をして好いか知れないから、顏を赤くして、下を向て衣服の縞をかぞへて居ました、此様な事なら安子様にこう聞かれた時の事も敎はつて居れば好かつたのにとおもふ。

「オホ、、、嫌なのかえ、そうではあるまいね」

「…………」
「實は子、お父樣が昨日の內に利助さんにお返事を上げてしまつたとさ、誠實にお父樣のお氣短かにも困るの子、妾やお前に話もしないで獨りできめて仕舞ふなんて」
でも今の內なら何とでもなるから、一寸お前の心を聞いて見たの、別に嫌な事はないだらう子」
妾は漸くの思ひで「ハイ」と答へた。
餘り話が早過ぎて何だか虛言の樣。



是が妾も彼の人ならばと思つてるから好い樣なものの、もし妾が嫌だつたらお父樣はどうするつもりだらう、眞實に嫌なお父樣だ。
お母樣は火鉢の火をかき起しながら、
「先樣では今月の內にもと被仰るけれど、種々仕度もある事だから、來月迄待つて頂く事にしたの、仕度は何も要らぬと云ふけれどまさか子、一生に一度だからなる丈け賑かにしたいと思つて子、それから婚禮がすむと直ぐ東京へ登るッて云ふから、お前も其つもりで

お出でがいゝよ」

お母様が何か云はうとなされた時、お父様が這入つて來られたので、何か云はれるかと恥しいから逃げて仕舞ふ、お父様の笑聲がする、屹と妾を笑つていらつしやるのだ、妾は何だか夢の様でした。

安子様の御話の通りなら、御嫁様ッて早くなれないものと始終思つて居た、妾が此度の事で一番氣に入つたのは東京へ行く事だ。

草の中で育つて、何處も見た事ない田舍娘だから、お父様や兄様が東京のお話をなさる度毎、妾も見たくッて、行きたくッて、夢にさへも見て居る位ゐ。

散歩するにも二人連、芝居も一度位は見せて下さるだらうし、上野の櫻、堀切の花菖蒲、畫で許り見て居たが、此も二人連で見に行かれる事であらう、先づ東京に着くと二人で寫眞を撮つて安子様に送らう、妾は一種云ふ可らざる愉快な心地。

世界は今や秋に入らんとして居るが、妾は再び春に會ふ心地で、ハラ／＼と散る木の葉、泣く虫の音迄も面白く見聞せらるゝのであッた、妾ばかりでなく、家の内何となく賑で、笑ふ聲は時々におこり、人の出入りも多い様に思はれる。

五日　晴

蟬の聲細く又起る、兄様の單衣が出來た。

彼方此方と押こんである兄様の衣服をたゝむと、袂から、柴田屋内小萩と書いて、武一郎様と上書をした手紙がばらり、今迄少ッとも知らなかつた、兄様もゆだんがならぬ、何時の間にそんな處に行つたんだらう眞誠に男と云ふものはみんなこんな者か知ら。

叱られると惡いから、又袂へ押こんで置く、松田の伯母様が來て、種々と妾の衣服に就いて、模様色合等御母様と御相談の末、富士屋を呼んで注文された。

午後昌子様が來た。

昌子様は妾の從妹で、妾より二ッ年若の今年十八である、氣立の優しい、可愛らしい人、其上非常な美人で、どんな悲しい時でも此子を見ると氣が晴々する程。

妾は女の姉妹がないから此娘を妹だと思ッてる、昌

子様も妾を姉だと思ッてるさうだ。

お母様は此娘が他家へ嫁く子だと宅の嫁にするがといつでも被仰る。

昌子様はニコニコと美しい笑顔をみせて、妾の部屋に這入つて來た。

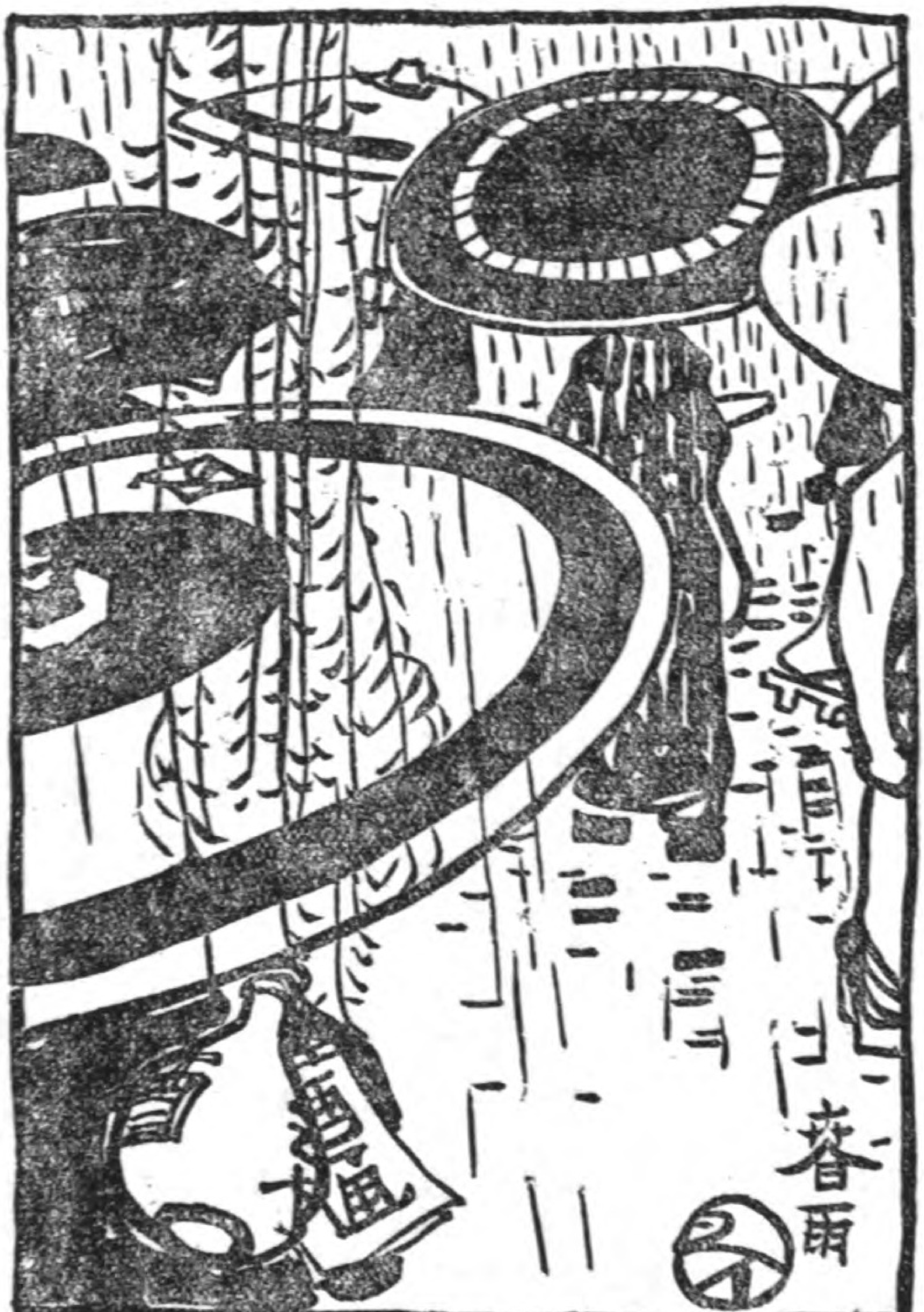
「三重子様、お目出度う御座います」

「アラ厭な、昌子様迄そんな事」

「オホヽヽお目出度うッて云つちや惡いの」

「昌子さんよく被入ッてネ、妾待つて居てよ」

花はいつもの如く茶とお菓子を運ぶ。



「今日おひる前参るつもりだッたが、昨日の衣服片付けたりして居てよ」

「そう昨日何處へ被入ッて、」

「岡本様によ、一寸三重子様、妾可笑かつたのよ、杉田様ネ、知つてるでせう學校の方あの方ネ、妾と貴女と間違へてよ、オホヽ、兄様御出ですかッて云ふでせう、妾變な顏して居たもんだから、漸く思ひ付いて直ぐ眞赤な顏してよオホヽ、」

「オホヽ、そんなに似て居るでせうか、此様な美麗な

方と間違へられて妾嬉しい事よ」

「ナァ厭よ」と顔をそむける。

二人で琴を彈ひて見た、昌子樣も此頃餘程彈ける樣になつて來たので、妾も嬉しい。

昌子樣が歸ると間もなく利助さんが來て、お父樣と奥で暫く話して歸られた。

お母樣に聞いたら、櫻井の方では、來月上旬上京せねばならぬ事になつたから、婚禮式は今月の末にして呉れとの事であつた。

餘り急なので仕度は東京へ行つてからする事にして只儀式の時の衣服と當座の入用品丈け、此方でする事にきめた、結納は明後日ださうで。

六日　曇り

釣れもせぬ癖に兄樣は又河に出掛けた。

御苦勞にも一日居て、夕暮頃しほ〳〵と歸つて來て籠を妾の前に置いたから、中をのぞいて見ると小さな鮒が二ツ、妾は可笑くつて堪らなかつたが、默つてわざと大きな器に載せて、お父樣とお母樣とお話して居らつしやる前に出した、皆々大笑ひ、染迄が出て來て笑ふので、兄樣は、

「人を馬鹿にして居るよ、三重おぼえてお出で」

兄樣は御機嫌の好い時は三重ちやん、惡い時は「ちやん」だけ捨つて三重と呼び、何か頼む時等は三重さんとも云ふ。

兄樣は足音あらく二階へ上つて仕舞はれた。

七日　曇り

又雨が降らうと云ふのか蒸熱い、蛙が鳴く、今日は妾の結納の日である。

朝から家中賑かで、妾もお母樣から薄暗い内起されました、肴屋と八百屋と來る、料理人が來る、出入の女達も手傳ひに來る。

土藏から膳椀が運ばれる、膳立てが初まる、勝手は全で戰爭に敗けた病院の樣に忙しい。

今日のお客樣は櫻井の兄樣、利助さん、原の叔父さん、此人は昌子さんのお父樣で、妾のお母樣の兄樣、松田の伯母さん、外四五人昌子樣もお給仕に來て居る

今日の昌子樣は眞誠に美しかつた、薄絹に玉をつゝんだ樣な顏色をして黑目勝の可愛らしい二重眼、黑く光澤ある髮を島田にした姿は、ほんとうに華族の姫樣のやうであつた。

妾に贈られた今日の結納は白綾一匹、緋綾一匹、帶地、帶〆、足袋等であつた。

八日午後晴

奧庭の赤い菊が咲いた、妾は庭に



あゝ學校の窓よ、この窓に倚りて幾多の女學生は、朝な夕な、花やかなる社會を見下して、いかにわかき血を躍らせ夢のやうなる理想を畫きたりしよ。一度社會の人となりて失意不遇、いかに恨しげにこの窓を見上げたりけむよ。あゝ窓よ汝の戸を堅く閉せ、而して永却彼等をして、花やかなる社會をゆめ見せしむるなかれ。

下りてあちこちと歩いて居ますと淸と花と高調子に笑つて何か話をして居るから、好奇心が起つてつい窓の下に立つて聞いて見た。

花の聲で、昨日は二人共立派だつたネ」

「誰と誰」

「昌子樣と宅のお孃樣とサ、お前さん何ちらが好いの」

「そうネ、昌子樣も美しいが、宅の

お孃樣も美しいワチ」

「オホヽヽちや何方が好いか分らないワ」

「宅のお孃樣の方が好い樣子」

妾はこう云はれて見ると、まさか惡い心地はしなかつた、獨りほゝ笑んで部屋に歸つた。

午後から珍らしく晴れて熱さも增す、未だ秋とは思はれぬ位ゐ、夕暮兄樣は久しぶりで庭つゞきの栗木林で笛を吹いて居らつしやる、其音につられて、妾もバイオリンを取つて庭下駄を引かけて行つた、此處には二ツの腰机がある、兄樣は丁度秋景色を吹いて居た、妾は其に合せて彈いて見ました、合奏せる時は何時でも二人で、此處に來るのです、今夜はわけて靜な晩だから、あたりにひゞき渡つて、我ながら身がかたくなる樣に覺えた。

いつの間にか來て妾の傍に寢て居たポチ迄感心さうに聞いて居る。

兄樣は笛を下に置いて妾の顏を默つて見て笑つて居らつしやる、妾は薄氣味惡くなつて、

「兄樣、厭よ、人の顏を見て笑つたりなんかして」

「此間迄赤ん坊であつた三重ちやんが、今度奥樣にならうと云ふんだから可笑しいんだ」

「兄樣最う一ツ何かやりませう」とまぎらせようとすると、兄さんは、

「何だ今は九月か、すると來年の七月頃は可愛い奴を抱いて來るのかハツハヽヽヽ」

「兄樣ツたら知りませんワ」

妾は兄樣を白眼んで、バイオリンを引たぐツて立つた時は頭の上の枝からもれて細い月が昇りそめた時であつた、妾が此處に來た時西の空の雲色、遠近の村々等は、淡りとした彩色畫の樣であつたが、だん／＼と薄墨の畵の樣になつて、今は全く濃き紫紺色の幕が下界にたれた。

九日　晴

お母樣は三里許りある町に買物に行かれた、染を連れて、妾は茶の間で裁縫をして居ると、昌子樣が見えた、種々の事を話した末、昌子樣は妾の顏を見て、

「貴女お嫁様に成ると妾の事なんか忘れてお仕舞ひでせう子」

「昌子樣は妾の妹でなくッて？　姉が妹の處を忘るツてえ事がありますの」

「ちや時々手紙を下だすつて」と妾の手を取つて其美しい目で乾と妾を見ました。

妾は眞から可愛く思ひました。

妾はお母樣と此子に別れるのが何より辛い。

午後一時過お母樣が歸つて被入つた、色々買物して昌子樣と二人で葡萄酒羮を拵えて見ました、思つたより甘く出來たので、お父樣も嬉し相に召上つて、被入る、兄樣は見て居る内に十切許り平げて仕舞つて、それで甘いとも辛いとも何とも仰らない。

「兄樣何うです」と催促すると、

「誠に結構で御座います」

お母樣と昌子樣はお笑ひなさる花が繪葉書を持つて來ました、誰だらうと見ると、中根安子より、山内三重子樣、と書いてある。

「お母樣安子樣からですよ」と見せる。

誰からきかれたか、此度の事を行々しく祝つてあつた、昌子樣が歸つてから女學世界が來た、開いて見ると先づ第一に目についたのは新婚日記、三橋屋から妾の夜具は二十日頃出來ると云つて來た、簞笥は二十五六日頃でなければ出來ぬ相である。

利助さんが來てお父樣と話して歸つた、妾の婚禮はいよ〳〵二十八日と定り、お母樣は頭痛がするとて、お寢になつて被入つたが、此話をきくと頭痛も何も忘れたのか直ぐ起きておしまひになつた、染も自分の事の樣に嬉しがつて來る程の、いや見る程の人に、此度の事を頼みもせぬのに吹聽する。

結婚してからでなく、約婚の日、即ち妾にすれば今が一番樂しいと人は云ふが、妾のは餘り急で眞誠とは思はれない位ゐ、斯うなつては嬉しいのか多忙いのか分らなくなつて來る、彼方からも此方からも祝はれて、妾の顏は一日何度赤くなるか分りませぬ。

嬉しいのと、またお母樣と別れるのが悲しいのと、先に嫁つてからの事が心配なのと恥かしいのと交せつ返した樣な妙な心地である。



哺乳日記

津留女

某月某日

朝の程より時々腹痛、身體のだるき事えもいはれず、屢ば下所へ通ふに、母上は今晩あたりならん、とく用意せよといはるゝまゝに、湯に入り、髪を洗ふ、分娩用具一色は彼のボール箱、子供の着物は下の行李と殘りなくいひ置き、夕飯の仕度にとりかゝりけれども、加減も覺えぬ計りに堪えがたうなりければ、床に入り、産婆を迎ふ、十一時頃ならんといふ、初産の其れまでに如何に成り行くらんと心細う、そゞろに涙ぐまるゝを、見られじと夜具引かぶり居る、母上は御守に御燈明などあげ、安産を祈り給ふ、妾は一しきり、又一しきり、甚しくなり行くを、兩手シカと握り、ハンケチ口にして忍び居る待ち遠しさ、やがて十一時となりけれども、急に産れん模樣もなく、陣痛の間に眠氣さへ催す、母上は氣をもみ給ひ、妾の兩手をとり勵まし給ふ、とかくする内我にもあらで力みしと思へば、オギアと耳つんざく計りの初聲あぐ、男ならば一聲、女は數聲ときゝしが、後に續く聲もなかりけり、夫も出で來給ひ、電報打たんと時計を見給へば、一時過ぎなりと、さては時の打ちしも知らでありしか、母上は鷄卵と故鄕の妹の贈りし名物の片栗とを程よき暖さとして賜はる、其味ひたとふるにものなし。

二日

目さむれば夫は已に出勤せられ、枕下には母上居給ひ、先々よかりし、男にて遠方わざ〳〵來りしかひの有るといふもの、さるにても女の子は持ちたくなし、ひと時なりとも苦しき思をさする事のいとしさよと、折柄次の間に子供の泣く聲す、顔見たければ連れて來て給はれと、見れば七月頃より仕立て置きて、日毎とり出だし、見ては樂みし緋モスリンに、白羽二重の襟重ね、夫にも妾にも似たる面差しの紅さしたるやうな

るは、色も白きぞと、母上はうれしげにの給ふ、昨日まで我腹の中に動き居しかと思へば、可愛さも一しほ、今よりは我傍に臥させんと、手枕させやれば、又スヤ〳〵眠る、隣の奥様今朝お子様の聲の聞しとて、御祝に來らる、四時過ぎ夫歸られ、朝よりは大くなりし樣なり、名は豫ねての通り某とつけんとの仰せ、母上は命名は七日目との給へば、イヤ腹の内より男ならば某、女ならばしかしかと付け置きぬと、皆々大笑ひす、妾は腹に力なき身の苦しき計りなり、あちこちよりの、祝電大方は陸軍萬歳なり。



三日

産婆來り、湯をつかはし始めて哺乳す、そのまゝ半日も眠れり、退屈なれば泣き聲にても聞かせすや、と頬ソト壓せば、何をゆめ見てかかすかに笑ふ可愛さ産褥熱は三四日頃より起るものときく、さる事のあらば如何せん、子持ちては死にたくもなし、死なしたくもなしと、或奥様のいはれしはまことなりけり、されどやんごとなき方樣さへかくれさせ給ひ、又消毒の何かをさへ知らぬ

者も、健に肥立つを見れば、何事も運命とあきらむ、あきらめられぬは幼子の、三日目の今日まで目さめし時も、片方より開かず、人しれず胸を痛む、母上も口にこその給はね、妾のウト／＼眠りかくれば、すかし見ては吐息をもらし給ふ、妾に知らせじとなし給ふ御心の中、推してはなほつらく、斯く顏もかたちも人なみすぐれて生れし子の、何の因果ぞと先のよろこびに引きかへて、氣も心も思ひにみだる、夫の御歸を待ちてかくといへば、例の氣質もてナーニと計り氣にもとめ給ふ樣子もなけれど、强て醫師の診察を乞ふ、屢硼酸にて洗ひ給へといふ。

四日

朝幼子は星の樣なる目二つ開けり、餘りのうれしさに我知らず母上、母上と呼ぶ、何事の起りしかと馳せ來給ひしが、幼子を見てよくも開いて與れし、あのままなりせば未だ血わかき汝のなげきを思ひて、心も心ならざりき、其れにつけても男なれかし、女ほしやなどいかでおのが望みのいはるべき、手足の指一本足らずとも、せんやうなきを、不具ならねば幸福なれと、折から御祝の客引きも切らず、母上は妾のかみの餘りに見苦しければとて、三つ組のお下げとなしたまはる、誠に勿體なき計り、かゝる時には心置きなき生みの親にましたるはなし、一姫二太郎とやらいへど、何人にも殊にお坊樣にてといはるゝうれしさ、目も美はしく開きぬれば、肩身も廣うおぼえ早く抱きて歩いて見たしといへば、母上は早く寫眞をとりて如何なる孫かと待ちますらん父上の、お目にかけたしとのたまふ、子供持つまでは終日淋しく、徒然なるまゝ、夫の歸りをのみまたれ、夕方など門を過ぎ行く車のひゞきにもとやかくと心をなやませしが、今は子供にまぎれさる事もなくなりぬ、皆人の子持ちては夫への愛情の薄らぐとやらいへるはこれか、さりながら三年五年の長き月日のうちには、話もつき火鉢にツクネンと差し向ひ、世の中もつまらぬもの哉、起きては食ふて寢、毎日同じ事して、やがて五十年も終るかなど、互の胸に浮ぶらん。冷ならんとする夫婦の情をあたゝむるには子に

しくものぞなし、まして二つ三つともなり、帽子など持ちて玄關に見送り、靴音きゝつけ先づ出でむかへ、まはらぬ口に父ちやまなどいひたらんには、如何に歸りの急がるゝぞ、妻はまた母に乞ひ漸く作りてもらひしといふ長襦袢惜氣もなう子供の料に仕立て直すに、夜の更くるも知らぬなど、かくて互に着實なる眞の家庭は作らるゝなり。

そへ乳してめざしは棚にありまする
あゝうがてる哉

五日

幼子の臍緒落ち痕もうるはしく異狀なし、今日より哺乳は二時間毎にせんといへば、母上始め産婆も、そは餘りに長ければ當分は一時間或は一時間半とし給へ、實際は學理通りには參らぬものぞといふに、せんかたなく一時間置きと定む、夫は食事の淋しければとて枕下に膳運ばせらる、早やかく成りしとは知らぬ友の許より分娩の注意など細々申來る、妾より一つの妹にして已に三人の母君、しかも年毎の最早やこり〳〵次の世にはよし女と生るゝとも獨立すべし、此のまゝ行かんには五人十人はつかの間のあつぱれ產博士とならんなど、ふと思ひ出すは、この友の兄上、醫師なりけるが、或日お產の事を思へば、妻は大切にすべきものぞといはれければ、そが母君のまづ親より始むべきぞといはれしとぞ、今も一つ話しとなりて笑ひの種なりける。

六日

ひねもす幼子に乳房ふくむる外せんやうなき身の、天井の節穴もかぞへつくし、唐紙の模樣もすべて見あきぬといへば、夫はいづくにて求め來給ひし芍藥と石竹の、いろ美しきを枕元に並べ給ふ、母上は產婆につかはすべき御禮の金封など作らる、折柄小包着せり、見ればのたまはねども父上のあつきみさとしのこもれる孟母斷機の圖に、產衣一かさね、流行の勝色に若松の熨斗目模樣白の下着のうつりよく、目さむる計り、妾への見舞としては魚せんべい等、他家よりの祝の品品、合せて床にうづたかきばかりなり。

七日

初めて床の上にすわり見る、夫は妾の姿勢のまたあしくなり、背までひく〳〵成りしとて笑ひ給ふ、まことや十月はゆめのやうに過ぎて、今日七夜の祝するうれしさ、身も輕う心もすが〳〵しう、産婆むかへて赤飯祝ふ、久々ぶり障子開けさすれば、桑も柿もいたく芽出して、向ひの屋根も見えず。

初夏や七日見ぬまのしげり哉

よの中はとせざりしことの感心と母上は笑ひながら産以來は落付きて庭も見ざりしとて、今更のやうにつく〴〵ながめ給ふ、生垣の外を六つ許りの男の子の軍歌などうたひつゝ、犬追ひまはし行くを見て、今の間ぞとの給ふ、折柄もるゝ隣の琴の音の、今日はめづらしく松竹梅の曲なるもいとめでたし。

八日

お産と脚氣とは仲の好きものといへりしが、心からにや左足さわり見れば少しゝびれしやうおぼゆ、産婆に聞へばお子樣の青便もし給はず、乳吐き給はねばさる事はなからんと思へど、醫師に見せ給へといふに、診察を乞へば、矢張り輕症のそれなれば、とにかく哺乳は一時見合せ給へと、牛乳の稀釋法哺乳壜の洗滌法など細々と示されけれども、幼子は却々吸はんとはせず、吸口はき出しては、首をふり泣くいとしさ、母上は折角目も開き恙なうこれまで肥立ちしものをと殘念がり給へど、せんかたなく夜も二時間毎に起き出で、乳作りに眠り給ふ暇もなし、妾もつかれに眠入りては正體なけれども、幼子の泣ごゑに目さむれば、吸口に何かつまりて思ふまゝに乳の出でぬなりけり、あゝ呑ませたし呑ませやりたし、我が乳は固う大く青筋たちて、ポト〳〵たりて着物といはず夜具といはず、うるほす許りなるを。

九日

母上にせめてひる間なりとも休み給はれと、幼子膝にとれば、あつかひし事なき身の抱き方のまづさと笑はる、見ればあはれにも面やせしやうなり、小豆も食はん、好ましからぬ麥飯も今は何ためらはん、早く脚

き懐に抱きて乳房ふくむるやうなれかし、先き頃道に幼子の乳母車にのり哺乳壜口にせるを、老人の見て開け行く世のありがたさ、乳母も何もいるものかはといひしが、いかで母乳に増さるものやあるまして此頃の暑さに牛乳腐敗して、幼子の胃腸や害せんと、心づかひ一通りならず、或人の炭酸少量を投じ置き給へといふにうれしく早速試む、世にはおのが容色の衰へんとて、貴き母乳を廢し、牛乳にミルクに人工榮養して得意の人もあれど、かく心を勞しては何のかひかあらん、されど哺乳時間は自然正しくなるやうなり。



十日

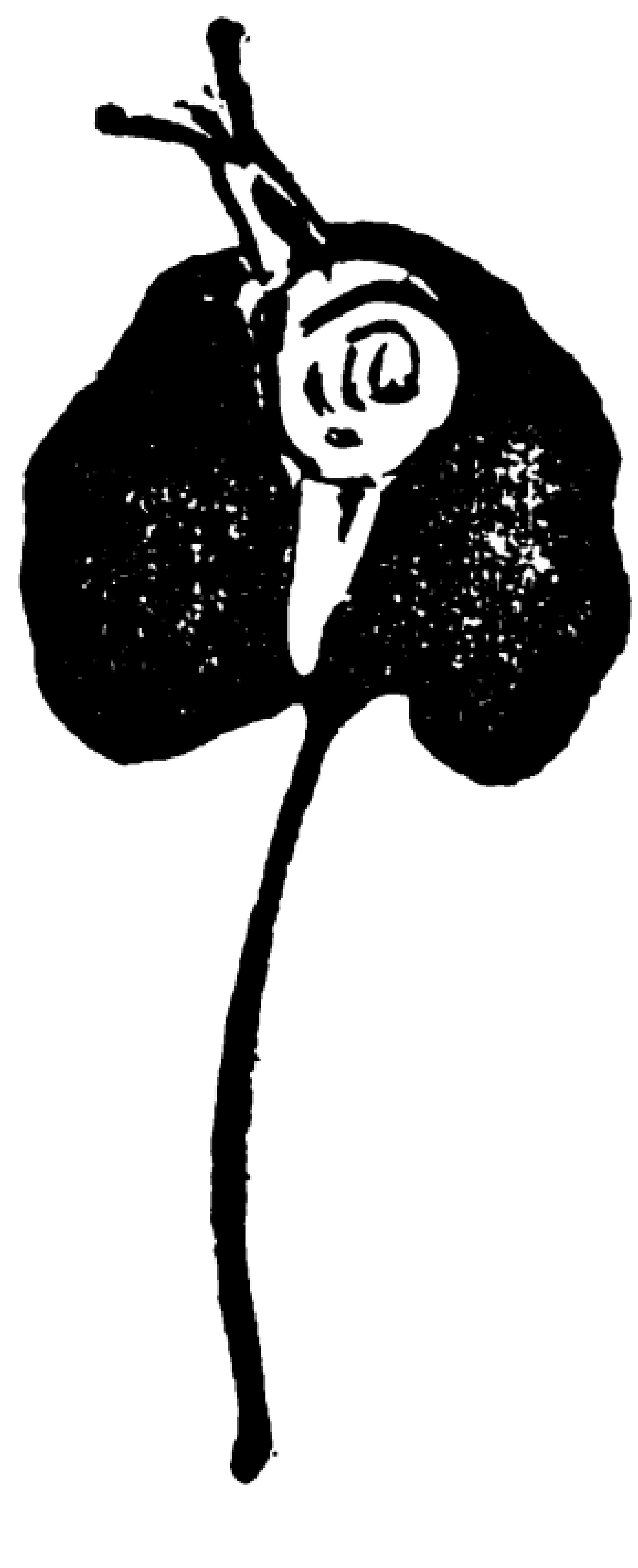
夜中に張り切りし乳の痛み甚だしく、搾らんとすれど手もつけられず、母上は打ち捨て置かば發熱せんとて、自から吸ひ出したまはる、産婆來り少し室内を歩き見たまはずやといへど、心臆してえ進まず、母上は十日もたゝば室内あちこちの片附せんものぞとの給ふ、もし姑の口よりかゝる事いはれたらんには如何につらからん、折柄心やすき某夫人の許より今日岩田帶の祝

ひせりとて、折詰め賜はる、年わかき夫人の程なく苦しき思ひし給ふかと、同情の念に堪えず、早けれども妾の安産の御守りと庭の青梅もがせて使ひにことづける、初産の何事もしらずやがて月みちて生れん日を待ち給ふらん、また男ならば何女ならば好める何子とつけんなど、われも人も等しからん、昨日今日の雨に朝顔の二葉著しく肥りぬとて、夫は鉢に移し給ふ、去年垣根に植ゑし朝顔の花に雨のかゝらんとて、傘させし事を下女は語り出して笑ふ、母上は草木すら二葉より育てなば可愛ゆきものをとの給ふ、菜園の胡瓜初もぎせしとて夫の膳に上れり、背よりも高うのびしといへば、早く下りたちて見たきもの哉。

本作者の住所至急御一報あれ

日光と色の變化





日々生存場裡を退却しつゝある東京婦人

毒紅唇

彼等は何故に物質的に敗亡しつゝあるか

▲最も單純にして最も粋美なる東京婦人

鳥が啼く東の空に男ありとは業平以前のむかしの事何といつても女は矢張江戸前に限るといはれたものだ、江戸前の婦人は氣が利いてゐる、利發が顔に顯はれてゐる、下卑た例を申すやうだが、お酌をさせても多瓜に目鼻の京女では旨くは飲めぬ、況んやズーく

の奥州女と來ては、折角の醉も醒めて了ふ次第であると言はれたものである。其處で江戸前の料理に舌皷を打つ時には、矢張り江戸前のお酌を要すると云ふ、されば東京育ちの氣の利いて居ること、挨拶應對のうまい事、人の目顔を讀むに素早いこと、人をそらさぬこと、座の白けない樣に無邪氣に取り持つこと、咳をすれば唾壺、お手が鳴れば銚子、調子が好くて、呑込が早くて、聲が美くて、長唄、新内、常盤津、淸元何でも出來る、三味線も彈けば、踊りも上手、而してこゝに尾籠ながら其の俗調を憚からずいへば、遣繰下手でも踊りは巧い何時も師匠に褒められるの方である。されば若し彼等が一朝左褄を取つてお座敷に現るゝや、幾多の前世紀的紳士を惱殺して、終には鼻の下の最も長い豪傑に依りて足を洗はれ、令夫人若くは副夫人と成り澄し、老父母を左り團扇の安樂境に置くのである。

▲最も下級なる東京の粋美人

されば其の前世紀的紳士（讀者曰く天晴の旦那を稱

して前世紀とは如何、答へて曰く、泥界に住む動物を身受して妻とする如きは常世紀の人にあらず）頃日來の春風に心動いて近郊の梅園杉田の里へ梅見にと仰せあれば、例の粹美人君は大喜びてお伴を申したのはよいが、抑もこの仕度といふのが大變である、まづ命から三番目の大切の〳〵頭髮がこれではならぬと髮結女を呼び、紅だ白粉だと大騷動をして、幾度か姿見に向ひ幾度か突襟して、例の七ッ道具を提げ、爪先輕げに、變り裏の裳を飜して前世紀君に倚り添ひ、如何にも得意氣に出掛ける。歩くこと二三丁にして汽車に乘ると、時々朱唇を歪めてスー〳〵鼻の孔の試驗をするのは、如何いふ了簡か薩張り判らぬ。が、これは男子が得意の時に鼻息の荒いのと同樣、妾の鼻の孔は此通り風通しが宜しいと氣取つて見せること〻想はれる。而して同車內の婦人をば、頭の天邊から下駄の鼻緒まで精細に觀察し、少しでも自分の物より好いのを身に着けて居ると觀れば、忽ち羨ましくなつて腹の中でそろそろ前世紀君に强請る方案を講じて居る。不粹野暮天な田舍女が汚れた「てがら」でも掛けて居るのを觀れば、大に自己の位地を高しとし、光榮を誇つて居るのである。然り而して其の前世紀氏に對する話し振りに據ると『オヤ左樣』『マア奇麗だこと』『アラ好い景色ですこと子エ』ぐらゐに止まる。即ち科學的智識に於ては頭腦の單純なる幼稚園の兒童にも劣る空の空々零の零々である所の彼等であるから如何なる高山も、如何なる大河も、名所も舊蹟も、千篇一律の御挨拶だから、氣の短い二十世紀の男なら橫面の一つも撲り兼ねまじき所ろであるが、其處は度量寛大ではない、弱點滿身の前世紀氏だけに欠伸もせずにニヤ〳〵と笑つて居る。併し斯樣な鼻下長氏に限つて吝嗇である。杉田に着いて先づ一服といふ時にも、ふかし芋など並べた薄汚い店の前に御腰をお掛け遊ばされた。スルトうすのろさうな婆さんが、令夫人の立派な風采にロク〳〵目を留めぬ樣子で『おかみさん御掛けなせへまし』と言ひつ〻、汚れた茶碗に生温い番茶を酌んで出した。令夫人は痛く人格を侮辱されたることを憤慨し、『ア、

斯様な詰らない遠足なら止すのであつた、いつそ芝居へでも連れて行つて貰つた方が餘程宜かつたわ、左様／＼昨夜の寄席の語り物は越路の二十四孝、行水の流れと人の箕作は……の出が嘸よかつたらう、オヤ此店にも芝居の番附が貼つてある斯様な田舍にも芝居があるとは感心だねー』と腰を立てゝ讀まうとする時前世紀氏が唐突にオイ御の森の左手に見えるのは房州の山だよと仰せられたので例の通り『オヤ左様マア奇麗だこと』と例の千篇一律の御挨拶、しかしそれちや何ば何でも餘り無愛嬌と思つたのか、房州の山……それでは伏姫の籠つた富山の續きですチエ』と追加した



のである。何處までも演劇趣味を離れない令夫人である。それから此處彼處と梅を見歩いたが、一向面白くはない、豪傑君が泥龜の牡丹を観に來た時の話をして、誰が酔ばらつたの誰が踊り出したのと言つたので、令夫人は急に元氣づき、『ヘー彼様な眞面目な方でも踊ることがあるんですか、一體その泥龜と云ふのは此處から近う御座んすか近けりや其處へ行つてお晝の仕度をしませうちやありませんか、妾先刻の芋屋の婆さんにおかみさんなんて言はれて癪に觸つてなりませんよ』などとそろ／＼我儘を言ひ出したのである。

右は藝妓とか稱する賤業的異人種が普通の令夫人に歸

化したもの〻一例として擧げたばかりでありまするが、徳川末路の旗下などに至つては、主人が放蕩するのみならず、妻や娘は芝居の替り目〳〵を觀たものである。それで江戸女は酒も飲めば、煙草も吹かし、賤業婦社會の流行をも追ひ、俳優とか稱する賤業者の噂に夢中になつたものである。其樣な旗下婦人に比べると、下町の婦人は餘程堅かつたのである。けれどもそれは只一種の堅い江戸風で、ハイカラ敎育を受けない婦人に限る、ハイカラ敎育を受ける樣になつては、迚も不健全なる感情の支配を免れ得ない。星や菫の趣味を解した婦人が、如何して二二天作ばかりに執着して、埃まぶれの亭主に仕へ得やう。自然主義の小説を愛讀する婦人が、如何して親の當てがつた南瓜面ばかり眺めて居られやう、徳川末路の婦人が良人の放蕩を眞似て、役者狂ひとまで墮落した如く、槿花一朝の榮を誇つた後が、菫咲く野に露宿して星を眺める自然主義となるに相違ない。

▲組し易き東京婦人

乞食は最も能く今日主義を實行して居る者であるが、東京婦人も今日主義を實行して居るのである。昔の江戸ッ子は宵越の金を使はないと言つたものであるが、今の東京婦人はそれほど極端ではないけれども、百圓持てばアレも欲しいコレも欲しいで買つてしまいそれが十圓と爲り五圓と爲つた時分から漸く心細く感じ始めるのである。決して百圓持てば二百圓にしたいと云ふやうな二十世紀的に觀念した世界共通の慾は無いのである。それは實に淡泊至極なものである。淡泊で快活で善く胸襟を披らくのはよいが、ベラ〳〵と自分が饒舌るばかりであるから、他の觀察材料となるだけで、他を觀察し人生を考へ、世間を考へて自ら修養することは出來ないのである。それも其筈である、幼い時から人の中に育ち、大きくなつて人ばかりを相手にし、人に醉つて居るのであるから、上戸が酒に醉ぱらつて管を卷やうに饒舌つてばかり居るのである。

井戸端會議で饒舌り、歌留多會で饒舌り、多人數の中へ出ても臆面なく饒舌り散らし、譯わからずに世話を燒く、其お饒舌と世話燒とは、狐を馬に乘せた樣な調子であるから誰も敬意を拂はないのである。又上戸が酒の氣なしに半日も過せないのと同じく、人の居らぬ處へ行けば、一時間も安心が出來ない。平生東西の方角を考へずに只、電車や汽車が目的の地點へ運んで呉れるものとばかり思つて居るから、偶々人の居らぬ野中や山中へ來ては、こゝから自分の家まで凡そ何里あるかも分らない、それ故自分の足が道路に耐へないと來ては、泣き出したくなるは當然である。東西南北が分らぬ位だから、地方の事などは少しも分らない。甞て東京から沼津へ引越した後家さんがあつた、成るべく荷物を少くしたいと思ひ、家重代の寶物とも謂つべき紫檀竿の三味線をば涙を揮つて二束三文に賣り飛ばしたはよいが、澤庵の壓石をばサモ〳〵大切さうに積荷の中へ入れて行つたのである。沼津へ行つて見ると、豈計らんや、澤庵の壓石などは濱邊にゴロ〳〵と轉がつて居る。紫檀竿の三味線に至つては、高い金を出さなければ買はれないので、地塡太踏んで悔んださうである。東京女の常識に缺げて居るのはこの一例でわかる。

▲アラ大變の亂發

「アラ大變」と云ふは東京婦人の口癖である、十丁か二十丁歩かなければならぬといつては「アラ大變」、結ひ立ての髮に塵りが着いたといつては「アラ大變」風で干物が落ちたといつては「アラ大變」箸が轉がつたといつては「アラ大變」何でも蚊でも一事一物に就てアラ大變の亂發、これ程の意氣地なしだから、猫の額ほどの畑も耕し得ない。三尺ほどの杭が倒れても立て直すことが出來ない。手桶の中には水垢が溜る、戸棚の中には埃が溜る、茶碗の中は薄黒く爲る、醬油注や燗徳利は何時洗つたものか判らない、膳の縁や火鉢の側がグラ〳〵して取れさうに爲り、大根の葉や人參の皮が茶の室に散らかつて、飯櫃とおまるが隣り合ひ、

頭の拔け毛は紙屑籠からブラ下り、煙草の粉は菓子皿の中に散亂して居る。自家の臺所で一ヶ月に何程の米や薪が要るのかも知らないで、下女が米屋薪屋を撃退し得ないのを叱り付けるなどは珍しくない事である。

▲發奮の動機に乏しき東京人

全體東京の婦人は、地方の婦人と大層心持が違つて居る。地方では婦人に限らぬが、幼い時から　天皇陛下の宮居が東京に在ますと云ふこと、東京が日本一の大都會であるといふ事を腦裡の中に深く刻み込んで居るのであるから、一生の中には是非一度は東京へ行きたいものだと希ひ、東京は自分の住んで居る土地から東に當るか西に當るかをも考へ、自分の土地から里程が何位あるかといふ事をも考へ、東京へ行くには旅費が何程要るかといふ事をも考へる。所が東京の人は其様な事を考へる必要がない、電車に乘つて丸の内まで行けば宮城を拜し得るのである。　天皇陛下が行幸あらせらるゝ時も、還幸あらせらるゝ時も　龍顔を拜むことが出來るのである。而して自分は日本一の大都會に住つて居ると云ふので、始終地方の人を田舍者と呼び、田印と侮蔑して眼中に置かないのである。

去りながら東京の男子は地方人に征服され踏み付けられ、生存場裏から撃退されつゝあるのを見て田舍者もナカ／＼馬鹿にならぬと一通りならず恐ろしく思つて居る。所が婦人にに至つてはこれ迄地方婦人に征服された經驗がない、實際有名な女博士や女將軍が地方から幾人も出て來て幅を利かして居るけれども、男子のやうに大臣や、豪商になると云ふではなし、元帥や大將になると云ふではなし、誰は九州から出た女將軍、誰は奧州から出た女博士などゝ一々調べて見るほど地方に尊敬の意を拂はない東京婦人が、地方婦人は敬すべし、畏るべしなどゝ感ぜぬのは、實に餘儀ない次第である。

▲東京婦人の生活觀

東京婦人の特長は、所謂粹人の心を喜ばせる音樂、

歌舞、酒宴の取持に限る、衣服、飲食、櫛笄、下駄、雪駄、紅白粉の詮索に限る。故に東京婦人の娯樂は、三越や白木の賣出し、胡蝶園や白牡丹の廣告に湯氣如く逆せ上り、芝居、寄席、緣日、勸工場、花の上野や向島と浮れ歩いて、植半、八百松などに晩食して醉顏を川風に吹かるゝに限る。其趣味は野暮なる良人をも化して粋とならせ、端唄の一つも遣らせる樣にするのを理想として居るのである、畢竟自分の顏自慢、髮自慢、着物自慢、化粧自慢、喉自慢、踊り自慢、茶の湯自慢、挿花自慢、道樂自慢を中心として、それに要する物質を詮索するのと、他の婦人の自慢が自己以上の價値を有するか否かを批評するに過ぎない。酒なくて何の己れが櫻かな、三味線も彈けず踊も出來ず、顏はお多福で髮は縮れ毛で着物もない女が花見も糞もあつたものか。是ぞ東京婦人の人生觀で、花を見やうと云ふやうな了簡は微塵もなく人を見やう人に見られやうと云ふのが、其趣味であり、其娯樂であり、又其特長である。



併し東京婦人は地理の分らぬのが花、意氣地のないのが花、忍耐力のないのが花、物に執着しないのが花、巾着の口も締らず、自分の口も締らず、ペラ〳〵饒舌り散らし、持つて居るだけの錢を撒き散らすのが花である。若しこれが地方婦人の

様になつたならば、電車人力車の需要が半減するに相違ない、三越や白木の賣出しとても淋しくなつて了ふに相違ない、歌舞伎座の前に草が生へるに相違ない。電車人力車あつての東京、三越白木あつての東京、歌舞伎座あつての東京に於て、婦人ばかりを田舎風にしやうとは大矛盾である。可言不可行である。電車人力車萬歳！、三越白木萬歳！、歌舞伎座萬歳！、東京婦人萬々歳！。

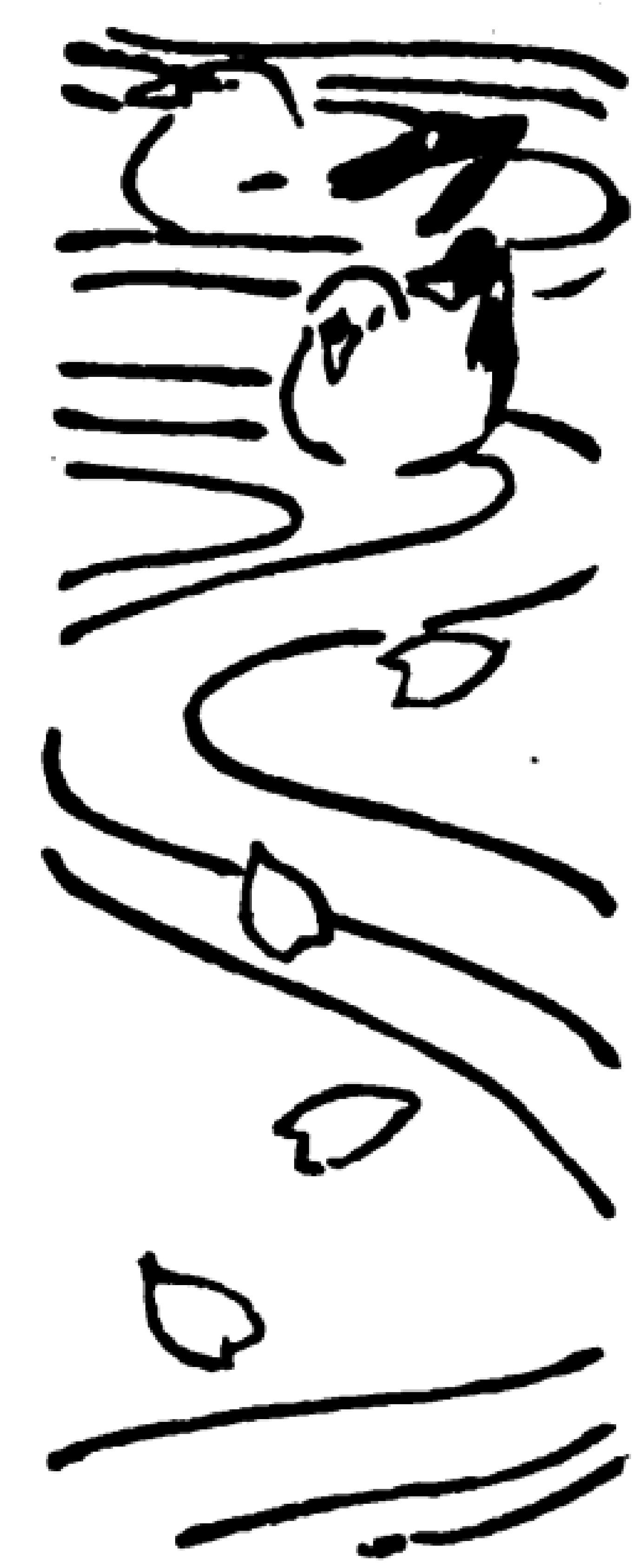
天外に聲あり喝して曰く、

萬歳の裡に衰滅あり！

と、如何にも彼等は萬歳を夢想しつゝ、樂天主義を樂みつゝ、現時現代を謳歌しつゝある間に、其の家庭を失墜して次第に其の子孫繁榮の點に於て物質的文明の生存場裡を退却しつゝあるのである。

次號には九州婦人の執着力と京阪婦人の纎吝性とを紹介せん。





弟の日記

流外女

五月雨が淋しい日、私は弟の書齋を掃除してゐますと、ふと現れたるは一冊の筆記帳、何の氣なしに開いて見れば、

……先日の神田の大火は、計らずも僕に勿怪の幸福を與へた。と云つては餘り我儘な話であるが、實は僕の行つてる〇〇校も幸か不幸か三分通り類燒の累を蒙むつて、茲に十日間の臨時休暇が申し出されたので、僕は取る物も取り敢ず、まづ叔父の家を訪ふことに定めた。

僕の叔父といふのは、夫の御薯で有名な川越の町から、約一里程隔たつた所に住んで居る。極めて氣輕の人で、もう彼是五十にもなるが、全然浮世の風といふものを知らないやうに、一年中戯談ばかり云つて、僕が行つて、種々な奇警な句を吐いて、揶揄だか罵倒だか譯のわからぬ——而も無邪氣なことをいうては笑はせて、又自分も滿足げに笑つてゐるといふ、誠に面白い人である。

一つには〇に不足の無い故でもあらうが夫許りでは決してかう愉快げに暮せる者ではない。それでは性來か、無論夫もあらう、併し其理由は他にあつて存するのだ。言はずとも知つてる人は知つてる、それは叔父には素敵に可愛い娘がゐるのだ、名前は桃代と言つて——叔父が桃が好なので附けたのだといふ——年はまだ十六といふ蕾の時代だが、如何にも叔父に似て嫌味のない、淡白した娘だ。色が白くて、眼がかう晴れぼつたいやうな、殊に頰の色と來ては、一段と異彩を放つてゐる。櫻色といひたいが、櫻には機に臨み變に應じて變化するといふ、濃淡の巧味がない。何れ譬へやうはないのだから、桃代さんの頰は桃代さんの頰とい

ふより外仕方がない。其の桃代さんの頬を持つてる人が、僕でなくてはいけないといふのだから嬉しいぢやないか僕が一にも叔父二にも叔父と、一寸暇があるたんびに家を飛び出すのも、畢竟するに此の人を見たい爲であるのだ。

現に今日家を出てくる時にも、兄貴が、『又桃代さんか、よせ〳〵』つてひやかしてゐたが、僕窃に案ずるに、此の兄貴の言句の間には、必ず『嫉妬』てふ二字が秘んでゐたんだ、否實際左樣としか思へないんだ。

市ケ谷から甲武線に乘つて、國分寺で川越線に乘り換るまで、僕はこんな取り止めもない事を考へてゐたが、惜別の列車に乘り移つて見ると、又新に開けた世界へでも來たやうに、今までの妄想がガラリと逃げて心は又新な方面に鋒を向けはじめる。

ふと窓から外を覗くと、よくも揃うた浮世の馬鹿が小金井の花見と見えて、變挺な風體をして居る突面を被つたのを先頭に、ぞろ〳〵と蟻市のやうに續く。銘仙の衣服を泥だらけにして、その癖右の手で正宗を喇叭に仰いでゐるのは未だ我慢してやるとしても畜生！何だ、左の手には一人の美人的を引いてゐる、不見轉か、否妻君らしい、何といふ傍若無人の奴だらう、如何に此の頃亭主殺が流行らないたつて、妻を侮辱するにも程がある、と餘計な話であるが、何だか癪に障つて溜らないで、獨りでプイ〳〵してゐたが、汽車は我不關焉と出發して了つた。と、又其樣妄想は逃げて了つて、再びかの桃代さんの頬色が眼に映つてくるそれも瞬間、汽車は川越に着く。

街を通り拔ると耕地になる、その耕地にならうとする出端れの口に、薄汚い茶屋があつて「入らつしやい」と人生の定限より二十年も死に損つたらしい婆樣が、皺枯れ聲で呼ぶ胸糞の惡くなる聲だ。しかし僕が叔父の家へ行く時には、いつも茲に休むのが定りになつてゐるので、休んで遣らないのも、何だか後の寐覺が惡いやうな氣持がしてならぬ。で、急く心を押し靜めてずいと這入ると、向ふでも實はよく顔を知つてゐる。

「御久し振でしたね」何の久し振な事があるものか、

まだ二週間とは經ちはしない、御世辭も斯うなつては寧ろ滑稽だ。が毫碌して忘れたのでもあらう茶は飲んだが腰は据らない、五分許して十錢奮發んで飛び出す。

　十八町の耕地もいつか過ると、もう蓊然とした叔父の家の脊景が見える二三町駈足して見たが、草疲れたので路傍に坐つてぷか〳〵煙草を吹かしてゐた。所々から田植歌が聞えてくる、古色を帶びたのが嬉しい。其所へ間食を持つて行くのであらう、之も田植姿の三十女が大きな土瓶と何やら携げ



て、傍を通りかゝり乍ら「いゝ御天氣でございます」と挨拶する。一般に此地方の人は丁寧だ。

　後の山を一廻りすると、もう家の前へ出た池があつて、緋鯉もゐる、眞鯉もゐる、それ相當の戀もあるであらう、表の長い門口を這入つて行くと、例の呑氣屋の叔父は何か懸命と土いぢりしてゐる、見ると切りと桃の繼木らしい。「叔父さん」と呼ぶと、泥手のまゝで徐に後をむいて「あ、庸か」つて又無言で土をいぢくつてゐる。何だか平常と異つてゐるやうなの

で、一寸躊躇したが、其儘母屋へ行つた。叔母が出る。「よく來らしつてねえ」と流石町家の育ちだけてあつて、言葉も東京訛で。が、その裏面には『うるさく來る奴だ』といふ聲が含んだ居つたかもしれぬ。元來僕は叔母に對しては、餘り信用が無さゝうな氣持がするので、叔母の打沈んだ樣子を見ると、氣にかゝらぬでもなかつた。がそんな邪推を起してゐる隙も極めて僅少であつたので、「あの學校が燒けまして又少し暇が出來たもんですから……」と靴の紐を解いて上る。桃代さんの出てこぬのが物足りない。

猫も三年經てば三歲になる、薄馬鹿な下女も、茶を煮る準備に取りかゝつた。その間に叔母は戸棚から、菓子を出してきて勸める。

恰度其時叔父が還入つて來たので、種々の世間談をしたが、叔父も叔母も妙に氣が引きたゝぬらしい、ともすれば噤み勝である、常とは異つてゐるので、僕は心配が起つてきたけれども、其を考へる餘裕よりは、第一桃代さんの消息がきゝたい。

「桃代さんは御留守なのですか？」と漸と聞いた、一種の恥かしさに襲はれたやうに、胸は躍つたのである。

叔母の話に依れば桃代さんは病氣で寢てゐるといふそこで僕は早速彼女の病床を訪ふ事にした。

桃代さん獨特の頰色はいつか失つて、櫛みとからんだ黑髮が、幾條か無常のさまに、靑白い顏を撫でゝゐるのを見た時には、僕はもう不憫といはうか、可憐といはうか何ともいひしらぬ寂寥の感に打れて、暫時茫然として空を仰いだまゝ突立つてゐた。桃代さんはすや〳〵と眠つてゐる、僕は心づいて密と接吻をすると、桃代さんは靜に眼を開いた。

嬉しかつた——と見ると叔母が後に來てゐた、たゞ微に笑つて居られたやうだつた、けれども僕、生れて十九年こんな恥かしいことは初めてだ……否後は記憶だけに止めて置く事にしやう………。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

重なる日丈け詳く書いた日記帳、罪な事とは知りながら、茲に拔萃して御覽に入れました。



二日の旅

袖子

絶えて久しきそれならで其名と共に年月を流れて聞ゆる御嶽の奥、青葉がくれの瀧の音のゆかしきまゝに卯月二十八日の曉たまあへる友どち二人みたり打つれ東雲のいまだ紅らまぬほど、胡蝶の羽袖かろ〴〵しきいでたちに草のいほりを首途しつ。

麥生がくれの雲雀の聲の樂しげなるにうかれかたみに笑みつ語りつ心も空になりて幾程か歩みけん、やがて和田峠のつゝら折なる山路にぞかゝりぬ。

こゝしき岩が根に立よりて松の葉ごしに麓の方を眺むれば我が住む里は早や薄がすみにつゝまれてはるかに遠ざかりぬ。

やう〳〵に足もとむづかしうなるを春のかたみと咲き殘るすみれたんぽゝの珍らしさに打ちまぎれ、流れ出づる清水に喉うるほしなどして、あへぎ〳〵ひた登りに登るに一足毎に眺め變り景色勝るもうれし。

向ひに現はれしは憂てふ事を白山に誰をか松の深みどり、そが間〳〵には今を盛りと咲き匂ふ丹つゝじの花のもゆるが如き色そひて一しは美しかりし。

と見る木かげに一つの掛茶屋あり、立ちよれば此處の嫗、齢六十路餘りなるが慣手に澁茶くみて出すなどねむごろにもてなす心のうれしく再び勇を鼓して歩みをはこぶ。

暫らくして平らかなる處に出れば道左右に岐る、彼方に畑打ち居れる翁あり、聲かけて尋ぬれば左の方を取り給ひなといふ。

坂路又けはしく左は溪川にそひ右は恐ろしき岩山の或るは頭上におほひかゝり或は雲の上に聳え立ちてさながら獅子の狂ひあそび、猛虎の蹲るが如きあり。

山又山を分け入るがまゝにみづ枝さす青葉の風の身にしみて今迄の暑さに、似ず思はずも襟かき合せつ。名も知らぬ鳥はふしおもしろう深山の花にうたひ、水清らかに瀬を早み岩にせかれて忽ち急に又ゆるく岸の小草の若みどり玉ちる露に色はえてげに云はん方ぞなき。

チヤラン〳〵と鈴の音に合せてひなびたる馬子歌の聲遠く聞えしが次第〳〵に近うなりて眼の先なる岩かげよりぬつと現はれたる一人の馬子に彼の瀧までは今どれ程の里程ぞと尋ねれば、二町强りにして石門ありそをくゞり給へば……との答にいと〳〵心うれし。

海中にいかりおろしゝ軍艦ともいひつべき彼の浮石にのりて喜び居れる友をおきざりにひたすらいそげばあわてゝ馳せ來るもをかし。此世の中ともおぼえぬ溪間のながめ、如何なる言の葉もて稱へんか、只珍らし奇しとのみ叫びつゝ夢かと許りに過ぎ行きぬ。

此道昔は禽獸の外は絶えて通はざりしを近世長田圓右衞門といへる此地の一農夫が交通の便をはからんが爲め年あまた苦心して遂に開きしと云ふ、あはれ此人なくて此道開かれざりしならばかゝる景色も世に知られざりしならんを、學識さへあらざりし一農夫の爲に一勝地を得て、内外國人のこゝにわざ〳〵杖を曳くもの年一年より多くなれるは碑面に彫りつけたる文字にても億ひ知れ其人の功勞又むなしからずと云ふべし。

いで開鑿當時の苦心の程を慰めばやとかた許りなる石碑の前に立ちよりて折來りし躑躅の花などさゝぐ。

先きに敎へられし石門くゞりて昇仙橋てふ橋を渡れば凄まじき響きと共に面をおほふ水烟は行手の方よりこれなん名に高き仙娥瀧、見上ぐれば幾十丈の絶壁よりとゞろき〳〵落ちたぎつ樣さながら白き雲かはた雪か。

いにしへ文覺上人とやらんが修業せし那智の瀧もかくやあらん近時藤村操が身を投せし華嚴の瀧もかうやうか、高さはかり知られぬ巖頭に、立てる時、凡てのうつゝ心を打ち忘れて後世をいそぎしもげにことわりぞとそゞろ今昔のあだし思ひにものゝ一時餘りは茫然

たりし。

友にうながされて岩によぢ水におり立み結べば涼しき谷の早瀬に塵の世心洗ひ去りて精神とみにさわやかになり。

これより途は猪狩村にと出で四方の眺めも何となう俗にかへれど道なだらかにいさゝ小川のささやき清く、桃櫻などの後れ咲きの人待ち顔なるもさすがに見過しがたくぞある。

御嶽の町の入口に黒木の大門ありてその邊りに老木の櫻あまたあり俗に櫻大門と稱ふ。

花は今や見頃に咲き匂ひてさながら白き幔幕を打ちわたせるかと思ふばかりなりし。



疲れし足に石のきざはし數へ終れば古りたる杉の木立神々しきが中に立ち並ぶ金櫻神社の社殿の結構金銀珠玉をちりばめたる見る眼もまばゆく流石に深山の奧ともおもほえず。いつ迄も立ち去りがたき心地はすれど日の早や入りて邊り小暗くなるにつきぬ名殘を惜みつゝ見かへり〳〵此處を下る。

今宵の宿は松田屋とか。

案内せらるゝまゝに二階の一間に通りをばしまにより見渡せば遠近の賤が屋より立ちのぼる煙のにぎはふ樣に遠き昔仁德の帝

がものせられし「民のかまどをにぎはひにけり」てふ古歌も思ひ出されてあはれなり。

名物の田舎そばすゝり湯あみなどす、一夜をあかす旅寝も心あへる人々と共なれば懶くもあらず見し事、聞く事語り合ひては打興ず。

戸外の淋しさ窓に音づるゝは峯の嵐か松風か爪音の夫にも似たる溪川の響聞えてげにみ山の奥なりけり。

明くる朝九時過ぐるほどにやう〳〵眠さむ。家づとにとて宿の者に土の鈴あまた求めさせ今日は道をかへて歸り途につく。

青葉を分くる芝山づたひ登りのぼれどさしたる眺めもなきによしなき事してけりなど昨日を戀ひてはつぶやく。

花を笑がほにむかへ、笑顔に送るを……はるかに釜無の長流は銀蛇の如くうねり〳〵ておもしろし。

此坂下れば刀ぬき石てふ恰も大劒を立てるが如く大空に聳ゆる岩あり、山姥の手の痕とて二丈餘りある人の手の形せる岩の横たはれる等珍らかなる岩々の眺め又常ならず。

誠や美しき姿は平かなる處には望むべからず浮世の幸も又かくてぞと友は云へりし。

谷間に鳴き合ふ山鳩の聲を聞きつゝさはらび摘みたむれば忽ちに雨の手にみちて土産の數そふ。

吉澤てふ村に出れば路傍に遊び居たるうなゐ子等の鈴の音聞きつけて羨やましげなるに一ッ二ッ與ふれば月の桂にても得たらん如く喜ぶ樣も罪なくて愛らし。

日はまだ高き山ぶみに野路より野路の面白さいそぐとしもはなけれども我が里近くなるまゝにたらちねの君やまちまさん、庭のうばらや數そひぬらんと覺えずもいさみ〳〵ていつしかに西の空一面オレンヂ色にそめなされし頃二日の旅路終へてなつかしの家の門に入りぬ。

勞れやしつらん風呂は、入り加減なるよとの何時に變らぬ母君のみなさけうれしく旅の勞れも洗ひながし樂き夕飯のまとひにはありし事ども物語に忙がはし。

やがて時計は八時を報ずるに今日の日記したゝめて暖かき臥床に入る。

あはれ今宵の夢や何ならん深山の奥の鳥の上か、はた花なるか。（をはり）



朧月夜

輝子

▲樹上に鳴く鳥は聞いて愛らしく路傍の草叢から呼ぶ聲は哀れに聞捨ならぬものである。

▲人間の最も愉快な生涯はと考へた時に、

咲足らひ朧月夜を靈と化して舞ふや朝風羽に心地よき

▲私は年來の神經持で家の中でガタリと音がしても、今書かうと筆を取りかけてゐる言葉さへ忘れてしまふのである、時候が暖かになると、外の幽邃な場所を求めてそこに行き、殆んど終日、本を手にして外に暮すのです。幾度か可愛らしき蝶の立居にも小さな胸は騷ぎ膽を拉がれるやうな事がある。

▲神經衰弱と云ふ病氣は實に物を能く忘れる病氣です、私などは今書かうとして腹の中に考へて居る事さへ、直ぐに忘れてしまつて筆が二進も三進も動かなくなる事がある、併し又其の忘れると云ふ事に依て大いに幸福と思ふのは、逆境に立て、四面楚歌の聲を聞いてゐる時でも、今が今、全くの血を吐くやうな苦痛をした事を二三日經つとサラリと忘れるのである。後では實に不思議な程愉快に歸つて、彼の恐ろしい苦悶の影を、再び描き出さうとしても、何うしても思出されぬ程綺麗にさつぱりと消してしまふ事である、神經衰弱に罹つた人でなくては分らない。

▲誠は人の生命である、私にも誠はある。併し神經病は時にその誠を忘れて、無茶になる事がある、其時には我儘放題の心に成らずにはゐられない。

▲風が強いと、大木の根を絡み込んだ丘なぞは、木のゆらぎしてさながら、地震かと思はれる。

寄りゐする椋の大木風にゆれて世はくつがへると

夢に見しかな

▲支那人が年齢を聞ふたから直ぐに筆を取つて、「雖從所欲心不超矩」と書いて見せると、判りませんと云ふ、孔子の言葉ですよと言ふと、暫らく考へてゐたが、ははアそれでは、七十歳ですかと云つて吹出した。

▲支那語で 清國人を「チンクワゼン」と讀む。一留學生曰く、私し街を通つてゐますと、日本人「チヤンコロ」と言ひます、「チンクワゼン」の間違です、大變な間違ひ、ゐはゝゝゝ。

▲西太后と書いて、此方は大層豪い方ですねと云ふと、否え、駄目の人、惡い人です、ですが兎に角豪いのでせうといつて「哲婦傾國」と紙に書いて見せると、然うです、全く然うですといつた。

▲支那の留學生がお宅はと紙に書いて出したので「深山幽谿裏」と書いて返すと笑つて「雲深不知處」でせうと、其側に書く私は面白くおもつて、

牛の背の兒が横笛のゆびさしも雪深うして師は藥をる

と書いて見せると打笑みつゝ、然うです、是れです、よく分りました。

▲支那人が腦病の藥に鹿茸と云ふ藥を澤山服めば必らず癒ると云ひましたので日本では漢方醫は疾うに廢つたと答へると、然うだ、だが外科は西洋醫も可いが、内科は駄目だと誇つてゐる。

▲支那人は日本人よりも禮儀が正しい、近寄る時は必らず帽子を脱つて來る。そして却々無邪氣な處がある一寸書籍を手にしてゐると、直ぐに何學校かと聽く、次で姓名を聽く、其次は宅を聽く、年齢まで知らうとする。而して皆が外國語に重きを置いてゐる樣子で、英書さへ繙いてゐれば必らず近寄つて來る、いつもこんなわけで彼等が先に名乘つて來ても私の方では一度も答へた事がないので、貴女我儘ですねと言つたものもある。而して何も私共は惡氣はありません、學生同士は學歷を話すのが面白いと思ひますと言つてゐる。私が支那の詩は面白いですねと云ふと、全くです、支那の詩は一番おもしろい、しかし詩は貴方に解ります

でせうと言ふ、ハイ少しは解りますと答へると、蝙蝠傘の頭で、「一枝濃艶露凝香」と書く、私が讀んで居ると、一人がこれは比喩です。女の比喩ですと云ふ。誰れのと問ふと、これは揚貴妃と云ふ婦人の比喩です。あゝ揚貴妃ですかと云ふと、貴方それを知つてゐますかといふ。知つてゐますとも支那の名高い美人ですもの、では貴方支那の歴史を能く御存じですネ、西京(西安の事)に墓があります、誰れでも往つて見ますと云ふ、では私しも其中行て見ませうと云ふと、貴方往きますなら揚貴妃に成りませうと、二人が一度に口を揃へて見上げたので、私は思はず吹出した。



▲所異れば風俗異るで、伊豆の國では、于蘭盆に物を遣り取りするに生身玉と書く、此方が御中元と書いて遣はしたら、先方では、意味を解し兼で、はて御中元とあるから、女中と下男に來たのではあるまいかと一家首を捻つたと言ふ話。

▲日本人はチョン髷を切つて日本服を着てゐるのに何故支那人は「ハイカラ」に成て支那服を着ないかと聴くと、未だ初めて洋服が流行りますからと首を竦めて笑つてゐた。おい／＼は日本のやうに散髪頭に支那服を着るやうになるであらうか。

▲ハイカラ支那生が舊カラ豚尾を見ると、彼れがほんとのチヤン／＼ですと笑ふ。

▲支那人は自國の女學生が活潑な行動を聞くと、非常に喜ぶと云ふから、或る女留學生の富士登山の記事を見せると、大層感服するとおもひの外、駄目、駄目、支那婦人駄目ですと云ふ。何故かときくと富士山は能でも登れますといつて笑つてゐた。

▲久振りに源氏物語を繙いて見た。浮舟に思を焦し、君や何處妾は紫の上よ、らうたがりし姿の、今更に罪なかりし昔しの夢に歸りて。

▲支那人は若い女でもスパ／＼煙草を喫ふさうである一支那人が私にも喫ふかと聽いた。日本では今頃の教育を受けた者は喫はぬと言つたら、豪いと感服してゐた。私は實際知人の中に煙草を喫ふやうな女はないのであるから、這麼事を聞かされると如何にも可笑しく感ぜられる。酒は何うかと尋ねるから、無論飲まぬと答へると、益其感心してゐる樣が可笑い。

▲淺草公園の噴水に虹が立てゐた。下が紫、其上が淺黄、其上が萌黄、其上が鶸、夫れから黄、黄の上が鬱金、一番上が赤であつた。

▲今年の新年には韓國の客から鶴の肉を貰つて元旦に生鶴の肉を始めて味はつた、格別旨いものとも思はなかつたが、併し鶴を食ふといふ事が既に珍らしい事であるから、口に入れる時の心持は又格別であつた。

▲海城から分捕つた九段坂上の高麗狗はその當時には大層大きなものだと思つたが、日露戰爭以來頓と小さくなつたやうな心持がする。

▲支那人が何が一番好きかと云ふから、私は詩が好であるといふと、直ちに書いたのは、楓橋夜泊の名詩であつた。夫れは小兒でも知つゐると云ふと、先生又筆を執つて、

春江女兒貌如花、龍鳳弓鞋髻堆鴉、
洗眸凝郎欲郎住、紅杏墻頭是兒家、

これは男女學生の星董的の詩である、這麼のよりは敍景の方が好いと言つたにも拘はらず、又筆を執て、

洛陽女兒對門居、纔可容顏十五餘、

と書いて、貴女の顏恰度這麼に見えますと云つて、下の句を指すから、まア馬鹿な事を言つてるわいと私も直ぐに、旅館寒燈獨不眠、客心底事轉凄然、故郷今夜云々と書いて、是れは貴方でせうと云ふと、先生讀んで見て肯づいたが終りの霜鬢明朝には餘程頭を傾けてゐた。私が又、

　煬帝行宮汴水濱、數株楊柳不勝春、
　晩來風起花如雪、飛入宮墻不見人、

と平素好な句を書いて見せると、先生我田の苗を未だ知らぬもの丶如く、笑みつ丶誦じて、特に二の句に舌鼓を打つてゐた。まさか今の支那留學生は唐詩選の句を知らぬわけでもあるまいのに。

▲私が詩を書くのを驚いたやうに、支那人に交際が澤山あるかと云ふから、否や一人もない、詩は小學校にゐる時分から習つて覺えてゐる、併し私共は日本では下女に少し勝つた位なものであると云ふと、彼は又筆を執つて、

　誰有勝君家才學

と書いたから、私は戯れに、

　容色ありて人の此世は花なれや
　　淋しからずや學識を云ふ人

と書くと、打笑みつ丶判りましたけれども發音が出來ませんといつた。

▲私が嘗て愛する花を襟につけてゐると一留學生はそれは可けませんと云ふ、何故可けませんかと聞いても答へはない、只笑つてゐる。推して尋ねると「支那の女郎、澤山に附けてゐます。」といつたので大きに嫌惡になつた。

▲地まで枝を伸ばした櫻の大木の下に立つて力を極めてその枝を振ふとさつと花の雨が降る、徑ちそれが吹雪となつて空に舞ひ立つ。

　心から枝をはなる丶花だにも
　　庭の吹雪とおのれやはちる



友達と別れに「四六四九」とは「よろしく」といふ意なり。辭書になき新語なり。クサーと燃ゆる燈のもとに繙けるは敎科書なるべし、寫眞帖なるべし、小說なるべし。



世帯に金を掛けぬ工風

翠香

△程よき家事經濟

先一ヶ月何程の費用を要する歟を算すべし、家持ならば家屋税、地代、并諸がゝり物何程、借屋ならば家賃若干、次に米代より、薪炭、點燈費、所得税是等は奈何人にても必要省く能はざる物なれば、人數に合せて何程と見積り、尚日々の野菜、肴、肉、酒、茶、醬油、莨、砂糖、鹽、味噌に至る迄分に應じて何程を要するかを計ふべし、其他の雜用はすべて各自の費とし主人を始め、妻子、兩親、兄弟、姉妹、各々の小遣金を定め、衣服は勿論、男は散髪、女は髪結費、湯錢、其他小間物、履物、學校費用、出遊費、間食代に至る迄一切の費用を各自の帳簿に口を分け其名を記して入費を分ち記さすべし、如斯嚴重に法則を立れば各々節儉心を生じて自ら浪費せぬ樣になるもの也、されど餘りに儉約々々と常にケチケチいへば、家族皆却て卑劣心を生じ、僅にても自己の錢をつかはず他のカスリを貪むとするの傾を生じて、世間より貶蔑まるゝに至る事あれば、經濟の許す限りは必要外に少しく餘裕ある樣にして充がふべし、其餘裕は勿論浪費せしめずして成るべく貯蓄するやうに奬勵すべし、各自に小遣帳を拵て其日毎の入費を記する事小児迄も怠らしむべからず、臨時に物入の多き時は其翌月を愼みて塡充を爲べしとは誰も思ふ事なれど、扨其翌月に至れば又何や角やと止を得難き義理合の事發りて、やはりいつも要るだけは要る上に、動もすれば病患等の出來事有て再び大物入と成る事有がちなれば、假令富裕なる家なりとも有に任せて浪費するは無謀也、必ず幾分を殘して多きは銀行に少なきは郵便局などに預けおくべし

△めい／＼相應の手内職

况や裕ならぬ家ならば常に心がけて家族各々何なりとも其身相應の手内職をなし、少宛にても金錢を得るの工夫を爲すべし、内職などを賤業の如く思ふは舊幕時代の迷夢の未覺ざる也、今日の盛衰速にして優勝劣敗拜金萬能の世の中に、浮々と遊びくらしてやがて財政の苦難に逢ふこそ恥辱なれ、内職にも色々あり、其身に藝能ある人は其得たる處を以て門人をとるべく、或は學校の囑託教師となり、又は高貴富豪の夫人令孃に月何回の出教授をなし、又は文筆の才あらば投書家と成るも可なり、繪畫の出來るは女子職業中の最上乘なるものなり、現在某女史の如きは、纎弱なる女子の手一つにて優に一家をなし、諸大家と並び稱せられて、有髯男兒をして又顔色なからしむ、是れ一つは其天性にも有べけれど、よしや天受の才はなくとも、何藝に拘はらず少壯よりそれ／＼の師に附て一心不亂に勉むれば、其業に依て金錢を得るに至る事は左迄難事にあらじ、古風に育ちたる婦人は裁縫を爲ても隨分よき職業なるべし、無學無藝の上裁縫も出來ぬ不器用者なりとも、尙ほ爲能ふ職業は世間にいくらも有り、家事に暇なしといふ勿れ、四六時中働らきづめの職工にして何等の内助も無き者すらも三度の食四季の衣服は不食不着には居らず、夜は眠り、湯にも入り、品の美惡時の長短こそ違へ普通人のする程の事はそれ／＼爲つゝ職を勤るならずや、出來ぬといふは爲ざるのみ、勤人の細君など主人の留主中暇なるが多し、空しく小説に耽り、琴三絃を弄し、或は下婢を相手に他の批評を喋々する時間を利用して、其身に適ふ職業をなし得る處の金錢を貯蓄しおきて、利に利をつめば、埃も積れば山とやら、終には好む衣服も買ひ得るに至るべく又自分の儲けし金なれば、折には花見も宜かるべく、何方に出遊するも父母や夫にねだるに増る事萬々にして間接には家計の足しともなるべし。

△勞費を少くするには

費の少からむ事を思はゞ怠惰をすべからず、世に懶惰より生ずる費の多き事枚擧に遑あらねども、概略をいはゞ、何事に拘はらず自ら行けば一度にて濟べき事を、暑し寒し等にて他を遣て其事埒明かずやはり自ら出かけねばならぬ様に成て、急ぐ爲に車賃を損し一筆かけばよくわかる事を面倒がりて口上に能いひ含めたる積りにても、其使思違へ或は忘れて肝要の事をいひ落し抔して爲に大差錯を生じ、甚敷は先方は立腹し紛擾と



なる等の事例尠からず、左迄の大事に至らずとも爲にいらざる足を運び事延滯し幾分のムダ費は必ずかゝる也、或は懶惰なるより他の機嫌を損じ、信用を失ひ得らるべき筈の機會をも取はづし、僅の懶惰より不計怪我を爲事あり、金錢其他大切の品も懶惰なるより取落し獲徒に奪はるゝ事あり、衣食住に付いても、先衣服は其取扱ひ方懶惰なればたとへ美服にても折目歪み悪癖付きて見苦しく、外出と常服とは必ずわかち置べきを面

倒がりて歸宅しても着かへずして早く損じ、宅に在とても勞働する時は必ず外被すべきを、怠りて其儘に爲れば殊に汚れ損じ速なり、ほころびも心付たる時早く繕へば少しにて直るを、幾日も打捨おきて大破に及び汚れも即刻に洗へば譯もなく落るを、久しくなれば染着て色を變じ石鹼よアンモニヤよと骨を折ても脱かぬるに至る、洗濯物はかはき次第に取入るべきを長く干て日光と風とに地を痛めて早く破る、張物も又同じ、寐間着と夜着ふとん殊に壯年の人のは度々干事を怠るべからず、之を怠れば厭ふべき臭氣を生じ且はやく損じ破るべし。

食物は煮焚の法其品毎に同じからず、强火にかけて早く引上ぐべき物、文火にて長時間煮るべき物、或は鹽醤油のよく吸收するとせざる物等甚精細に注意を要する仕事なるを懶惰にしては甘くなるべき物を不味し油斷して焦つかせ、又は些の骨惜みより器物を取落して、悉くかへさざるも其量を減し、人數に不足して追煮を爲ざるべからず、用ありて立つ際一寸戸棚に入るを怠惰して犬猫に肴をさらはれ、或は數日戸棚中に入置て味を變じ、夏季は蟲を生ぜしめ、味噌漬物を出したる跡仕まひを疎にして酢味黒色を帶るに至れば又喰ふに堪ずなる等、悉皆懶惰よりおこる損失ならざるはなし、雇人任せにすれば一層甚しければ何事も主婦たる者が先に立て爲ざるべからず。

△住宅の掃除と飾附

家屋は掃除と飾附の注意によりて、侘宅も淸潔美麗に見え、且破損もすくなし、如何立派なる建築なりとも、掃除行届かず、隅々汚なく、天井より煤のぶら下り、板間及び緣等に雑巾の跡縞の如く、又は足形を印し、庭に紙屑糸屑を掃落したる儘にし、草の生たるを拔かず、木枝は蜘蛛巣多く、或は雪隱を汚したる儘淸めず、手洗鉢は水垢溜り、殊に座敷の客雪隱に鼠糞をち壁虎の這ふあり、手洗水には孑蟲の昇降する等、一見して其主婦の怠惰を知らる、勝手をみれば流し元に菜の切端、茶滓こべりつき、溝詰り、井戸端にごみ芥

を打捨などしあらば、懶惰ならずと誰かはいはむ、又は戸障子の開閉あらく、ガタヒシと音高く、物を持運ぶにも壁襖に突當て疵を附け、角ある物そゝけたる物を重しとて、曳摺りて疊板間に疵を附る等、猶いひ立つれば際限なし、是等は注意周到なれば、多年をたもつべきを、疎暴懶惰の骨をしみより速に破損するもの也。

△物理化學の活用

經濟を思はゞ家内に病人の出來ざる樣に、衛生の事を常に心掛て病魔を



未前に防禦して、一歩も入れじと縮むべし、凡病程不經濟なるものはなし、常には何事も儉約辛抱すべしと雖、病ばかりは何をさし置ても醫師を迎へ、藥は勿論、氷よ滋養物よと醫師のいふがまに〳〵買はざるべからず、事によりては看護婦を雇ひ又何角に付ても用多くなれば人をも雇ひ一時に物のいる事夥だしきも、夫をいとふ遑あらず、又病人有が爲に諸事に妨多く、直接間接共に損失甚だし、幸にして一時を凌ぎ得たりとも舊の如く全快する迄の費も又

容易の事に非ず、されば病を未發に防ぎて、病はぬ工夫するを以て、最上策とす、誰も病を好む者はなけれどとかく不注意より發る物なれば、主婦たる人は衛生法を知らざるべからず、尤醫師の如く深き事は知らでもよし、只概略を心得れば足る、今日の婦人は學校に在し時理化學をも學びたる人多ければ、其學べる處を主婦と成たる時に活用して日々の料理上に食品の性質を研究し、何は滋養分多し、何は何の毒を含めりなど吟味して、成べく有益の品を用ゐるを得べし、斯くてこそ學校の功能も顯るゝなれ、在學中種々の小六ケ敷課業を學びたりとも、今日に應用する事を得爲ざれば、長の歳月と學資を何の爲に費したるか、全くムダ事と成卒るべし、然れども又生かぢりの學理にのみ拘泥すれば、却て今日の間尺に合はざる事必ある物也。

△病魔も寄り附かず

抑病なるものは多くは安逸過食に基す、時候の不順、寒暑の俄然なるに乗じて、感冒より呼起す故に、或は風邪は百病の本といへども、感冒は近因にして其源は安逸過食也、凡そ何人にても、日々三度の食を時刻を定め、分量を違えず、うましとて多く喰はず、朝は早く起、各々の業を活潑に爲し、假令閑散の隱居たりとも、後園に花卉を培養し、或は庭掃除をなし、遠近散歩の序を以て家の用を足しなどし、夜は家内一統十時を限り寢に就き、何か事あるも十二時より更さざる樣にする時は時候の不順、風雨寒暑は恐るゝにたらず、病魔も寄つく事を得ず其證は田舍の農夫は、寒暑を冒して勞働すれども生涯藥を口にせず、又長命者の多きは、學ばずして其日々の行狀自然と衛生法に合すれば也、都會にても勞働者は感冒位に休みもせざれども、自然と脱去りて病とならず、然るに貴族富家の常に衛生々々と口實にいひながら、安逸を貪り、强飲過食し、彌が上にも重着するが故なり、漬物は不消化也と退け、滋養と稱して脂濃き肉類をのみ多食し、飯は二度焚或は粥の如き和らかなるに非ざれば毒也とし

壯年の身を首卷手袋などと包み廻し、眼鏡を掛け、杖を携へて、恰も老人病者の如く、隨て血色あしく成、僅の道にも俥に乗るなど衛生法の誤解も亦甚し、斯いへばとて萬事昔風田舎流儀がよしと云ふには非ず、只物事耽り泥む勿れといふ也西洋料理を食するも可也日々活潑に事務を執り運動を克して時に美味を喫はゞ眞に滋養と成べしと雖、身を安逸にし、莨を吹く外何の爲事もなく、寐ころび居眠り、覺ては欠伸しつ間食を貪るは、自ら病を求むる也。

△謂ゆる文明の利器

たとへ身は坐居すとも絶ず手の活らく業をなし居れば、心も共に活らきて眠くもならず食をも忘れて却々運動になるもの也、寒暑の烈しき時も何事をか爲居れば却て暑寒ともに紛れて凌ぎ易すけれど、徒居すれば彌寒く彌暑くて堪難し、首卷手袋も常になれば、たまく晴の席に臨み取去らざるべからざる時、折あしく寒風凜烈たるに逢へば忽感冒となる、杖眼鏡は老人の具也、壯年には無用の費ならずや、杖は非常に備ふる也といはば云ふべし、眼鏡は眼力を扶くる也と或は然らむ、さはれ洋燈に反射する光ある洋書を深更迄讀むを少しく節して遲くも十一時位に止めて眼力を勞せざるの增れるにしかず、近年壯者に近眼



者及び眼病の多きは全く光の反射する洋書を絶ずみるによるといふ人あり、又昔俥といふ物なかりし世には、壯年者は大概健脚にて、女にても一日八九里迄は歩行爲たり、男子は一日十二里を普通とし、東海道百廿里を十二日に行定めなりし、健脚なるは一日卅里をも行者有しぞ、今は汽車、人力、電車、自轉車、自動車など次第に出來て、草鞋脚袢はたゞ勞働者のみと成り昔日の健脚は亦見られざるに至りしこそ遺憾なれ、去ればせめては當時諸學校にて行ふ生徒の遠足會を今一層盛にしたく思ふなり、女兒たりとも折々遠足登山を試みて克く身體を錬え置くべし、やがて主婦と成ては日用の買物は自ら市に出でゝ求むべし、是は自身の運動になると共に、物の相場も知られ、家にのみ居て出入商人の持込物のみ買ふの損なる事を悟るに至るべし。



時勢に葬らるゝ女

高田峰子

△私はまだ若いのです▽

近頃、若い婦人たちの思想がハイカラになりましたこと、またその嗜好や慣習が、ズン／＼變つて參りますことは、實に目ざましい勢なので、私どもは、たゞたゞ驚くの外はありません。

と申しますと、何だか私が老い込んで居て、世紀おくれのことを言ふやうですが、その實、私とてもまだ三十に足るや足らぬ若い身、美しい花を咲かせ、立派

な實を結ばせるのも、實際はこれから後なのです。その若い身でありながら、どうかすると、一日々々、時勢といふ足の速いものに追ひ越されさうで、暫らくも落ちついては居られないやうな氣がします。

それも、同年輩のものばかりを見てゐますと、別に私だけが時勢おくれの考へを抱いて居るのでは無さゝうに思はれますが、退いて二十歳前後の妙齡の少女に接しますと、どうも私どもとは、スッカリ時代が變ッて居るほど、思想や動作の上に相違があるのを認めます。これは一體如何いふ譯なのでせう。境遇の相違によるのでせうか。教育の有無によるのでせうか、將たまた時勢が、それほど變ッて來たのでせうか？

△學生時代のお轉婆▽

もとより、學校生活のうら若い少女と、さゝやかながらも、一家の主婦となッたものとは、おのづからその境遇も異なり、心もちも違ふのですから、これを一樣に論ずることは出來ますまい。學生時代は、譬へば春の野の糸遊のやうなもので、他愛もない空想に耽つて、些少なことに乍ち笑ひ乍ち悲しみ、一向取りとめのないことを考へて居ますが、さて結婚して苦しい貧乏世帶を預かりますと、米味噌の心配から子供の育て方、それは〳〵油斷のならぬ問題に、實地直接に觸れるのですもの、大抵の婦人は、結婚前には非常にハイカラなことを言ッてゐましても、結婚後になりますと、見違へるほど思想がジミになッて來ます。

私たちも、學生時代には、今から想ひ起してさへ耻かしい位、お轉婆なことをして、ハイカラがッたものです。それでも、近頃の女學生たちに比べますと、まだ〳〵十年前のものゝ方が、遙かに因循であッたやうに思はれます。日本の婦人として、以前私どもの學生であッた頃の方が宜しいのか、或は現今のやうにハイカラなのがよいのか、その可否は、いづれとも申し上げることは出來ません。たとへ以前の方がよいとしましても、時勢の變化ならば、奈何ともすることは出來ないのですから、寧ろ新らしい思想、新らしい風習に、

おくれないやうにするのが、肝要なのではありますまいか。

△言語が違つて來ました▽

先づ、髪の結ひ方、着物の好みなどが、近來いちじるしく變りましたのは、誰でもすぐに氣のつくことですが、單に外部に現はれたものばかりではなく、その内部までが、日々に變つて參りました。第一、現今の女學生同志の使ふ言語をお聞きなさい、これまでの婦人の言葉とは、殆んどその樣式がちがッて來ました。學校や家庭では、これを賤しい輕薄な言葉だと言ッて、隨分非難もされ矯正法にも注意されるやうですが、もはや大勢如何ともすべからずと申しませうか、ますます新らしい言葉や、新らしい使ひ方が多くなりつゝあるのは、爭はれない事實です。

△文字や文章の變化▽

第二には、文字や文章も、またよほど變つて來ました、いや、變つたといふよりも、男子の文字や文章に近よッた、といふ方が適當なのでせう。昔の御家流や、近頃まで流行ッた小野鵞堂先生流の文字を書く少女は次第に減少するやうに思はれます。而して男子の手蹟によく似た、四角な字を書くものが、だん／＼多くなるやうです。殊に、この頃はペン、萬年筆、鉛筆などを使ふ場合が多くなりましたから、なほさら手蹟が男子のに似ます。それからまた文章も、やはりその通りで、チヨツト手紙を書くにも、『まゐらせ候』式の文體ではなく、小説にでもありさうな文章を書くことが流行り出しました。

△考へ方が違ひます▽

斯ういふ風に、思想を發表する言語や文章までが、變つて來たのですから、その奥にひそむ思想それ自身も、自然と一大變化を受けたものと察せられます。たとひ同じことを考へるにしましても、その考へ方が、以前とは大いに異なッて居るのです、例へば、立派な

着物を着たいと思ふのは、婦人の身として昔も今も將た近き未來も、變ッた所はありますまいが、それは單に高價な衣服、美しい地合といふことばかりでは無くなりました、たとへその、地質は少々惡くても、全體の色の配合がよいとか、或は色合が高尙だとか、自分の皮膚の色をよく調和するとかさういふことに重きを置くやうになりました。

また、家庭の幸福を望むといふことにしましても、たゞ平和で、安樂に暮らすことが出來るといふだけでは、まだ慊りません。なほ進んで、精神上の自由も得たい、高尙なる趣味も求めたい、相當に知識を廣め修養をはかることも望む、といふやうに、その內容や方法が、以前とは違つて來たかと思はれます。



△女學生の交際ぶり▽

次には、近來一種の競爭的流行のやうになッた婦人の交際これも日を追うて、ますます盛んになる樣子ですが、その間に於て受ける影響は、思想の上にも外形の上にも、なかなか多いのですから、以前のやうに僅かに一家庭や親戚のもの同志が交はッて居たのとは、よほど違つて來たと言はねばなりませ

ん。現今の若い少女を御覽なさい。その交際ぶりの上手なことは人に對して臆した色を見せぬこと、とても私どもの及びも寄らぬ所です。而して、交際の範圍が廣まるとゝもに、知識の分量もやはり增して來る譯ですから、近頃の女學生たちの世事に明るいことは、實に驚くばかりです。これを見ますと、私どもが動もすれば時勢おくれのやうに思はれるのも、無理ではありません。

△時勢おくれの婦人▽

つまり、現今の婦人生活は、すべてのことが、以前とはスツカリ變つて來たのです。これを物質の方から見ますと、日常の食物までが異なツて來ましたし、精神の方から申しますと、在來の婦德が頽れて、今や新らしい作法が出來かゝツて居る、と言ツても宜しいのでせう。

さア、斯うも急激に變化を來した婦人の境遇で、私どもは如何したらよいのでせう？　私も立派に明治の教育を受けた婦人です、嘗てハイカラな思想を抱いたこともあるのです。新時代の理想を實行するために、舊弊な姑や叔母と、意見の衝突を免かれなかツたこともあるのです、いや、現在今日までは、私自身が隨分新らしい思想を持ツて、一廉進んだことをする婦人だと思つて居ました。ところが如何でせう、更に若い女學生たちを見ますと、まるで私どもはお婆さん！　舊式な考へに囚はれた、時勢おくれの婦人と言はれなければならぬやうになツたではありませんか。

△花々しい生涯は短かい▽

時勢に葬られたものほど、憐れむべきはありません。而も婦人は、男子よりも早く、時勢に葬られやすいのです。ふるい言葉ですが、時勢は日進月歩で、一日同じ所に留まれば、すでにそれだけ時勢におくれて居るのです、私どもが、まだ若いつもりで悠々としてゐますと、いつの間にか周圍の事情が變つて、ちやうど嘗て頑固な姑や叔母を憐れんだやうに、後から追ッかけ

て來る若い婦人たちに笑はれながら、時勢に葬られてしまはなければならないのです、さう思ひますと、ホントに婦人の花々しい生涯は短かいもので、何だか心細く感せられますが、併し私どもの修養次第で、たとへ年は取りましても、思想だけは若々しく保たれるものだと思ひます。



△小説に現はれる婦人▽

ところが、近頃の小説に、この時勢におくれた婦人……その癖まだ年の若い婦人が……、良人には厭はれ、社會からは冷遇されて、遂には悲しむべき不幸に陷いり、人知れぬ煩悶を重ねる有様が、澤山描かれてあるやうです。すでに小説家の材料に取られるのはさういふ婦人が社會に多い、或はさういふ傾向が押し寄せて來る、といふことを現はして居るのではありますまいか。

△時代の新運に伴へ▽

現今の女學生たちの抱く思想感情、さてはそのハイカラな動作が、果してよいのでせうか如何でせうか、それは分りません。中には、隨分厭ふべき弊風もあるやうです。けれどもさうなッたのは、爭ふべからざる時勢の力なのですから、今さらこれを如何することも出來ますまい。と言つて徒らに時勢や境遇の奴隸になッて、是非なくそれに盲從するのは、もとより望ましいことではありませんが、或る程度までは、時と共に移り、世と共に進まなければならぬかと思はれます。いや、新らしい時代に處して、幸福なる生活を營まうとするには、決して十年前の思想や慣習に支配されて居ッてはなりません。ですから私どもは、現代の婦人生活の惡い方面即ち浮華輕佻な風をまねてはなりませんが、併し時勢の進運に後れないやうに、絕えず自ら省みて、知見を擴めるのが肝要でせうと思ひます。

感冒の注意

近頃は大分冷水浴をなさる方が多くなつた、これは衞生上大いに喜ぶべき事です、併し素人考へでは、冷水浴を始めたらば、感冒を惹かうが、腹が痛からうが無理に氣を押して行るものが多い、これは甚だよろしくない、少しでも病熱のあるやうな場合や、氣分の惡い時は止めた方がよろしい、身體に異狀のない時行つてこそ冷水浴の效能もあるもの、殊に感冒の流行するときなどは成可く中止した方が安全です。

又鼻風位で熱さい出なければ入浴は左ほど惡くはないが、熱があつたら必らず止めなくてはなりませぬ、湯に温まつて寢ると感冒が拔けるものだとよく素人が申すけれども、兎に角感冒には身體の冷へるといふ事が一番わるい、感冒を引いて居ながら寒いのに夜分外出するなどは甚だよろしくない、又人によつては足から風を引くといふ事がある、すべて身體の或る一部分の甚だしき寒氣を受けるといふ事が最も感冒を引きやすいです。



老孃の紀念事業

ゆかり女

▲此頃は何れの國も兵卒に對する注意が、昔しと違つて大いに進歩して參りましたが、茲に英國の「ポーツマウス」兵士會と申しますは、其基礎が元一婦人の精力と忍耐とに因つて成立た者でありまして、英國の近世社會史を綴る者は、誰れでも此婦人の事業を、第一に頁の花と飾らればなりませぬ。

▲此婦人は名を「サラ、ロビンソン」と申して、兵卒の友と呼ばれて居ります。當年七十四歳の老孃ですが幼年の時から、兵卒の爲に同情を持て居た人であります。

▲孃は始めには或る傳道の事業に從事しましたが、不幸にも脊髓病を患つて、不治の病症と診断せられてからは、鋼鐵の器具に依て、歩行して居りました。夫れより孃は全心を慈善事業に注ぎ、如何にもして同胞の爲に善き働を爲さんと神に祈て居りました。

▲斯くて孃は四十六歳の折「ギルドフオード」に移轉しましたが、此時始めて兵卒が如何に誘惑の多い、危險な生涯を送つてゐるかと云ふ事に氣付きました。而して此爲にこそ身命を擲つて、心靈上の爲にも物質上の爲にも出來る丈けの扶助を與へたいと決心しました。

▲元來兵卒に關しての此樣な事業は澤山ありますが、單に殺風景な牧師や、長官が何程親切に慰めても、未だ懷かしい家庭を持たぬ未婚の兵士等に取ては、どうしても心に物足らぬ所が多いのであります。是れは多年軍隊に、經驗のある將校達の皆認むる所でありました、此物足らぬ所に、愛の光を補はんと、「ロビンソン」孃は思立たのであります。

▲で其年に始めて此事業に着手しその手始めに兵舍の中に傳道所を設けましたが、是れは餘り成功しませんでした。併し夫れから四年程後には、孃が某の後備隊や、英國南方の常備兵の屯集してゐる所々の町で働いてゐました。孃が測るべからざる慈善心は此間に實を結んだやうに思はれます。

▲それから十年ほど經ちまして海陸軍省の免許を得て、某の軍隊の秋期行動に隨つて參りましたが、其時には、兵卒の爲に、休憩所修養所を設けまして、休憩所には珈琲、茶、其他種々の飲食物を並べ、修養所の方には、新聞雑誌や、又書簡を書く用意から、遊戯品まで具へました。

▲所で此企圖を成功させますには、先づ自分から進んで先鋒隊に加はらねばなりません、孃は練習の終る間、常に先鋒に立て、自分は流浪人の樣な生活をなしつゝ働きました。其間の心配と疲勞は、弱い身體に隨分影響を及ぼしましたが、其代り成功は又偉大な者で、此度砲兵

卒間に、泥醉や罪惡の少なかつた年はなかつたと言ひます。

▲ですから司令長官を始め、將校だちは、皆孃の勞力を感謝し、心服して居ました一例をいへば彼等の一人が何故私共が「ロビンソン」孃を兵士の友と言ひますかとの問に、孃は他の慈善家の如く、演壇から高く私共を導きません、來つて手を取り、顔を合せて、親しく私共を正しき道に導きます」と申したさうであります。

▲此成功に勵まされて、孃は「ポーツマウス」に兵士會を建てる氣に成つたのでせう。「ポーツマウス」は單に陣營のある計りではなく大なる軍港で軍艦の給料は大抵此港で拂はれるのであります。而して、印度や、外國から歸つて來る軍艦も、皆此港で上陸し、再び他に遣られる迄、數ケ月間は茲に碇泊するのであります。

▲此給料を受取つた兵士等は、再び職務に出る前に、各其幾分を聯隊救助銀行と云ふに預けるが常ですが、夫れが外國に出て再び歸つて來ます時には、利子が附いて大なる金額と成て居て、一人十ポンド(百圓)乃至五十ポンド(五百圓)を持つ事に成りますので、思慮なき彼等は、夫れを費ふのに待たれぬ程に思つて居ります所に、一方には例の狡猾な下等の飲食店、旅宿の主人等が、疾くより、艀で迎ひに出てゐて、誘ひ行くと云ふ有様でありますから、何うしても惡るい方に金錢を費はずにゐられませう。

▲のみならず「ポーツマウス」は、人口か十三萬まで有る中に、千以上の飲食店や、不潔なる營業者がありまして、此兵士會の建ちます迄は、實際一ケ所も、清き尊敬すべき行所はなかつたのであります。印度から歸つて來た或聯隊では、此港で、僅か二三ケ月間に六千ポンドの金錢を救助銀行から引出して、五百ポンドの外は盡く是等の下等店で浪費して了つたと云ふ事であります。孃が此墮落頽敗を防ぐ爲に、茲に兵士會の必要を感じたのも道理です。

▲所が幸い兼て深く孃に心服してゐた聯隊の士官等は、此所で大いに盡力して、或土地を、陸軍省から無代價で、兵士會の爲に下與へる事になりました。

▲然るに好事魔多しで、當時茲に非常な勢ひで布教に盡力して居た、羅馬教會が、甚しく反對しまして、陸軍省も切角の志を翻へ、土地を下渡す事は出來ぬと變替を言ひ出しました。併し熱心なる孃は是に屈せずして其附近に其組合を置いて、誘導する事に致しました。

▲すると間もなく敬虔なる羅馬教會附屬の兵士等が、進んで義捐金を募り、孃に十ポンドを送つて寄越しました次で孃の眞心に感じた人が「ファウンテンホテル」と云ふ古い建物を義捐しましたから孃は夫れを修繕いたして、翌年の九月に、始めて兵士會と云ふ者が建設されました。孃は自分の住居を此處に定めて自から指揮して居りました。

▲兵士會は宛かも軍隊倶樂部の樣な組織に設立されまして、茲で社會的交際も出來、又自分の好む娯樂も勝手に出來る樣に仕組まれました。

▲内外の裝飾は誠に念を入れてありまして、或る一兵卒が、讀書室に

入らうとする時に、其友の臂を引いて、「君、これは士官の室だよ、僕等の爲に、何で這麼立派な敷物なぞが布いてある者か」と言た程であります。

▲入口の向ふには、大きな帳場がありまして、是は以前ホテルで在た時に同樣に使つて有つて、此室には烏渡休憩したい者が、入いて茶や珈琲なぞを飲む室に設けられてあります。

▲珈琲室と云ふは、重に社交的の休憩に用ゐられてゐまして、幅廿呎、丈四十呎と云ふ至て長い室で、玆には新聞、雜誌、將棋、骨牌戯等が置かれてあり此室で兵卒は聯隊以外の人々と交際する事の出來る樣に、外から、自分の妻や、友達なぞを伴れて來て、自由に休憩し快樂を取る樣な仕組にしてあります。是は兵卒等か往々士官の眼を偸んで、普通人の如く倶樂部に往き、聯隊以外の氣樂な交際を望みます結果、畢竟足を彼の下等飲食店に運ばせるのを妨ぐ爲めであります。



▲讀書室の大きさは階下の珈琲室と同じ程で周圍の壁には漆で塗つた、綺麗な樫の嵌板がしてあツて。夜は二つの大きな燭臺が點され、瓦斯が白晝のやうに輝きます。新聞雜誌は勿論、夥多の出版物が揃へてありまして、倶樂部の内に、何處でも、此樣な讀書室のあるのは名譽と致します。

▲夫れに並んで浴室があります。溫浴と水浴の兩方で、種々の道具が具つて居ります。

▲浴室を少し離れて、大きな、兵卒等の妻が裁縫をする教場があります。

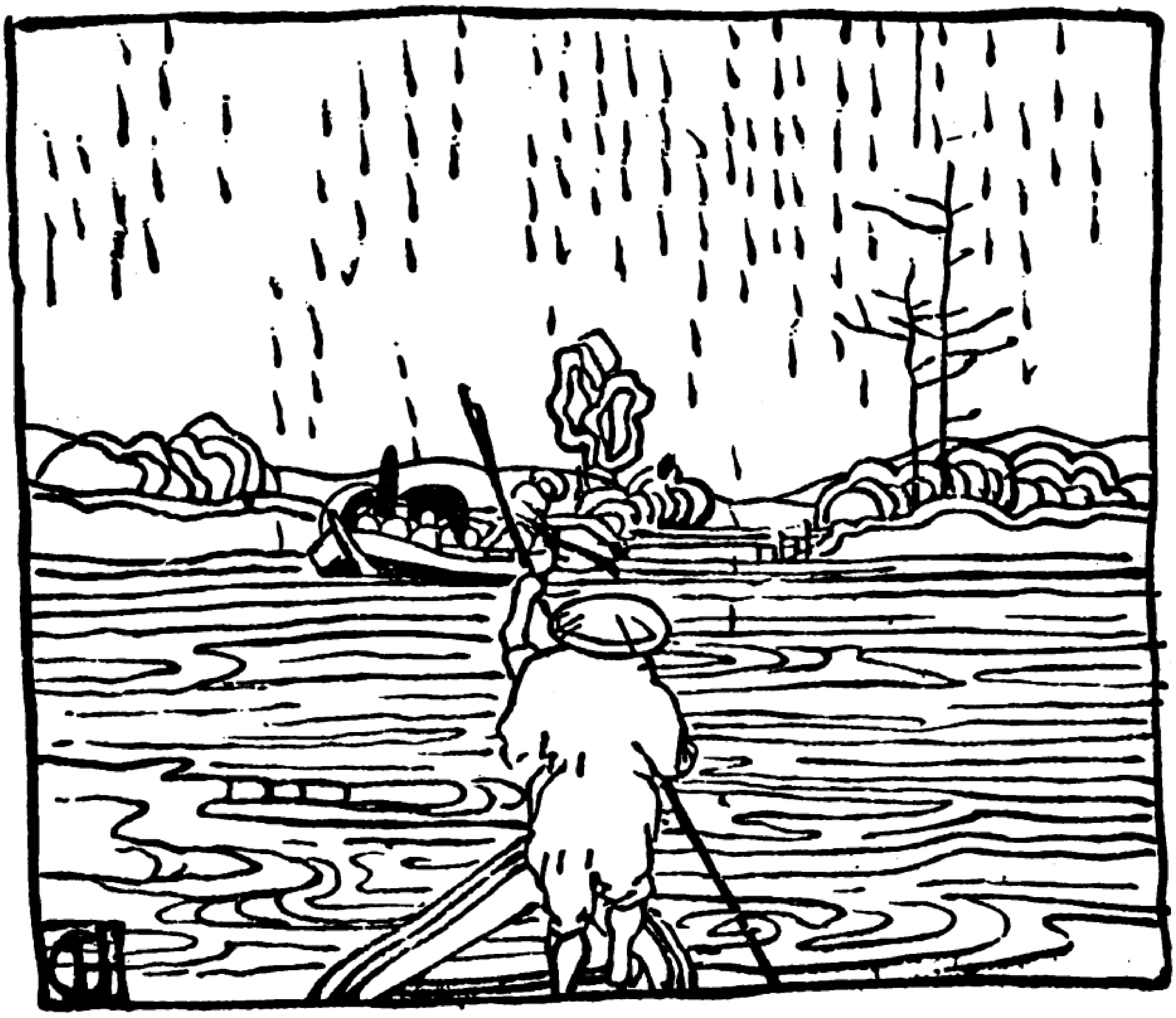
▲最も上は皆學校の寄宿舍の樣に、小さい鐵の綺麗な寢臺が置かれてあり、夜具も心持の好ざさうな綺麗なのが具へてあります。總體で百人

位は儲られます。

▲其他矢張り此建物内の他の部分に、結婚した兵士の爲めに澤山の室が在りまして、此室では兵士等が外國に職務に出ます前、或は除隊に成て家に歸ります前なぞに、其妻や家族等が來て、色々世話をする所であります。夫婦して一つ室を借りやうと思ひますなら、一夜に大抵廿四錢を拂へば可いのであります。併し一人宛の寢臺なら、僅か十二錢で借りられます。千八百八十六年には此兵士會に二千七百四十人の人が泊まつたと云ふ事です。

▲「ロビンソン」孃は又水夫歡待所と云ふ者を設けまして、是れには喫煙室があり、二個の大きな球突臺と、多くの寢床が置いてあります。千八百八十六年には茲に四萬七千人の水夫が泊まつたとの事であります。

▲此樣で「ロビンソン」孃は、疾くから脊髓病を患ひ、千八百八十年までは、大した難儀もなく寄附金を募つて廻る事が出來ましたが、夫れより以後は常に病床に臥してゐて、「ポーツマウス」並びに「アレキサンドリア」の兵士會、水夫歡待所、風俗改良の爲に設けました「ナツプス、レン」の青りボン珈琲館、其他「ポーツマウス」の「ケナンポル」珈琲館等を、皆完然に指揮して、何れも能く其機械を動かしてゐました。





可惜花嫁を臺なしにしたる男

糸左近

左の一篇は、或婦人の小說の樣な身上話、聽いて棘にも露とやら、むくつけな左近も、暫し淚に咽んだ程の氣の毒な事柄、前車の覆へるは、後車の戒のみならず衞生上の注意にも勿論なるべければ、例月のとは一風變つて居れど、一つ申上げて見ませう。

併し姓名だけは故と違はせておきます。

▲文子の素性

花山文子は越後の生れ、越後は雪と美人が名物の國、文子は其中でも殊の外美しく、雪の肌花の顏ばせ、娘有つ親は。誰とて羨まぬ者は無かつた。十八歲の春に土地の高等女學校を卒業して上京し、女子大學へ通學する外に、琴や抹茶までも稽古したのである。

▲文子の緣談

未だ卒業せぬ中から、許嫁だけでもと、茶の先生や琴の師匠を中心にして、言ひ寄る者も多かつたが、文子は何時も顏を橫に振つてゐた。然るに二十二の歲、卽ち女子大學も今一月で卒業といふ時、故國の兩親から「相當の緣あらば、東京でゝも差支は無いから、何分宜しく賴む」との手紙が、叔母へ宛てゝ來たので、叔母も熱心に、何うか良き婿殿をと選んだ末に、二人の候補者を得た。

▲見合の一

其の一は、理學士で、今尙大學院に斯學の蘊奧を研めてゐる人、或人の媒妁で、愈見合をして見ると、邊幅を飾らざるにも程あつて、髮や髯の野生的なるは言ふも更なり、羽織を見れば、これでも、昔は紋が有つたかと、疑はるゝ程に古びてゐる。叔母が何か話しかければ、「ハア〳〵」と率氣なく「朝日」燻らしながら返

事する胴間聲、迚も音樂を解する的の聲では無い。見合が濟んでから、叔母は、「あの人が何うして見合する氣になつたらうか」と笑ふ。が併し、文子は、却つてあの樣な人に同情の涙が有るのでなからうかと、心が其の方へ惹かれた、されど其の心を語る程の勇氣は何うしても出なかつた。

▲見合の二

今一は某銀行頭取の若旦那、經濟科卒業の法學士で而も俊才との噂、見合をしたのは前者より三日後れての事、前者を野生の杉とすれば、後者は手入の善く屆いたお庭の松、髮鬚の整然たるはいふまでも無く、新しいフロックコートに、燦然たる黃金の時計は、善く調和してゐる。「御免下さい」と會釋して、葉卷を吸ふ態度は、如何にも落着いてゐて申分が無い。斯くて見合も濟んでから、叔母も義の叔父も、「此方は煙草を吸はぬ者ばかりだから、「御免下さい」と挨拶する所は、實に禮儀に適つてゐる、彼の樣な婿を世話したら兩親も嘸々喜ぶだらう、文子にも豈夫不服はあるまい」文子は此の好男子を絕對的に厭な人だとは思はなんだけれど、野生の杉が却て他日棟梁の材となるのでなからうかと何となく蟲が知らせた。

▲緣談調ふ

蟲が知らせたにも拘らず、總ての事情に餘儀なくせられて、女子大學卒業後間も無く故國の父母も來て、愈々銀行頭取の若旦那即ち法學士松山才太郎の令夫人となつた。數多の婢僕には、若奧樣々々々々と冊かれて、何一つ不自由なき身の上、搗てゝ加へて、夫なる人も、人前で故と新婦を叱つて見せる樣な愚物でも無ければ、さりとて甘つたるい態度の鼻下長でも勿論無い。威嚴があつて言葉優しく、晩酌の後は、「琴でも三味線でもお彈きなさい、我も一つ歌はうから」などと、却々粹な所もある。「思うたにも勝る結構な家にて舅姑方も殊の外優しく、そしてあの良人も親切な方にて候」とは文子より兩親への報知、さらでだに嬉しき兩親は、此の報知に又々辶かけて、村人などへも吹聽したは夢か。

▲結婚一ケ月後

結婚してから、一週間や十日は、唯譯も無く耻かしいばかりで日を送つてゐたが、最早一月にもなつて見ると、我が夫にも次第に慣れて、次第に言葉も平氣に話さるゝ樣になり、來し方行く末なども、話さんものをと思へども、結婚當時とは違ひ、昨日も某所の宴會、今日も何處其處の懇親會、朝に出でゝ、歸るは夜の一時二時、『餘り遲う御座いますね』と言へば、『さう眠いなら早く寢てゐた方が可いぢやないか』一月前の地藏顏は、今や變つて閻魔の



姿、イヤ閻魔は姿こそ恐ろしけれ、罪無き者を罰するやうな神では無い。清浄無垢の文子、其の樣な神ならば決して恐ろしくは無いけれど。

▲言ふに言はれぬ苦痛

心の中に面白からぬ事あるにも拘らず、追從輕薄言ふやうな文子では無いから、如何に心の不快を隱さうとしても、自然に表はるゝ身の辛さ、身の辛さとは抑々如何、二言目には『此の意氣地なしめッ』と罵らるゝ事か、否々、然らば『田舎者めッ』と誹らるゝ事か、それは唯心の辛さで、身の苦

さでは無い。身の辛さとは、身體に故障の出來たことである。始めの中は、只小さな潰瘍だから、直ぐ治るだらうと、誰にも告げずに、賣藥の即治膏を貼つておいたが、次第に濃汁出で、拭へども〳〵、ジク〳〵と絶え間なく洩れ、起居にも幾らか臭氣がする。『不潔な女だなア』と叱られる良人に對しても耻かしく、密に醫療を乞はんかとも思へど、これとても極りが惡い。斯くて二月三月と、姑息の素人療治をしてる中に、偖も嬉しや瘡は治つて、何等の故障も無くなつた、果して眞に治つたのだらうか。

▲第二の病に罹る

ヤレ嬉しやと思うたは束の間、或日久々で散歩がてら叔母の許まで訪れて歸ると、俄に鼠蹊部が、何の痛も無しに腫れ出し、續いて頸や腋窩なども腫れ、偖も不思議なことだとは思へば、別に何の苦痛も無いから其の中に治るだらうと、二三週間も其の儘にしておけば、こはそも如何に。

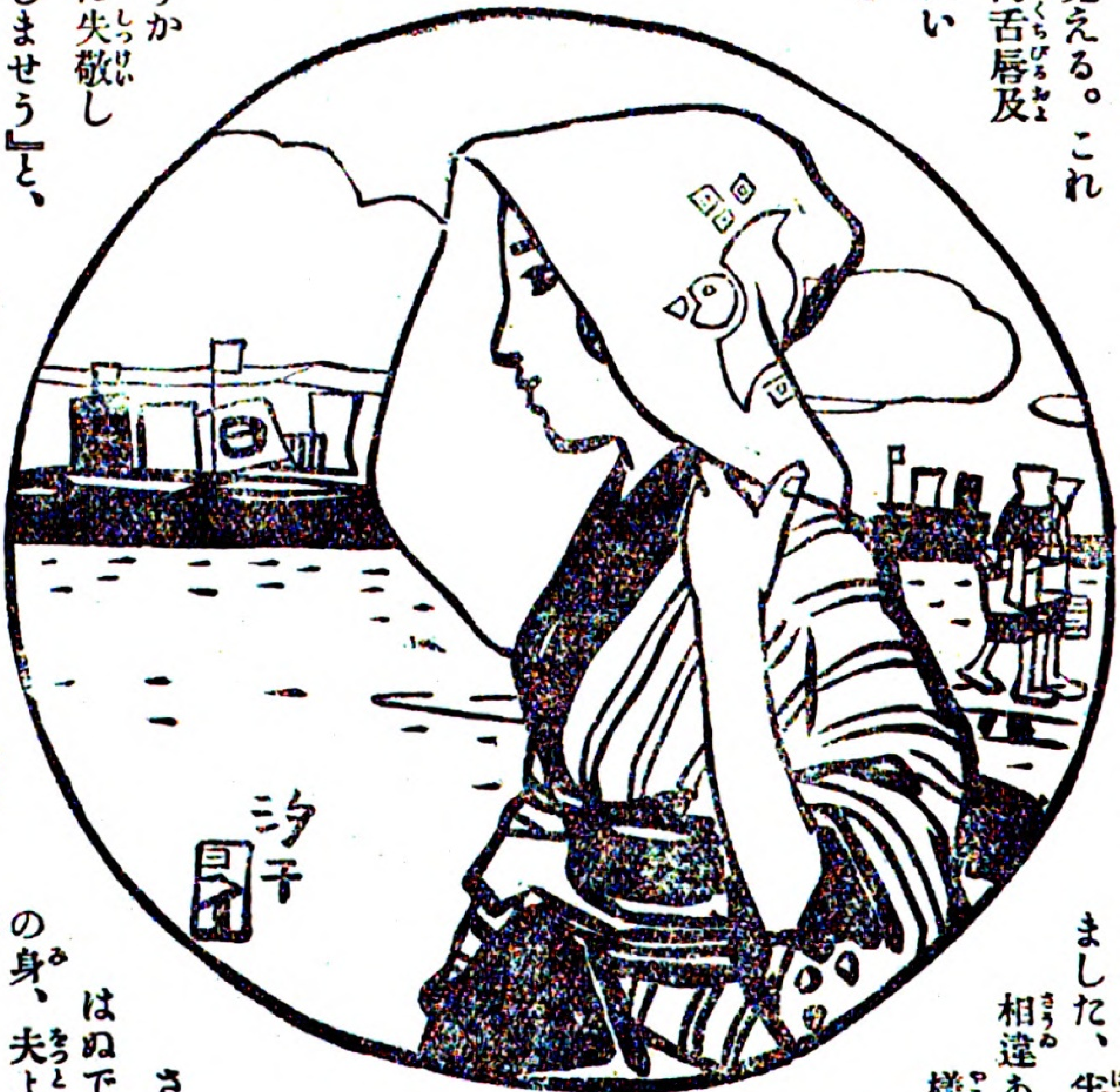
▲俄の熱發

水掛けられるやうに、ワナ〳〵と惡寒がして、熱は殆ど四十度。頭から肩それから、諸關節に劇しい痛を發し、その辛さといつたら何ともかとも形容は出來ぬ早速醫師をと招いたが、生憎『先生は風邪で引籠つて居りますから』と、薄髭の代診が來て、鹿爪らしく打診聽診した揚句『これは急性の多發性關節僂麻質斯で御座る』成程、患者は始め潰瘍が出來た時からの容態を詳しく話さぬのだから、未熟な代診が、斯う診斷するのは寧ろ無理の無いことだ。斯くて僂麻質斯の藥を服むこと一週間、熱は次第に退いたれど、何條根本の病が治らうぞ、日を經るに從ひ、小豆大の赤い點が顏や頸に出で、續いて胸や背、乃至は手掌足蹠までに、櫻の實ほどの紅い點が呈はれ、その點の中心は乾いてその周圍は濕つてゐる。『僂麻質斯に何故斯んな疹が出來たので御座いませうか』と問へば、『されば僂麻質斯は既に治つたれど、これは又別病で即ち急性濕疹といふ病に轉じたので御座らう』『らう』では甚だ心細い話だ。兎に角この代診者は未だ後期の試驗も受けぬの

が、足蹠に疹の出來るは、或病の特徴なることに、お氣が附かぬと見える。これより四五日經つと、肛門舌唇及び口中の粘膜などに平たい肉様の物が出來て爛れるやうになる。事茲に至れば、如何に遠慮勝の文子も、代診に甘んじてる譯に行かぬ、又如何に冷淡な舅姑も之に應ぜぬこともなるまい。

▲先生驚く

『病を忍して宅診だけはしてゐましたもんですから、殊の外長引き、甚だ失敬しました、ドレ御診察申しませう』と、身體殘る隅なく丁寧に診終つて、『へー斯う



なるまで放棄つてお置きになつたとは、驚きました、半年前からも兆してゐたに相違ありますまい、迚も拙者の様な、内科醫の手では治されませぬ、專門の名醫にお掛りなすつた方が可いでせう』斯う言つて四方を見廻し、人の居らぬを機會に、『これア梅毒の第三期になつてゐます、一歩進めば鼻も墮ちて了ひますぞ』

▲文子の離緣

さうでは無いかと、豫て思はぬでも無かつたが、清淨無垢の身、夫より外に感染るべき人は斷然無い。然るにその夫たる人に、何等の徵候

も無いやうなれば、豈夫〳〵と日を送つた上に、代診の誤診。されど斯うと定つては、矢張怨むべきは唯我が夫、否怨んだとて何の効も無きことなれば、『良人‥‥‥先生から伺ふと、此の儘にしておけば鼻も墮ちて了ふとやら、妾は鼻が墮ちようと、耳が除れようと、良人さへ優しいお言葉をかけて下されば、何より嬉しう御座んすけれど‥‥』『何だ自己からでも傳染つた樣な事を言ふせ、憚ながら、自己なんぞの身體には、一點其の樣な汚はしい病は無い、汚はしい病は汚はしい行があるからだ、然るに己の罪を他人に塗らうとは、太い女だ、戸籍の入つて居らぬが幸只今から行つて貰はう』『それア餘りで御座んす』と縋つては見たれど、既に義の叔父を呼んでの談判、叔父も之を打消すだけの證據を有たぬから、遂々引取ることにした。

▲鼻は墮ち目は盲んとす

引取られてから早々專門醫の手に掛ければ、左樣の事も無くて濟んだものを、殘念なるかな、無智の叔母は、早速賣卜者に方角を占て貰ふと、『今居る處より巽の方に當る、第一の醫者に診て貰へ』との判斷歸りがけに、其の足で搜し當て、『何卒御來診をお願ひ申します』招待に應じて來て呉れたは、六十路の坂を二つ三つ越えたらしい漢法先生『手後にはなつて居れど、拙者家法の名藥を用ゐますれば、二月程で美ン事治して上げませう』二月のものは半年かゝつても、治りさへすれば何よりなれど、憐れむべし、文子は日を累ぬるに從ひ諸所の粘膜は爛れ、四肢の骨、顏の骨、殊に鼻の骨は劇しく痛む、それでも尚信じて益々草根木皮に縋ること丁度二月、遂々物言へばフギャ〳〵と響くやうになつて了ひ、のみならず大切なる眼は段々霞むやうになり、此の分で進めば、何うやら盲れさうである危い哉。

▲最後の醫師は神の如し

流石の叔母も賣卜者の信ずべからざることを悟つたと見え、今度は日本第一等の皮膚科專門醫、石肥慶二博士を招待した。博士は診察し終つて、暫し不審さうに文子を見詰めた末に、貴女は松山樣の若奥樣ではあ

りませんか、嘗て才太郎樣を診察に往つた時貴女を見たやうだ』叔母は文子の無言を受取つて、喋々と顚末を語る。博士は大に奮慨して、『お眼は梅毒性の網膜炎なれど、今の中に療治すれば治ります、鼻も鼻音だけは免れませんが、墮ちて了ふ程には至りませぬ、入院なされば私が引受けて治します、又貴女の濡衣も事明白になる策、イヤ松山才太郎殿を謝罪らせて見せませう』

▲病は治つて事落着

入院後三月程經つと博士の明言せるが如く、視力は幾分薄くなつたれど眼球に



何等の故障も無く鼻音は多少殘つたれど鼻中隔も墮ちず鼻形も醜くならず先々目出たい成績を得たが悲い哉烏羽玉の黑髮は薄くなつて艶を失ひ、鮮かであつた顔も近寄つて見ると薄い斑痕が處々に殘つてゐる此の顔では迚も故國へは歸られぬ。話替つて松山才太郎は其の後賣春婦の無情を悟り己が不品行の罪を悔い、煩悶悲觀してゐる所へ石肥博士からの義俠なる説諭、何とて之に背かれうぞ、直に車を馳せて文子の許へ驀直文子も固より罪こそ惡め、人を執念く惡む女でないから事茲に落着 覆水 再び盆

に復ることゝなつた。

▲才太郎の酒精中毒

既に善良の人に立ち返つた松山才太郎は心に一點疚しい所を殘さねど、身を數年の間酒浸しにした爲に、あはれ慢性酒精中毒症を殘し、身體はデブ〳〵と太り、消化器は傷み時々嘔吐を催し、鼻の上は紅くなつて四肢はビリ〳〵と顫ふ、從て根氣も薄く記憶力も衰へ、昔のハイカラ的の氣象は今や變つて憂鬱なる心に成て了ひ色々治療を施したが容易に治らず「嗚呼思へば紳士と稱せらるゝ者や角帽を頂いてる學生の中にも澤山己の樣な者が居つて何れ程無垢の女を奈落の底に墮しつゝあるかも知れぬ、されば世の爲、人の爲、己の名譽を犠牲にして、之を最も多くの女讀者を有せる雜誌即ち女學世界に載せて貰ひたい」これが最後の遺言であつた。されば貞操の文子は余が許を訪れて泣く〳〵物語つたのである。それに引換へ例の理學士は其の後太陽の紫外線に關する論文を提出して博士號を得、更に夫人と共に獨逸へ洋行したとのことである。（終）

衛生顧問

指の長きは身長の延る兆か　問　幼少の時身體の割合に掌や指の長きは後に身長の延びる兆なりと申しますが道理の有ることに候や。（指長女）

答　道理あり。例へば根を眞直に長く地中へ延す松は丈も亦延び、他日聳ゆるの材となり。枝を四方八方に瀰らす藤は其の根亦四方八方に瀰るが如し。されど身長の細長さは孱弱なる體質なれば今より滋養の食物を取りて適度なる運動を怠らず、肉太になる練習あらまほし。

感冒の藥に就いて　問　二歳の男兒感冒にて鼻加答兒を起す折撒曹に臭素曹達を伍用すれば大効ありと申す人も御座いますが果して眞ならば其の分量を御教示下され。（三重縣梅香女）

答　成程撒曹は感冒の藥にて臭素曹達は鼻加答兒等に多少の効あるけれども、之を二歳の小兒に應用するに至つては危い哉〳〵と申されねばなりませぬ。何となれば撒曹は大人にさへ注意して用ゐぬと大に衰弱する憂があるし、臭素曹達も少なからぬ中毒を来すものであるからである。

盲腸炎の豫防法等　問　輕症盲腸炎に罹り治療を加へ全快致し候へ共二ヶ月後少しく走り候處又々痛みを感じ候何卒この豫防法及び養生法を御教へ下され。（京都の鶴子）

答〔第一〕は安靜である。たとひ全快しても半年乃至一年は重い物を持つたり、或は走つたりするが如き過勞を避ければならぬ。〔第二〕便通の注意である。若し便秘の傾ある時は醫師に就て診療を乞ふが肝心である。〔第三〕可成固形の食物を近づけるが宜い〔第四〕感冒に罹らぬやう注意せればならぬ、感冒より本病を惹き起すことがある。〔第五〕入浴を怠つてはならぬ。入浴は身體を安靜にして居られればならぬ場合には特に必要である。先づ豫防法養生法は大抵右の五ケ條に含まれてゐる。

白粉ニキビの療法

問 幼少の頃より白粉を注けし爲か顔面に「白粉ニキビ」とか申す黑い小さな塊が出來困り居り候、右全治法は之れなくや。（滋賀の浦白椽）

答 鉛分を含んだる白粉を塗けるとさうなるものだ。されば今後成るべく白粉を塗けぬ方が善いのだけれども、尤も塗けるならば無鉛の上等を擇ばねばなりませぬ。兎に角療法はペルツ水を塗け給へペルツ水は藥屋に賣つてをるけれど念の爲にその製法を申せば、

蒸餾水百五十瓦
苛性加里一瓦　グリスリン二瓦
アルコール二十瓦　ベルガモツト油二滴

右の五藥を混合したものである。

色は白くなるものか

問 内用外用の藥何れにもせよ、色を白くすることの出來るものか、お聞かせ下され。（美作の醫案）

答 色の白い黑いは表皮の底にある色素の濃いと淡いとに依るもので此の部へ人工的に或る色素即ち入墨すると却々容易に除れぬものである。されば人工的ならぬ自然の色素を除かうといふことは六かしい譯ではありませぬか。

顔色を美ならしむる法

問 私は食物には隨分注意し成るべく營養物を擇んで取り、其の上牛乳も一合宛は飲み眠りも十時間致し顔は毎朝クラブ洗粉で洗ひ白粉は御園のみを用ひ、且又硼酸で洗つたこともあるしペルツ水も塗けましたこともあれど顔色は常に惡くて「はたり」の樣な物が出來て困ります何卒顔色の善くなる法を敎へ下され。（業晦の梅香）

答 この種類の質問は毎月甚だ多けれど左に余が理想的の美顔術を述べて見ませう。

▲理想的の美顔論

○○○○○○○ 前述の如く色を白くすることは困難なる法として先づ之を省き、唯活々としたる顔色になることに就て申しませう。それに就ては〔第一〕自然を尊ばねばならぬ。自然とは如何、人は先天的の病氣あるに非ざる限りは美しい顔色を受けて來たのであるから之を保存するやうに工夫することが必要だ、退いて更に一考したまへ、人生れながらにして、面皰あるでもなければ痘痕のある譯でもない、實に淸淨無垢の者である。この理を知らば決して人工的の美即ち白粉を塗るとか、紅をつけるとかは宜しくないことが了りませう、〔第二〕身體を健全にするのである。身體を健全にすれば血液の循環

整ひ、從つて顏色は赤くもならなければ蒼白くもならず、頰の肉も瘦せこけず又太り過ぎもせぬ、實に中庸を得て花々しくなるのだ。〔第三〕精神の爽快が肝要である。精神が常に鬱々として居れば其の相好の悪くなる顏色も自然悪くなつて艶を失ふし、何時も怒つてばかり居れば其の相好の悪くなるは誰も善く知ることであらう。〔第四〕淸潔は美の基である。西洋の諺に「水は天然の化粧水なり」といふことがある。卽ち度々水を用ひて洗へば啻に皮膚の垢が除れるのみならず、天然の皮脂は十分に分泌して艶を善くし凡ての皮膚病も起り難い道理である。朝一度禁厭的に洗つた外、塵埃の巷を歩いて來ても或は汗がタラ〳〵流れた後であらうとも、更に氣にも留めずに一日を過すやうでは決して美しくなる道理は無い、湯屋奉公する女は其の始め來た時に醜くかつたにも拘らず、中年も經つと其の容貌が大に美化するは誰も認むる所であらう。

右は大體の理論であるが、之を約言すれば、

(1)皮膚病ある外は藥的の物を塗らぬ事。

(2)太陽の直射は宜しくないけれども戶外運動をすべき事。

(3)朝起は顏色を善くするものである。

(4)精神を美しくせよ。

(5)淸潔は美の基。

(6)睡眠の不足は固より悪いがさりとて八時間以上の睡眠は宜しからず。

(7)間食をせぬ事。

(8)餘り劇しき寒風及び極暑の光線は之を避くるが宜い。

(9)酒類の飮用は赤鼻などを招くの基である。

(10)便秘月經の不調は直に顏色を悪くするものである。

【夢見寢言を止むる法】
問　身體健全なるにも拘らず、每夜夢を見、且つ寢言を言ふ癖あり、何卒その療法を敎へ下され。（大阪の初何女）

答　夢を見たり寢言を言つたりするのは幾分精神が働いてるので、眞の熟睡では無い。眞に熟睡すれば決して然ることの無いものだ。熟睡する法は臨臥に運動して入湯若くは腰湯をなし、寢床に入つてから、兩手の指で、一二三四……と數を數へながら眠れば、無念無想の境に入るものである。若し又御經の如きものを暗誦してる人ならば、之を讀めば最も妙である。

▲（和歌山縣うぶ石女）に答ふ――前答の如くせられよ。便通も宜くなれば夢も見ませぬ。

【脣の乾くを治す法】
問　每年十一月頃より四月頃まで朝起ると、脣が乾き、笑へば出血致す位に候、その療法を敎へ下され。（京都府二十六歲女）

答　察するに炭酸瓦斯を吸はるゝからでせう、例へば敷炬燵をするとか、左も無くば夜具を以て口を被ひ、自分の呼氣を吸ふやうなものである。果して然らば之を愼まれよ。治ること妙なり。



父と話ができぬ子供

小夜子

―妊娠中の注意―

妊娠中に美人の肖像畫を毎日見て居ると、其生れる兒は美しい顔をしてゐると云ふ事は、世間の人も言へば、又醫師などにも言ふ者があります。其反對に妊娠中に、感情を度々刺激すると直に嬰兒に惡い影響を及ぼすと云ふ事は明らかな事實ですから、妊娠中は十分注意して心身の安靜をたもたねばなりません。

次に述ぶる事實は母の妊娠中に起りし事柄が胎兒に及ぼす影響の如何に大なるものであるかを示す一例であります。

米國中で最も牧畜の盛な「モンタナ」地方に、今や醫師、哲學者、科學者の大なる注目をひいて居る六歳の童兒が居ります。

此兒は、四肢は克く發育して居るし、内臓の器官にも異狀はなく。身體には先づ申分がありません。顔や容姿は非常に愛らしく、元氣も却々盛です。此小兒が不思議な事には、外の人には克く話をするが、父の前に出ると、啞者と同樣で、一言も言へなくなつて了うのです。

如何に言聞しても、賞品で釣つて見ても、鞭で打つても少しも効果がない。此小兒をして父に口をきかしめる爲に色々手段をつくして見たが孰れも駄目でした。今迄父が此兒を酷い目に合はせたと言ふのでもなく、又さう云ふ風にせよと敎唆するものがあるのでもありません。此小兒は只だ彼のダルウイン氏が進化の說を證明するために此世に生れたものかの如うに科學者の前に立つて居るのであます。

此小兒の名はハアレー、マルチンと言つて、モンタナのカスター郡に住むヂヨーヂ、エム、マルチンと言ふ人の子息である。其の家庭の有樣を聞くに、此小兒の出生に先立つ六ヶ月、即ち妊娠四ヶ月目に、母は或

るつまらぬ事から夫と口論して、怒が嵩じて「ヒステリー」の樣な狀態となり、夫にはもう一生口はきかぬと迄言放つた事があります。此の口論がある迄は、マルチン氏の家庭は非常に平和で、近所の賞讃物と成つて居たが、此れ以後は誠に情ない狀態に陷りました。

勿論、マルチン氏は、其の寛大な思慮に訴へて、自ら屈して妻に詫を爲し、舊の平和に引戻さうとしたが、妻君は之を聞入れないで、子兒が生れる迄六ケ月間と云ふものはとう〳〵一言も夫と口をきかなかつたと云ふ。然し小兒が生れると流石の妻君も、自分の行を心からわびて、再び故舊の夫婦仲に返りました。子兒の出生は實に長い暴風雨の後に暖かい日光を見る樣に樂しい平和をマルチン氏の家庭に齎らした。而して夫婦は子兒の將來に付いて色々計圖を立てた。先づ男兒であるから、成長の後は父の職を繼がせて牧畜者に成し、自分で廣大な地面を所有し、幾萬の家畜を養ふ事の出來る樣に今から十分用意して置かうと、しば〳〵夫婦で語合ひました。

やがて、床の上を匍匐る樣になり、譯の分らぬ聲を出す程になりました、父が嬰兒を空中に投上げてふうわり受けると、嬰兒はキャッ〳〵と悅しさうな叫聲を出す。すると夫婦は嬰兒は大膽だと他人に話して、自慢の種にして居りました。

それから、よち〳〵步行をやる。意味不通の言を云ふ。而して手を引いてやるのは父であるが、父に其兒の言葉が分らないので、兒が何か言ひたさうにすると、父は何時も母の助をかりて通譯させた。

此時は此事に付いて別段深い考ももたずに居たが、やがて小兒の步みが確實になり、發音が明了に成つて來た時、始めて此嬰兒の奇妙な性質を發見したのです。此小兒は、嬰兒の時分のやうに、母には常に克く話すが、父が橫から來て、笑ひ興じて居る小兒を抱上げて、何か言葉を掛けて貰はうと思ふと、それつきり子兒は沈默つて了ふ。

別に小兒の顏には父を厭がる、恐れると云ふ樣な色も見えぬが、其唇は固く閉ぢて了ふ。他人には克く

話すが、父に向つては恰で啞者の樣になる。此時若し母が言葉を掛けると、子兒は亦にこにこして返答する。

マルチン氏は小兒が斯く自分に物を言はぬ事について、何物かゞ小兒の舌を無理に押へて居るものとは考へないで、世間の小兒は斯くして父に遠かり段々母に親しむものかと嫉ましく思ひ乍らも又月日の經つ中に



人情の薄さは下宿の主婦のみかは、朝な朝なの味噌汁は水のやう
細かに見れば天井裏の節穴も映つてゐる。

は此事も無くなるだらうとも思ひ、僅に慰めて居たがこは全く空望でした小兒は何程經つても依然として父には物を言はぬ。

去れば心を痛めたのは父ばかりではありません。母も種々計略をめぐらし、時には小兒と共に窓から、父の歸宅つて來るのを見ながら、

『坊や、ほら彼處からパパが歸つて來るだらう、さあ、

「パパ御歸へんなさいと言つて御覽、ママが甘しい御菓子を上げるから」と言ふと、小兒はすなほに點頭いて、戸を開けて駈出して行くが、今やパパと言ふ頃になると、ぱつたり立止つて沈默つて了ふ。自分も言はう／＼と苦しむで居る樣子だが、どうしてもパパの一言が口から出ません。

母は、ひよつとしたら小兒がわざと此樣な事をするのぢやなからうかとも考へて、スパルタの母の氣になつて、鞭を以て小兒に物を言はせうとする、もし御父樣が歸つて來た時に物を言はなかつたら、此の鞭で打つよと小兒に言ふ。小兒は痛い鞭よりも甘い菓子の方が宜いから、自分も其積で居るが、其場になると矢張り駄目である。

で、小兒は母に鞭うたれる間は無言で温和しくして居るが、父が外出すると母に向つて、涙を流して、自分は父に物を言はう／＼と思つてゐるが何うしても舌が動かぬと訴へる。

母はいぢらしさに再び鞭を用ゐなかつたが、扨てつく／＼其原因を考へて過去の姙娠中の事に及ぶと、あれがと思はれる事が確にあつたので、母は涙を流して悔ゐた。

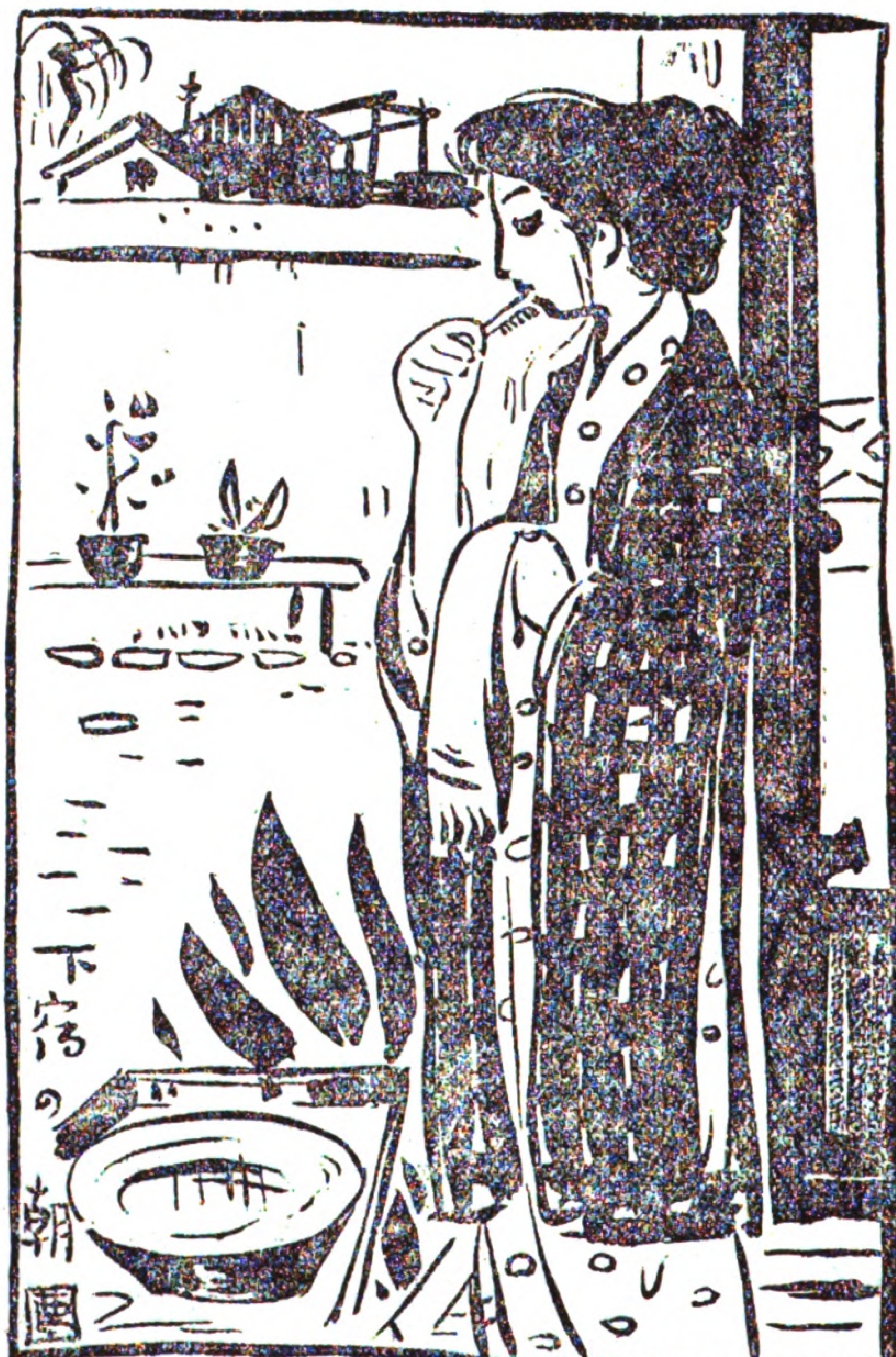
あゝ小兒に父の前で無言と云ふ遺傳を與たのは母であります。母は大なる罰を被けたが、父の後悔も一方でない。よし愛情は充分とは言へ、自分の前で口をきかぬやうにしたのは、妻の姙娠中に、つまらぬ事を言張つたからであると思つては、世に身もあられぬ悲嘆の涙にむせびました。父と兒との間には互に意志を通ずる事が出來ぬとすれば、小兒は何うしても母のみに傾むく筈であると思ふて、最愛の妻を憎らしくも思ひました。

此事何時しか世間に知れ渡つて、男は深くマルチン氏に同情して、其妻君を非難した。

數人の醫師は此小兒の身體を檢査したが、身體は勿論、精神にも何等の異狀を見なかつた。科學者は此子に深き注意を拂ふ樣になつて來た。

ダルウイン氏とワッレース氏は進化論に於ける二大

代表者ですが、二人の意見は根本的に違つて居ります。
ダルウイン氏は、母親は元來の性質、偏癖、習慣のみならず、ただ其姙娠中のみ又は子兒の誕生前少しの間のみ存在した性質、偏癖、習慣等をも十分小兒に傳へる者だと言つてゐるが、ワツレース氏は之に反して、其樣な少時日の間だけの性質等は小兒に傳へるもので無い、兩親は自分が持つて生れた丈の性質、偏癖、習慣より外傳へる事は能ぬと言ふて居ります。けれ共右ハアレー、マルチンの例で見ると「ダルウイン」氏の說は正しく勝利を得たのであります。



醫師や看護婦の秘密帖には此れに似た例が澤山に書いてあるさうである。又彼のオリバー博士の著した小說エルシー、ヴエンナにも斯る事柄を仕組んであります。
此小說の主人公は、觸れる男を皆迷はして了ふと言

ふ一美少女ですが、此女は特別な波狀をなす蛇の如な眼を持ち、其風采は優美で、而して未だ曾て自分の咽喉を露はした事がない。何故か知らぬが常に頸の廻に妙な編方の金鎖を纏つて、寢る時にでも放さない。或時此少女がふと自分の通學する學校の一教師を戀したが、其れは片戀であつたので、一方ならず悲嘆に沈む。けれど父は其樣な事とは知らずに近頃は樣子がちと可怪しい位に思つて居りました。所が或朝少女は寢床の上に冷たくなつて死んで居る。で乳母は葬式のために少女の屍を裝ふと思ふて、其頸から彼の金鎖を何心なく取外すと、何事ぞ、乳母と父とより外知らぬ此少女の頸にあつた生れたてからの蛇のうづまいた證が消て居る。此少女の母は、此少女の生るゝ數月前に、蛇に咬まれて、此少女を生落すと共に死んだのであります。

右は其の小說の概略ですが、世間で評判する所によれば、これは「オリバー」博士の實見が骨子に成つて居るのだと云ふ事です。

オリバー博士は之を否定するけれど、博士はダルウイン氏と同樣に、姙娠中の如き短期中の母の心的變化と雖も、生れる小兒に大なる影響を與へると信じて居る人ですから、之は何か根據があつて書いたものに相違ありません。

兎に角、此の一美少女は先の小兒ハーレー、マルチンと共に、ダルウイン、オリバー二大博士の所說の悲酸なる證明者、或は其の犧牲として此世に現れ來つたものと見えます。

此は孰れも極端な例であるが、之に依て姙娠中の安靜が如何に大切であるかゞ分ります。僅かの感情を抑へる事が出來なかつたために、小兒に此不幸を與へるやうに成つたと云ふのは、實に恐るべき事であります。





家庭の不和を嘆く女へ

女徐福

一家百年の大計は家族の和合にあり。他の萬事は一家治りての上の細目にして、家内に風波立てば家政治らず經濟上にも損失多し。姑と衝突し、夫の愛を失ひ、或は家族の怨みを買ひ、親戚に憎まるゝ等の事ありては、紛紜の種と成り日に月に枝葉を生じ、口論の花咲いて、其結果は離縁となるの外あらじ。

凡そ他と衝突するは双方共に危きなり。柳に雪折れなく、獨り相撲はとられず。一方忍耐力つよくいかに突懸られても柳に風と受流して克己の二字を守り居れば、紛紜とはならず。

△睨み合ひては容易に解けず

姑と嫁の衝突。昔堅氣の姑と、女學生上りの嫁とは其言葉からして異なれり。女學生の言は、漢語洋語に一種學生間の流行語さへ交れば、古風なる耳には悉く生意氣に聞え、其態度又禮節にとぼしければ、行儀正しき昔人には疎暴傲慢とも見えん。之を時代違ひ時勢のしからしむるなりと見ゆるし聽ながすは、餘程學力ある歟、又は何も得せず知らざるお心好かの兩極端にあらずんば得べからず。而かも前者は稀なれば、普通は後者と心得て嫁の方から衝突せざる樣に愼むべし。事の是非を論せず、曲げて從はざれば治る物にあらず。小學校にて理のある處は長上に向ひても論せよとをしゆ。男兒には或はよからむ。女兒には無益有害なり。

姑が嫁を生意氣疎暴と思ふと同時に、嫁は又姑の詞も擧動も見馴ず聞つけぬ事多くて、異樣に感じ小六ッかし面倒なりと思ふ矢先に、嫁が當世の事をいへば、姑は其意味解かねて動すれば誤解するゆへ、嫁たる者は舊弊人共に語るに足らずと輕蔑る心を生じ、言に出さぬも顏色擧動に顯れて忽ち姑に反響し、奴婦學問

を鼻に掛て孝を以て仕ふべき義母を愚弄すと憎しみを生ぜしむるに至る。夫婦間は時にいさかひても一夜に和解する事あれど、姑と嫁の間にては、一度睨みあひては容易に解けぬものなり。

△姑も悪いが嫁にも罪あり

凡そ女學生の卒業近くなれば、各々心中に理想の夫ありて種々の空想にふけり、吾一家の主婦とならば何某の如き家にすまはむ、座敷の装飾は何々を配置し、庭には何を栽培し、便室は斯々せむ、厨房は云々、而して日曜には夫と手を携へて出遊し、或は同窓の友を會して何々の遊技を試むべし等と、恰も現在に其事定りて何日の後にあるが如く、空中に蜃氣樓を畵き樂しきホームを夢見つゝ在りと雖、扨學校を卒業し、父母の選ぶ處に従ひ、豫て理想の如き夫とは思はれねど、それも是非なしと負て嫁したるに、前に空想したるとは大違にて、斯く爲むと思ひし事何くれと故障ありて一もならず、する事爲すこと失敗多く、小言をいはれ笑はれてくやしき事のみ打續き、ツイ學校にては云々といへば、ダカラ生意氣なりと頭碎に叱られ、樂しい處か苦しくてならず。夫はさすがに然迄ならぬも、姑は日に増し意地わるくなり、終に堪兼て實父母に泣附きて離縁談となる。十中八九は皆斯如し。されど是は姑ばかりが意地惡きに非ずして嫁も又罪あり。思慮足らず忍耐力を欠くより爰に至るなり。

△斯の如くして姑を導け

姑に縁を求むるに皆姑小姑なきを願はざるはなし。然るに縁は異な物にて、長し短し思はしからで、終に姑はおろか義子迄あるにも道理を附てゆく人も皆無にあらず。佛者のいはゆる因縁なるべし。

されば今爰に舊弊極る姑のある家に嫁すると假定して其心得をいはむに、先づ我身の運命は茲にさだまれるものと悟り、如何なる苦難ありとも初志をかへずと堅くとつてうごかざれば、自然と耐忍力強く成り、姑の舊弊なるは文化の洽からぬ世に生れて學事に就かし

められざりし故なればお氣の毒なりと、深く同情をよせて、折々今の事の不解して他に笑はれ給ふは子として見るに忍びず、いかで吾おぎなひ扶けて文明にみちびきたてまつらむとの孝心を以ていさゝかも冷笑の語氣を交へず、親切叮嚀に通譯の勞を取れば、其誠意姑に通じて生意氣とは聞こえず、悦ばるべし。



△畑水練は實地に用ゐ難し

扨て家政の事は其家風を知らねば能ぬとなれば、萬事姑の旨をうかゞひて其指圖に從ひ、今迄學びし處はホンの大本のみ、實地は少しも經驗なき身なり、机上の空論畑水練は實地に存外の差ひありて、其儘にては用ゐ難きものなる事をわきまへて、姑は勿論下婢たりとも熟練のものならば萬事を問ふて事

を行ふべし。

家政は事多端にして何々と數へ切らるゝ物に非ず。學校には縱五年七年一日も缺ず學びたりとて竭さるゝにあらぬを、況んや一週一二回一時間やそこらに何程の事をか知り得べき。其上敎科書の上のみなり。料理は實地なれど、是とてやはり雛形たるに過ぎず。學校と家庭とはすべての程度大差あり。理屈は其とほりに違ひなくても、種々のじぢやうありて然は出來ぬこと多し。其學べる處を基として今日の事に折衷し利用するにあらざれば失敗は免れ難き也。

△うまく演て見せむの心掛

然るを慮かり爰に至らずして、二ッ目には學校流を持出し、理論を武器として押とほさむとするとも、姑は母位にあり。一家中の長上なり。論に勝たりとて、勢力には負ざるを得ず。いづれ敗に定りたるをあらそふは愚なり。新婦たる者は姑夫は勿論家族に迄も負て、唯己の心にのみ克を以て智とす。たとひ今日かやうの事はと心中馬鹿々々しくても、姑の命令とあらば他威は嗤ふとも何の憚る處かあらむ。些も辭せず違へず行ふべし。心ある人は其從順を感じて譽こそすれ、決して我恥にはならず。嘗て學校に在りし日、活人畫喜劇等を演じたるときのこゝろもちとなり。目前のよき模型なる姑の言語態度を一心不亂にまねるべし。演劇氣に成りさへすれば此事決して憂くも辛くもなく、却而おもしろき心さへ生じて、一番うまく演て見せむと技倆をふるつて舊幕時代の婦人に扮澄せば、觀客たる姑を始め、家族の喝采を得て、不思議にも母堂によく似てゐらしやるは全く御緣のあるしるしと褒そやし、姑も宅の嫁は今日のむすめに似氣なく温順い者で、吾もしあはせなりと人毎に吹聽し、家内つねに春の如く花笑ひ鳥うたふ樂しき家庭たるべきなり。

△破鏡の夫は斯の如く言ふ

夫婦の不和合。夫婦は元合せ物なれば時にはなるゝ事あり。良工の作れる器も其取あつかひ手荒く不注意

なればはやく破損するが如し。破鏡の夫にきけば曰く彼女ほど不興者はなし、いつも佛頂面をして夫の機嫌をとる事を知らず、何を爲せても不器用で、來客に一寸酒をといへば大層にぐわたく〳〵と音をさせて長時間俟せ、度々催促してやッと持出した物は不味くて喫はれず、友人に面目を失はしむ、故に不經濟とは知り乍も他へ連て出て酌む、スルト思はぬ人と出會し、つい他へ誘



はれて、今から歸宅すれば又膨面を見ねばならぬと思へば、厭に成て漫其方へ足が向くものなり。又緊要なる調査ありて在宅し一生懸命に書き記して居る處へ今でなくともの事を度々聞に來たり下婢を相手にキャツ〳〵と大聲を發たり、氣の利かぬ事おびただし、附托事はツイ忘れましたで夫に事を缺かせるし、在宅すればむしやくしやと腹のたつ事計り、出張でもすれば

歸るのが嫌になる、つまり彼女は常識にかけたところがある故に離別したりと云ふ。

△里方の苦情

嫁の家にて聞けば曰く、始は至極睦まじく、何でも流行ものは買てくれる、休暇には温泉海水浴にも連て行き、父母も良婿と悦で居ましたが、どうした事か近頃は内を外にして留主番ばかりさせられます、何故かと詰問ますと、稀に在宅の際は氣むづかしくて叱り散す計りなので、怖くて恐る〳〵物を云ても碌に答もして呉ず、自分は書齋に、むすめは便室と、別々に寐る事に極たさうで、承れば外妾とかいふものも出來てゐるさうである。如何なる缺點が我が女にあるかは知れませんが今時の嫁が其樣仕向をされて辛抱するも馬鹿氣た事、世間に男は澤山あり、他に良緣なしとは限らぬ、一年でも若いうちに取戻したがよかろうと、親戚の誰彼も申しますから破鏡させました。

△何故内を外にするか

これを夫に聞けば常識欠乏して主婦たる資格なきが如く、これを嫁の方より聞けば薄情きはまる放蕩家なるが如し。されどこれを世間公平の眼より見て評せんには、十の七八までは婿の不注意にして、テキパキせぬより發れりといはざるを得ず。いかにとならば、始には睦まじかりし夫婦が、寢室を別にし内を外にするに至るは、其嫁の行狀夫の意にかなはざるに起因せずして何ぞや、夫も又妻を教導きて良妻たらしむる事を勉めず、そゞろに他出のみして妻を顧みざるは勿論宜からざる事なれど、凡そ男兒たる者は外に出て事務に鞅掌す、其業の何たるに拘らず終日或は夜に至る迄も拮据勉勵身心ともに疲勞て家に歸るとき、其妻たるもの容態をとゝのへ、顏色をよろこばしくして出迎へ、懇切になぐさめ好む處の食物をすゝめ、其そぶりを見てほつする處をさとり、いはぬさきにはやく其意を滿しめ、かゆき處を掻が如く、あらぬ限りの誠意を

つくして愉快ならしむる時は、男子の心滿足し、一日の勞を忘れて氣力を回復し、翌日も又心勇みて出勤す、殊に旅より歸りし際如斯なれば、アヽ自家わがつま程よき物はなしとの感つよく發して、他をかへりみる心なくなるは人情なり。



いかでか愛想のつきざらむ。常識缺乏といはれても辯解のことばなきにあらずや。抑女は夫の爲にこそ紅粉をよそほひ形容をもとゝのふべき者なれ。外出にのみ美服を着飾りメカシコミて、家に在ては夫の前をもはゞからず取亂し不潔ぶしつけなる容態をして婦たる

之に反して、宴會等に出席して裝飾眼を眩し、美人花の如きを見て歸りし目移りに、其婦よごれあかつきたる衣服をしだらなく着て、四邊は亂雜にとりちらけ、食物はまづく、加之にキガキカズと來ては、夫たる者

の勤務を怠るよりして、夫は愛想をつかし、我家の不愉快なるゆゑにやけをおこし他の女に親しみて悒憤をもらす也。婦たるの本職を怠り、自己の不敏をかへりみずして、夫を薄情放蕩なりと父母に告ぐ。父母も又

女の言を信じて之をそしへいそしむる事なく、却つて離別を乞ふ。かくて又いづくに再縁すとも婦の行狀の改良せざる限りは同じかるべし。女兒を嫁せしむる父母は其衣服調度に焦慮するよりも、舅姑夫に仕へ婦たるの職務をつくすべき事をもつぱらに敎へざるべからず。ゆめ／＼學校を卒業させたればよしと思ふなかれ。

△先づ味方にすべきもの

家族と嫁の不和。係累中にも小姑はもつとも嫁の爲にわづらはしく處しがたし。就中出戻りの姉は自己の不運なるより心僻みて何事に附ても他を嫉むものなり弟妹は又あながちわるきにあらざるも若年の思慮あさく兎角に嫂の事としいへば何を欲と眼を皿にし耳をそばたてて見附け聽出しては面白半分に云ひ囃たがるものなれば、一家の紛紜は小姑の言告より平地に風波を立ること多し。故に鬼千匹といはるゝなり。父母たる人常に克く誡めて其言を採用すべからず。嫁は誰よりも先づ小姑の歡心を買はざるべからず。縱夫の心には十分適ひたりとも、小姑に惡く思はれては、いつしか夫の愛をも失ふに至る。されば決して厭はし氣なるそぶりせず、うちとけて其意を迎へ、其欲する處をさとりて、成るべく歡ばるゝ樣にするが自己の爲なり。係累多き家に嫁したる人は、心を寛大にして吝なるべからず。

凡そ世間の事貴賤となく雜輩の歡心を買ふには惠與を以てちかみちとす。德義道理は君子の事なり。他を味方と欲せば、さる迂遠なるかんがへにて成功するものにあらず。然ば夫の家もしゆたかならずば、父母より女の爲に運動費を送らずんばあるべからず。しかれども又其分相應といふ事肝要なり。餘り始に過分に爲れば後つゞき難く成り、其際貰ひ附たるくせにて不足を云ひ不平を懷きて今迄の費も一朝にしてムダツカイと成了るべし。兎角機を見て處置し其宜を得るの才なくては馬鹿をみる事有るべし。



花に顯はれたる國人の思想

鶴枝生

花といへば美しいものゝ、別體となつてゐますが、中にも梅、櫻、桃、海棠、椿、山吹、藤、躑躅、薔薇、牡丹、芍藥、花菖蒲、百合、蓮、朝顔、桔梗、芙蓉、菊などは、とりわけ美しい方です。さうして同じく花でも國々の風俗により嗜好が一樣でありません。日本人が櫻を好みて日本魂の標章とすれば支那では牡丹を愛して、花の中の王となし、英國では薔薇を以て最も貴い花とみなして居る如く、國々によッて、持囃す花が異ッてゐます。で其國民の嗜好に適した花が、其國の代表花であります。

櫻（日本）

日本は櫻花國で、櫻の花を愛すること他に比類なく大古は花といへば梅のことであッたが、其後櫻は實に我邦の花を代表してゐるのです。夫ゆゑ花の神、木花咲耶姫を祀ッてある所には、大概櫻の樹を植ゑてあります。うらゝかなる春の日、人の心ものどかなるの時雲か霞かと見まがふ櫻の花は、實に天下の美觀で、桃も椿も躑躅も牡丹も比べものになりません。紀貫之が櫻よりまさる花なき花なればあだし草木はものならなくにと詠ひ、櫻に勝さる花はないから、これに比べると、他の草木は物の數でないとまで賞めはやし。又業平が世の中に若し花がなかッたならば、如何の春でも人々の心は、かほどまで陽氣ではありますまいと曰ひ春の風暖かに柳の若葉が綠々としてる其間の花がチラチラ咲き混じッてる所などは、恰るで佐保姫の織ッた錦の樣に思はれます。素性法師の歌に見わたせば柳櫻をこきませて

都ぞ春の錦なりける

とあり、全く其通りです。で爛熳たる花を見ると、花に醉ッて人の心もうか〱して、何となく落付きません。西行法師の歌に

吉野山梢の花を見てしより
心は身にもそはずなりにき

とあり、ほんとうに花の美しさにみとほれると、心は花の方ばかり思ッて體について居らんのです。花は斯の如く優美でさうして高尚でありますが、これがまた日本特有の花で外國にはないのです。否支那や印度などにも、櫻の一種はありますが、花が賤しくて日本の櫻の樣に優美でないのです。それに日本人の氣象が櫻の花の樣にさッぱりしてるので、一層よく似合ひます。本居宣長の歌にある通り日本人の精神、即ち日本心は、どんなものであるかと問ふならば、朝日に咲匂ふ山櫻の花の如く、優美でさうして高潔であると曰ッてよいのです。

牡丹（支那）

支那では、非常に牡丹の花を愛し、國を中華と稱へ花といへば、牡丹のこと、勿論古代蜀の國では、海棠を以て、花の中の最も神仙なるものとしてありましたが、どちらかといふに、國花としては、牡丹の花を推してあります。それゆへ牡丹のことを、別に花王、富貴花、國香、天香、第一香、貴賓などと呼び、洛陽が支那第一の名產地であッたのです。此植物は、もと印度地方の原產で、日本では、聖武天皇の時、支那より傳はり、近頃また西洋諸國へ傳ッて行き中にも寒牡丹は、秋の末に美しい花を開きます。

芍藥は、一にカホヨグサと呼び、牡丹に近き草花で支那では、牡丹に次ぎ愛賞し、牡丹を香國の花王とし芍藥をば花相と稱へ、又醉西施、王瓔珞などと稱へ、楊州を以て、支那第一の產地としてありました。日本にも多くの種類あり、中にも日出世界、染鹿子など上等で、根は牡丹と同じく藥劑に用ゐられます。

蓮（印度）

印度は、熱帯國であるから、蓮に適してゐます。牡丹の富貴菊の隱逸に對して、蓮は君子の風ありといひ、さうして清淨の花とみなし、佛様は、蓮の花の臺に坐わッて居るものといひ傳へ蓮華座と稱へてゐます。それゆへ佛教に熱心なる印度人が蓮花を貴ぶのは當然です。蓮の花には、大きくフックリとして、白色、紅色、薄紅色の三種あります。で臺の狀が蜂の巣に似てるので蜂巣と呼び、後ハスと轉訛したのです。蓮は糞尿の如き不潔物を忌み、泥の中から出るけれども、泥に染まらぬ清潔な花ですから、別に君子花ともいひ、支那には又仙葉淨友、不坭、玉環、などの異名があります。一説に蓮の花は、埃及の國花で、印度の花は罌粟であるといふことも言ひます。蓮には



いろ〳〵な種類があります。金絲蓮は最も珍らしく、紅き花瓣に金色の線があります。大紅蓮は、花が淡紅色で、其直徑五六寸に達して實らないのです。茶碗蓮は、小さくて、盆栽として愛されてゐます。鬼蓮は一に水蕗といひ、ジユンサイやヒツジグサと同じく、圓い葉が水面に浮んでゐます。南亞米利加のアマゾン河に產する一種の鬼蓮は、頗る大くて、花の周りが六尺で、花瓣は長さ七寸に達し、葉の直徑が六尺餘りもあるから、子供は乘つて遊ぶことが出來ます。

薔薇（英國）

薔薇は、歐米諸國一般に賞愛して居りますが、特に英吉利では百花の王としてあります。薔薇は種類多くて西洋では六千種もあるといふことです。中に就て最もありふれてるものは、庚申薔薇といひ、四季に咲くから、支那では月季花、月々紅或は長春と稱へてゐます。薔薇の花は、いづれも美くしく、往々牡丹の如く大花の咲くのがあります。またよい香氣があるので花から香水を採ります、之を薔薇水といつて歐米人に持囃されて居ります

百合（佛國）

百合は、美しく、さうして香氣の高い大きな花を開くので、賞愛されてゐます。百合の花は、六枚の花瓣から成つてる樣であるが、實は三枚の花瓣と、三枚の蕚から成てるのですが、蕚が立派で、花瓣との區別が出來ないのです。斯の如く蕚が變化して、花瓣との區別が出來ないものを、學術上花被といはずして花蓋と稱へてゐるのです。

百合は溫帶から寒帶に產し、熱帶地方には產しないのです。世界では四十何種といふ程あつて亞米利加には最もよく適してゐます。日本も百合に富んでゐて、十二三種はある、其うち山百合は、サヽユリともいひ到る所の山野に生ずる百合で、花白く香氣高く、最も見榮えがあるから、多く外國に輸出するのです。米國などでは日本から輸入した山百合を培養して、大きな

花を咲かせ、品評會や展覽會などを開くさうです。

麝香百合は花が白くて、頗る大きく、長さ五寸位もあつて、香氣が強いので、世界の各地に培養されてあります。

巻丹は、花は紅くて美しいが香氣がない、しかし根が大きいので、畑に培養して料理に用ゐます。此百合は、他の百合と違ひ、夏になると、葉の附根の所に珠芽が出來て、それが地上に落ちて蕃殖するのです。姫百合は、百合類中最も小さくて、可愛らしい赤花が咲きます。



これは都の片ほとりにむさくろしき自炊生活「こわめしが」出來粥が出來、興來れば讀み倦けば食ふ、こゝにも春は訪づれて天窓から櫻がちり、緣側へ出した菜のリボンへ蝶がとまる。

向日葵（露國）

向日葵は、菊類の大きな草で高さ六七尺にのび、秋になると大きな黄色な花を開くが花の直徑七八寸もあり此花が太陽の方に向ッて回轉するといふので、向日葵或に日車又は日輪草と名けらたのですが實は南の方ばかり向いてゐます種子は大きな粒で、炒りて子供の食用となり、或は

鶏の餌となり、又油を搾取ることも出來ます。露西亞は大國だけに此大きな草花を好むとみえます。向日葵に近き植物に菊芋といふのがあります。菊芋は畑に培養して馬鈴薯の如く地下に生ずる塊莖は、專ら食用となります。

雛菊（伊太利）

雛菊は、形小さく、簇生せる數多の葉の間から、二三寸の花梗を出して愛らしき花を開き、白と淡紅とがあるが、又段咲とて段々を爲して二三の花を附けるのもあります。此草は菊と同じく根分けにより繁殖し、冬の間でもよく生長し、早くも一月頃から咲出だし、春を越えて夏の末まで咲き續くので、別に長命菊又はトキシラズと稱へられてゐます。此草は、西洋草で、西洋では「無邪氣」「自然の寵兒」或は「詩人の愛物」などの記號と爲し、詩人などに持囃やされてゐます。此花は伊太利の國花としてあるが、英國人も非常に愛賞して居るさうです。

以上の外、サクソニア國では、木犀草を國花とし、スコットランドでは薊を國花としてゐます。それから花でなくとも、たゞ草木を以て植物の代表としてある國もあります、例へば普魯西國のシナノキ。西班牙の柘榴。北米合衆國の橄欖。北米加奈太のサトウカヘデなどであつて、皆其國人に賞愛されてゐます。次手に其二三の植物をあげてみませう。

菩提樹（獨逸）

シナノキは、菩提樹に近き喬木で、諸國の山に生じ高さ三丈許りで幹の周り一丈位に達し、夏の初め白色の小花を開き、佳い香氣があります此樹は種類多く皮は頗る丈夫で、能く水に堪へるから、綯つて船綱と爲し。或は疊表を織る時の經糸と爲し。織物にも織られるのです。で此樹の皮は、又シノカハともいふ、馬の頸掛けに用ゐ。幹は緻密で柔かであるから、鉛筆の軸や。彫刻に適してゐます。併かも此樹は生長が速いので、多く山地に植ゑられてあります。

柘榴（西班牙）

柘榴は、花によりいろ〳〵の名稱あり。實を結ぶのを實柘榴といひ、八重花で實の結ばないのを花柘榴といひ。姬柘榴は、樹が至つて小さいので專ら盆栽に作られます。一たい柘榴の花は、紅くて、ちよつと他の花の無い入梅中に咲き、さうして長持がするから、見だよりがあります。



また秋になつて果實が熟すと、皮が紅くなつて美事です。故に支那では、朱實、血珠、紅豆頴などの異名がありますが、皆紅といふことが名に附いてゐます。

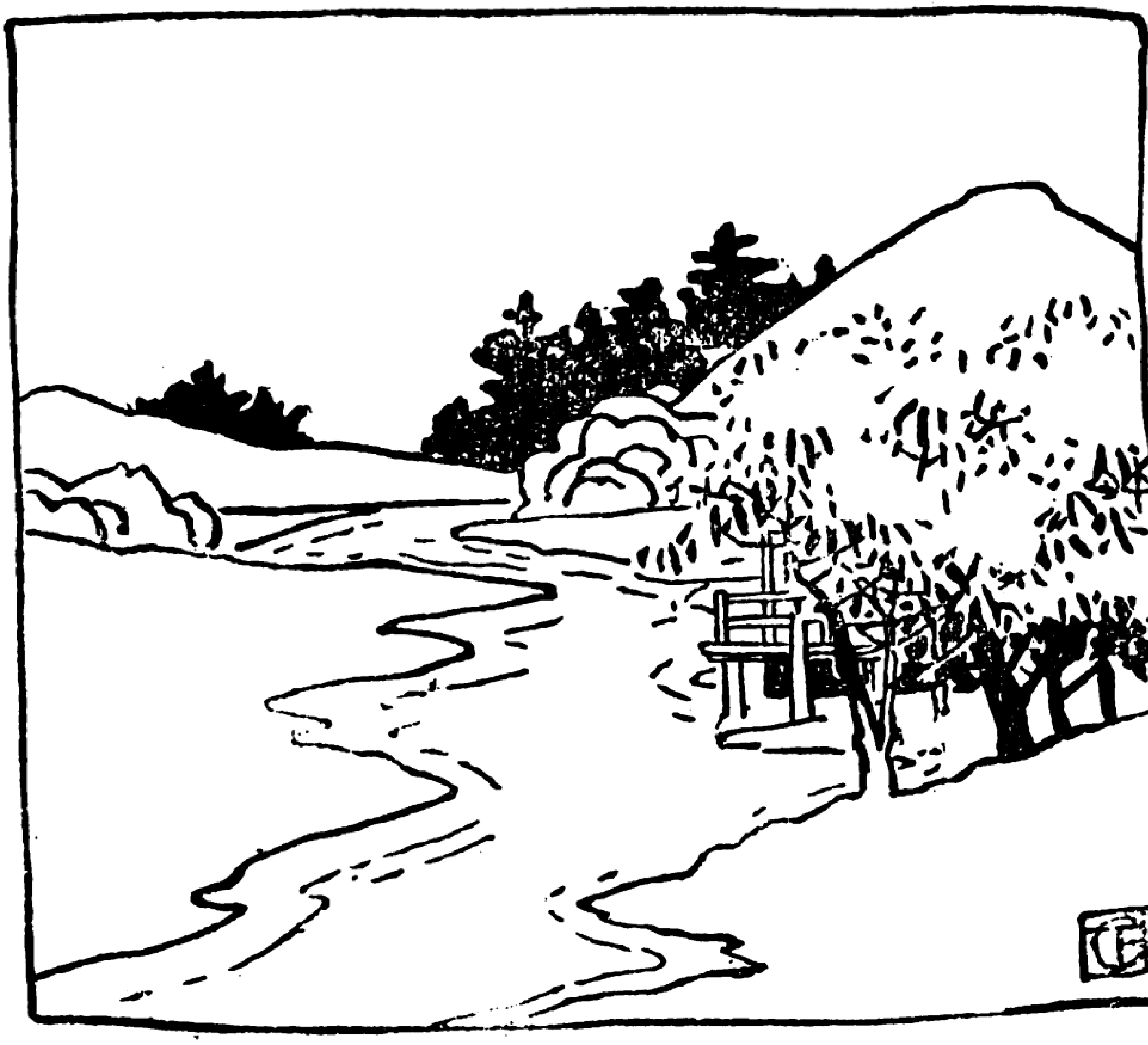
柘榴の果實は味が酸いけれども、水晶柘榴の果實は、味が甘くて食用に適します。花は、觀用の外、紅き染物となり、果實の皮には、單寧といふ澁が多いので、印度では、モロッコ革を染めるに用ゐ、又昔の漢法醫は、柘

榴の根の皮、果實の皮、及び花を藥劑に用ゐたのです此樹は、もと埃及の原產で、西は歐羅巴にひろまり、東は波斯、印度から支那、朝鮮に傳はり、日本には九百年前に、支那から傳つて來たのであります。

橄欖（米國）

我邦で橄欖と呼ぶものに二種あります、一は支那に產する橄欖で、他の一は廣く温帶の各地に培養せらるる『オレーブ』のことであります。此オレーブは木犀、木蠟樹、狗骨など丶同じく、木犀科に屬する樹であります。

橄欖、即ちオレーブは、もと亞細亞の西方に產したのですが、今では歐羅巴の南部から、北米及び濠洲の各地に蕃殖し、年々多くの果實を結び、其果實から搾り取りたる油が、有名なるオレーブで、西洋料理に用ゐるの外、肝油の代用となり、又藥用として皮膚病に効あり、其他染料或は石鹼の原料となり、佛蘭西より最良品を出し、我邦でも神戸から紀州邊に栽培してあるさうです。實用主義の米國人が、斯の如き効用多き植物を愛するのは、素より當然のことであります。





母の會の働き人

みどり子

私が始めて明治母の會へ出席致した時から、いつもお目に懸る一夫人がありました、痩形の背高く、質朴な優しい方で、きまり悪る氣に困つて居る新會員を常に親切に導いて居られました。

私は此人の飾り氣のない、口數の少い言葉のうちに眞の情の籠つて居るのに、家へ歸つても幾度か此夫人を思ひ出し、まだ見ぬ家庭のさまなど想像して、心密かに喜んで居ました、其後私は此夫人について或る友人に話した事がありましたが、友人は至つて外出嫌ひのヒステリー的の女なので、私の言葉がいたく心に障つたのでせう。

「あの人は良人が養子で、若い丈夫なお母さんがあつて家事萬般をやつてゐる、子供達は汚い鼻たらして、下女は云ふ事を聞かず、御亭主がお襁褓の世話をしてそれを妻君平氣の平左でピヤノを彈くと云ふ連中ですよ」と憎さ氣に云つて横を向きました。

それから私の好奇心はおい〱募つて、私の豫想と友の想像と孰らが當るかを確めたいと思ひました、恰度一昨年の夏の初め頃、母の會の歸りがけに中央會堂の門を出る時、そつと此夫人の袖を曳いて、

「あなたの旦那樣は」と小聲に聞きますと。

「えヱ宅ですか、晝は忙しくて留守がちで御座いますけれど、晩は大概居りますよ、なんならお遊びに來らつしやいな御紹介しますから」

「難有う、どんな方で被入るの……」

「さうねヱ、甚麼つて云はれないけれど、基督信者ですから私共にも親切にしてくれますの」

其では矢張りあのお襁褓の連中かと私の心は冷りとした。

「お優しい、ハイカラの方?」

「いゝえ至つて蠻カラで、頑固な人で御座ひます」よく皆さんが私共の夫婦をソマトーゼの廣告のやうだとお笑ひなさいますの、私は痩せて青いから呑まぬ人宅は恰度呑みし人よオホヽヽヽヽ。」

「それでは肥つた赤い方ね」肥へふとつて油ぎつた人は精力が強くて、妻君に敷かれるやうな人ではない、私は自分の考へが當つたやうで、嬉しかつた。

二三日過ぎて、私は遂にその夫人を訪ねました。家はキリスタン坂下の冠木門のある奥ゆかしい構へでした、私は恐る〳〵敷石の上を歩むで、

「御免下さい」と聲をかけた時には、恥しくてはッと上氣しました。

是迄人を訪ぬる段に、一番心苦しいのは玄關前で、三度四度七八度聲を掛けても、呼鈴を引いても取次は出ない、時としては聲の枯れる程呼び枯らした頃、田舍出の武骨な女中が、

「何ですか」と口を尖らす、「奥樣は」と云ふと被居ひます、やれ嬉しやと、息をつく間に引返して來て姓名を聞く、奥へ行つたと思ふと、また來て用向を尋ねる、其間に子供は泣く、はしたない話は聞へる、時にはあられもない家庭の秘密まで見へ透くやうで、立派な玄關も、美き夫人も、糞土の如く思はるゝ時がある、此日も豫め之を恐れて居ました、併し事は意外でした。私が一聲おとのふた時、

「はい」とやさしく答へて玄關障子を開けた人がある、見ると豫想したお三どんではありませんでした。

「まア、よく來らしつてね、さアお上りなさい、」夫人は紺絣に白の前垂れ胸高にしめた、かい〳〵しき世話女房の姿でした。

寢室であらう、葭戸の間に寢臺のほの見ゆる、北向きの部屋の前を通つて、次の室へ行くと八疊の間に段通が敷かれて、椅子と卓子とが置いてある、床には華山の軸が掛けられ、違ひ棚には百科全書が積み重ねられて、オルガンが一臺此方の隅に据えてある。

「どうぞお掛けなさつて」と椅子を勸められましたが、

「いつそ此方へ來らしつて頂戴な」と、直にまた次の

六疊へ導かれました、此所は夫人の居間でせう、縁の隅にはミシンが置かれて、室には大きな姿見がある、額は唐筆の六ケ敷い字で私には讀まれない、西と南は庭に面して、大な楓が軒を蔽ひ池の彼方の東屋を隠して居ます、茗荷谷の高地を其儘築山として、樹木が靑々と茂つた中を白糸を引ひたやうに小川が流れて落ちる。



日曜日の朝

春日和の朝日が、麗らかに障子を照らす、縁側に腰をかけて「お姉様まだなの！」と妹の時ちやんが、自烈つたさうに呼ぶ。今日植物園へ遊びにゆくので、時ちやんはもうちやんとお化粧が出來て、姉樣が仕度するのを待つてゐる。障子の内に、品のいい島田に結つた姉の妙子は、帶止の金具をパチンと白い手ではめて「お待遠でした、さつ、もういゝの」としんなりと縁側へ現はれる。姉樣の帶は、オリーブと白の刺繍のある牡丹色。「お立ち！」と小間使が玄關へ通じる。

「何とよい、景色でせう」、と私は思はず云つた、私の心には庭といふ狭い範圍を越へて、自然の景光に接するやうな感じがしたのでムいます。

「たゞ廣いばかりで、宅は餘り作るのを嫌いだもんですからね まるで山奥みたやうですは」

私は豫て此夫人の天眞爛熳なのを欣慕して居ましたが、今また其良人の自然を樂しむ人である事を知りました、さうして此家庭の内には自然の光

の融和して居る事を感じました。
「今日は女中を遊びに出しましたの、それで私がお菓子を燒いたことで御座ひましたよ」大きな菓子皿にうまさうなかすていらが盛られてある。
「始終お家でなさるのですか？」
「女中に敎へましたら、此頃では上手にいたしますの」
私は母が私のために團子お燒をこしらへて、學校の歸りを待つて居た事を考へ出した。
「被入いよ」と夫人の聲に應じて拾歳位を頭に男女の子供が顯れる、何れも洋服姿の可愛らしい子供です、私は重荷を下したやうで嬉しくほッと息をつきました。
「お祖母樣は」と愛らしいお下げの孃さんに聲くと、
「御座いませんのよ祖父はありますけれど」と夫人が代つて答へられた」
「こんなお小いお子さんがおありなさつて、よくお出かけが出來ますね」と申しますと、
「女中が長く居りますからね」
「お召物は」
「私が調製ますの、子供には洋服が輕くてよいやうですから、碌なことは出來ませんけれど、今もこれをね」と側にあつた白い布を私に示される、見れば縮の可愛らしい夏服でした。
「六ケ敷いでせうね」と申すと、
「あなたもなさつて御覽なさいよ、譯はありませんわ、此はみんな母の會の型ですよ」
私は始めて參つたことも忘れて、無遠慮にも菓子を喰べました。此後私は此家を訪ふのを唯一の樂しみとして居ます。
母の會で英語の幼稚園が設けられてからこの夫人は助手として事業の大半を擔はれて居ます。
丁度昨年の暮でした、師走の忙はしい中を母の會の會計、幼稚園の學業報告、クリスマスの準備、と種々な事務を一人脊負つて、しかも悠々事を處して居られる、私はその都度只感心するばかりで、
「あなた、どうして手が廻りますの」

「なに、誰だつてしやうと思へば出來ますよ、一生懸命働いた後は善い心持ですね」

「私だつて働くつもりですけれど」

「あなたは、考へて居る時間が長いのですよ、私は忙しいから其麼暇はありませんね、朝起ると今日は幼稚園へ行かうからと思つて一心に家事を致します、歸ると翌日の用意や、子供の世話をして、水曜と木曜の夜は祈禱會に參ります、日曜日には教會へ行く、これでも子供の春着の手入れをして、餘所のお子さんの服も縫つて上げましたの、私はそれで取越苦勞や、心配をして心を痛めて居る隙がなく、始終身體を動かして居るので瘦ては居ますけれども丈夫ですよ、此は神樣が働くものに被下る贈物ですねホヽヽ」と氣樂さうに笑つて居られた。

私は日本婦人が神經過敏で、家庭が何となく陰氣臭く、中流以上にはヒステリー患者の多い事を聞いて居ます、私は嘗て之を或る醫學博士に伺ひますと、博士は笑つて、婦人達が火鉢の側へ坐り込むで、着物や頭のお裝りに氣を揉んでる間に、盛んに洗濯や張物でもして、日光浴をしながら働いたならば婦人病の大半は癒つて仕舞ふ――と言はれた。

私はしば〳〵樂し氣に家族相携へて旅行をしたり、散步したりする彼の婦人を見ました。知る人も皆々スヰートホームの主婦たる彼の女の幸福を羨で居ります併し私は密かに思ふて居ます、彼の如き家庭はその春風の如き、優しく快活なる彼女の性情によりて生るるのであらうと。彼女が無邪氣な麗しい性情は、人の爲め家の爲めに喜んで事に從ふその善行を愛でゝ、神の給ひし大なる賜物であらうと。彼女の良人は某銀行の重役です。



どんな着物が身に合ふか

東京勧業協會染織部　倉辻要五郎

◎顔色と衣服

衣服は實用の外に身に釣り合ふといふ事が肝要ですが、それに就ては、色と柄、期節、場所並びに光線の作用なども具さに研究して美術趣味を加へなければなりませぬが、また衣服の擇び方に就て最も肝腎なのは色合と柄です、それを定めるには第一に顔の色と相談しなくてはなりませぬ、何れも口には言ふものゝ、さて眼に映る美しい物を見ると直に生來の顔色の方を忘れて了ひます、即ち今牡丹が流行れば牡丹色に、赤豆が流行れば赤豆色にといつたやうにツマリ流行の色に酔はされてしまつて、注文の目的を紛失するのが一般の習ひです、一體顔の色には淺黑いのもあれば赭味の勝つたのもあり、普通肉色と云ふのもあれば凄いほど蒼白い者もあります、それから顔ばかりでなく頭髪も大いに關係があります、まづ黑いのが普通ですが中には赤毛もあれば西洋流の薄色のもあつて是等が皆な顔や衣服の色に關係して引立てたり毀したりするので厶います、そこで各自の顔の色にはドンな色合が調和するかと申すと、それは百人百色で、四季の氣候にもよれば晝と夜との光線の差別もあり、又着る人の年齢や背丈の長短、肥瘦等によつてそれ〳〵異いますけれども大體に於て、夏は明るい色冬は暗い色これが色彩學上の原則で、總ての配合は此點から割出さねばなりませぬさうかと云つて晝は明いから白い衣服、夜は暗いから黑い衣裳を着るものと早合點されては困ります。早く言へば色の白い人は華やかで、パッとした色、黑い人は沈んでしつとりとした色、又若い人なら夏の如く活活した色、老人なら冬のやうに寂しく質素な色といふやうにするのが大體の心持です、更にこれを詳しく説明致すと、

色の白い人には、

赤、桃色、濃紫、梅鼠、海老茶の如き色が適し、赭味がゝつた人又は淺黑い人にはオレンヂ、淺黃、水色、

淺綠、薄鼠の如き成べく薄色の方が上品です。
色の黒い人なら、
紫紺、オリーブ、濃葡萄、花色、鐵色、濃茶の如き落着いた色が調和します。
但し濃紫のやうな強い色は顏色の淺黒い人には禁物でそれに就て面白い話があります。

◎鏡と相談の色合ひ

先達て私が芝居に參りましたところが、目も覺る樣な紫縮緬の羽織を着た高島田の婦人の後姿を見ました、後姿でさへ彼ですから、前から見たら甚麽に良いでせうかと想像致した甲斐もなく、前面から拜見致すと存外見榮えが爲ませんでした、さうかと申して決して不美人ではムいません、何方かと申すと容貌は好いどうも不思議だと思ひまして幕毎に立つ姿を凝と見極めて、はじめてその顏の色が淺黒い爲に紫の着物と調合はないのだといふ事が解りました、妙齡の處女さんでさへ些しの顏色の加減でかうですから一概に流行の色を着るのは大きに間違つた譯だと存じます。

然るに厄介な事には何人に限らず多少自惚と申しては失禮ですが、他目で思ふほど自分の顏色は解らぬもので折角大枚の金錢を奮んで却て容貌の調和を損ずる樣な向も、無いとは限りません。そこで二分黒いものなら三四分、三四分黯い者なら五分位に見積つて、自ら引立つ色を擇べば其處で始めてその標致が衣服の配合美で十二分に美人を發揮する事が出來るといふものです。

◎脊の高い人はどんな色を選ぶか

次に縞柄と模樣はドウかと云ふに之は極めて簡單で而も顏色には餘り關係がない、先づ脊の高いスラリとした人なら、縞物では縱縞よりも格子縞、模樣なら縱模樣よりも横模樣若くは斜模樣、それも成べく大形で派手なのが映りが好い、

◎脊の低い人はどんな色を選ぶか

又脊の低い人は、萬事高い人と反對の好みを以て地の色合ひは薄い物より濃い方が適する、縞物なら成べく細かい縱縞に限る、之はツマリ脊を高く見せる手段

である。

◎瘦せた人と肥へた人の選び方

又瘦ぎすの人なら、赤とか海老茶とか、桃色とか、オレンヂとか云ふ溫かい色合の模樣が好く、肥つた人は濃厚な色で地味な模樣が最も調和がよろしい。

◎季節〳〵の選び方

さて又顏色や體格に次いで、春、夏、秋、冬と四季折々の氣候によつて色の好みを異にせねばならぬ、夏分の浴衣が白地に藍と極つたのは、凉しさうな感じを見せる爲に雪の色と水の色とを配合したのであるが、單色や二色に止まらず、複雜した色を調合はすべき冬や春秋の頃、即ち袷物、綿入物となつては殊更に色の見立てが肝腎です。同じ袷でも春と秋とは自然の差別があつて、春の花見には陰氣な色ではいけません、秋の月見に陽氣な着附でも適合しない。又綿入物でも十二月までと正月になつてからとは人の心持が違ふのですから隨つて正月は冬と違つて賑かな晴々した色取を見せねばならぬ。恁云ふ工合に顏と姿と年齡と時候と三方四方ピッタリ揃つてこそ、側から見ても心持の好いものですが、そこが各自の好みに腕をよるところでムいませう。

◎時と光線の關係

季節によつて色や模樣の好みがあると共に一方には時と場合とに應じて衣裳の撰び方があります、例へば祝儀、不祝儀、園遊會、花見、芝居見物、講話會、夜會などそれ〳〵趣きを異にせねばなりません、尤も葬式とか婚禮とかいふ特殊の場合には大抵服裝が極つて居ますから說明するまでもありませんが、病氣見舞の時と出產見舞の時とは相互の感じが異ひますから、前者は陰の色、後者は陽の色といふ工合に服裝に注意せねばなりませぬ、花見や園遊會の席なら思切つて派手な風も好いですけれど、其衣服を着て直ぐに講話會や其他眞面目の會合に臨むのは餘りに晴がましいです、そこで目出度い席へ出る時には前に申した明るい華かな色を用ひ、不祥の場合なら、暗い色を擇ぶのが、日本ばかりでなく世界一般の禮法でムいます。

◎曇つた日と晴れた日

それから一日の中でも、曇つた日と晴れた日と、朝と晝と晩とで光線の工合が違ひますから、其邊も篤と研究して色の好みを別にしなければなりませぬ。晝は太陽の光線を頼んで原色のまゝを見せますから何でもないが、夜は燈火の力で見せるのですから其光線の強弱次第で白つぽくも黑つぽくも見えます。そこで晝間は誠によく似合つた結構な色だと思つたのが、點火を致しますと容貌を打こわすやうな色になつて、折角の好みを臺なしにする場合もあります。

◎夜に適する色合は何か

西洋で中流社會の婦人ですと大抵は夜會服の外に電氣燈の光で見て、餘り變らない色の衣服を用意して居ますが、日本では未だ其處まで考の及ぶ婦人は少いやうです。殊に我邦では燈光の强弱が家々によつて違ひますから、猶さら夜間服の選擇が困難で、ランプを用ゐる所もあれば瓦斯を燈す家もあり、其瓦斯にも白熱瓦斯、それから電氣燈、皆なそれ〳〵光りに强弱の差があつて物の色を變らせます、と云つてこゝで燈光に對して小言を並べた所ではじまつた話でもありませぬから、それよりもまづ點火してから變る色と比較的變らぬ色とを述べて御參考に致しませう。

◎點火に變らぬ色は何

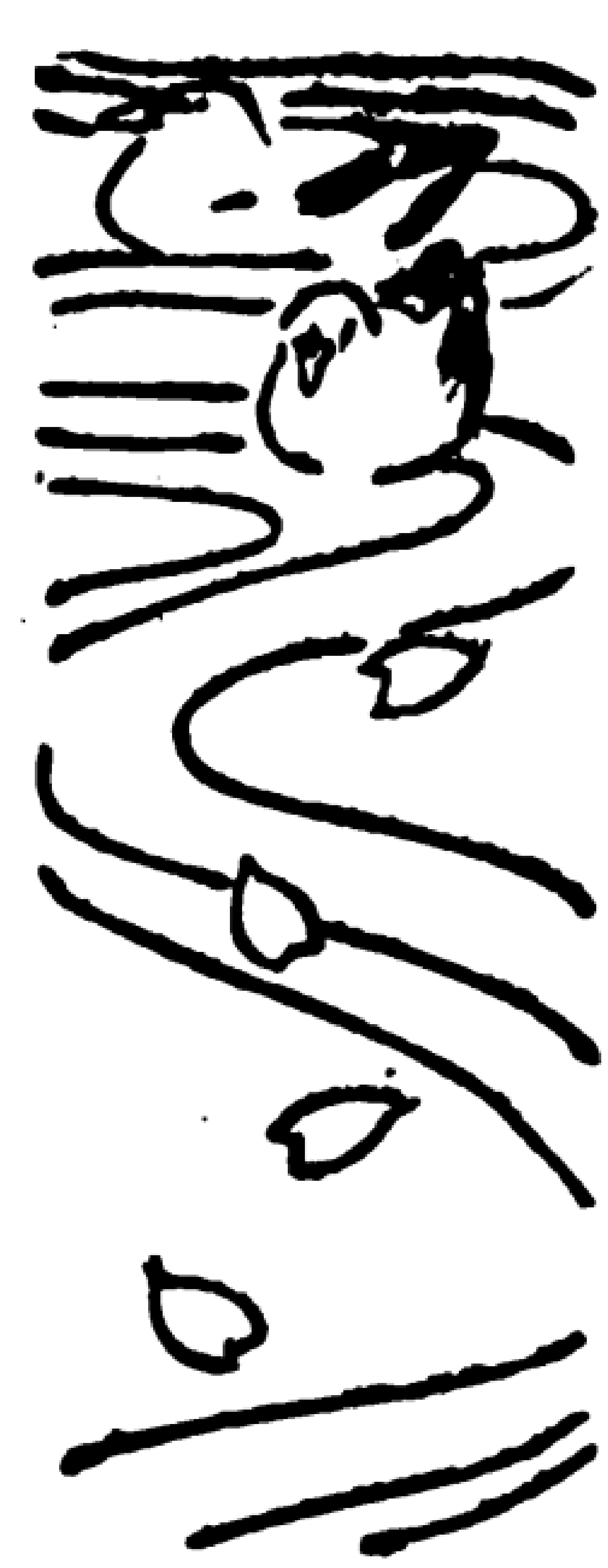
紅梅、柿色、オレンヂ、藤色、梅鼠、小豆色、淺緑、鶯茶、白、黑、瑠璃色

以上は比較的變らぬ色ですがそれでも燈光が弱いと多少暗い色になりますから、其心持で擇ばなくてはなりませぬ。

◎點火に變る色は何

黄、水色、赤、海老茶、オリーブ、紫、紫紺、花色、鐵、葡萄、納戸、濃茶、鼠、藍、牡丹色、栗色、勝色

右の中、黄と水色とは薄くなりますが其他の色は大抵黑ずんで見えます、それに白熱瓦斯の場合には一般に蒼味を加へますから、其際には青と反對の色、即ち紅梅、柿色、オレンヂのやうな色を見立てた方が宜ろしいと思ひます。



燈影雜記

柴崎村雨

愛の色彩趣味

夫婦の愛は紫の如し、人是を好めども、素紫は合せ色なり、調和程を得ざれば忽ち青くなり赤くなり、はなれ〴〵の見にくき斑と成る可し。

夫婦の愛は法則を以て論ず可からず。能く規律立ちたる相對の中は、見る目美しく立派なる者なれ共、世の多くは氣の毒なるほど可笑しく、取りとめなき事水を掬ぶに似たり。人丁年に達すれば早晩親の愛を離れざる可らず、きのふまで身を以て護られたる親を離れて人間は却々に獨行なし得る者ならず。是に於て天はやがて親の愛と交換に。男には妻。女には夫。これを第二の保護者として定められたり。故にかりに是を交換の愛といはむ。親は既に子を一人前に育て上げ自身に代はる保護者をも定めたれば、總てを讓り萬事を任せ、安心して餘生を樂しみて可なり。

子はけふまでの廣大なる親の恩をおもひ一人にて償ひ難き孝行を保護者と二人して盡す可し。何事ぞ、保護者出來て却て一家に愛と愛との衝突を起し風波を醸すが如きはいはゆる交換の愛の眞意を誤るものにて。親。夫。妻。各個人々格の上に大なる恥辱なりとおもふ。惜しむ可し。

友達

友達の愛は淺緑の如し、淡白にして快よく、何處かに强き希望ありて誰が目にも爽快に映ずるものなり。

友の愛は心廣々として恥なく遠慮なく無邪氣なり、快活なり、愉快なり、爽快なり、胸襟を開いて淸々と談ず、かりに是を旅行風の愛といはむ。

友は素と他人なれば、其間蟠りなくして殊に嬉し、友達は、我智、我學、我性、と、少なく共對等の人たらざる可らず。若し何れか劣らば相互の力には成り難し、一友を得るは千金を得るより難しといへば、眞の友持つ人は眞のさいはひなるかな。

兄弟

兄弟の愛は群靑の如し、多すぎてはうるさく無くては物足らず、素群靑は一色にて用ゆべく、合せて用ゐんとする共得ざる可し。

兄弟の愛はかりに藝術の愛といはむ、他人の知らぬ苦心もすれどもまた、人知らぬ興味もあり研究時代は自然意見の相違を來して反目する事なしとせざれど、互に辛酸を甞め經世の學問を味ひて後は其親しみ元に返りて晩年には話相手、相談相手として缺ぐ可らざるに至るといへば、よりぬきの人物三人計りは兄弟に持ち度し。

祖父母

祖父母の愛は桃色の如し、只愛らしきが故に只愛するなり、愛らしきが故に愛するに留まりて希望も立脚地もなき愛なり、かりに是を晩春の愛といはむ。

親

親の愛は純白なり、何色を染め出すも自由にして其範圍大きく尊き事他の比にあらず。五彩是より生じ、光明是より發す。

人世に愛あり、愛にさま〴〵あり、され共要するにおのれの爲めに他を愛するか、愛せられたる故に愛するに至るか、畢竟自己ありて後に生ずる愛なり、いひ換ゆれは報酬を望む愛なり、只ひとつ、報酬をおもはざる愛あり、親の愛是なり。

子、親に背け共親は只悲しみて怒らず、子の不良度に越ゆれば親の愛いよ〳〵加はり、憐み助け、恤り護りて一意專念、變りなく動きなき無量の愛は天下何物も及ぶ可らず、故にわれ是を靈泉にたとへむ。

古へ不孝の子あり、親を邪魔者に思ひて憎みひそか

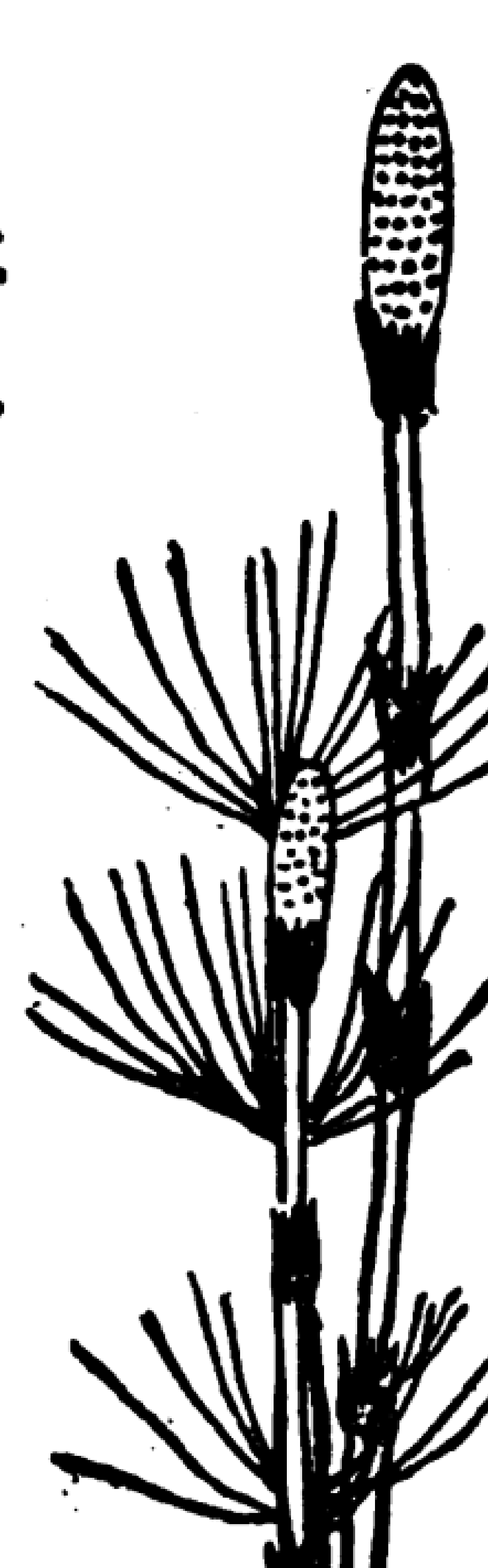
に是を捨てんとて家を連れ出す、親は子に捨てらるゝを知りしが敢て背かず、途をめぐり、又幾めぐり既に其場所に至り今や子の去らんとするにのぞみて親はいへり、みち〳〵木の枝を折り來りぬそれを目あてにゆかば恙なく家に至るべしと歎ゆ。此瞬間、子は始めて感激して悟道に歸すと。

姥捨山の物語りは千古を徹す親心の明鏡なり。現世幾萬の子等、夜陰人靜りて後、此鏡面に立ち、窃かに我姿をかへり見よ、おのづから恥ぢ、せめてもかたちを整ふるに至らむ。

叮嚀なる禮儀は一厘半錢を要するものにあらずして、しかも萬事を購ひ得るものなり。

着物の着方と女振り

さくら子



◎賤子樣の貌の御觀察は私も至極御同感で御座いました一體上品だとか下品だとか粹氣だとか野暮だとか申事は容子一つの事なので此容子はお顏の好し惡し丈の高ひ矮ひのは關係のないものだらうと思ひますのマア藝者衆なんか御覽遊ばせ一から十迄美人ばかりは有ません隨分肥り肉な又顏も二の町髮は縮れ毛なんかもありますがそれで居て何處かこうスッキリとして粹氣に見えるのは容子が好いからなんだらうと思ひます。此容子と云ふ事がなか〳〵六ケ敷ので馬子にも衣裳髮形ッて一口に云ひますが髮は結いぶりで大に與つて

力あるものですが着物はさうは行きませんどんなにリユウとした品質を纏ッても召し方が悪くては引立ませんやれ大彦の高島やのと大金を抛つて山繭のやれお納戸色の紋付のやれ絞り染の帯それ縞お召のと大騒やつても猪頸に引付て着たり腰締りも無着崩れのする樣な召し方をしたり又むやみに拔衣紋にばかりしたりするから可笑いのです。着方に注意する樣な方は屹度容子も良いに違ひありません。

◎

女學生は女學生奥樣は奥樣の特有の容子の有るもので孃樣や奥樣がむやみと藝者衆の眞似をするのも妙なもので上品な中にもどこかゾロりとして粹氣に見え粹氣な中にもどつか愛らしい品のいゝと云ふ風に「粹氣人物」でありたいと思ひますの粹人には婀娜なのやでんぼうなつくりも見て良いものです。



丈の高ひ方は横ものを召しても矮者は成可竪縞もの格子ものでも縱長の格子を撰ぶなどの事は先刻御承知でしやうからそんな事は拔きにして着物の召し方を申ましようなら、

◎

素人方は衣服を着るのでなく着物にきられるからそれで可笑ので何々婦人會などいふ御婦人の集る處へ參て見ますと美しい孃さんや奥樣でもチツカラ召し物の引立ないのは着物にきられるからです其處へ行と藝者衆は餘所行でもきなれて居から、常着の心で居るのですそれだから無造作で却て容子が良く見えるので着物をきこなして居ます。

素人でも下町へ行と見直します大店の孃さんなんか半襟がけの着物に前掛を上から(はしよりの)かけて縞お召の長羽織かなんかで雪駄をチヤラ〱させて小僧が後からお花を持てお稽古通のお供などこんな圖は山の手あたりには見たいと云ても有ません、八千代さんか荷葉さんの下町式の小説で見る位のもの山の手で其樣な風を望むのはこつちが無理かもしれませんがさりとて通る人も〱も妙な人が多くていやになちまひます。

◎

先丈の高い方から申ますと腰帶を腰骨の少し上に固めに〆まして胸紐は極弛やかに前後左右へ體の柔軟に動く樣に、衿は其人々の好々で放すも付るも隨意ですが餘り付たのも可笑く而していま流行ません、前の方はフツクリと弛やかに着る方が着物に着られた樣でなく奥床敷丈の矮い人も略同じですが只腰帶を可成上に〆帶は前を下げ後に臀の出ぬ丈にして心持上に小さく結ぶ樣にしたら乾度恰好がよく見えます。衣服はすべて長めに着お座敷での會などの時は引ぎみにし歩く時園遊會の時は後を長めに前を短めに召した方がよいと思ひます。之が前後になりますと揚裾に見えて醜もないのですよく通で村長さんの奥樣染た野暮な人を見掛るのは得てこう云ふ人に限て此樣着方をしてゐるのです。

◎

下前は衽を左の腰の邊で衿元から半分に折て着た方が裾捌もよく自然です、長襦袢や下の物は纏つかない樣にした方が具合がよう御座います。

◎

着物の着方にも流行〱が有つて藝者でも女學生で

も後の襟をキユツト付けて襦袢の襟を帶の處まで細長く出した時代もありました、着物の着方も始終各自が注意して流行を追はなくつては容子よく見えるものではありません。

今の流行は心持拔衣紋にして前は喉の〆られる位にキツト合せ衣服の襟も下前は充分左の乳の下へ上前は右へ引て襦袢の襟の餘り見えぬ樣な纏ついた着方ですですから、衿屋は模樣を以前より上へ付る樣になり衿で見た時は模樣の上りすぎた位の位置の惡ひのを取て却て具合がよいのです着物の襟は紋付でも何でも眞二ツに下まで折て着るのが流行です。

着物の仕立方帶の〆方等も其内暇があつたら御參考に申上て見ましよう。

主婦の心掛

女は一家を治むるのは骨の折れるので。事細く爲やうと思へば閑のあるものでない、一家の主婦が今日は花見に行くとか、明日は誰某を訪ふとか、夫婦で遊山に行くとか、子供を連れて遊びに出るとかいふ樣な事は能く出來たものであると思ふ、一軒の家を治めて行かうと思へば一日も閑のあるものでない、世の中の能く出て暮らす人は定めし内輪では拔けた所があるであらうと思ふ、拔けた所なしにさういふ事が出來れば大變豪傑であれども、恐くは拔けだらけにして遊んで歩くのであらうと思ふ、それ位忙いものであるから、家事と申すものは奧まで進んでゆかうと云ふには書物を讀んだばかりでは却々いかぬ。女は一軒を治めて行くのが本來の職務であるから、書物ばかり讀んで居ても甚だ困る、學問もせねばならぬが書物ばかりに噛り附いて居ない樣にして貰いたい、古人の金言とか何とか云ふ樣な短いものを何度も讀んで之を味ひ、間さへあれば其事を考へ、ドウか自分の身も其處に到りたいものであると云ふ事を心懸けて行きさへすれば隨分品位を有つて行く事も出來るから、書物ばかり讀んで居ないで專ら家事に心を用ひ、夜分寢てからでも味ある古人の語など一句二句讀みこなして其れを學問となし、日々忘れぬ樣にするが肝腎であらう、心に品位さへあれば幾ら賤い業を執つて居ても恥るに及ばず、賤い事をするを恥かしいと思ふ中は心に品位がないのである、業は賤しい藝であつても心に人間の道理を辨へてさへ居れば、業ばかり高尚であつて心の品位のなきより遙かに優つて居ろ、學校卒業の女子なぞが高尚なる業務ばかりを望みて、女子と生れ乍ら女子の職掌を盡くす事が出來ないのは是れ氣位の卻りて卑しい證據であらうと思ふのでございます。

(棚橋女史談片)

よしなし言

静子



長谷川しぐれ

早や五六年も經たらんか、女學世界の定期增刊に、「埋火」てふ題にて選に入り給ひし水橋康子樣筋は覺えねども下町式の娘を描寫されし御筆致、言葉の言ひまはし、どうしても日本橋邊の御育ちかとの想像異なりき。其後は唯折々短文等拜見いたすのみにて、忘るゝともなく忘れ居たるを、先頃はまた花王丸とやらの脚本、賞に入り給ひしとか。去月逝き給ひし三木竹二樣の門弟として劇評等もあそばすときけば、さこそ幼きより演劇が御好きにて、その道の通人にて在はさん、芝居は見る可き物にあらぬ樣に言ひて叱らるゝ親も多き世に之は又流石に御江戶の眞中、日本橋の御育ち柄、代り目毎の觀劇も御心の儘なりしは御天性の文學者に一增の力を添へて今現はれたる、三度に一度はよせよと御止めなされしならん御兩親樣も心中密かに御滿足ならむ。康子樣との御名のみにて、想ひし君は、一體に小柄にて面はどちらかと言へば丸く、いつも高島田か何かの髮に結ひて、何處迄も舊式に、ハイカラがらぬ、御方かと想はれしも新聞にて拜せし君は、御顏だちも丸からず、半身像なれば、わからねども御丈も伸伸としたる御方の樣に見受けられぬ、康子樣と申すよりしぐれ女史の方こそ御容姿に適らめ、御髮はわざとか、取りつくろはぬ亂れたる結ひ樣、察するに粹氣好みの御方にや、一度は嫁き給ひしも程經ず御離緣となりて今は御獨棲とやら、如何なる理由ありて、破鏡の御身となり給ひしや知る由なけれど、心ならぬ人に添ひて一生を終らんより己が好みの道に心の儘進み給ふ

こそ遙かに優らむ。心弱きは女の常、行末寂しうおぼし給ふ事も在はすべけれど、一度は妻たるつとめも經給ひし御身、殊には御兩親も揃ひ御同胞も一人ならず御心やすらに文の林の奥深うわけ入給ひて、一代の傑作物し給へやと、出過ぎたれど。

伊藤政子

炎天燒くが如き、日西に沒して、雲なく澄める中空に、天つ御國の名工が磨きに磨きし、明鏡の影、大洋の浪に映りて、銀の月とはまさしくこれ、神秘壯絶の其れとの御意か知らねども、銀月樣とは君の御良人、水道の水で初湯つかひし、神田ッ子と江戸ッ子がつたる御文體に依りて、都の御生れと思ひしにさはなくて政子樣こそ京橋に初聲あげ給ひし御方にて御出身の學校は第一高等女學校とや。御良人樣の文體に幾分、似通ひてあか拔したる御觀察の一寸目先き鋭りたるも、似たもの夫婦とや言はまし、我が心に書きし君はきやしや造りの御方と言ふより、むしろ丈夫なる骨格の御方かと想はるゝは銀月樣の奧樣てふ、御良人樣よりの聯想にや。外に出でゝ强き殿方に限り内にては妻君孝行に在はすとかきく、銀月樣もあの樣に强がりて雄々しき筆、揮ひ給へば奧樣には餘程優しき御方かと想はるれども如何にや。

先頃いかがはしき風說、耳にしたれど、政子樣の御傷はしければ僞りなれかし、睦まじき御仲なれよ、情の波瀾起らじなとぞ祈る。こは他事なれど近頃自然派とやら、盛になつて思ひに思ひて貰ひ得し妻も多年の中には寢樣惡しとやらぬか味噌臭しとやら與につきて愛は自由なりとか何とか、勝手な理屈をつけて、我儘氣儘なさるゝ主人公の描寫多し、まさかに、書き給へばとて其の御方に、其の樣な事はあるまじけれど、智情意の三つの中情の發達最もすぐれたれば文士の方とし言へば御心多き樣にぞ思はるる。

一の瀨初子

御父上樣は宗敎家、君も幼きより宗敎學校に在はし

て、朝な夕な、祈のことば、讃美の聲耳にし給へば、自づと精神も高く在はさん、君の御作の何處かにキリスト敎的臭味あるは、又他の作者と變りて嬉し、御在校の折より、文綴る事、御好にて日々の學課もさまで氣にも懸け給はず御机に凭りそひて、何やらん熱心に筆走らせ給ふ「何が出來ますの」と見度がれば「何でもないのよ」と袂に押込みて只くす〳〵と笑ひ給ふ、御姿、今も見る樣なり。文學會の大會に「梅樹の下蔭公を偲ふ」てふ題にて文章朗讀なされし時、其の詞の美はしさに情の溢れて、周圍恥かしき迄に涙の禁めがたかりしよ、上級の方とし言へば何となう心置かるゝに、君とは隣合の室に半年餘りの起ふし、冬は間の襖を開きて火鉢を中央に一家の如き親しき交り、遠慮も氣兼もなく、朝臥床の中にて、昨夜の夢のをかしかりきと語り出らるれば我も我もと同室四人の夢合せ、今日は屹度小包が來てよ、私の夢は當るんですもの、」と賭迄爲して待ちしもをかし、かくて毎朝初子樣の夢物語聞かぬ日なく、或時「私はね、一つの夢を三晩ばかし續けて見る事が有るの、今晩此處迄見れば翌晩は又其のつぎを屹度見るんですよ」と仰せらるゝに那麼事虚言だわ〳〵と、皆樣笑ひて眞とし給はず、我には同じ經驗あれば、「其りや眞實よ、私なんぞも能くあるわ」と話進みて、あなたも？　私もよと興湧きぬ。

君憶へ給ふかはしらねど、其の頃の夢話は、御癖の一つとして、君を思ひ出の折毎に心に浮び微笑まるゝよ。卅八年の夏、三田行の電車を待ちて大門前に彳めば門内より此方へ來給ふ、君のさても瘠せ給ひしものかな、殊に御顏の色の惡るさ、互に御久しぶりと喜びて、この夏は？　ときかるゝに、房州あたりへ行つて見樣かと思ひまして、と言へば、私は少々病氣ですから歸國し樣と思つてます、と二言三言語らふ程に日比谷行の電車、鈴の音忙はしく、連れなる人の乘り給ひしに、君も追い立てられて、さよならも、そこ〳〵に別れしがその後は絶へて相見るよすがもなく、只折々の御作、なつかしう、拜するのみ、御筆も餘程進み給ふて、立派に斯道の人となられし事、他人事ならず嬉

しう覺ゆ、何處迄も〳〵宗敎的觀念を捨て給はず、眞面目に高尙なる作を出し給へや、世の風潮に誘はれ給ふなキリスト敎主義に錬られたる頭腦より出づる思想は無宗敎の其よりも慥かに異彩ある可き事と君に待つ事多大なるを。

人知れぬ、苦悶も悲痛も神は知り給ふ君にしあれば神は凡ての訴へ處、慈母の懷、德も思想もこゝと求めて、堅固に在はせよ。

國木田治子

緣なくて、まだ御作の多くは讀まざれども、獨步樣のは、何となう、氣に入りて、大方の御作、缺かさで拜見致し居ればか其の奧樣も薄からず思はれて、御名記しては見つ、御作の如何を評する術もなし、只治子樣治子樣と言ひ繼げて胸に浮びし想像の儘を、之が眞個のよしなし言とや、さきに、文士の妻とやら物し給ひしと聞きしも田舍に住む身の悲しさ思ひに任せず之も見逃したり、然れど、御里の御母樣の、獨步樣に對する御小言ぞ、御きゝなされて、なりたるもの、とやら承りしが、げに文士の妻として、一寸、人知れぬ御苦痛も在はさん。御良人樣の御作は軟派の、だらしなきものにはあらず、骨もあれば、響もあり、人生の何かに、ふれたる如き……等と申せば如何にも、ゑらき人樣の言ひ種の樣なれども、朧げなる頭腦にも、ひゐき目か知らねど然、映りて、治子樣の御筆致も御構想も、かゝれかしとぞ念ふ、始め獨步樣の奧樣が同じ道の御方とも得しらず、只如何なる御方にや、御良人樣の御作に興味を持ちて、かにかくと御話相手になり給ふ御方なれよと老婆心にも、祈りしに、ふと國木田治子との御名前、見出したる時の嬉しさ、我と同じく國木田びいきの兄樣に、「これ御覽なさいまし、此の方は獨步樣の奧樣でせう、まあ〳〵御夫婦揃つてよかつたわ」と喜びの笑もらせし時「眞個に御前は狂的だね」と御笑ひなされぬ。

或日親しき友の訪問、嬉しく、帝國文學の何か二三冊其處邊にあるものを御目に懸て、「あなたは誰の作が

御すき？」と伺へば「私は鏡花のが」「あらさう、私は獨歩と秋聲のが一等いゝと思ひますわ、鏡花のは何だか妖怪見たいで」と言ひすぎてふと心づき「でも好き好きですわね、鏡花の文は又大變ねれて立派です事ね」と言ひ足せば「だつて獨歩樣は御酒が好で、其の又、御酒の上が惡いんですつてね」と被仰るから「そりや世の中の男で御酒を飲らない方は、澤山は有ますまいよ、殊に文士はね、大町樣だつて登張樣だつて御すきだつてぢや有ませんか」と言ひわけせしものゝ心の底には、眞實なりせば奥樣の御心なやまし給ふ事もありなんかと胸騷がせし事も有りけり。我が心に畫かれ居る治子樣は女らしく優しき方にて、無口の、少々神經質にては在はさずや等と、全然異りたる想像なりせばをかしかる可し。

次號には野上八重子、佐藤露英、小金井喜美子の方々を御月旦め申あげん。





自活の出來る裁縫の仕方

女子共立會　松江美佐子

技術と學問

私は御承知の通り裁縫が專門で御座いますから、別に面白いお話しはありませんが、多年の經驗上、若い婦人方殊に裁縫を稽古しやうと云ふ方のために、常々心附いて居る事を一寸お話致して見ませう。

扨技術には必ず其れに相當した學問の添ふるのである事は、今更私が申すまでもありませぬが、然し學問は客で技術は主だと云ふ事が充分頭に入つて居りませぬと、輕重を顚倒する事があります。言ひ換へますれば、技術に對する感念が確かでありませぬと、學問も空理の方に流れ易く、肝腎な技術が何だか卑しい事のやうに誤解をするやうになります。併し技術殊に裁縫の如きは、學理の上で何の位口が利けましても、實際に當つて練習即ち技術の方が進んで居りませねば何にもなりませぬ。所が前に申す通り、裁縫を專門に學ぶ人でありながら技術の練習を忽にして其の客たる理論と云へば立派ですがつまり實地に遠い詰らぬ事を筆記するが爲に多くの時日を費して、其れを大層高尚のやうに思つて居る人が少なくないのであります。其の結果、折角堂々たる裁縫學校を卒業しながら、いざ實物と云ふ場合に一々筆記帳を取り出すと云ふやうな事實を往々見受けます。此に就て私は實驗上から少し意見を話して見たいと存じます、一體此弊の由て起る所はと考へて見ますると、學校が惡いか生徒が惡いか、どちらがどうとも申しかねますが、要するに双方の中に裁縫は一つの技術であるから、其の方に重きを置かなければならぬと云ふ確たる了簡が定まつて居ないから此弊を來すのだと信じます、私共の手許にも種々の人々

が居られます、それで或種の學校の教授の方法は知れますが、第一多くの生徒を一室に集めて、一人の敎師が時間を切て敎へますのでは、學問に於ては兎に角、技に至つては遺憾のないと云ふ譯には參りますまい、殊に材料の供給と云ふ事が充分出來ませんでは學問は進んでも技術は思ふ程に進みませぬ、天晴某裁縫學校の卒業免狀を持ちながら、獨立生活は愚か、技術の足らぬ爲に裁縫で奉公する事も出來ずに、無意味な下婢に住み込んで居る人さへあるのを承知して居ります、是等は一例に過ぎませぬとも、此邊の消息を自白して居るものではありますまいか、して見ると學を尊んで技を卑しむのは生徒の罪ばかりではありませぬ、考へて御覽遊ばせ國を出る時は何年經てば何々學校を卒業して裁縫敎師になれる、すれば婦人と雖も獨立生活は充分出來ると、かう豫定を立てゝ都に出ませう、父兄も同じ思ひで學資を貢ぎませう、さて愈々卒業をした曉に前のやうな結果では今更國へは歸られず、今迄通り學資を送れと云ふのは、何だか言ひ惡う御座いませう、それも父兄が豐かで、金錢の心配のない人ならば、矢張りいつまでも同じ事を繰り返して居る内に、いつかは上手になる事もありませうが然し裁縫を學ぶ人の多くは前申した通り、學問よりは裁縫の方が早く卒業が出來ると考へてかゝるのであります。此は尤もの事で、全く裁縫は學問と違つて、卒業の早いばかりでなく、稽古の仕方さへ宜しければ、傍ら收入を得ながらでも勉强する事が出來るので御座います、併し此れには材料が充分になければなりません、所が中流以上の家庭には、有り餘るほどの仕事があるのは事實でありますが、少々位の仕立賃の爲なら上手な方がと云ふのは人情でありますから、前申した通り技術の何物であるかを自覺して居らぬやうな人には到底、研究になるやうな材料は貸してはくれません、そこで私共では此兩者の便利を計るがために、一方では實技の養成に力め、又一方には材料の蒐集に努めました結果、只今では諸大家の信用を得まして、內の生徒ばかりではいつも縫ひ切れぬ程の材料があります。さうして傳習

生の方には異つた品を順次に宛がひまして、同一の品を凡そ五六回づゝ縫ひ習はせます、それで一年間の内には殆んどあらゆる種類を手にかけ盡しますから、技術の進むはもとより、本人も大に自信が出來ます、是れで家庭内の裁縫をするには充分でありますが、尚此道で獨立をしやうと云ふ人人は進んで研究科に入ります、此の方は全く仕事で自活をしながら



其奥義を研究するので御座います夫れに家庭的で御座いますから、生徒は自分の子女と同樣、品行、作法から勉强の程度に至るまで喧しく注意を致します、又寄宿生になりますと夜々、習字、作文其他の學科を差し加へて向上的の精神を鼓舞します、これで十數年間其成績を勘へて居りますのに、通學生は二年、寄宿生は一年、

それで充分人樣のお仕事をさして頂いて差支のないだけになります、又他日家庭に入つてから不都合のないやうにと存じて塾生には交代に、其月内の會計、書信の往復、來客の應待などをさして居ります、妙なものでかやうに、私が實際を重く見て居りますと、生徒も自然其感化を受けるものと見えて、萬事實際の方に趣味を持て參ります、寄宿生などになりますと、ミシンなどは何時敎へるともなしに覺へて仕舞つて洋服を敎へる時には先に知つて居ると云ふやうな事が度々あります、併し此に就て私が始終注意を要します事はあまり技術を重んずる爲に精神上、向上の心を失つて仕舞つてもなりませぬから、出來るだけ學問と技術との調和を計つて居るので御座います、殊に父兄から何時までも學資を送つて貰ひます事は、現の經濟は兎に角、人の妻となつた場合に所謂「女は夫の收入も知らずに自分の身の廻りの者をほしがる」などゝ云ふそしりを受けるやうになつては困りますから貧富に限らず修業の內から人樣の御仕事を請合つて成るべく自分で責任を持つやうにさせて居ります。又かやうに人樣の仕事をしますには前申す通り決して仕立屋などに劣るやうな技倆ではいけませんから私は精神から修養をさせて技は精神につれると云ふ風に敎へます、一體技術を厭がつて、空理に傾くと云ふのは、精神が技術に入つて仕舞はぬからであります、精神を籠めてたとへ何物が來ても心が其れに移らぬ位熱心になりますれば上手に出來上ります、勿論遣り損ひはないのです、上手に出來上れば愉快です、愉快なれば次の熱心が起ります、熱心の極は業が神に入ります、諸藝の奥義と云ふのはつまり此れ一つなのであります、其處に至れば、王公貴人も恐るゝ事はないと云ふ事になります、此れが技の德であります、そこで私は常々技術は女の生命であると申して敎へて居るので御座います。

以上は只私の經驗を述べた許りで御座いますが此れが若し、裁縫を敎へる人、同じく習ふ人のためにいささかにても御參考となれば誠に仕合だと存じます。



江戸子料理と季節物

和洋割烹塾 琢間つね子

珍物料理は拙い

餘り澤山の金をかけず、季節物の滋味の乘つた原料を成べく手輕に旨く食べさせると云ふのが料理法の主意で江戸ッ子料理の神髓とする所も矢張り之に外ならんので御座います、ところが世間には往々珍物料理とか申して、原料の美味い拙いはさて措き、何でも珍らしい物のみ擇好んで、季節外れの物に大枚の金をかけて、それで料理通のやうに心得て居る方も厶いますが、大體五寸位で一圓もする冬瓜や一個廿五錢もする茄子などに脂肪の乘つた滋味い物のあらう筈がございません。

交通便利の今日では長良川の鮎でも京都の松茸でも二日位で取寄せられるし、朝鮮の鶴でも電報をかければ一週間で來ますから、お金さへあればドンな珍物でも蒐められますが、然しコンなのは御馳走を食るといふよりは寧ろ紙幣を嚙むと同じ樣な譯で、料理法の本義ではありません。そこで生粋の江戸ッ子料理はと申せば、先づ醬油とだしが違ひます、京阪地方では色が淡くて鹹い醬油を用ひ、だしも主に昆布を使つて萬事コッテリした料理を致しますが、此方では色が赤くとも味の美い醬油にだしも本場の上鰹を擇んですつぱりしたものを拵へます。

簡單な江戸ッ子料理

それから江戸ッ子料理の特色とする所は、第一、物の自然の姿を失はず、體裁を衒はずそれで味を佳くする事です、分量を多くしたり、食物にいろ〳〵小細工を加へて慈姑を花形に切るとか、煠卵を摺つぶして林檎の形に葉を添へるといふ樣なことをせず、慈

姑なら慈姑其まゝで姿の良いのと新らしいのとを擇んで、それに旨く味を附けるのです。

第二、成べく手をかけずに自然の旨い味を出す樣にする事――お魚なら鹽燒の暖かいのか刺身の新鮮な所を賞翫するので、料理の手數は極めて簡單でも僅かの鹽加減と鳥渡の庖刀使ひで自然の味が狂ふのですから、其處の呼吸が大層難かしいのです、殊に小鯛の如きは鹽燒に限ると申す位で、之をうまく食はせる程になれば、先づ江戸ッ子料理の名人としてあります、其他野菜でも肉類でも凡て手數を簡單にして原料其物の味を消さずに一層美味くすると云ふのが本來なのです。

一粒擇の材料

第三、原料の撰擇に注意する事――例へば蒲鉾を拵へるにつきましても、此原料は虎キスと云ふ魚が一番美いので、血を出し腸を去り頭を落してたゝくのですが、此魚は網で漁るよりも釣つたのが多いから皆一つ一つに漁つた時間が違つて、中には餘程古くなつたのが交る事がある、さういふのが一尾でも入ると其板全體に香ひが移つて、折角の蒲鉾を臺無しにせねばならんことが有りますから、江戸ッ子料理の方では最も此原料の撰擇に注意致します、其他煮魚でも生膾でも野菜料理でも皆な同じ譯で、百の中に唯一つ惡いのが這入つても全體の味に影響するのですから、之は江戸ッ子料理に限らず、如何なる場合にも、材料の陳いのと新らしいのとを擇分ける必要があらうと存じます。

昨今よく料理法の研究とか申していろ／＼の事を爲さいます方も厶いますが、大抵は原料の鑑別や調理の手加減よりも、重に體裁上の研究のやうです、之も必要でせうけれどそれよりも一個の材料に就て、例へば豆腐を美味く煮るにはどうしたら宜からうとか、お芋はどうすればお旨くなるだらうとか云ふ樣な、どんな片田舍の品物の不足な所でも又は貧乏人にでも應用の利く調理法を研究なされたら如何と思ひます。

料理の食べ頃

生粋の江戸ッ子料理と云へばざつと右様のものですが、凡て食物には食頃と申す事が肝腎でムいまして、いくら名人が骨を折つた料理でも、食頃でない時分に食べては拙くなります、鰹の如きでも捕つて直ぐよりは少し置いてからの方がお旨いけれど、餘計におけば又段段まづくなります、又汁物へ魚の切肉を入れるには鹽をしますが、それを暖かい出來たての中に召上がれば美味く食べられます、即ちそれが食頃なのですが、暫く經つとまるで鹽出しをした樣で、汁は鹽ッぽくなり、魚は鹽梅が狂つて本統の味が失くなります、殊に宴會などで多勢でバタ〳〵立騒ぐ席では、食物に埃がかゝつ



て料理の妙味が臺無しになりますから、江戸ッ子式の方では之が何よりの禁物です

それから料理店などで出す折詰のお土產、あれは寔につまらぬもので、夏分の如きは膳先へ附けると先づ人のうん氣で可加減に味が狂ひます、其上家へ持ち歸つて、晩いから明日食べやう、まア臺所へ仕舞つてお置きといふ樣な風で、蓋もあけずに戸棚へ入れて戸をピッシャリなど〻行らうものなら全く堪つたものぢやムいません、せめて氷箱へでも入れて置けばまだしもですが、それでも食頃が過ぎて居ますから拙いことは勿論です、又家庭料理にしましても、奥様が晩餐

に折角丹精を凝した御馳走も、旦那樣のお歸りが遲ければツヒ宵越しになる、翌朝主人が召上つて、何だ此肴はまづい杯とお小言を仰有つてもそれは食頃に食べない人が惡いので、奥樣こそ可い御災難でせう、と申すやうな次第で何でも料理のお旨いのは出來立てのホヤ〳〵に限ります。

江戸ツ子式の鯛料理

そこで今度は季節物に就て江戸ツ子式の料理法を說明しやうと思ひますが、一口に季節物と申しても隨分澤山の數で一々述べ切れませんから、其中でも最も美味い、これから滋味の乘つて來る鯛と筍の調理方を申し上げませう、鯛は普通春の彼岸から向ふ四十日間を盛期としてありますが、本統にお旨いのは四月へ這入つてから、櫻の花のボツ〳〵綻び初る頃が一等でせう。

先づ椀物から申せば、

▲小鯛の巴煮　これは小鯛と貝柱と生海苔と斯う三品附合せて汁の物とするのですが、最初鯛を三枚に卸し、五分位に切り鹽を撒つて三十分程經つた後鹽を洗ひ、熱湯に煠て椀に移し、次に生海苔をよく洗つて水氣を搾り、二番煮出汁に少量の醬油を加へて椀に組合せ最後に煠でた貝柱を三つ四つ添へるのですが、江戸ツ子の最も賞翫するのは此巴煮でございます。

▲皮卷鯛　之は鯛の肉を刺身其他の物に使つた殘りの皮（其積りで最初から少々肉を着けておく）を縱に渦卷のやうに卷き、竹の皮の細く裂いたので所々を固く縛り、蒸籠にむして蒸せたら木口から三四分の厚さに輪切となし、其處へ生椎茸の薄醬油に煮たのを組合せ、靑味として三葉芹などを配合します。

▲黑鯛の茗荷合せ　黑鯛を三枚に卸して小形の切身となし、それに鹽を振つて三十分の後に洗ひ落し、沸湯にざつと煠て椀に盛り、次に茗荷苗の根の方の軟かい所を三寸程採つて木口から細かく刻み、二番煮出汁に少量の醬油を加へて鯛に附合せるのです。

▲鯛の皮附糝薯、これは鯛の蕎麥煮といふやうな物ですが、最初ひきぬき蕎麥と申す粉を澤山の湯で煠上げ、

少量の醤油を加へた二番煮出汁で下煮を致して置きます、それから鯛を三枚に卸し、皮を剥く時裏皮に薄く肉を着けておき、肉は細く切つて庖刀で充分挨いた後擂鉢に入れ、其處へ煮切味醂と煮出汁とを注しヨク攪交せて裏漉にかけ、さて今度は以前の鯛の皮を肉附面が上になる様に竹の皮の上に擴げ、其上へ裏漉の肉を一寸位の厚さに附けて蒸籠にかけるので、それが蒸せたら四五分の厚味に切つて前の蕎麥と盛合せる。



▲鯛の卸し煮　鯛の鱗を去り、鰓を除き、腸を去り水でヨク洗ひ、頭を切落して三枚に卸し、更に之を角形に切り敷皿にのせて鍋に入れ酒、味醂、醤油を適宜に加へて煮たる後それに大根おろしを振かけ、附合せには土當婦、椎茸、生姜などを見計ひます。

▲鯛の紙鹽　紙鹽とは鯛の外に生海苔、甘酢、山葵の三品を附合せて酢の物とするのですが、先づ魚の方から申せば鯛を三枚に卸して刺身のやうに作り置き、偖て塗盆へ少量の鹽と水とを振りまき、其處へ一枚の美濃紙を布いて鯛

の作り身を載せ、其上へ更に紙を被せて今一度鹽と水を振り一時間ほど經つてから皿に盛るのです、次に生海苔は水でヨク洗つて水氣を搾り充分乾いた後に魚の上へ擴げてかける、又甘酢と申すのは二合の味醂を一合に煮詰め、之に五勺の酢を混せ、少量の鹽と醬油とを加へて鯛にかけるので、辛味としては山葵を用ゐます、之は所謂通の食物で下戶よりは上戶の口に適ふやうです。

▲甘鯛の味噌漬燒　之には附合せとして寄蜜柑と生姜を添へるのが普通で、先づ甘鯛の鱗を引き、鰓、腸を拔き、薄鹽をふつて三十分程の後にそれを洗ひ落して漬るのですが、之に使ふ味噌はヨク擂り、味醂一杯醬油二杯の割合でドロ〳〵に延ばして漬け置く時間は十時間乃至十二時間が適宜です、又燒く時は必ず串を打ち遠火にかけて魚の眼の色が白く濁つた位の所で裏表を返し、それと共に金串を廻す事を忘れてはいけません、然うしないと肉が串に燒付いて拔く時姿が崩れます、又寄蜜柑を拵へるには、寒天を水に浸し柔くなつた時、寒天一本に水三合砂糖一合の割で火にかけ三合の水が二合に煮詰りたる頃おろして器に漉し、次に蜜柑の皮を剝いたのを布巾に包み其液汁を搾り取つて寒天に混せ、再び火にかけた後重箱に流しこんで其器を水に冷すと羊羹のやうに固まります、それを適宜の形に切つて生姜と共に魚に添へるのです。

▲小鯛の黃金燒　小鯛を三枚に卸し、薄鹽をふつて二三十分の後ヨク洗ひ、横に金串を打つて兩面を燒き、之に卵の黃味を刷毛のやうな物で塗つて再び火に炙ります。

▲鯛の子持蒸　鯛を三枚に卸して二時間ほど醬油に漬けた後に肉を二ツ折となし、之に木芽味噌を孕まし竹の皮に載せて蒸すのですが、木芽味噌の拵方は胡桃實と山椒の新芽を擂鉢で擂り、次に白味噌と砂糖を入れて裏漉にかけ、煮出汁に延して流れ出ないほどの所で魚に詰め込のです。

此外に鹽燒、照燒、潮煮、刺身、田樂、南蠻煮、蕎麥蒸等いろ〳〵ありますが、それは省きました。

筍料理のいろ〳〵

亀井まき子

筍の普通の煮方は、大概どなたも御存じだらうと、思ひますから、少しかはつた調理を、四五種申しませう。

◎筍の黒あへ

先づ筍の根をきりまして、外皮を二三枚剥がし、竪に二つにきり、鍋に水と糠を少し入れてゆでた中へ、前の筍を入れて茹で、茹だりましたら、皮をむいて、よくあらひ、竪に四つ五つ位に、切りましてから、横に細かく、らん切にして、煮出しと鹽と、味醂を少し入れて、煮るのです。此汁がなくなりましたら、皿へうつして、さましておきます。

次に黒胡麻をあらひまして、炮烙に入れて炒り、擂鉢に胡桃を四五粒沸湯に入れて、皮をむいたのを入れて、よく擂つておいた中へ、炒りました黒胡麻を入れて、又油の出るまでに擂つた中へ、此擂つた黒胡麻と同じ量丈、並味噌を入れて、また擂つて、裏漉にかけて出ましたら、これと味醂を鍋に入れ、よく煮ましてから、皿へうつし、よくさまして、前に煮ました筍を、あへまして、丼にもり、上へ木の芽をあらつたのをのせて、出すのです。

此筍の分量は、適宜でよろしう御座います、只筍を煮ますに、筍とひた〳〵になる位に、煮出して味醂を入れるのです、其割は煮出し二合から、味醂五勺に鹽一勺位でよろしからうと存じ升。

黒胡麻は一合なら、並味噌が其黒胡麻を炒つて、擂つた分量と同じ程で、よろしう御座います、又味醂は一合位でよう御座い升。

◎筍のあちやら煮

筍を前に申しましたやうに、茹でまして、皮をむき、横に薄くきりまして、夫を又細かくきつて、鹽少々を入れて、酢につけ、夫から一時間もたちましたら、かたくしぼつて、砂糖をかけ、唐辛子を細かく、輪切にして、水にはなして、種をぬいたのを、前の筍の中に

ませ、二時間もたちましてから、とり出して、皿へもるのです。之は煮肴のつけ合せに、一寸よろしう御座い升。

これは分量と申すものは、別段御座いませんが、鹽は少しの方がよろしう御座い升。唐辛子も又多いといけませんから、これも少しの方が、よろしう御座います。

◎筍の雲丹燒

筍は前に、申しましたやうに、茹でまして皮をむき、横に厚さ三分位に、きりまして、煮出しと、味醂と、鹽を入れて、煮まして、煮汁がなくなりましたら、鍋から筍を出して、ほそい魚串にさして、兩面を炙り、雲丹を玉子の、黄味でとかしたのを、筍の兩面へ引いて、一寸炙りまして、皿へもるのです。

此筍を煮ます分量は、別にこうといふ事は、御座いませんが、筍がかぶる位で、よろしう御座い升。又其割合は、煮出し一合五勺に、味醂五勺、鹽は咖啡匙に、二杯位で、よろしう御座い升。

又雲丹を、玉子の黄味に入れて、とかすには、大根の切り口で、とくと、よくとけ升。箸などでは、容易にとけませんから、其思しめしで、雲丹をとかす前には、大根を用意して、お置きになるのが、よろしう御座い升。

◎筍のシチウ

筍を、矢張前に申しましたやうに、茹でまして、皮をむき、細かに刻んでおき、夫からメリケン粉を、バタでとかし、ソップと、鹽と、せり酒を入れて、前に細かく、きざんだ筍と、一緒に鍋に入れ、文火で四五十分間も、煮、それが煮上りましたら、胡椒をふつておき、又沸騰した湯の中へ、玉子を、割つて落して、すぐ穴杓子で、すくひまして、前に煮た筍を、皿へもつた上へ、のせて出すのです。

此筍の分量は、いか程でもよろしう御座い升が、バタが、食匙に一杯ならば、メリケン粉が食匙に一杯半、ソップが三合、鹽が食匙にかろく一杯、せり酒が食匙に二杯位で、よろしう御座い升。

◎筍のプヂング

筍を、矢張前に申しましたやうに、茹でまして、皮をむき、横にうすく、きつておき、又別にバタを、鍋に入れて、メリケン粉を入れ、とかしましたら、ソップと、牛乳を入れ、鹽を入れて一寸煮て、前の筍を入れてまぜ、夫から、パイ皿かそれがなければ、丼の中かへ、筍のまざつた汁を入れて、パン粉と、胡椒をふり、バタを少しのせて、上火のつよい、下火の強くない、天火に入れて、やくと四五十分もたてば、やけ升から、此パイ皿か、丼ごと出して、よい程に、わけてとるのです。

此筍の分量は、適宜でよろしう御座い升が、バタが食匙に一杯ならば、メリケン粉が、同じ食匙に二杯牛乳が一合、ソップが一合五勺、鹽が咖啡匙に、かろく二杯位で、よろしう御座い升。又パン粉と、胡椒は、適宜でよろしう御座い升。（以上）

◎筍と烏賊と木芽和ひ

筍の根の硬き部分を切捨て穂先を斜に切落したる後皮を剝き煠る時は湯に糠を入れて筍の灰を抜き、一時間程水に放ちたるのち適宜に切つて砂糖と味醂を加へた醤油で下煮をする、烏賊は足の先を五分ほど切棄て腸を去り細かに切つて之も亦醤油で下煮をします、次に木芽は山椒の新葉を擂鉢ですり、それに白味噌と砂糖を加へて味醂で摺延し、裏漉にかけて右の筍と烏賊とを和へるのです。

◎筍の梅和ひ

之は筍を梅干と和へるので、先づ梅干を熱湯に煠て裏漉にかけ砂糖を混せて擂りたる中へ筍をうでゝヨク灰汁の去りたる後、長さ五六分に細く切り刻み、少しく醤油で味をつけて梅干とあへるのです、之は御飯のお菜よりも酒の肴又はお茶受に適します。

◎筍の三ツ輪

これは烏賊と莢豌豆とを附合せて煮るのですが、一ツ〳〵に申すと烏賊は腸と足を去り背を開いて皮を剝

き、縦横に庖刀目を入れ長さ一寸五分幅を七八分に切り、熱湯に潜らせて霜降色に致し、之を煮るには醤油と味醂を半々の割に一度中揚げをして汁を煮詰め、再びざつと煮るのです、次に莢豌豆は花落と蔕とを去り洗つて鹽をふり置き、煮出汁、砂糖、醤油を一緒に沸かし汁の煮詰つた時入れて煮るのです、又筍は普通のうま煮を今少しく甘加減にして前の二品と盛合せます。

◎筍の關東煮

之は筍に筋蒲鉾を附合せるので、筍は例によつて煠て灰を抜きたる後うき煮となし、蒲鉾は魚の筋を肉に雜せて拵へたもので東京では單に筋と申して居ますそれを木口から薄く切り、粗と煠て醤油と砂糖で煮しめて筍に添へるのですが、之は熱いのより冷めた方がお旨うムいます。

◎筍と豚の味噌煮

煠でた筍を木口から薄く切り、水を換へて灰汁を出し、豚肉はうでし水に潜らせ、偖て鍋に胡麻油を少々沸して筍と肉を一緒に煮め、之に適量の水を注し鰹節と少量の味醂、砂糖を入れ、次に摺味噌と醤油を入れて大抵味のしみた頃おろし、餘り煮詰めぬ方が結構です。

◎筍　飯

煠でた筍を木口から薄く切り、次に油揚豆腐を一つ縦に渡して細かく刻み、沸湯を灌いで油氣を去り、さて煮出汁一杯、味醂一杯、醤油一杯の汁を沸し筍と油揚を一緒に煮上げ置き、御飯を移す時混せてもよければ泡を吹く頃一緒に炊込んでも宜しい、又此外に煎卵や燒海苔を茶碗に盛る時かけるのもあり、木芽や生薑を添へるのもあり、それは各自の料理加減で如何様にもお旨く出來ます。

季節漬物のしをり

くりや女

漬物の季節は普通秋の末から冬へかけてヽすが、併し大抵の家では四月頃になると、モウ澤庵はヒネにな

る、菜漬は酸ばくなるといふ工合にどうしても美味いのが無くなつて、新らしい物が欲しくなる時分で、謂はゞ漬物の替り目とでも申しませう、ところが秋とは異つて段々暖くなるにつれ物が腐敗し易くなりますから、何を漬けるにしても先づ糠味噌の手加減が第一です。

◎糠味噌の拵へ方

冬季の糠味噌ですと糠一斗に鹽五合の割合で拵へますが、春季はそれよりも鹽を二割方強くして其代り漬ける日數を減します、先づ糠一斗に鹽七合を混せて桶に入れ、次に三合の鹽を二升の水にまぜ充分沸してそれを冷したる後糠に混せてよく攪廻し、其處へ酒三合又は酒粕三百目を入れ四五日其儘に寢かして、それから物を漬けるのです、で新に拵へた糠味噌には成べく水分の多い蘿蔔、蕪、京菜、細根、小蕪、胡瓜、生姜、刀豆のやうな物を漬けた方が早く糠が馴れて漬物も亦結構に出來ます、而して漬物を出入れする毎に糠味噌をヨク攪廻しておかないと味が惡くなりますから、夏分の如きは特に注意して日に幾度も攪混た方がよい、それに魚類を漬けた味噌や醬油、乃至殘酒のやうな廢物を利用して此中へ入れると大層美味くなります、又糠味噌に水が溜ると漬物が水ッぽくなるから屢々その水を汲み出し桶の置場所は日の射さぬ冷たいところが宜うございます、汲み出すには笊の樣なものを入れて上水をとるのです。

◎蘿蔔の榊漬

東京邊では之を切漬と稱して冬季よりも春と夏に多く漬けます、先づ蘿蔔の根と莖とを切離し、莖は細く剉み、根は五六分の長さに輪切となし、それを縱に短册形に薄く切り、莖と一緒に桶に入れ一摑みの鹽を投じて手でヨク揉み、一度水をかけて固く絞り、再び漬物桶に入れ鹽をふつて中蓋を致し、輕く壓石をして朝漬けると夕景には丁度喰加減になります。

◎赤蕪の糀漬

赤蕪は東京附近にも出來ますが一番好いのは北海道產ので、春の漬物としては最も結構です、之を三

十個ほど漬けるには糠三升、糀二枚、鹽五合の割合で一緒に混合し、蕪は二三日前から日光に曝しおき、漬ける時は今の混合物を樽の底一寸位の厚さに撒き其處へ蕪を並べ、乾蕃椒を適宜に加へ、其上へ更に糀と鹽をふりかけ中蓋をして壓石をおきますと大抵二週間目に喰られます。

◎蕪の蜜柑漬

今の赤蕪なら一番結構ですが普通のでも宜しい、一つの蕪を三つ位に輪切となし、鹽揉みにして水で洗つた後淺廣い器に入れ蜜柑の液汁を之に搾り込みます、其處へ細く刻んだ煮出昆布と乾蕃椒とを漬加へ、次に醬油を少し注して一夜漬けますと可加減に美味くなつて酒の肴には殊に結構です、但し三日より永くは持ちません。

◎蕪の早味噌漬

一つの蕪を四つか五つに切り、鹽壓しにして三日程漬けたる後田舍味噌の鹹いのに漬込み、間々に味噌の萬遍なく行渡るやうに致し壓石をして十日程經つと可加減に美味くなります。

◎京菜漬

漬菜一樽につき鹽二升を標準として、最初樽底一面に鹽をふりまき、其處へ菜を一側並べにして株の方へは特に多く鹽をふり、中蓋をして重石を置くのですが、之は漬過ぎると不味くなるから一度に多く漬けずに生漬りの頃に食します。

◎大芥菜漬

大芥菜は東京よりも關西から九州地方の名產で、四五月頃に漬けて夏分食じます、先づ菜をヨク洗ひ水氣を去り一日日光に曝して漬けるには腐敗を防ぐ爲に普通より多く鹽を撒りかけ乾蕃椒と昆布を刻みこみます又根倚の太い所は皮が硬いから皮を剝き、之を軟くするには少量の炭酸曹達を入れます。

◎獨活の酢味噌漬

獨活の皮を剝いて三日間ほど鹽に漬けたる後、摺味噌に酢五勺と少量の味醂を加へ二日ほど漬けて生漬りの中に食べた方が結構です。

◎胡蘿蔔の芥子漬

芥子漬と云へば大抵茄子に限るやうですが、胡蘿蔔の芥子漬はそれよりも一層結構です、最初にんじんを鹽に二三日漬置き偖て生の芥子一升、糀一升、醬油五合、味醂三合をヨク混合し、其處へ鹽漬にんじんを水で洗つて漬込み密閉して一ヶ月程おくと好加減に漬ります、之は長く貯へる漬方ですからドウしても芥子の色が悪くなりますが、若し當座漬にして色を美しく見せるには、にんじんを多分の鹽で鹹く漬け置き、入用の際に取出し水で鹽出しをして味醂又は煮返砂糖に一兩日漬け、芥子を攪き水で延してにんじんにかけるのです。

◎胡蘿蔔の糠味噌漬

最初胡蘿蔔を普通の糠味噌に一週間程漬け更に細かく剉んで味醂を加味した白味噌に漬けて二三日經つと美味くなります、之は酒の肴にもなれば又洋食の後などには殊に結構です。

◎牛蒡と蕪の芥子漬

蕪は莖を少しつけて薄く切り、牛蒡も澁皮を去つて薄く切り共に鹽壓をして水をきり次に芥子を美濃紙に包み熱湯をかけてアクを拔きたる後酢と味醂にてとき其處へ蕪と牛蒡を入れて攪混せて置くと半日ばかりでヨク熟れます、但し夏分は四五日しか保ちませんから其お積りで召上れ。

◎刀豆の粕漬

刀豆を一旦鹽漬にしたるのち出して太陽に晒し、味醂の粕に鹽を加へ其中へ刀豆と刀豆と摺合はぬやうに並べ、粕を充分に入れて桶に漬けますと、一週間位で旨く食べられます。

◎筍の阿茶羅漬

筍をざつと煠て灰汁を拔き四ッ割にして一寸許りの長さに切り、二日ほど日光に曝しおき、醬油一升、味醂二合、酢一合を混合して沸騰せしめた中へ、生姜、昆布、茗荷の子と共に筍を漬込み、一週間ほどすると食加減になります。

◎蕗の養老漬

蕗は五月が盛りですが其頃になると莖が硬くなるから四月中旬頃が恰度漬加減です、さて蕗の上皮を剝き雜と煠て澁を拔き五六寸の長さに切つて二三日太陽に乾したのち、醤油一升、味醂粕百目の割合にてヨク混合した中へ漬込み、二週間の後に食します。

◎甘粕漬

麴と米と鹽とを各一升づゝ等分に用意して、米は普通の御飯より少々硬く炊き一寸いきを拔いた所で鹽と麴を入れてヨク搗混せ、甕の中へ入れて密閉し一ヶ月程經つてから蔬菜を漬込むのです、今の季節なら刀豆筍、蕨、獨活、椎茸、山葵等ですが、其他何を漬けても一週間位で結構に出來ます。

◎奈良漬

奈良漬の瓜を漬けるには八九月頃ですが其原料の粕は今から用意せねばなりません、四、五兩ヶ月の中に米一升、麴一升、鹽三合の割合で先づ米をふかして鹽と麴とをヨク混合し、甕に入れて酒をふりかけ密閉なし置き、入梅になつたら再び酒をかけて元の通り蓋をしておき、さて八月中旬の瓜の盛になつた時買入れ、一夜鹽漬にして前の粕につけ込み正月頃に最もお旨くなります。

◎福神漬

この材料は裂干大根、刀豆、茄子、紫蘇、若筍等がありますが、裂干を除く外は皆な鹽漬にして貯へて置きます、そこで裂干は漬ける前に一時間ばかり水に浸し之を木口から薄く切り、他の野菜もヨク洗つて刻みおき、醤油一升、味醂五合の割で煮沸し詰り加減にして冷したところで、前の材料を一緒に投じ、清潔な蓋物に入れて十日程寢かしておくと恰度好くなります。

◎薤漬

薤漬の季節にはチト早過ぎますが序だから申して置きませう、先づ薤の薄皮を剝き去り後先を切捨て笊に揚げ、臭味を薄くする爲に熱湯をかけ置き、次に鹽を萬遍なくふりかけ沸した鹽水の中に入れて壓をかけ、五六日の後薤を取出し笊に揚げて水を注ぎ、さて酢五合、砂糖半斤、鹽一合を七合の水に混せて沸騰

せしめ、よく冷めたら之を甕に移し其處へ薤を入れ密閉して冷たい所に貯へ、一ケ月程するとボツ／＼漬ります、之は漬汁が少いと黴がついたり蟲が酵いたりするから、汁が充分かゝつて居る様にせねばなりません。

◎鯛の南蠻漬

今度は魚類の漬物を二三種申上げますが、就中一等お旨いのは鯛の南蠻漬と申すので、之は鯛を三枚に卸し暫く鹽をして小形に切り、一寸日光に晒して生姜の汁に一夜浸け、其翌日再び日光にあてゝ甘酒に浸け又一夜してから三たび日光に乾し、今度は煎酒で二日間漬けるのです。

◎鰯の糠漬

新鮮の鰯を頭と腸を去り鹽をふりかけ三時間許りおきて、糠六升、鹽四升の割でよく混和し米泔水で煉り糠味噌のやうにして其處へ鰯を漬込み壓石をして一兩日すると漬ります、食する時は糠を洗ひ四五分位に適切にして酢に浸して食べますと寔に結構な味で、常菜にして客膳にしても大層經濟的でございます。

◎鎌倉漬

小鯛、鱚、鯵等極めて新らしい魚のみを撰び、頭、腸、尾鰭を去つてよく洗ひ、溜醪一升、酢三合、鹽三合を合せて煮返し漬下地を作り、壷に移してそこへ魚を漬け目張をして數日の後食するのですが、之は骨が柔かくて大層風味の佳いものです。





美妙なる音律、或は高く或は低く、切々喞々、高峯を嵐の飛ぶときけば、春の水いゝさ川にせゝらぐ、我を忘れて、たゞウ井オリストの白き顔を見てあれば、うつとりとなつて月のやう。

醬油の鑑別法

▲或人は、醬油を簡單に鑑別するには、鍋にたらして沸騰させて見ると能くわかる、良い品は上へ白い泡が浮くが、惡い品は其れが浮かないと言つて居ますが、之れは當になりません。試みに其れを遣つて見ると、成程極く惡い品には浮かないが、上等の品にも浮きません。泡の多く浮くのはつまり中等の品です。

▲最も確實なる鑑別法は、指につけて嘗めて見る事、香をかぐ事、色澤を見る事などであります。品質の良いのは、色が淡くて、香がよくて、味に重みがありますが、惡いのは、色が濃厚で、香はわろく、味に餘韻が無いから、何人にも分ります。或は刺身、豆腐料理などに使つて見るのも良法で、其れを食べて見れば品の良否は直に知れます。

▲良い品は風味がよい上に割りが利きます。例へば、吸物を作るに、並みの品では一升の水へ一合入れて相當とすれば、良い品は七八勺も入れゝば十分です。又惡い品を使つて好い味を有たせる爲に往往味醂などを使ひますが、然かも到底良い品の自然の風味には及びません。即ち良い品は味が好くて且つ經濟に當ります。故に近年迄は値が安いとて下等物を多く使ひましたが、此頃では諸方の料理屋を始め一般家庭に於ても多く上物を使ふやうになりました。

▲東京附近で出來る醬油では、野田の三印——龜甲萬、木白、上十、銚子の四印——山サ、地紙サ、其他の二印、などは先づ良い方でありませう。就中野田の龜甲萬は天下一品の稱があります。此等は樽詰の儘で買へば間違は少ないけれど、瓶詰などになると大抵僞物が這入つて居るから御注意なさい。

▲品質の良い醬油は下等物よりも黴方が薄いが、それを全く防ぐ法は今日はまだありませんから、之に對する方法としては、樽の口を成るべく下方に置き、中味の盡きる迄其儘動かさぬ樣にしてお使ひなさい。斯くすれば黴の出來方も少なく、又流れて出る事もありません。尤も樽の中へ生薑一片入れて置けば、幾分か黴方が少ないと云ふ人もあるから、一度は試めして御覽なさるがよろしい。

和歌

三宅花圃女史選

（天）折にふれて　岩代　岸野常子

おもはすも君か門まてきつるかな
　里川つゝみ小草つみつゝ

評、無理なきしらべゆかし。

（地）暮春　下野　外塚あさ子

門に出てゝ暮れ行く春を惜しみ居れは
　をちの山々雨となりけり

評、なさけこもれる歌なり。

（地）閑居花　横濱　鈴木まつ子

小てふのみけふもとひ來てわかいほは
　花のひかりも靜けかりけり

評、清閑なるさまうらやまし。



（人）對岸花　河内　櫻井貞子

まそ鏡むかひの岸の花咲きぬ
　蝶よ羽かせわれもわたらん

評、調も心もかろし。

（人）山初雪　越後　坪井わか子

重なりて一つに見えし遠近の山
　ふりわけて見する初雪

評、けしきおもしろし。

（人）田家梅　赤坂　矢澤民子

ふく風に香をとめゆけば小山田の
　賤か垣根の梅さかりなり

評、ふるき難はあれどよみなれたり。

佳調

育兒院　　香川　松本史子

大御代の恵の露に山吹の其みなしごも春に逢ふ哉

○　　相模　文子

すや〳〵とねむれる稚兒の袖の上にさくらちるなり花の下路

師の君の三十年勤續をたゝへて　　備中　落合嘉美

三十とせのめぐみの露にうるほひてみどりそひゆく庭のやち草

春雨　　備中　落合ひろし

惠むたびみどりいやます春の野はふる春雨のしるしなるらむ

小田川のれこやなぎを見て　　備中　落合靜子

小田川の岸の柳に風たちてそらにちりかふ花の白雪

友の婚を祝ひて　　備中　落合エイ

千代經べき森の木かげにあし田鶴のかたらひかはす聲の床しさ

題知らず　　信濃　小林公子

父上のひざにすがりてなき母をたづぬるちごに袖ぬらしけり

偶吟　　岐阜　度會敏子

世の中はかゝらむものか揚雲雀落つる時には聲もきこえず

題しらず　　下總　岩瀬不二野

散る花をしら帆にとめて吉野川なみのあやせを下る舟かな

琴　　信濃　前島きよか

森の花薫る小窓の月かげに誰が琴の音ぞゆかしかりける

東都の遊學生に送る　　筑前　吉田響

降りつもる雪間をわけて咲く梅の雲井に匂ふ時ぞまたるゝ

東山　　攝津　三宅菊子

布團着て寝たる姿によきほどの霞の幕をひかせけるかな

春の月　　四谷　松田春子

水清き里の小川の底見えてしづかに搖るゝ春の夜の月

池邊柳　　埼玉　大熊嘉壽子

風ふけばさゝなみ見ゆる池の面にかげうつしけりあをやぎの糸

春月　　山形　佐藤とした

青柳絲のかみにさしそへてくしと見せたる三日月のかげ

友の病室の紅梅をみて　　肥前　嬉野金子

朝な夕なみ枕近う侍りては君慰めよ紅梅の花

春の海　　長崎　綾子

ま帆かた帆かすみにきえて鷗まふ渚にみだる白波の花

春の月　　同　同

羊よぶ牧笛きえて菜の花の香床しき朧夜の月

杜頭杉　　山口　小野朋子

千早振る神代ながらに榮えけり雲井はるけき大宮の杉

夕霞　　京都　宮下園

夕まくれ比叡のおろしの身にしみてあわれを誘ふきさらぎの月

早春　　丹後　旭小枝

きさらぎの風も身にしむ川ぞひのせりなつみゆく姉いもとかな

讀書　　千葉　金子みさを子

故鄕や菜の芽つみつゝはらからといさかひあひし昔こひしも

逸題　　栃木　瀧田しげ

ふりつみし雪のあしたの那須の野はなげる海原見る心地して

春夜　常陸　菊地峰子

聲ひくき窓の我が歌人は知らじ梅咲く宿のおぼろ月夜に

春鶯　京都　四辻湾子

鶯のなくれゆめぢにかよひきておぼろにあくる春のあけぼの

春雨　岐阜　片田美濃子

そらたきの煙しめりてなすの外に春雨匂ふ夕さひしも

望佐渡島　越後　石山とら子

あしたいてゝ夕にかくる雲なからわかるゝ情しき佐渡の島山

春雨　備中　落合ゑい子

春雨の一日二日とふるまゝに緑そひゆくはるのわか草

田家立春　備後　杉田坂子

賤が男は心長閑に畑打ちぬかゝる里より春や立つらん

題しらず　丹波　青木さよ

うぐひすよ暫しな啼きそ妹は膝に眠りぬいたみわすれて

雪中の梅　山梨　井出まさじ

雪もしらずやしばしすこすらん雪につゝめる庭の白梅

ゆく春　茨城　小島つれ子

なしめども高根のかすみ野のかすみ消るゝまゝに春ぞくれゆく

そゞろ心　本郷　熊谷りき子

梅が香にそゞろ心のゆめさめぬ嫁くべき我のたしなみいかにと

失題　兵庫　今井敏子

引舟のかげのなかばをあらはして霞にあくるあけぼのゝ空

歸郷の前夜　牛込　重子

幾許へてあしたまつ夜の永きかなつきぬ思に夢もむすばで

落花　同　同

千陣の風と戰ひ今はとて総清くも散る櫻花

題しらず　豐後　西野柚子

午下り絵日傘續く川添ひの菜の花の村家鶏むれ鳴く

逸題　鶴見　白鍈

みどりゑがく並木雲みち富士かさにおもわかくしてゆく乙女かな

春の歌の中に　横濱　濱野たけ

入相の鐘を恨みし春の日も永きをかこつ身と老にけり

折にふれて　濱花　みさを

さらぬだにいぶせきものをいたつきのまどに淋しく小雨そぼ降る

冥　美濃　傍島女史

村さかひ堤みの上の日あたりにほしならべたるなま瓦かな

春の朝　大阪　靜子

朝霞白帆も見えて濱寺の横山たかく雲雀なくなり

折にふれて　澁谷　原田ふの

朝がほの露のひるまのひとさかりはかなき事も忘れてぞ見る

柳　越後　石山とら子

すみわたる池の鏡に青柳は姿うつして梳るらむ

失題　長崎　綾子

うすみどり富士の高根もかげうつす田子の浦わの春のあけぼの

題しらず　山梨　井出しつえ

れやちかき竹のしげみに朝な〳〵れさめうれしき鶯の聲

折にふれて　本所　木村歌

風ひきや日毎にうさのます鏡見るかげもなき身とならんとは

失題　伊豆　古谷靜江

沖遠くかすみ渡れり伊豆の海七しまかけて春や來ぬらん

毎朝聞鶯聲　沖縄　吉永和歌子
朝戸出のたもとすゞしき木の間よりのとかにきこゆうくひすのこゑ
春の日よめる　兵庫　富田艶子
鶯の聲はいづこのたゆたひに流るゝ花のゆくゑをぞ見る
春のうたの中に　尾張　豊子
七重八重かすみはこめてみぬおくの花の香をくむ春の山川
ゆく春　岐阜　山本さと子
入あひの鐘の音淋しゆく春の花より後の夕ぐれの空
藤　神戸　西わかれ子
手をうちて鯉に餌をやる雛僧の袖にもつるゝ白藤のた
思古郷　臺北　宮崎孝
春雨のふりしきる夜の淋しさに思ひ出多し古里の山
春朝靜雨　長門　内田策子
花を待心はかりはいとなくて朝しつけき春の雨哉
若菜　下野　林ちゑ子
何方に行きて摘みてん春日野に萠えし若菜のはてしなければ
梅　牛込　岡つれ子
春風のふきくるたひにゝほふかなかすむ野つらの梅やさくらむ
題しらず　下總　岩瀬不二野
そのむかし君と結びしふるさとの小川のやなぎ今かもゆらむ
深山花　神田　月枝
もゝ鳥のこゑをたよりにわけ行は花にはてなきみよしのゝ山
假春花雲　千葉　小堤端正
春雨の晴れゆく雲と見えつるはたか櫻の花の咲けるなりけり
児なりける人病にふしける折に　埼玉　宮倉仙子
なくさむる言の葉なくて病む児のやせたるおもわうちまもるかな
待花　本所　印出井きん子
うら〳〵と御空に霞む山里のはなの便りもほとなかるらん
花間春雨　周防　小越亀代子
おのつからむすふしつくも匂ふなりはなのこすゑにかゝる春雨
題しらず　廣島　加藤しすい
君います宿とおもへばなにならぬ垣根の草もなつかしきかな
紀元節に[illegible]　宇都宮　松元のぶ
とことはに大みひかりのますかゞみくもりなきよを祝ふけふかな
春里　奈良　清水むめ
楽しく咲き出でにけり山城の伏見の里の桃の初花
朝　千葉　金子みさを子
桐の芽につゆきらめきて百鳥のうたをもしろき朝ほらけかな
若菜つむ少女を見て　京都　小手まり
若菜つむ乙女子みれば何となくむかし戀しくなりにけるかな
折にふれて　伊勢　山路くに子
新妻が忍び泣きする梅の窓春の小雨は音なう降りぬ
みなしご　大分　陶山きよ
明日よりは飢ゑに泣くらん幼児がはひよる母のちぶさつめたき
逸題　大和　齋藤枝子
このころをまちしれがひの切りもせずむなしく柳若芽ふきけり
子　山口　末田貞節子
育てあぐる吾子御國につくせよと起きふし思ふ親こゝろかな
冬戀　奈良　山川かほる

擬起す人だにもなき埋火のたゞいたずらにきえん我身か

ふと見て　伊勢　たき

いさかひて少し痛めし頬のかすり母に見せじと花かざす子よ　筑前　木村こま

迷雁

雲の音にさそはれてゆくらなくと戀し紫と歌かたりする

折にふれたる　大阪　岐山龍子

子雀のおぼつかなげにとぶ見えて梅の花ちるいけがきのうち

冬眺望　福岡　柳田トヨ子

霜がれてすごき木立の西山にほの三日月のかげのさびしさ

春の野　周防　國富清嘉

花も咲きぬ蝶もきてまふ春の野にすみれつむなり美くしき人

鳥　下谷　田代糸子

小夜深くうきれのとこや氷るらむ聲も寒けくなし鳥のなく

折にふれて　柏崎　ゆかり女

わかゝとの家の畑につらなりてすそ野もわかぬふしの遠山

社頭松　播磨　たつ

ときはなるいかきの松はすへくにのつきせぬみよとともにさかえん

父君の十七年祭に　信濃　松尾節子

春ごとに花は咲けども白梅の植にし人は世にあらずして

春の歌のうちに　信濃　松尾節子

鶯の初音をきゝし梅の枝に降れどつもらぬ春のあわ雪

題しらず　廣島　立神ハル

おとなへば琴のよき音のつとやみて衣すれやさし春の夜の人

折にふれて　荻野くに子

こゝろあらばよみぢへ送れ春の風父がめでにし梅のかをりを

枝垂櫻　同

月おぼろ瀧もぞ落つと思ひしは岩間にたるゝ櫻なりけり

田家花　三重　帆山あきつ

咲き匂ふ花にうかれて賤の女もはたけ打つ手のたゆみ勝なる

夜春雨　三重　帆山しづ子

いつしかも朧の月の影きえて雨になりゆく夜半の淋しさ

春雨　青森　三浦愛子

苗うりの乙女の小唄おもしろき春の雨ふる下京のまち

春月　群馬　高橋深雪子

すみ染の夕の空の花くもりなりあはれにも月そ匂へる

松間鶯　尾張　さみしきひと

雪きえし岡の松原わけ來ればあさひかすみて鶯のなく

立春　三河　岩瀬雪子

我宿の松のこずゑを吹く風も春の調をうたひ初めけり

矢雁　廣島　田上たま

參らしし梅の一枝にたまはりしみうたとのみなとてうれしき

鶯　京都　四辻清子

朝な〳〵きけどもあかす朝な〳〵梅にきてなくうくひすのこゑ

殘雪　河内　秋子

消え殘る垣根の雪もさく梅の匂ひの中になりにける哉

木枯　赤坂　矢澤民子

ましらなくこゑもきこえて冬の夜の寒さ身にしむこがらしの風

題しらず　上總　細谷牧子

宵の雲月に映りて霧ふよ櫻ほのめく山のあひだに

笛の音　伊豫　井手不二

おぼろ夜に誰かすさびや尺八の梅の林をすきてゆくかな
水師の盛栄を祝して　伊豫　熊谷　巴
年々に文の林の生茂り言葉の花そ世に匂ふなる
霧　大分　南山きよ
くり毛馬にのる武士のひなどしの鎧の袖にうつる夕映
矢嵐　上總　山口いく子
小山田の畔道行けば一群の菫亂るゝ初春の風
逸嵐　美濃　育子
卯の花のまかきへたてゝ風呂呼はる聲になさけのみてる里かな
梅　前橋　宮内りき子
朧夜の灯影さし添ふ柴垣に琴の音もるゝ白梅の花
朝霞　大阪　山田
きのふまてあらはに見えし遠近の山もかすみておほろなりける
逸嵐　香川　山西昌子
行く春に取り殘されし鶯の青葉の中に鳴く思ひ哉
雪消　秋田　小松蔵子
物濯ふ水のぬるみに日の照りて雛子なくなり雪消の里
春の歌の中に　攝津　倭文子
長き日のくるゝもしらでをとめ子はのどけきひと日野邊にくらしつ
堤柳　神田　小笹千代
江の南しづかにくれて青柳の堤の上に月出でにけり
梅　周防　三浦澄江
心して宿れ鶯我が庭の花の盛りの梅の小枝に
柳下鶯　大隅　林たみ子
青柳の糸にひかれて少女子か暮るゝも知らてすみれつむなり
逸嵐　四坂島　渡邊梅子
とかれさりし其一言をよもすからしぬひし朝の鶯の聲
行路柳　大隅　林幸子
道の邊の若菜つむ子か袖の上になひきかゝれり青柳の糸
野遊のかへり　麹町　きん子
こぼれ出る籠のよもぎにまづ今日のたのしさ見せて歸へる乙女子
蝶　備後　平岡敬子
夕雨に宿りやかふる蝶々の菜の花畑を舞ひ出にけり
矢嵐　美濃　林節子
遠山の霞眺めて徒らにこぞの都を偲ぶ今日かな
夫身まかりければ愛兒をおきて生家に
歸りける折　千葉　やす子
みるも夢さむるもゆめの世の中やうつゝのやみにまよふ此頃
桃　越谷　中村千代子
亡き兄の墓に捧ぐるくれなゐのもゝの花さへ露をふくみぬ
遠村霞　備後　菅いと子
春の日のはやくもくれて程とほきゆくてにかすむともし火のかげ
初春鶯　備後　淺見ユキ子
何となくのどけくなりぬ鶯の聲のふるすをいでし初音に
折にふれて　備後　菅房子
九重の大宮のうちのみやひわざもれきくばかりうれしきはなし
熱海にて　遠州　鈴木輝子
大島もかすみかくれにほの見えて漁つる舟のたゞよふらしも
小學校　下澁谷　平原千代子
君が代のめぐみの露にうるほひていとゞ色そふおみなへしかな

寮舍に上りし妹より寫眞を送り越せしに　靜岡　竹原八重子

末永く學びの道をふみしめてうつせし影のたのもしき哉

暮春　名古屋　淸水みさを

大井川花のしがらみかけてせる流れてすぐる春の行てを

機路つゝじ　同　同

かり取りし眞柴が上に岩つゝじ添えて深山の春をつたへん

題しらず　本郷　若子

入る月のさむき夕をわがためにきぬ縫ひおはす母おもひぬ

積雪　伊豫　勝山みどり

野も山も里のわら家も白銀のたゞ一いろになれる今朝哉

都春　肥前　南しな子

九重のみやこは春の盛りとてはな見車のおとぞひまなき

折にふれて友垣にまゐらせし内　兵庫　野田とき子

わが宿の老木の櫻さかりなりいざ見に來ませ風ふかぬ間に

春野　飛騨　錦霞女史

霞にかすむを見ればたゝ霞のとやまのすそ野菫咲くなり

題しらず　東京　小澤さだ枝

おもしろうつみてくづして小供等が小石に遊ぶ三尺の庭

花未開　千葉　松山末子

春ことにみる色なれとみることにあかれぬものは花にそ有ける

柳　長崎　高柳節子

うちなびくかぜのまに／＼もつれあふ岸の靑やぎ春めきにけり

逸題　長野　原めぐみ

旅の空今日ひもすがら風やまずまさきくおはせ故里の母

題しらず　島根　森山キン

琴のぼるねずみの音の冴ゆるなり文讀む冬の夜や更けぬらん

折にふれて　大阪　後閑八重子

たちこめし霞うすれて鶯の音色のどけき春の山里

失題　大阪　諷綾子

逝く春を我が身の上にくらべみて花散る窓にひとり物思ふ

失題　姫路　尾田四鶴子

世を避けて牧に牛飼ふ旅とせを我も若いたり妻も老いたり

春曙花　下總　小堤はる子

横雲のなびくと見しは空目にて花になりゆく春の明ぼの

春山　埼玉　大塚明霞子

百鳥のさえづる聲にさそはれて深くもいりぬ花のやまみち

訪ふ人稀なる我宿の庭の梅が枝に鶯の聲きこえければ　靑山　高木すゑは

春風にさそはれきけむうぐひすの人も訪ひこぬ我が宿になく

＊　＊　＊　＊　＊

應募歌の中に古歌を其まゝかゝれたるがあまたありたとへば「鶯の鳴く野邊ごとに來てみれば移ふ花に風ぞ吹ける」また「世にふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞ鳴く」ごとき耳ちかきのさへあるはあまりなるべしとて

よに匂ふ人の言葉の花折りて
かざすをはえとなと思ふらむ

龍子しるす

短文

甲賞

淋しい姿

本郷 藤田豊子

今日學校のかへりに、お茶の水で、久し振りに野中の百合さんにあつて、あんまり變つたお姿にびつくりした。見れば油氣なしの無雜作な束髮に、濃海老の袴、五年前には、中山農學士とのホネームーンを國のステーションで見送つた時は、赤い手柄の丸髷姿可愛い〳〵奥樣振りであつたのに、どうした事かと聞けば、お姑樣のお氣に入らないのでお睦しいしかも御子樣迄ある仲を、去年の秋とう〳〵お別れになつたとやら、

「何も運命でれ」と、はつきり仰つしやるものゝ、何處やら力ない淋しい御容子に、思はずほろりとした、どこまで浮世の風は無常に吹くのかと、つく〴〵身にしみた、あゝ結婚ほど樂しい而かも恐しいものは又と世間にありませうか。

乙賞

妾の生活

長野 渡邊松子

夫婦差向ひに、下女一人、家も廣からねば朝食前に掃除は終る、主人は公務で出勤がちなれば、自分は朝から机に寄つて讀書するのが唯一の仕事である、興を催せば歌でも作つて樂んで居る、時々友の訪ひ來て面白き話などして半日位過す事もある、又自分もたまには他を訪問する、食事と云ふても人數少なければ手數もかゝらず、洗濯物とて子供もなければ澤山はない、下女は退屈だとて不平を云ふ、夫故下女には小使取のためバテンレースをさせて居る、自分は暇で氣樂で此のまゝ一生すごせるものかしらと末の事共考へると、氣味の惡い位で有る、之れで宜いので有らうか、是で職分を盡して居るので有らうかと、自分は今の身の上を自分で氣遣ふて居る。

乙賞

寫眞を待つ

奈良 梅田つゆ子

庭の椿に鶯のなく朝であつた、妾は縫ひかけの袴を縫つて居ると、わが最愛の妹と契りし美耶子さんからの手紙がついた、相變らず字は美しい、「撫萄寮にて美耶」とある、「姉樣の御手紙は燃ゆる思に拜しました、御返事おそうなりまして失禮でした、此頃はボツ〳〵試驗風が吹いて來ましてれ、私の級では先日地文がありました、歷史も近々に不意打をやられさうです、先生の御顏色ですからなか〳〵油斷がなりませんのよ、今日は外出日で、一寸寫眞をとつて來ましたから、ぜひ姉樣にと思つて居ります、昨日私共卒業

の紀念にとて、永くなれ睦びし寮友會員一同、あの心字ヶ池のほとりで撮影しましたから、これも御一緒に御送りいたしませう。姉様のおすきな寮監の先生もいらつしやることよ。姉様と共に手に豆をこしらへて掘りました心字ヶ池は、今もかはりなう友の心と共にとこしへにと澄んで居る事を御認め下さるでせう。後ろにはおなじみの小使の椿も常も居りますよ。姉様から御手紙下さる毎にいつも室まで持て來てくれては、「やさしい炊事長さんだつた」つてよろこんで居りますよ。それで私も姉様の御德を汚すまいと注意して居りますのよ。あゝもう私も姉様の御あとを追ふて母様を離れなければなりません。もう上京は思ひ止まりました。ですから私も遠くの空で姉様のやうに田園の空氣を吸つて、なつかしい昔がたりを雁のたよりにいたしませう。れ、いつもながら亂筆御免下さい」。あゝ美耶さんの心は花とやさしい。でも待たれるのは二つの寫眞、この一日二日が千秋の思といふもまだ足りないと思ふ。

（丙賞）

薪取り

備後　松永繁子

「一休みしませう」と父上に云ふと、「それもよからう」と、早速腰の煙草入を手に取つて、今刈り集めた薪の上へ腰をおろしなさる。私も休む。私等二人は今日、此の山へ柴木を刈りに來たのである。中には芽を出し花も咲き實を結ぶ木もあるのを、惜しげもなく切り拂つて薪を作る。かれこれ三時間、私はせつせと働いた。背には汗さへ出て、暫く休むのが何とも言へぬ心地である。父上は煙草をつめてはぱくり〳〵。煙は輪をゑがいて昇つて行く。春は淺いから、わらび、ぜんまいなどは、まだ山里の乙女が唇を一寸觸したやう。花はまんさくに三角草位が僅に開きかけてゐる。樹梢には小鳥が鳴く。山にも野にも霞が立てこめて、炭やきの煙が、ゆつたり登つて居る。花の香を送つて來た春風は、私の亂れた黑髮を撫でる。私が斧を持つた手をあげると父上も又斧を手にして立ちあがられる。

（丙賞）

僻地

但馬　繁子

如何に鄙とはいへ、十八年も住み慣れた神戸から、この但馬と聞いた時は、遉に不安の念も起つたが、來て見れば却々おもしろい。お隣の友さんの様子等を妹に見せてやりたい。此間もお父様がお前のいふセツケンとはシヤボンの事かとか、彼岸の中日にホラホを出せとかお仰つたこと等實におかしい。暮し向の事でも鍬が張物板になる事などは來る迄知らなかつた。塵捨場も桑畑の方が箱よりよつぽど工合がよい。住めば都とはほんとによくいふてある。

丙賞

梅雨

下野　築谷德子

喧しくなく雨蛙の聲に驚いて、窓を開けると直ぐ前の梅の木から、青い梅の實が一つポタリと落ちた、何所の子か知らないが垣をくゞつて來る、實を拾つて口へ入れやうとすると、「食べてはいけない」といふ聲が何處からかきこえる其の子は慌しく口から實を放したが、未だ手にもつて殘り惜しげに見つめて居る、「早くすてゝおしまひ」、今度は優しい聲、姉樣であらう、捨てられた梅は轉々とまはつて、泉水へ二寸位の所で泥にまびれる、また一しきりギヤーギヤー雨蛙がなくと、シメ〳〵と雨が降つて來た、泉水の水の面に何か物が浮ぶ、一尾の金魚が之を見屆に出ると、又一尾がおつて來る、濁水が段々小溝の方から流れ込んで泉水の水は金魚の姿をかくしてしまつた。

梅が香

愛知　榊原愛子

如月中頃、山里なる友がり訪ひぬ、えならぬ梅が香に誘はれて、しめやかなる苔の細道たどり行く程に、一つの庵あり、木立ものふりて、庭の景色も心あるやう、杉の生垣のほとりにはもゆる若草二つ三つ庭の彼方には大なる梅の木あり、これなん友が住家ならめと訪へば、友は柴戸押し開きて、「立田姫の君よ。ようこそかゝる山里を尋れ給ひしよ、佐保姫が住居はこゝになん侍る、はや〳〵御入らせ給へ」と戯れつゝ

春風に匂ひ出でけん我宿の
　梅をたつれて友やきませる

夕暮

牛込　平塚白百合

紫の筑波はオレンヂ色のそらに浮きだしたやう、燈ははや燈が二つ三つ見えそめた、夕もやが模糊たる湖をわたると夕ばへは漸く淡く、佐原通ひの汽船は、怪物の眼のやうな燈を點じて、汽笛の音ゆる〳〵と入つて來た、いつのまにか入日月は山上に光をあらはしてゐる。

春の夜

肥前　あや子

弓はりの月が西の空に鈍い光を放つて、あたりは、ぼんやり霞んでゐる、夜廻りの太鼓の響が、しめつた夜の空氣を震動させる、妙に寂しくて、ひときは故郷が戀しくなつた、母樣の御病氣はどうだらう、同じくこの月を見て、自分を思ひやつてゐられはすまいか、オヤ顏のあをざめた母樣がよろめきながら歩いてこられる、「お母さま――」とは言つて見たが、ハツと氣がつくと、何時しか櫻の下にきてゐた、花はハラ〳〵散りしきる。

罪なもの

丹波　荒田菊子

呉服屋こそ罪深きものなれ、命じたるにもあらざるを、新柄着きて侍べる、御覧じませと持ち来る、さし當りて要るべきものもなければ、といへば、たとへ御用なくとも見給へとて、索り上りてはや陳列す、様々の物を見る程に、ふと欲しきものを見出して、思ひかけず金を費すめり、こはわれのみにはあらじ。

初春

滋賀　西尾かめ子

千鳥の鳴く音哀れなる學校の寄宿舎の窓から、あの寒さうな深山の冬姿を眺めてゐたのも、つい此間であつたに、いつしか霞棚引く春景色となり、見渡す限り緑り滴るゝ若草萠え出で、菫、蒲公英の花も稍々綻び初めた、雲井に囀るは雲雀の初音か、軒端の梅の花は噂匂ひをとゞめ、鶯の聲いと妙に聞えて、何となく浮世ならぬ思ひがする、櫻の花のまだ咲かぬのが、いとゞまち遠い事に思れる。

清書を送りこしたる妹に

尾張　井口外世子

芳ちやんのお清書只今拜見しました、大層お上手になつたわれ、姉様はおどろいてよ、こんなに上手にならうとは思ひませんでした、芳ちやんの好きな岡本の姉様にみせましたら、大層ほめて居らしつたわ、早速御ほうびを送るつて、何を下さるでしやうれ、私はホラ芳ちやんがいつかほしがつてたあの西洋人形を上げませう、明日送りますから待つて居らつしやいな、左様なら。

日記の一節

尾張　同　人

廿四日、今日はポカ〳〵と暖い、朝、峯ちやんの髪をお下げに結つてから、私は机に向つて昨日時子様からかりた不如歸をよむ、餘り浪子が可愛さうなので、思はず泣いて姉様や弟にからかわれる、午後兄様の御注文で姉様と二人がかりでおしるこを作る、幾度も〳〵おかわりをなさるからマア随分れと笑へば、おさつだつたら千鶴さんの方が随分だらうと仰しやる、兄様はお口が悪い。

乳母車

駿河　天野ふじ子

従弟の美いちやんが、お美味くもないがといつてお櫻餅をお重へ一杯持つて来て呉れた、其を喫べながら私は今窓を排けて青葉の庭を眺めてゐる。

白百合の園のほとり、樺の若葉の下には、乳母車が一つある、中には芳子がすや〳〵と眠つてゐる、葉がくれに櫻色の頬が見える、若楓のやうな兩手を睡う胸にあてゝ、甚麼な夢を晴てゐるのであらう。

燕が一疋乳母車を覗くやうにして飛んでいつた。

さゞなみ

相模　石井和子

姿は今、片瀬河畔を彷徨てゐる、川面をサツと吹いて漣をたゝせた風が、枯蘆をさわがせる、漣に漂ふて柴舟が一ツ来る、
舟は流るゝまゝに、船頭は煙草を吸て居る、一人は柴に凭て白河夜舟の體、春風は其顔をなでゝ行く。

よしなし言

紀伊　松島双葉

「上級生の意地わるさ、舎監だつてあんまり同情がない、あゝいやな寄宿舎生活よ、戀しきは父母が膝下、あかねは深山のわがすまゐ、業終へて歸らんはいく日の後ぞ」、今は戀しき三年の昔の華のすさびのよしなし言、よみもてゆけば覺えずもくりかへさるゝ。

ながらへばまた此頃や偲ばれん
　うしとみしよぞ今はこひしき

海の暮色

福岡　吉川まさゑ

工場の汽笛がピー、と鳴る、六時だらう。日は西に沒んとして西天一面赤くほがした様。黄金色の白雲が一片浮ひて居る、濱は極く靜かで、一條の長い光が輝いて眩いやうである、白帆の消えゆく大野島の隅から暮れかゝつて、多貢山の碧も分らなくなつた、世は刻一刻と黒ずんで来る、櫓の音がギイ／＼聞えるが、船の影は見えぬ。千鳥の群がサーと頭の上を西へ、仰げば空に星が二ツ三ツ。

お包抱えて

牛込　大島ひさ子

今年七つになつた末の妹は、四月から小學校に入るので、昨日神田の叔父から祝はれた紫の袴を、今日は朝の暗い内からはいて、美ちやんもお姉様と同じく女學生よ、紫のお包抱えてれ、早く四月が来るといゝわ。

ある一夜

清國　たけ女

やめる身には、いとゞ、寒さを覺ゆる夜にしあれど、さちにも、家のものゝ心づくしにて、あたゝかき病床に身を横たへるよと思ひては、そゞろに嬉しさを感じつゝ、いつしか、夢路に入りぬ、やゝありて夢さめ、側を見れば、ふと眼に入りし封書一通、たよりか、いづこよりぞと手に取り見れば、なつかしき妹よりの消息なりき、かゝる淋しき折柄なれば、いとゞ嬉しうて。

妙な顔

伊勢　細野ふみ子

「英枝ちやん早うお出で」、ハイと云つて駈けて来たが、溝石に跪いて摚さまにバツタリ、顔をしがめて早や泣き出る

うとする、刹那、「サアこれを上げやう」と、お母アさんの手に紅白の蒸菓子二ツ、見ると英枝ちやんは泣き笑ひの妙な顔。

初音

小石川　稲生さき

初めて鶯の鳴くをきく、去年は十五日頃きゝしを、今年は十日程遅し、氣候のせいにや、古人は云へり、「鳥によりて情おこり情をもて景を思ふ」と、妾はこの鳥の聲をきくごとに亡き母上の事を思ふ。

友の反省

紀伊　菊岡芳枝

芳枝さん許して下さい、と新聞を手にして涙ぐんだのは、おとなりの春子さんである、しばしはたゞしやくり上げて泣くばかり、やがてかしらを上げてどうか許して下さい、わたしは一生どこへも嫁ぎません、實はあなたの縁談に邪魔を入れたのは妾です　わたしが——、此の新聞を見て下さい、是が天罰です、此の上は命にかけても妾はあなたの縁をつがせます、どうぞ、と自分の手をかたくにぎりしめると、熱い涙が一雫手の上に落ちる、自分も又たえかねて友の手を握りかへす、涙は早や頰のあたりをつたつてゐる。

田舎の春

宮城　長崎はるゑ

春雨の一夜さ毎に、垣根の雪もむらぎえて、日は麗かに庭の千草は萌え初め、川邊への柳も芽ぐみゐる程に、吹くともなしに春風の我窓を打つこそうれしけれ、風よれがはくは花の香を乘せて音づれよ、野に凧上げ、笹舟浮べる男の子もあれば、聲もほがらかに歌ひつゝ遊びたはむる少女もあるめり。

弟妹

宮城　よし子

妾が東京へ行くべき書籍など行李に入れつゝ在る時、襖を明けて入り來れる弟は、姉様東京へ行くつてほんとう、妨も行きたいけれど、と名殘をしさうに云ふと、妹も亦姉様御歸りに御土產澤山と言つたが、愛らしき其の眼には早や涙の露がやどつて居る、明日は此の可愛いはらからに別かれて行くかと思へば妾もかなしくなつて來た、あいらしき妹よ、弟よ、健全なれ。

友の許に

紀伊　松島双葉

吹く風はまだ肌寒う候へど、日影はさすがうらゝかに、垣根の若草もやう〱色見えそめ候へば、やがて地をひく霧霞に、殘る遠山の雪をも消えはて候はん、先の御便りによれば、試驗も早旬日の中に候とや、定めし今は御多忙に入らせられん、さりながら、日頃御勉學にたゆみもなき御身には、此折こそはとなか〱にむゆく御事に候はん、御申越しの國文學講義、こなた只今は不用の品に候へば、

御心置なく御つかひ下されたく、別封小包にて御送附申上候

來む試験休はいかに御すぐし遊ばさるゝ御豫定に候や、一日はこなたへも御車よせ給へ、柳櫻をこきまぜし御地のそれにはくらぶべくもあられど、霞み渡れる海原の眺めも、さすがにをかしく、かつは御身の御保養にもと、切に御まち申上候、つもる御話しは何も其折を期してこそと、

あら／＼かしこ

新婚旅行

麹町 名もなき花

父母の手を離れて始めての旅であるから、嬉しさ樂しさの中にも心細い心地もして、只々夫をのみ頼つてゐるが夫は勿體ない程親切にして下さる、世の中に戀しき者は父母の外にあらじと思ひしものを、といふ歌の意味を漸く覺えた。

家庭日記

山梨 西川豊子

三月四日、水曜日、くもり、

今朝二三リン咲いた櫻の花を床の間に挿す、毎日待つて居る女學世界が今朝もこないのでいら／＼思ふ、元來私は讀書が好きで、今日もお母樣にしかられた、午後久しぶりで、琴をカラコロとやつて見る、夕方梅深樣から御手紙がきた御上京遊ばしたとの事 同じ卒業生で東京へ行つていらつしやる方がまたたくさんにある、私はうらやましいけどお父樣がゆるして下さらないからしかたがない。

庭の鶯

但馬 しげの

一週一度の安息日だと思つて寢て居たら、庭前で鶯が鳴き初めた、そつとのび出て障子の破れから覗いて見ると、丁度綻びかけた紅梅の枝から枝にあぶなげに飛び廻つて居るのが誠に面白う見える、夢中になつて見惚れてゐると、上の枝から一塊の雪がばつたりと落ちて、あたら鶯を追ひ逃して仕舞つた。

御苑の春曉

京都 藤田靜枝

空には下弦の月影、淡くかゝり、世間はまだ眠りより醒めで森閑として居る、賀陽宮御殿脇を白雲神社の畔に出づれば、此處は今總理の大臣として世に時めき給ふ西園寺侯爵家の御屋敷跡とか、一體に植込まれたる數百株の梅は今丁度眞盛りで、得ならぬ香が風もなきに馥郁と鼻をかすめる、東の空がパツと白むと、間も無く薄紅に變じて、東山一帶の峰々は紺青色に染出され、續いてキラ／＼と火箭を射るやうな後光がさして、黄金色の朝日がヌーツと、上り、紫宸殿の御棟を見舞ふ、其神々しさ、貴はしさに自分は思はず手を拍つて頭を下げた。

忘れし梅

磐城　小野朝子

郵便と聲高に投げ行つたはがきは、新婚の友より來たもので、昨日漸々二人で小家庭を造り候、御來遊下され度し、との文であつた、御祝ひには何が耳からむと思案の末、風雪にたゆまず咲く梅の花は、世の荒浪とたゝかひて勝利を得たる人のごとく、千代八千代春古びても匂ひ變らぬは、妹背の愛にもたぐえん、これこそよけれと庭の梅手折りて、村の停車場より汽車に乘る、枝折られてはとそれを荷棚に載せ、新夫の上を思ひやりつゝ、やがて、梟と呼ぶ驛夫の聲に、我に歸つて車を下りる、改札口にて切符を渡して、やう〳〵忘れ物を思ひ出した。あはれ彼の梅は何の地に咲き匂つて居るであらう。

微笑

神戸　谷口操

今朝から降つていた、雨が、夜になつても亦だ止まぬので、何だか心淋しい、家内の人達は早くより床につく、あとはひつそりとして時計の音のみ高く聞える、久しぶりで友への手紙を認めて居ると、次の室で突然大きな聲をして手を打ツ者がある、ひつくり筆を手にしたまゝいつて見ると、今年七ツになる弟が、晝の遊びを夢見しか、圓々とした頰に微笑をうかべつゝすや〳〵とねむつてゐる。

春雨

大阪　出雲加代子

今朝から降り出した絹の樣な春雨に、庭の楊はうなだれて、誠に美しい床しい香が雨間から袷を縫つて居る姿の居間へ送られる、親子らしい雀が二羽おとなりの方からとんで來たが、こちらを見て驚いて逃げて行く、可哀想に、今頃はどこのお庭で雨宿をして居るだらう。

私の生活

静岡　大沼龜子

私は羽二重工場の工女です、朝は鷄鳴と共に起き、殘月を踏んで出勤し、夕は晩鴉の聲を聞きつゝ歸宅して、一家團欒の中に其日を送るのが私の生活です、よし美衣美食はなくとも、慈愛深い母の手で膳に上つた食物があります、「バイオリン」はなくとも、それより清い弟と私の聲がありま す、都にいらつしやる友たちの上などは露程も羨みませぬ、私は此田舍の自然の景色に浴しつゝ、母に仕へるのが一番樂しみです。

春の日

三河　今村貞子

讀んで居た女學世界に栞を挾んで、南向の障子をカラリと開けると、縁側には日が一ぱいに當つて、人形をいじつてる妹の赤いリボンのピンが光つてゐる、「千代ちやん」とよ

べば、ふりむいてにつこり、と〻線先の櫻がヒラ〳〵と二片三片妹のお下げの上に落ちた。

胡蝶

愛知　三井たか子

雪に霜に葉がくれし小畑の菜も、一雨ごとの暖かさに、やさしき花を開き、胡蝶の音づれて、ひらひらと樂しげに舞ひ遊ぶ、さても愛らしき胡蝶よ、終日去らずしてわらはを樂しませよ、程なくいづこよりか一匹の猫はしり來りこれにそばゆ、愛らしき胡蝶よ、しばし舞ひをやめよ、いたづらなる猫早く去れ。

運命

大阪　梅村波奈子

空は曇つて靜な海には船の影もない、私はうらの折戸をあけて濱つゞき寂しい磯を物思にふけりつゝ歩いて居ると、傍の松の樹陰で人の忍び泣する聲がきこゑる、思はず立止まつて見ると、三十餘りの青白い束髮の婦人と、其親らしいお婆さんとがしみ〴〵話しつゝ泣いて居られる、そして若い婦人がやがて、運命ですわと諦めた樣に言ふ、事情は何か知らぬけれども、今果敢ない運命に泣きつゝある姿はいたく此の一言に打たれました。

春の野遊び

東京　月枝

久方の光長閑く、四方の山々白妙の衣脱ぎ捨てゝ、翠色となりぬる景色のおもしろきに、さすがに家にたれこめがたく、親しき友と打連れて柴門を出でぬ、さてそこはかとなくさまよひあるくに、吹きくる風はいとやはらかに、青柳は翠の糸をくしけづり、萌む若草はのび〳〵と萌えわたり、麥の波間より雲井に高く啼く雲雀の調いと妙に、梢をとぶ鶯の聲の滴く床しき風情など、細なき筆にかきもえず。

雪の一日

本郷　ななしぐさ

朝起きて障子をあけると、庭はまつしろで、雪はなほ盛に降つて居る、けれど春の雪は流石にとける方がかつて、庭石や松の葉などだん〳〵顏を出して來る、九時頃コートに身をつゝんで、行く先もチラ〳〵して見えない樣な中をお琴の稽古に行く、見る〳〵コートの袖が白くなる、午後爐に火を起してお釜をかけてかれこれ支度するうち、お茶の先生が見え、二時間ばかりでお稽古がすむ、雪は終日やまないで、庭も又大分白うなり嬉しくなり、ガラスごしにながめて、日の暮れるのも知らなかつた。

庭梅

越後　田客笑花

夜一夜吹きすさびし風もをさまり、降りしきりし雨も晴れて、今朝はさすがに春日和なり、野邊の緑も一きわ色を深めしならん、庭の梅も昨日まで見えざりし莟の夕べの闇に

誘ひ出されしにや、南の枝に二ッ三ッ露をふくみてほゝゑみ居たる樣のあまりに美しくて、知らず〳〵一片もげば、香り床しき一筆面にかゝりぬ。

春曉

伊豆　井出たい子

唐歌に春眠曉を覺えずとは、實に此頃の候とぞ知らる、妾は何故斯くは眠かりつらんと、友に語れば、吾等も同じ事よと聞く、妾は毎夜床に入り、枕を付れば、いつしか睡境の人と化し、暫し夢路をたどると思ふ間もあらで、はや旭日高く樹梢に昇るが常なり、今朝起き出れば幾多の梅花は雪の如く地に散き、殘香風に和して、徐に窓に入り來る。

姉上の許に

大阪　陰山禮子

御圍ひの鶯いと美しううたひそめしとや、いかばかりお樂しみにおはすらん、羨しうこそ、妹が背かよふ丸窓のもとに君がしらべのみそひと文字は、鶯の聲のそれよりもなつかしうて、來ん休み日にはかならず伴を、とばす可くなむ、さらば姉君、風に心したまへかし。

春の宵

本郷　茗子

今朝よりの雨名殘りなうはれて、うらゝかなる春の宵ながら、月はおちぬらし、かすめる影の、窓をてらすよと、見つるほどに、はや、暗うなりはてぬ、木にも似たる、夜の靜けさを、やぶりて、上野の鐘の音、餘韻、かすかに、ひゞきて闇に消え行く長閑けさに、このまゝ、れむしも心なく、ひとり、庭の面に、立ち出づれば、咲綻びし梅の、闇にもしろき其姿、暗き空の、けがれたる世に、ぬけいでて、ひとり、行ひすましたるにも似て、ゆかしとも、ゆかしく、つと、花かげに、立ちよるうなぢに、梢の雫が、はらはらとこぼれかゝりたる、うれしともうれし。

夢

澁谷　中村千代子

四面海もてかこまれし、わが敷島の秋津洲、外なる敵をふせぐには、と聲高らかに歌ふはまだ五つばかりの男の子、身には海軍服をつけ、其無邪氣に遊ぶ愛らしさに、私もいつしか釣り込まれ、共に手拍子取って唄ふて居り升と、何處かでオルガンの音が頻りに聞え升、じつと耳を傾けて聞いて居りますれば、オルガンと思ふたのは枕元の目醒し時計が今六時を示して居るのです、さうして可愛子供と見たのは曉の夢でありました。

一口噺 ◎印入賞

◎　横濱　服部花子

母「早くお線香を買ておいで、言ふ事をきかないとお灸をすゑますよ、
小供「大丈夫よ、お線香が無いから、

◎　神戸　谷口操

母「光ちやんや、なぜそんなに人形の顔をもんでゐるの、
光「顔色が悪いから「マッサーヂ」して居るのよ、

◎　駿河　天野ふじ子

父「お前何故さうおいたをするの、
子供「だつてお祖父さんがさういつたよ、お父ちやんの子供の時はもつとしやうがなかつたつて……

東京　池田百合子

米屋「今日は、御拂をいたゞきに參りました、
下女「あら奥樣はおるすだよ、
米屋「おや、只今御庭に立つていらしたよ、
下女「それだからおるすだよ、今御前さんの聲がしたから、奥樣は裏口からあわてゝ御出まし遊ばしたのさ、

京都　藤田靜枝

甲妻君、乙妻君に向ひ、
「奥さん、女學世界の寶さがしは如何でした、
「アイ、私しの頭の中にはありませんでした、

横濱　服部澄子

母「坊や鵜が御菓子を美味しさうに なきながら食べて居るよ、
坊「坊なら笑つて食べるよ、

長崎　村上清子

甲「西洋で製造した物を西洋人は舶來と言ふじやらうか、
乙「ナニ、やはり和製と言ふサ、

和歌山　山口文枝

百姓の若衆、淨瑠璃を習ひ、「伯夷叔齊は飢（植）へて登なし」と云ふ所に至り、
「もし先生、伯夷叔齊とは、どんな木ですか」、先生之れは日本にはない木です、

丹波　森はつ枝

小供「お母さんあした（明日）つて何時なの、
母「一ツ寢て起きたらあしたです、
小供「明る朝早く起き
「お母さんお早うアシタつて今日なの、

美濃　田中久代

甲「人間の運といふものは、中々むいてこないもんだれえ、
乙「そりやア其答す、いろはでもんの字は一番後だもの、

芝　松井岸子

火鉢を中に、降る雪を眺めながら、
甲「初雪が砂糖であれば金儲け、
乙「初雪が綿であれば金儲け、
丙「初雪が鹽であれば金儲け、

神田　小野與次

甲「私の村には周圍一丁もある太鼓がありますよ、
乙「私の村には胴の長さ二丁もある牛がゐますよ、
甲「そんな大きな牛が居てたまるものか、
乙「だつて其位の牛がいなくちやあなたの村の太鼓の破れた時張りかへることができないではありませんか、

小笠原　讃岐いと子

甲「永らく眼病で御困りだつたさうですか、見りやまだ御眼がわるいですれ、
乙「はいもーなほつたかと思ふと全快し、なほつたかと思ふと全快し、もう全快したくもありません、

▲人事活斷▼

石龍子

▲岡山縣一貫にお賴女へ――龍の水を得ずして沙泥の間に呻吟するの卦なり。水を得れば天に上下し、其の勢や當るべからずと雖も、水を得ざるの間は如何ともすること難し。御身の良人も之と同じ道理なれば艱苦を忍んで龍の水否資本を得て海外に發展せらるべし好運續々として來るや必せり。

▲長崎春松女へ――貴女の精神は穩健にして疵無き美玉に似たり。されば今一層奮發して高師に入學し然る後銀行員の人と結婚するの約を堅めおかるべし、家長へに榮え目出度事限り無し。

▲大阪のアイエス、エス、女へ――美肉に留れる蠅が其の肉に飽きて他所へ行かんとするが如し。容易に之に靜る位置あらんや、宜しく神戸の商館に留まりて他日を待たるべし。

▲京都白蓮女へ――女の身に生れて百年の苦樂を共にするは唯我が夫のみ、舅姑や小姑は僅の年月來ることなれば其の夫にして我を愛せんか萬難厭ふべきに非ず、されば御身は婉曲の心を懷き夫をして父に學ならしめ、御身も義姉に友愛の道を盡さるべし。三年を待たざる中に家庭は春の如く穩かに、而も富貴繁昌すること疑無し。

▲攝津國灘の酒家へ――有るか無きかの分らぬ天變を恐れて逃げ仕度に汲々たる臆病者の行爲に髣髴たり。御身の良人は今や春秋に富める人にして、而も敢て疾病あるに非ず、然るに御身は萬一の事を心配し、彼島と諮らぬ事に手を出すは勞多くして何等の益あることなし。如かず唯婦德を守つて內政に從事し悠々天命に安んぜんには。

▲加奈陀得失女へ――御身の良人は苦境に立たしむれば成功の人にして、樂境に在らしむれば不成功に終るの傾あり。されば今幾度か苦境に沈淪せんとすることあらんも、御身此の間に立つて貞淑を守り、勤勉節儉の道を說いて大に助けらるべし。五六年の後ならでは錦衣歸鄕の望無し。

▲頑固的悲觀女へ――石龍子嘗て之を醫に聽く、曰く「妻を迎ふる事を以て不納蓋なりとし一生妻帶せざる男子や或は夫に仕ふるを以て汚濁の行と爲し終世獨立する女子は一種の精神病にして强て夫妻を配すれば寧ろ死を求むる者あり」と、危い哉、御身の心も亦之に似たり。而して御身は今や子弟の育英に從事し、一生高潔の行を全うせん云々、何ぞ誤れるの甚しきや、敎育は唯文字を知らしむるのみの者に非ず、宜しく其の行爲に於ても子弟の模範たらざるべからず、而して御身は御身の行爲を子弟に學ばしめんとするか。退いて考一考したまへ、子弟をして學ばしむべからざる行爲は高潔に非ずして劣等なり、病的なり、宜しく有識の人に就て今一層學ばるべし、釋然として悟る所有らん。

▲土佐の峯子へ――金脈の路を迂回して鑛山を掘りたれども今や其の金鑛に近づける卦なり。然るに容易に得ざるものとして他方面に進まん

か、益々其の好運を捨つるなり。故に御身も上京せずして苦勞ながらも家に留られよ、近き中に良縁ありと知り給へ。

▲鹿兒島縞江櫻子へ――物に頼らざれば獨立する能はざる蔓草に似たり。然れば何事も我意を挾まず只管に母上の意に任せ給ふべし。久しからずして官吏の人に良縁あり。

▲神田兄思少女へ――失望したまふ勿れ、不合格の卦見ゆ。

▲東京老孃の叔母へ――慾深き骨董家が買手の有るにも拘らず、價高く賣らんと荏苒日を延し遂に可惜器物を賣るべき機會を失ひたるが如し。されど今や悔いたりとて何の詮も無ければ今後買手あらば縱ひ安くとも斷然之を賣る方却て利あり。御身の經驗も此の理を悟り、若し結婚を申込む者あらば、少し位不滿足なる點ありとも之を忍ぶの心になり給ふこと何より肝要なり、果して其の心になり給はゞ良縁遠からずして來るや必せり。

▲長野縣野のすみれ女へ――大將の命を用ゐずして進軍せんとする兵士に似たり。功を奏することの少きは、鏡に懸けて見るが如し。而して母上は大將なり御身は兵士なりと心得たまふべし。兄上は必ず合格の卦見ゆ、萬歳々々。

▲熊本よるべなきなやみ女へ――御身は或一點に達せんとする旅行者の海陸何れより行かんかと迷へるに似たり。而して甲者即ち商業校卒業の人は遠けれども平坦なる陸路の如く、乙者即ち才齒ある人は近けれども波荒き大洋の如し。此の卦に依て考ふれば甲者に從ふの安全なるに如かず、然れども甲者に從ひたる後嗚呼遠しとの不平心起らば必ず災あり、不平の心を起さゞれば家庭圓滿瑞氣靄々たるべきなり。

▲下野河野とみ子へ――令弟は將來に於てむを使ふ的の職に從はずして、身を使ふ的の業に從はるべし。さすれば啻に令弟の幸福なるのみならず、兩親方も亦滿足なる結果を得らるべきなり。

▲福岡縣遠藤ちか女へ――偶然の出來事を神の告示せるが如く思惟するは蠻人の迷信なり、我が揺斷は斯る迷信的の者に非ずして唯人事の正か不正かを判斷するのみ。されば櫛や簪の折れたるは、吉兆にも非ず、凶事にも非ず、唯折れたる爲め新調せねばならぬ位の損なり、更に憂ふるに足らず。

▲新潟縣愛に富みし貞子へ――御身の手紙を讀みて意志強き積りの私も覺えず同情の涙に兩袖を絞りたり。而して余の揺斷を下すに先ち御身の手紙を滿天下の人に知らせて滿天下の同情を得御身の幸運を祈らんと欲す。されば御身の手紙を意譯することを姑く許し給へ。

(同)「何の因果か知られども三千世界に私程悲しい身の上の者は必ず無からうかと存じます。と申すのは、私は新潟縣の生れ、幼い時生きながら父母に別れればならぬ運命に迫り、實に〳〵悲しい月日を送りましたが、此の事は既に過ぎ去りました事ゆゑ、詳しくは申し上げますまい。お話替って二十一歳の時或る人の媒妁で、陸軍士官に嫁ぎました。生れて以來僅り少き身が今更に夫の父、夫の母を、夫と共にお父樣お母樣と申さるゝ樣になり、三人のお方から「お貞」と呼び捨にせらるゝとの嬉し

さは何に譬へん樣も御座いませんでした。されど〳〵、それは唯束の間にて、夫は再び上京せねばならぬ役目「家に留つて舅姑にお仕へ申すか、それとも我に從つて東京へ行くか」と申された時、お笑ひ下さいますな、舅姑と共に居るも樂しいけれど、何れかと言へば夫に從ひたう存じましたがさう申すも恥しければ「如何樣にとも」唯これだけより外に言ふ術を存じませぬ。さるを舅姑は私の心を察し給うたか「妻は夫に從ふが道ぢや」この「妻」といふ言葉だけでも實に嬉しう御座いました。斯くて戀しき故鄕の山を後に見て知己朋友の人々から「何卒お達者で……」の聲に送られた時は、何となく別離の涙に咽びましたれど、目の前に軍服姿の夫を見れば心は自らイソ〳〵として、新婚旅行の樂しさを深く感じました。

東京へ出てから、小やかなる家を借り受け、世帶道具など少し許り買ひ求め他人から見れば如何にも淋しく、如何にも不自由ならんと思はれましたらうが、私の身に取つて此の時の樂しさは後にも先にも有りませぬ。これより後一ヶ年は別に之と申し上げる程の事は御座いませねど、兎に角其の來年父方へ酷似の男の子を安產致しました。並で一寸夫の氣質を申しあげておく必要があります。夫は何處までも進んで取らうといふ的の軍人氣質にて「必ず斯うせねばならんぞッ」と命じ給ふ時などにはオヽ恐いと思ひましたれど、又退いで「男はあれでこそ凛々しけれ、喋喃々說明せらるゝやうでは眞の男でない」斯う考へますと、縱ひ叱られても嬉しう御座いました。

或日夫は嚴然と威儀を正し「我は陸軍大學校の試驗を受けて、他日三軍叱咤する大將にならればならぬ、それに就て妻子が側に居ては兎角勉强の邪魔になる、されば我業成るまで子供を連れて歸國して貰はう」何たる情ない言葉で御座いませう、併し一度言ひ切つた事は、決して後へ退かぬ夫の氣象を存じてゐますのみならず、大切な夫が選れ御國の御用に立たうといふ其の心、妻として樂しからぬ筈も御座いませぬ。「さらば〳〵御機嫌宜しく……」と盡が知らすか一向に泣き叫ぶ赤兒を賺しつゝ上野のステーションに登りました時の心細さ、迚も私の筆では書き盡されませぬ、汽車が出ましてからも夫の姿我が居間などの有樣が歷然と眼に映り、長い道中も唯泣き通して歸國致しました。

それでも兩親は「まア可愛い孫ぢや」と最先に赤坊を抱いて下さいましたので、又得も言へぬ涙に暮れてゐますと「此家とても矢張其方の家、氣兼氣苦勞無しに暮すが宜い、將來に仲も戻つて來るぢやらう」これからと申すものは幾度此方から手紙を出しましても何の個もなきこと殆ど一年、「大方試驗の結果が思ふ通りになつてから文通する積りだらう」とは舅なる人の仰せ。斯くて昨年の春に至り、久々で夫よりの手紙何となく胸騷ぎしながら開封すればこはそも如何に〳〵。「故あつて其方を離緣可致候間これ限りの緣と諦め下され度候云々」唯アーツと覺えず聲擧げて泣きました。これから三度續けて手紙を出し「何なりと妻の不都合なる點を御責め下され候はゞ肺かけ改め申上ぐべく候」と申し迫りましたが、唯故有つての一言葉で聽き入れて吳れませぬ。されど舅姑は「又

倅の氣の和ぐ時もあらうから」と審に變らぬ優しき言葉併し斯うなつて見ますと我家に居るやうな氣も致しませぬ、然る所實家からも「相談あれば至急來れ」との事ゆゑ、取敢へず歸れば「肝心の夫が妻とする氣の無い處に一日も居るべき道理は無い、我が妹なれどお前の如き操の正しい女を、離緣する男は、更に涙の無い人ぢや、此の先は必ず以前に優る立派な夫を持たせて見せる。

斯くて兄は無理無體にも、我が身を犧牲に供へてゐる可愛くて〳〵ならぬ一人の子を、夫の兩親へ歸して了ひ、私は今は兄の厄介となり、坐つてる疊の上を千尋の底に沈む淵の思ひに日を送つてゐます。されど〳〵一分の光陰も見捨てられた夫を忘れず、一秒の時間も赤ン坊を思ひ出さずには居られず、間がな隙がな「何卒再び審に復へるやう助け給へ」と、神明にお縋り申して居ります、先には夫の成功を祈り今は我が身の復歸を禱る、噫や神樣もよく禱る女だと思召すことで御座いませう。

併しながら、玆に一つ賴もしきは夫の兩親にて、夫の兩親は私の心に同情を寄せて下さる事ゆゑ、私は實家の目を忍んで家を出で、再び夫に逢つて切なる誠を申し上げたら、夫も可愛き子の情に引かれ、一度は逐ひ返して下さることもやと信じて居ります。

如何なもので、御座いませうか、何卒三月の誌上を以て、私の身の上の御判斷下されたう存じまする、されど〳〵何事も諦めて再緣致せとの御判斷下されぬやうお祈り申して居ります。尙此外に申上げたき事海山御座いますれど餘り長きを憚りて惜しき筆を止め申します。

(答)判斷――航海中颶風に遇ひ檣折れ柁摧け、游泳を以て萬一を希ふが如き姿なれども、遠からず颶風和ぎ救舟の來るべき氣あれば、貴女よ貴女、落膽沮喪することなく、一心に游泳否祈禱を注ぎ給ふべし。良人は木石に非ず又鬼に非ず。

▲富山縣海邊の一婦女へ――猛虎を得て之を養ふが如し、之を自由に放たんか、如何なる暴を逞うするか計られず。之を檻中に投ぜんか囂々として日を送るべし。然れども如何せん檻中に投じ美肉以て之を養はざるべからず。今御身の問はるゝ事も之と同じければ可成鞭子に拘束を加へて放蕩に流れしめず、而して可成優しく過せられなば敢て御し難きに非ず、緣談の事は首尾よく整ふべし。

▲木花咲耶女へ――船出せんとする際連日颶風の起り爲に荏苒日を送りたるに似たり。到底航海する能はずとして船出を止めんか、爾來の目的を捨てざるべからず。而して颶風は必ず止むべき時あり。御身此の道理を知らば獨立すべきに非ず、良緣の來るを待たるべし、必ず遠からずして好運續々たり。

▲靜岡縣春野花子へ――駿馬に鞭うつて平々坦々たる道を走る事に似たり。何等の故障なくして目的を達せらるべければ、大に奮發學び給ふべし、成功すること更に疑なし。

▲常陸國つくばれ子へ――未だ卒業もせぬ書生の身が結婚を申込むなどゝは不埒千萬なり、墮落なり。占はざるも不吉なり凶事なり、夢々應じ給ふべからず。

新刊紹介

▲追懐　田口掬汀著

ひたすら青春の血を湧かして戀の外には何物もなしといふ危險なる少女の戀愛ではなく、これは世態人情の入り組みたる間を縫ふて行く戀情の働らきの微妙なる樣を描いたものであるから常識も發達し世故にも長けた婦人の嗜味に最も適した小説と言はねばならぬ所謂面積もあり、奥行もある書きぶり何だか世態の奥底へ踏み入つて事實を捉て居る樣で一寸近頃讀みごたへのある作物であります　價壹圓日高有倫堂

▲落葉　瀧田泣菫著

新體詩及小品文十數種を集めたり寂しい味、俗氣を脱した心持が自然にあらはれてゐます　價八拾五錢獅子吼書房

▲妻と母　小林 慶著

現代の社會を目的として良妻賢母となるべき婦人の修養を説いたものであります、その理屈は別段新奇なものではないが説き方が巧みである、だけに無益の老婆心を避けて肝要な心得のみを示してあります、衛生の事、教育の事、交際禮式の事、家政育兒、料理裁縫の大體までも引きくるめて説いてあるのは一書によつて萬用を完からしめんとの目的でせう　價五拾五錢嵩山房發行

▲女子作文良材　河井醉茗著

初學の女子が文章を作るの捷徑には斯る讀物こそ簡單で了解を得る事が早いでせう、一とわたり文を作る方法を説き又名文の例をも示してありますから　價四拾五錢三星書房

▲無藥療法　米左 近著

醫には素人藥物學を著はして藥用に對する一般の智識を供給された著者は此書に於て藥の効用が人體に何程の價値あるかといふ事を説いてある、是れ又素人の衛生書 要するに藥を過重視する日本人の弊を列擧したものであります　價五拾五錢東京堂

▲月魄（藤の巻）　菊地幽芳著

學問あり品性ある梅小路伯爵は二十五歳の時に同族の間から貞淑温良な夫人を娶つたが、纔か數年の後最愛の夫と二人の子供を後にして此世を去つた、伯爵の失望言はん方なく其年に歐行の途に上り五年間歐洲に居て今歸つて來た、まだ若くもあり名門といふので後妻などの縁談は煩さいほどあるにも拘らず亡夫人の記念の愛兒を大事とおもひ獨身を守つてゐる、さてこの伯爵に如何なる婦人が關係して如何に人々の性情が發展して行くべきか本篇は即ち這般の消息を解するものなり、篇中に賢なる家庭教師あり、其の友人に又奨なる一淑女ある、兩夫人の情界の波瀾叙し得て精細なり　價九拾錢文淵堂發行

▲朝鮮

現代の韓山の政事、社會、實業、風俗の各方面を最も適切に記述したもの殊に日本人と韓人との交渉に就て起る事柄を最も實 際的に記述した材料が多いから韓國を知るには尤も必要な好

籍である、主筆は二十年間韓國に居住して京城の事情に精通した菊地長風氏である、韓國京城日韓書房

▲しのぶ草　小澤紋子著

教育家でもなく、家庭の人でもなき一婦人が種種なる境遇を經來つて世態人情の有樣を自得した追憶の記錄である、文章は割合に達者である　金刺書店發行

▲綠髮　小川未明著

小品文三十種、これぞと取り立てゝ傑出のもののない代りに又どの文にも捨てられぬ妙味はある、美文を好む人の參考となすべし　隆文館發行

▲衛生問答 姙產婦篇　衛生新報社編

婦人の衛生、殊に姙娠の部分に就て最も痛切に惡ろく言へば無遠慮に書いたものである、姙娠は倫理上からいへば神聖なる事柄ではあるけれど、元と生理上より起る事であれば、其の生理に立入つて委しく說明するのも大いに必要である、本書はこの必要を滿す爲めのものである　價四拾五錢日本橋箔屋町丸山舍

▲女子大學講演集　櫻楓會發行

成瀨校長が毎年の卒業式や春秋の大會に臨んで生徒達に訓戒されました講話で熱誠のこもつた言葉で深遠な理想を說いてありますから良妻の典型も此の中より得來る事が出來ませう

▲南犬北犬　博文館發行

世界お伽噺は第百卷を以ていよ〳〵完結致しました、南北の犬おの〳〵性を異にし運命を異にするおもしろいおはなしの大團圓めでたし〳〵

▲觀音堂(續篇)　成功雜誌社

この立志小說は續篇に至つていよ〳〵佳境に入る著者が滿身の熱血凝つてこの小說となるとありますが、徒らに肉慾を理想として書いたものよりか人心に稗益あることいふまでもなし　價四拾五錢

▲偉人に及せる婦人の感化　內外出版協會

賢母良妻の言行を集めたものといへば陳腐に聞えますが、人の妻となり母となり朋友となつて偉人傑士を生み、助け、慰め、志を成さしめ、品性を感化し、人格を造り成した立派なる婦人の美はしい情行を眞面目に顯はしたものであります

▲明治詩集　吉野臥城編

知名の新體詩家十六氏の作を、各三四編宛集めたるものにして、附錄として新體詩年表を添へあり、一讀現代諸作家の詩風を窺ひ得ると共に、明治の新詩壇が如何にして發展し來りしかを知るの便あり、定價金七拾錢本鄕弓町昭文堂發行

▲日記文作法　吉野臥城著

日記文の綴きは更にも言はじ、且つ多く後日に遺るものなれば、其の忽にすべからざるや勿論なり、本書は即ち之を書かん人の手引草として著されたるものにして、作法を說く事詳細に、文例を示す事廣汎なり、本鄕弓町昭文堂發行、定價金四拾錢

▲宗教小說 自覺　村山鳥逕著

一青年牧師を主人公とし、一女學生を客とし、自覺せざる境遇、自覺せんとする動機等を描きて、信仰も、希望も、愛も、究意自覺の人にして初めて獲、語り、敎ゆべきものなる事を闡明したるもの、蓋し著者が牧師としての見地を文士としての筆に上せし人生の深調に外ならず、定價金六拾五錢、京橋和泉町祐文社發行

懸賞寳さがし當選披露

◎解答總受附總數五萬貳千七百八十一通內正解數參萬六千九百二十一通◎抽籤當選數六百三十八通

一等　金百圓（三越呉服店切手）

長野縣埴科郡杭瀨下村　米澤立枝

二等　金五拾圓（玉寶堂製女持金時計）

東京日本橋區新和泉町六番地　吉本きく子

日向國宮崎郡田野村鹿村野小學校　串間うめ

三等　金貳拾圓（玉寶堂製金指環）

大阪市北區上福島北三丁目百八十番地　菊池逸子

東京府下豊多摩郡淀橋柏木九百六十一　猪谷ナカ

松江市白瀉本町　園山くに

高知縣土佐郡小高坂村三百六十三番地　島村榮

長野縣小縣郡浦里村仁古田　竹内うち子

四等　金拾圓（三越呉服店切手）

埼玉縣秩父郡國神村大字金崎山巍商店内　磯田照子

青森市新町二九砂田方　高屋かよ

東京下谷區下根岸町五十七番地　杉山ミツ子

高知市南新町三丁目　樫尾鹿榮

橫濱市花咲町七丁目八十四番地　畑中椿子

岐阜縣郡上郡八幡町伊藤與兵衞内　木村銀子

東京芝區芝口一丁目拾番地　乗子花枝

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五八〇　小高靜子

北海道札幌區南二條東五丁目壹番地村田方　小島しげよ

甲府市櫻町一丁目　村松しず惠子

五等　金五圓（◎懷中化粧道具◎婦人用肩掛）

東京市牛込區天神町七十六番地　和田總子

福島縣須賀川町字井毛町五十一番地　三澤千里

埼玉縣入間郡川越江戸町裏　川上いち子

信州南安曇郡東穗高村飯島病院東隣　佐々木淑子

北海道雨龍郡深川村字芽生七線　河原せん

京都市油小路通三哲角第七番戸　栗本ツヨ

愛媛縣立宇和島高等女學校寄宿舍內　赤松芳子
茨城縣稻敷郡阿見村大字磯部　堀江すみ
兵庫縣有馬郡高平村ノ內布木村　竹中千代
富山市大田口町五九　堀八重子
愛知縣名古屋市熱田白鳥町百貳拾四番戶　村瀨せい子
福岡縣遠賀郡八幡町尾倉大門町四丁目　松尾モヨ
佐賀縣立佐賀高等女學校寄宿舍　烏巢つる
山口縣周防國床波　鎌田サカエ
群馬縣群馬郡岩鼻村岩鼻火藥製造所官舍　窪田すわ
東京神田裏神保町一番地　龜井孝子
羽後國山本郡能代島町　大淵トメ
大阪南區大寶寺町八六　都志ツヤノ
伊豫國北宇和郡吉田町大字東小路二宮助太郎內　三瀨米子
山形縣西田川郡鶴岡最上町　高木つる子

六等（價格金貳圓の物品）

東京京橋區八丁堀仲町十番地竹淸內　荒川よし
同京橋區大鋸町十四番地稻生小金五郎方　岡崎もと
同日本橋區濱町二丁目一番地　武田ちよう
同麴町區元園町一丁目十番地　谷崎芳子
同麻布區東鳥居坂町十三麻布中學校寄宿舍內　田中琴
同赤坂區青山原宿百六十九番地　高木すゑは
同四谷區右京町十三番地鳥居方　吉田きん
同四谷區左門町二十八番地　高木みき
同牛込區原町一丁目八番地　瀨藤千代
同牛込區矢來町三番地御殿十二號　上野たへ子
同市小石川區白山御殿町八番地杉浦武雄方　高橋わか

同本鄕區元町二丁目六〇長崎方　安藤光代子
同本鄕區千駄木林町十八目縣方　渡邊かつ子
同本鄕區湯島天神町一丁目五番地　河村いと
同本所區向島須崎町一三七槇木彥方　興津ふみ
同淺草區象潟町十番地　石井かず子
東京府下品川町字北品川四拾六番地　岸重雄
府下豐多摩郡大久保百人町一五九　水谷久代
橫濱市外大岡川村永田山　大津靜子
橫濱市中村町一三四三　河原みつ子
橫濱市日の出町二丁目五拾二番地　篠田昌子
橫須賀市元町七番地茅野龜吉方　茅野たか
千葉縣君津郡富津町篠部金左衛門方　平野落子
千葉縣山武郡蓮沼村　松村靜子
上州高崎市椿町貳十四番地　木田きく
群馬縣佐波郡伊勢崎町在下植木村七番地　片桐まつ
埼玉縣北埼玉郡忍町大字佐間三三七三　松木和子
埼玉縣秩父郡皆野原町　飯野元子
宇都宮市三條町九番地　三澤とく
新潟縣北魚沼郡小出町　伊倉潮
新潟縣北蒲原郡新發田町字西築地六五四　新保サヤ
長野縣北安曇郡松川村　一柳乙子
長野縣南佐久郡畑八村下畑　工藤直助
信州下高井郡中野町　小田切とよ子
福井市藩町二　鷲田豐子
石川縣石川郡鶴來町ヵ三拾四番地　木戸實子
山形縣西村山郡寒河江町　大久保やす子
山形縣南村山郡東村須田板　木村とし子
山形縣西田川郡鶴岡町三日町鈴木佐太平方　鈴木光子
米澤市南堀端町山根方　宮島トラ
仙臺市光禪寺通り拾番地　石井はな子

福島縣刈田郡白石製糸模範會社内　後藤あき
青森縣弘前市五十石町十四番戸　羽場キサ
陸中花巻町字栗木町　似内ツヤ
北海道札幌區北六條東二丁目五番地　中井喜代
北海道空知郡下富良野村本間牧場事務所内　本間たみ子
函館區天神町七四　齋藤つれ
北海道石狩國札幌郡江別町富士製紙會社第五工場社宅　永田シズ
遠江國相良町　山本平三郎
山梨縣中巨摩郡鏡中條村小野醫院内　小野つれ
名古屋市長久寺町四十六番地　横田八重
岐阜縣稻葉郡加納町清水町堀嘉助方　堀千代子
岐阜市泉町安田方　田口順
岐阜縣大野郡高山町　住のぶ
美濃關町加藤裁縫舍内　徳島みゆき子
京都市西洞院丸太町上ル河崎爲之助方　河崎てい子
京都府南桑田郡薭田野村　葉山花子
大阪市東區東平野町六丁目第一六五二番邸　大谷ツル子
大阪市西區江戸堀北通貳丁目百七十五番屋敷　福井新六
大阪府三島郡茨木町千七百廿一番地　古川シツヱ
大阪市北區樋上町三十九番地　内海つれ
大阪市北區上福島中二丁目一四八四　井上きぬ
大阪市西區江ノ子島西ノ丁五番地　内田文子
伊勢國多氣郡荻原村赤瀬　小椋良輔
神戸市楠町五丁目五十三番屋敷　中村よし
神戸市下山手通七丁目百五十四　木村とし
兵庫縣津名郡廣石村郵便局西隣リ武田支店内　大津艶子
兵庫縣多紀郡篠山町ノ内立町圓野酒店内　阪本小つる
奈良縣奈良市南半田西町　河合常子
奈良縣宇智郡五條北之町　福田信
和歌山縣和歌山市新堀北之町一番丁五番地　内藤愛子

紀伊西牟婁郡新庄村　榎本きぬ枝
奈良縣宇陀郡神戸村大字西山　上岡ハル
江州彦根町字芹橋十二丁目　西村文子
滋賀縣坂田郡長濱呉服町　河村くに子
鳥取市下釜町　湯本初子
鳥取縣鳥取市掛出シ町九番地　井尻利枝
石見國濱田字松原　林せつ子
岡山縣御津郡福濱村大字青江七百六十三番地　西山政惠
廣島縣安佐郡可部町尋常小學校　野田せつよ
廣島市白島九軒町一二　西原悦
備後沼隈郡松永東町上元町　片山あさ子
山口縣豐浦郡王司村大字宇部伊秩修平方　西山喜
德島縣麻植郡川田村　江崎周子
德島縣那賀郡立江村大字櫛渕村櫛口鶴三方　野澤さか枝
愛媛縣伊豫國温泉郡生石村大字南吉田　高木やす子
高松市南龜井町　高島繁
福岡縣三潴郡鳥飼村大字大石　村上周子
豐前國田川郡香春町　是永ヒサ
筑前國若松町旭溜鐵道官舍　安部富士子
大分縣臼杵新町　山崎いと
山口縣厚狹郡小野村　野村イト
長崎港外端島　又川滋子
竹敷第十七艇隊第三十六號水雷艇乘組　板井政吉
鹿兒島縣姶良郡加治木村　菅木彦雄
韓國群山坂上眞信方　松田清暉
韓國京城大和町一丁目二六一　江頭松子
臺南市總趕宮街臺南醫院官舍　中川廣子
臺灣宜蘭法院官舍　井上たか子
臺灣臺北小南門街三丁目十三番戸　小林とよ子

七等（價格金壹圓の物品）

本所　西谷はる
淺草　鳳岡フサ
本郷　歌澤靜造
小石川　片岡満須子
四谷　志那千代子
本所　松下勇
赤坂　山岸すゞ子
豐多摩　島野春子
京橋　板倉かれ
淺草　實木勝
淺草　小川時代
千住　小出すみ子
神田　三股たかな
豐多摩　白石千代子
芝　青地さだ
南葛飾　小菅輝子
神田　黄川田かれ
八王子　馬場りう
下谷　大江お多福
麴町　花原儀
本郷　萬木清子
淺草　石井よしみ
西多摩　下田とみ
麴町　佐藤タニ
豐多摩　阿萬ヨシ
小石川　向井その
麻布　久次米鶴子
神田　加藤ミサホ

荏原郡　藤木豐子
四谷　白井靜子
豐多摩　岩田卯三郎
横濱　森林晃
横濱　小長井禎子
横濱　稲島千代
横濱　久保田なか
小田原　立木まん
三浦郡　有賀らく
千葉　秋保巳施喜
千葉　白石直
千葉　日暮ユキ
千葉　金子まさ子
千葉　鈴木みち
千葉　豐野琴
茨城　藤田りを子
群馬　三田エイ
前橋　關根ヒロ
群馬　三木しげの
前橋　河原りき子
群馬　大島よれ
上野　田中蕭子
埼玉　野上ふゆ
栃木　篠原チカ
長野　田村季子
長野　黒澤あき
長野　小林ぶん
長野　松下多智
長野　出澤さく
長野　古林およリ

長野　長岩友江
長野　富永圓子
長野　中野てる子
長野　小口みすゞ
新潟　齊藤サイ
新潟　濱田ヨレ
新潟　田中忍能
越後　駒形ヒデ
越後　布施セイ
新潟　渡邊ヤン
新潟　齋藤むめ
新潟　大橋トキ
越後　安達花子
富山　清水きよ
金澤　八島みつ
石川　飛彈ひさ子
石川　宇知越しゆん
越中　谷村こと子
若狹　木下蔦野
福島　遊佐光子
福島　本井メミ
岩代　高久セン
仙臺　吉村靜江
陸前　高瀬とくゑ
岩手　下斗米スヱ
岩手　菊池やそ
陸中　榛澤ノヱ
青森　和島とよ
青森　田中ミヨ
青森　吉田みゑ

青森　中村きゑ
山形　莊司榮子
山形　粕谷きつ
山形　笹原芳惠
山形　濱田みち
秋田　小玉カツヱ
釧路　小田切させ子
石狩　倉邊メカ
石狩　本間誠治郎
濱益郡　熊谷林藏
膽振　吉田靜子
札幌郡　藤田あきよ
石狩　山形イク
旭川　土田清
空知郡　幸田トク
札幌　笠原つい
石狩　木幡とみゐ
相州　淺羽ゆきえ
靜岡　杉本喜多子
靜岡　金子和歌野
靜岡　森かれ
愛知　淺野幸子
名古屋　田部幸子
美濃　櫻井保子
岐阜　岩岡くら
岐阜　坂田なか
岐阜　佐々木辨司
山梨　有賀ことじ
大阪　奈古屋愛子
大阪　片山幸次郎

大阪　大室安
大阪　宮本きくの
大阪　木村せつ子
大阪　堀尾文子
大阪　母田好次郎
大阪　小西菊子
大阪　樋口壽枝
大阪　中谷玉枝
大阪　岡田カン
攝津　柏岡恒子
京都　守村まさ
京都　久下靜江
京都　松本しげ
京都　足立榛子
滋賀　辻萩野
奈良　高橋ハツヱ
奈良　植竹順子
和歌山　平賀きよ
和歌山　河村いく
和歌山　南貴代
岡山　大塚ヘル
岡山　大野藍
岡山　太田榮子
岡山　藤原千惠
岡山　柏原かれ子
廣島　黒瀬きくよ
廣島　入交まき
廣島　原田盈枝
姫路　郡菊乃
姫路　城戸初枝

愛媛　阿部春乃
香川　中内雪子
高知　中澤すみ子
神戸　西田常子
神戸　尾崎はる
兵庫　田口滿治
兵庫　赤松きしの
兵庫　土屋貞子
兵庫　黒田せい
丹波　入木たま
丹後　豐田りつ子
鳥取　信太豐子
鳥取　米谷綾
鳥取　田淵輝子
鳥取　枝本清吉
島根　中尾ツル
伯耆　中原ヒサ子
但馬　長島てい子
備後　鉢本春子
備後　吉原政子
長崎　山口エイ
長崎　石井とし子
長崎　樋口要次郎
長崎　紀内蔦子
福岡　白水いづみ
福岡　松澤博二
福岡　種藤雪子
福岡　渡邊ふく子
山口　中澤イヨ子
山口　柳原美壽

山口　尾林イマ
山口　五十部ミドリ
山口　天野かつ子
山口　土肥秀子
佐賀　古閑芳子
佐賀　辻武ヤス
大分　赤木きよ
門司　西山いそ子
筑後　伊知しま
鹿兒島　中島まつ
熊本　菅るき子
朝鮮　豐田郁恵
韓國　井上きわ
韓國　土肥倉子
韓國　森あき
仁川　吉田とし子
仁川　葛城靜江
韓國　山田りき
韓國　大東豐子
臺灣　清水かなる
清國　中川まさ子
清國　山下譽子

八等（價格三十錢の物品）

麴町　桑原みよ子
麴町　星見篤子
麴町　宮村鳳
麴町　八木じつ子
麴町　城所あき
深川　鹽田なみこ
芝　堀田みや子
芝　小山七之助
芝　碇山たけ
芝　竹内恒子
芝　金田ヒロ
芝　後藤秋子
芝　松村登志
芝　星野菊次郎
芝　高崎うめ子
赤坂　渡邊縣枝
赤坂　北村つれ
麻布　島村信子
麻布　林君子
神田　佐野とく
本所　堀原つる
本所　都築芳子
四谷　緒方鳳野
四谷　大石貞子
四谷　原田登美子
小石川　鈴木ツル
小石川　岩本恒子
下谷　橋本きみ子
下谷　堀愛子
下谷　外山てる
青山　奥山君子
北豐島　上塚白岳
南多摩　若林文子
南葛飾　高田とき子
豐多摩　野中今子
荏原　飯島美知子
日本橋　吉野貞和
日本橋　藤田あい子
豐多摩　今村けん
北豐島　澤渡きよ
荏原　河野梅子
神田　竹内光子
京橋　河野なみ
京橋　山下久子
京橋　川村俊一
京橋　吉村小倉
京橋　秋野月子
淺草　石内とき子
淺草　中野コト
神田　芝崎宗吉
神田　山本ねい
本郷　安部よし子
本郷　近藤ロレ
第一潜水艇　市川實之助
横濱　吉野まき子
横濱　濱野誠敬
横濱　和田すゑ子
横濱　石原サト
横濱　吉永メマ
横濱　永谷卓夫
横濱　越智祖清
神奈川　矢部のぶ子
神奈川　岩淵鐘子
神奈川　大橋入重
神奈川　石井とよの
横須賀　三橋幸
横須賀　小川琴子
相模　藤澤みよ子
相模　中川よし子
千葉　松本鉄子
千葉　野中歌子
千葉　武田キク
千葉　滝谷とし
千葉　大惠田武子
千葉　宮澤長藏
千葉　伊藤梅子
埼玉　杉田近子
埼玉　山本千代子
埼玉　楢原玉子
茨城　星野元七
前橋　岡田けい
高崎　永井うめ
群馬　松澤晋文
埼玉　高城わか
栃木　高野キシノ
栃木　落合セイ
長野　清水さかえ
長野　佐村はな
長野　高坂米藏
長野　高橋くの子
長野　藤本さめの
長野　中島はる子
長野　井津たみ子
長野　金澤ひろ
新潟　松川はつの
新潟　島津ふゆ
新潟　古澤ふさ子
新潟　近藤ナツ
新潟　光井貞
新潟　丸實きくよ
新潟　金井やい子
新潟　安原ミキ
越後　平野スイ
富山　堀井その子
富山　松田よし子
加賀　宮澤すゞ
越前　河村菊
福井　岩崎はな
福井　池上小芳
越前　久谷久子
福井　松村まつえ
福井　栢植かづ
若狹　武藤きわへ
福島　熊田濱子
岩代　富田きみ
宮城　伊藤さき
宮城　戸田ノブ
宮城　三浦よしみ
仙臺　我妻ゆき
岩手　熊谷マツエ
岩手　高井秀子
岩手　曾根田ゆき
岩手　太田そよ子
岩手　大森文太郎
青森　宮崎辰
青森　大久にかれ
山形　渡部メカ
山形　梅津千代
羽前　地主いつ
羽前　岡村マサ
山形　曾我久子
山形　清堅よし
山形　高橋すみ子
秋田　鈴木俊子
秋田　小野メカ
秋田　工藤むたえ
室蘭　加賀谷聽子
札幌　三瓶さく
札幌　安島かつ子
函館　佐藤きよ
函館　佐藤てる
石狩　武田キシエ
釧路　大村シュン
歌棄郡　白木キン
札幌　富田ミサヲ
札幌　高道サカ
札幌　杉山榮子
函館　相馬ミス
靜岡　川田きほ
靜岡　堀田きみ
靜岡　笠原かや
靜岡　小島ふさ
駿河　山川奈代子
甲府　山田積子
山梨　五十嵐郁雄

山梨　三井いち子
名古屋　堀榮貞
名古屋　小林花子
名古屋　早川きく
名古屋　伊藤よれ
岐阜　小木曾志賀
岐阜　大洞千代子
岐阜　鵜飼靜子
三重　平田きぬ
伊勢　平野とき子
三重　松島松三郎
三重　水野直
伊豆　古谷靜江子
大阪　荒木都留
大阪　新家幸子
大阪　佐渡富榮
大阪　中西たつ
大阪　中川鐵
大阪　和合壽子
大阪　古田竹野
大阪　酒井操
大阪　藤野滋
大阪　戸田みさを
大阪　佐伯美彌子
大阪　川崎エン

大阪　塚口政子
大阪　横山富貴子
大阪　田中ユキ子
大阪　三宅尙子
中河內郡　西山靜枝
京都　細木とみゑ
京都　松村柳月
京都　財部芳子
京都　横江善次郎
京都　森本うめ
滋賀　正岡菊枝
近江　川村愛子
近江　安孫子富枝
滋賀　楠本篤子
滋賀　藤野久子
滋賀　南條トミ
滋賀　永田眞
滋賀　杉本ふじ子
奈良　森口鈴子
大和　櫻井勉
和歌山　山本初枝
和歌山　山田君枝
和歌山　吉原加壽子
堺　山內花榮
神戸　平野ぎん

神戸　加藤文
神戸　原靜枝
神戸　原田政枝
神戸　矢野しま
神戸　宮成律
神戸　山尾君枝
神戸　松田キヨエ
神戸　衣川照子
神戸　山本操子
兵庫　中村ますへ
兵庫　生悦住秀
兵庫　三木文子
岡山　木下章
但馬　澤たけ子
但馬　國澤豐
伯耆　八鹿みつよ
新舞鶴　天野たか
岡山　船橋豐子
岡山　箕浦幸猷
岡山　渡邊篤
岡山　中島遊鶴子
備中　三村芳子
備中　西原春代
備後　井上シゲル
尾道　田中春子

廣島　世良かずよ
廣島　川淵茂子
安藝　藤河多摩子
廣島　檀上ヒサ
廣島　楢高龜代
下關　宮崎幸太郎
山口　岡村すみ
下關　猪原瀧世子
山口　木村裕子
山口　松井政子
山口　內藤俊文子
下ノ關　野上信
山口　新龜クニ子
山口　進藤ハツ子
山口　大村武一
山口　境野常子
山口　田中すト
山口　上野椎雷
松江　船木いち子
島根　福島みつ子
島根　岩田かほる
因幡　樂仙子
鳥取　森峰子
鳥取　太田敬子
鳥取　前田狀子

愛媛　村上千代子
愛媛　越智いわの
愛媛　渡部キヨミ
愛媛　中川ツノ
讃岐　佐藤クニ
丸龜　香川なか
香川　黑澤美和治
德島　武田ミチヨ
阿波　天羽兵太郎
高知　木戸菊乃
高知　井上直
高松　木下俊平
福岡　關ロウ
福岡　池田ハツ
福岡　吉塚安
福岡　山下フクノ
長崎　福井靜江
長崎　宮田千代
長崎　松藤政雷
長崎　森輝子
佐世保　平出京子
長崎　中島みわ
長崎　內野駒
肥後　北野秀子
熊本　高木アキ

熊本　平野榮次
佐賀　廣川ふさ
佐賀　堀川秀子
大分　渡邊かつ
大分　下田綾子
大分　工藤サイ
大隅　篠原とみ子
鹿兒島　郡外川ナミ
鹿兒島　折田ノブ
鹿兒島　太田マス
大島　新納ナミ
鹿兒島　山下たつ
沖繩　澤さだ子
韓國　岡笹朝
韓國　湯口セツ子
京城　堀田壽子
韓國　鈴木富貴子
臺灣　高橋生
臺灣　松原よし
清國　田中滿貴子
清國　久山美津子

読者文藝 投書歡迎（締切四月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以內）

▲小說（二十枚以內）

▲一口噺（一人一題）

▲小品文（十枚以內）

◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢

▲三等參拾錢（圖書切符）

▲一口噺は入賞參拾錢

▲小說と小品文は銓考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數 増刊四回）	十二册 一、五、九、十一月假格同一
郵税	一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十一年四月一日發行　第八卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百十番　三百三十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

女子高等師範學校敎授
文學士 下田次郎君著

女子の修養

全一册 洋装四六判並製美本 正價金廿五錢
紙數約二百五十頁 郵稅金四錢

今や古の女子の敎へ廢れて、新しき敎へ未だ確立せず女子は日常の生活及び修德の方法に於て、その適從する所を知らざるの有樣なり。本書は此動搖の時代に在りて、女子に其執るべき道と方法とを示したるものなり。著者は我が國女子敎育の專攻家にして本書はその多年の研究と敎育上の經驗とに基きて物せられたるものなり。其所說は奇矯に失せず因循に陷らず極めて穩健中正にして文章また平易に何人もたやすく會得するを得べししかも著者の豐富なる學識と旺盛なる元氣と湧くが如き機智頓才とは他の模倣を許さゞる著者獨得のものなり。されば一度此書を手にせば遂に卷をおくこと能はずその終るの早きを惜むや必せり。切に婦人の一讀を勸む。

發兌元 本町 博文館

英語世界編輯部編

廣告 緊急

四十年度入學試驗 英語問題詳解

附 試驗委員之成績講評及受驗合格者之受驗談

洋裝四六判美本紙數凡百五十頁

四月上旬發行

執筆者
(ABC順)

深澤由次郎
今井信之
上條辰藏
喜安璡太郎
長井氏晸
佐川春水
武信由太郎

講評 試驗委員

神田 高商敎授
高島 高商敎授
村井 高外語敎授
平井 外語敎授
畔柳 高校敎授

發兌元 東京 博文館

入學試驗中最も學生の難しとするは英語と數學なり。此難關に應ずる最も捷徑の策は果して何ぞや。所謂難句集を鵜呑にするも一策たらん。所謂受驗科に入學するも一法ならん。而も常の敵たる試驗問題其者を研鑽して問題馴れのコツを得るは更に要訣中の要訣なり。本書は本年度廿八官立校の入學試驗英語問題に無比の詳解を施し、加ふるに試驗委員の成績講評と、受驗合格者の受驗談とを以てし、天下幾萬の受驗者が應試準備の信賴すべき參考書たらんとす。世に類書の刊行なきにあらねど其の答解の正確精緻なると叮嚀懇切なるとは寔に編者の誇とする所なり。

翠堂松村政親君著

實用 作文獨修書

此の書は專ら實用を旨とし先作文の階梯として平常口に云ふ語を普通の文語と書翰の文語とに更める事を各品詞に分ちて數千言を擧げ次に書翰文は十五類に別ちて其の作法より認め方等まで說明し尙百數十通の作例を口語と文章と對照せしめ公用文は其語づかひの事より延いて願屆書式の必要なる十數通を擧げ示し次に普通文は記事敍事日記紀行傳記逸話歷史祝辭祭文弔詞ならびに解釋議論辯駁文等逐一其作法作例文範を示し又文體の種類より形容法修飾法等の法を說き例を擧げて示し總て詳密丁寧に口語にて說明したるものなるを以て苟も假名文字を知る以上の者は之を讀みて手紙のやり取り受取書注文書等を始め如何なる家にも必要なる願屆書等をも認むるを得べく又進んでは總て高尚なる書翰は云ふに及ばず公用文記事敍事文議論文等何等の文章も此書に依りて意の如く應用記述せらるべし實に學生といはず實業者といはず丁稚小僧手代番頭三太夫檀那に至るまで上下に通じて適當なる獨習書なり

洋裝四六判並製
紙數約三百頁
正價金二十八錢
郵稅六錢

津田梅子女史序文

新渡戸夫人まり子 河井道子女史 辻村靖子女史 合譯



家庭小說 ひとりぼっち

洋裝四六判
總クロース上製美本
紙數約三百八十頁
正價金六十五錢
郵稅拾錢

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフィーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに淸く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の家庭小說中稀に有る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾教授河井村二氏譯述して世に公にす其內容の如きはこゝに喋々するを須ひず江湖の人士乞ふ閱覽して批評の榮を賜へ

販賣用電話本局二六二〇 發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館 振替貯金口座第二百四十番

女(後付の二)

田村逆水君著

人生と健闘

曩に成功と人格を著はし好評を得たる著者は今亦本書を出せり其内容は敢て喋々たるを要せず下に掲ぐる標目を見よ

●洋裝菊判並製紙數百七十頁

○本書目次

●正價金三十錢　郵税六錢

東京本町　博文館

竹貫登代多君著

算術獨習書

全二冊

出でたり！言文一致にて算術の初歩より誰にでも解し得る如く認めたる算術獨習書は出でたり!!! 著者は誰？數學世界主筆竹貫登代多君也。機敏なる學生諸君にして、先生の名を知らざるものありや。方今、算術を分り易く記述すること竹貫君に及ぶものありや！敢て薦む大方の學生諸君に、此書一度自己の所有に歸す以上は、僻邑の獨學せるものと中央都會に良師に就て勉學せるものとの差異は取拂はるべし、何となれば算術獨修書は、良師に超越すること數等なればなり、敢て勸む。書中の順序は決して奇拔なるものにあらず、世間一般學校に就て敎授するものと毫も異なるなし、之れ等しく文部省令に準據しあればなり、只だ此獨習書の特色は說明の親切にして且つ分り易き點のみ、されば獨學者に頗る便利なるは勿論他の一般學生には良好なる復習書なり各學校入學受驗者の福音なり、敢て天下の學生に薦む。

菊判洋裝並製

上卷……紙數三百八十八頁　正價四拾五錢　郵税八錢

下卷……紙數二百四十二頁　正價三拾五錢　郵税六錢

發兌元　東京本町　博文館

(後付の三)

藤村島崎春樹君序
理學博士齋田功太郎君閱
農學博士稻垣乙丙君閱
田中貢一君著



正價金壹圓五拾錢

小包料十二錢

洋裝菊判總クロース美本　紙數約五百頁
着色石版繪十數葉　挿圖九十四個

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、雅れて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歷史家に過ぎざるを慨せられ、花界百般の事項を、一般家庭はいふに及ばず、其道にあらざる諸學生、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絶大の興味とを以て、嘗えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小說として發表せられたり、本書は、五月に於ける金鳳華孃の講話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る　中、愛らしき花子、蒔の兄弟と、美はしき此等由花との間に纏々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！　而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！　書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其內容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に　現時の　自然　科學界に於ける、破天荒の作物として推奨するに憚らず世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず。

女(後付の四)

土居香國先生編述

初學 作詩活法續編

四六半截袖珍本
クロース切付け金文字入
紙數約四百九十頁
正價金五十錢
郵稅金六錢

曩きに、發刊したる初篇は、專ら作詩の急務より、詩の由來詩體の各色、作詩の心得、作詩の妙訣、等を說けり、此篇は、初篇に續き、題叙の書き方、聯句の法、聲音韻の工合、四聲を使用する早合點、照應の法、故事の遣ひ方、虛語の用ひ方、推敲の仕方、詩の書き方、作法に付ての諸種の心得、等を詳說し、卷末に平仄の早見を付したり、特に作詩增なる一章を設け、登覽宴集、羇旅、懷古、贈答、慶賀、傷悼、送別、咏物、等の數部に分ち、熟語對句等は總て、初篇の例に隨ひ、尤も俊逸精麗なるものを澤山に蒐集し、且つ四字連續の熟語をも各部に羅列し、加ふるに、各部に古人の作例をば、一方には符號のみを排列し又一方の熟語等の處には、點々其同符號を付したれば、此符號を搜索して、彼の一方の符號ばかりの處に、順よく記入すれば作例は瞭然として、目前に顯れ來るの仕方を設けたれば、作詩修養の上に於て、非常の興味を覺へ、知らず識らずの間に、人生の如何なる方面をも、自在に詩に作くることを得べし、初學者、袖中常に缺くべからざる古今無類の最も嶄新參奇なる良書なり、

東京博文館本町

本書は我國古來の賢哲が世俗一般を教化せんため修身處世上、極めて通俗にして趣味多き文字を用ひ機に臨み事に應じて筆を染められたる數百ケ條の教訓を集め一書として公にしたるもの也、特に多年德教研究に心を寄せらるゝ足立氏が其採集の珍書中より一々出所を示して其粹を拔かれたるものなれば學校家庭の參考本として將又學生及實業家諸氏の好指針として最も適當有益の著書たるや疑を容れざるなり立志處世に志あるの士幸に之を坐右に備へよ

伯爵 松平直亮君序
足立栗園君編

洋裝並製菊半截
紙數三百二十餘頁

立志處世 先哲教訓集

正價金三十錢 郵税四錢

東京日本橋本町 博文館發行

香國 土居通豫君編述

作文活法

全一冊 菊半截判洋布特製約六百卅頁
四月上旬發行

古來我國文に於ける諸體の作法を示したる書は、極めて稀なり、本書は、君が時勢に感ずる所あり、獨特の技倆を揮ひ、和漢洋の文法を斟酌湊合し、一斷案を下して、我國の現時に最も適應する所の國文の作法を一定せり、卷中章を分つこと十六、中に就て、篇法、章法、句法、修辭法、の如きは一々古人の文を引き或は圖を掲げて、詳密に其作法を示し、詞法に於ては、國語組織の根元を明にし、而して各體の作例は極て豐富なり、其他國文の作法は網羅して一も漏す所なし、之を一種の文典と稱するも實に誣ひざるなり、地方師に乏しき人は素より中學生諸君及、それ以上の學生諸君に於ても、坐右片時も離すべからざる近世稀有の必用書なり、

東京 博文館 本町

醫學士　石原喜久太郎君著

新編家庭衛生

全一册

洋製菊判美本
紙數五百五十頁
正價金壹圓五十錢
郵稅金拾四錢

石原醫學士醫科大學衛生學教室に在りて斯學の研究に從事すること茲に多年、傍ら或は演壇に或は諸雜誌に、衛生思想の鼓吹普及に努力せらるゝは人の知る所、亦者掲題の一書を完成して之を本館に授く、著者本書の目的として記する所を見るに「一國の衛生を進めんと欲せば先づ一家の衛生を進むべし、一家の衛生を進めんには、家事の實行者たる主婦に衛生思想を鼓吹普及するに如くはなし」と、是れ本書の生れたる所以なるべし。

本書の前篇「諸論之部」は衛生に關する汎論にして、後篇「各論之部」は住居衛生○衣服と飲食物○季候と衛生○旅行と轉地○小論○姙娠と産辱○病氣の七章よりなり、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して細大漏さず、殊に行文は平易通俗、論者は實地應用を主とし、叙事明晰、説明懇到、高尚なる學理をも難澁なく説示するの面目は、確かに多年の薀蓄深きを窮るに足る、之を家庭に備ふれば一家衛生の良指針たり加ふるに又醫師、醫學生の良友、諸學校衛生教科の參考書たるに適すべしと

醫學博士吾妻勝剛先生序
佐藤醫學士　伊藤尚賢君共編

婦學生健康法

全一册

洋裝三六判
總クロース頗美本
紙數三百八十頁
正價金四十五錢
郵稅八錢

衛生の書汗牛充棟、衛生の學愈々進みて吾人の健康益々劣り來る、斯くの如きは理に合せざる處なるも、之れ今日の現況なるを如何せん、聞く健全なる精神は健全なる身體に宿ると假令不健全なる身體に健全なる精神宿るも、其希望目的を達するには病軀の克する處に非ず、諸君は男學生なりや、さらば普通人に比して更に一層の健康を要す、貴女は女學生なりやさらば一般婦人病以外に尚學生病に罹はるべし、之れ國民として亦學生として由々敷大事ならずや、諸君並に貴女は嘗て衛生書を讀みて其健康を增す處ありしや、著者は滿腔の同情を表し、敢て此書を座右に捧ぐ、思ふに熟讀以て履行せば啻に學生の健康に資するのみならず、家庭に於ても亦有要なる健康辭典となるべし、偉大なる希望を有する學生は固より健康を欲する人、并に子女の美麗と健康とを樂まんとする父兄は、速に一本を備へられよ、健康は美麗と成功と快樂とを意味す、病に惱みて巨萬の富何するものぞ

東京　博文館　本町

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

每卷洋裝菊判美本――紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

醫學博士 三輪德寛君述

（第一編）**一般救急法**

正價三拾五錢 郵税金六錢

醫學博士 森林太郎君述

（第二編）**衛生學大意**

正價三拾五錢 郵税六錢

醫學博士 林春雄君述

（第三編）**藥物の大要**

正價三十五錢 郵税六錢

◎總論●健康と病氣と●藥物の定義●治療の意義●藥物の作用●藥物の分量●投藥の反覆●製劑の製粗並に藥劑の理學上の性質●藥物を用ふる場所●藥劑の個人に對する關係●身體に用ひたる藥劑の發落●藥劑の類別法◎各論●第一類 神經筋肉毒（「クロロフオルム」「アルコホル」の類外十六項）●第二類局所の營養を障碍する有機化合體（粘漿劑外十一項）●第三類無機化合體（水外八項）●第四類 消化醱酵素並に滋養品（脂肪及消化醱酵素の類、含水炭素類、蛋白質類）

醫學博士 緒方正清君述

（第四編）**姙產婦之心得**

正價三十五錢 郵税六錢

○緒論●婦人の生殖器●月經●姙孕●受胎したる卵の變化●胎兒の子宮内に於ける狀態●姙婦の身體に現はるゝ變化●姙娠の徵候并に姙娠各月の徵候●分娩期日を算定する法●數胎姙娠●胎兒の死亡●分娩の種類●正規分娩の經過●胎兒の位置并に分娩の狀態●正規の產褥●姙娠中の生殖器以外の異常●姙娠中の腟分泌物の異常●姙娠子宮の位置の異常●胎兒并に其附屬物の異常●流產及早產●子宮外姙娠●姙娠と共に起る病氣●陣痛并に腹壓の異常●產道の異常病胎兒の異常●胎兒の附屬物の異常●產道の損傷●胎兒分娩後の無力ヶ出血●分娩時に起る氣●產褥中の異常

醫學士 筒井八百珠君述

（第五編）**花柳病講話**

正價三十五錢 郵税六錢 既刊

◎總論◎第一編黴毒＝●黴毒の傳染●黴毒の區別●黴毒の經過の概要●黴毒性原發症●淋巴管及淋巴腺の黴毒●黴毒の第二の潜伏期并に發疹期●皮膚の黴毒●毛髮及爪甲の黴毒●骨の黴毒●關節の黴毒●消化器の黴毒●呼吸器の黴毒●泌尿器及生殖器の黴毒●血行器の黴毒●眼の黴毒●耳の黴毒●神經系の黴毒●奔馬黴毒●先天性黴毒●黴毒の豫防法●黴毒の養生法●黴毒の豫後●黴毒の療法◎第二編軟性下疳＝●軟性下疳●壞疽性并に蛇行性下疳●横痃◎第三編痳疾＝●痳菌●男子尿道痳疾の症狀●男子尿道痳疾の豫防法●男子尿道痳疾の攝生法●男子尿道痳疾の療法●男子尿道痳疾の合併症●女子の痳疾并に其合併症●男女共に發する痳疾の合併症

★發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館★

（後付の七）

二大お伽叢書の發行

明治文壇空前の大作と傳へられたる我小波山人の世界お伽噺は創刊以來茲に十個年を閲して、滿天下の喝采聲裡に全部一百卷を完成するに至れり、而も編者が精力と材料とは決して之が爲に盡きたりとせず、否更に筆硯を新たにして、進んで第二期の大發展を試みんとす、聞け其新計畫を、一を世界お伽文庫とし他をお伽畫帖と云ふ。

世界お伽文庫

第一編 大勇士（四月發行）

滿谷國四郎君畫

毎月一回發行菊判類美本紙數百餘頁
挿繪木版二十個入正價一冊金拾參錢郵稅貳錢

天は大勇士をギリシヤの孤島に生めり、彼其名を呼びてペルセウスと云ふ、力量非凡衆に絶す、傳へきく邊境に怪物あり、頭髮皆蛇、一度見る者忽ち石に化すと稱せらる、彼踴躍措く所を知らず、我快腕を振ふ此時にありと遂にヘルメムの神助に依て蛇首を斬り、更に海神の犧牲たらむとする王女を助け、双手の花を以て再び孤島に凱旋せり、正にこれ世界的快男兒の標本、天下無双の武勇談なり。

—（續刊目次）—

第二編 魔法鶴（四月發行）
第三編 半分物語（五月發行）
第四編 善玉惡玉（六月發行）

お伽畫帖

第一編 桃太郎 春汀畫
第二編 猿蟹合戰 春帆畫
第三編 かち〱山 古峰畫
第四編 イソップ話 三郎畫
第五編 牛若丸 秋春畫
第六編 花咲爺 月莊畫

毎月二回發行
四六判類美本
極彩色石版十六頁

正價一冊金六錢郵稅貳錢

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館 振替貯金口座第二百四十番

（後付の八）



健腦丸
腦病
神經病全治良劑
本劑の赫々たる信認は世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
腦病藥の覇王
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健腦丸のみである
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税十戔
三週分 壹円廿戔 仝十戔
二週分 八拾五戔 仝六戔
一週分 四拾五戔 仝四戔
三日分 貳拾戔 仝貳戔
一日半 金拾戔 仝貳戔
本舗 大阪市心齋橋 東京市箔屋町
丹平商會藥房

女學世界

(明治四十一年四月一日發行
毎月一回一日發行)

第八卷第五號

(明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可)



化粧の話

市川左團治

私に御婦人の化粧談を聞かうと仰有るのですか、西洋へ行つて居りました時分には舞臺の顔の研究こそ多少致しましたが、御婦人の化粧にまで手が届きませんでした然し見た丈けの事で宜しいと仰有るならザッとお話致しませう私が歩いた中では佛蘭西の御婦人が一番化粧がお上手かと思ひ升、ですから誰様も美人に見えるので、私が最初巴里へ着いた時に如何してこんなに美人が多いのだらうと内心驚いた位ゐです、段々滯在して居る内に解りました予、彼地の御婦人は總て手入が宜しいので恰度京都の御婦人の樣に、何かなさると直ぐ顔をお直しになる其手際が、頗るお上手ですから、誰様も美人に成つておしまひです佛蘭西に次いで伊太利の御婦人が化粧が旨いと思ひ升、英國の御婦人は餘りお化粧をなさいませんが、夫れでも鬘屋抔へ參り升と、素人のお方でも化粧の稽古にお出に成つて居らつしやい升、鬘屋で化粧の稽古と云ふのは可笑しい樣に思召ませうが、西洋では皆夫で、斯く申す私抔も鬘屋へ通つて顔を粧つて貰つた一人で御座いますので、其外牛乳浴抔が有つて、交際場裡にでも立たうと云ふ御婦人は常に夫へ浴つて居らつしやるから、皮膚も滑らかになり、白粉も奇麗にのる理由です、隨つて牛乳劑を美顔料に用ひて居る事も實に熾んなもので、日本では牛乳浴と云ふ譯にも行き升まいから、牛乳で製した化粧品丈けは是非欲しいと思つて歸朝して見升と、平尾賛平さんのお店から御發賣に成つて居る乳白化粧水『レート』が夫で有ると伺ひましたから早速取寄せて試して見ましたが至極工合が宜しう御座い升ので、常に樂屋で用ひて居り升(特別大壜金壹圓、送料八錢)

(定價金貳拾錢●郵税貳錢)